

文藝博士 藤井乙男 解説編輯

淨瑠璃稀本集

(全)



文學博士 藤井乙男氏〔編輯及解說〕

校註
淨瑠璃稀本集全



株式會社
文獻書院發行



凡 例

一、本書には淨瑠璃として稀覯に屬するもの十一種を選んでこれを收めた。

一、原本はいづれも假名書の部分が多く、送假名・假名遣等は全く不規則であるが、今翻刻に際し、便宜上漢字交りに書改め、又送假名・假名遣等もすべてこれを正した。但し助動詞の「なり」をも「成」とし、感歎詞の「のう」を「なふ」と書くなど、當時慣用の汎かつたものは、そのまゝにして改めなかつたものもある。

一、句讀は原本には語る上の句調によつて附してあるが、今は普通の文章の句讀に従つた。

一、原本には地・中・ハル・フシ・詞等をはじめ節譜を施してあるが、今すべてこれを

省略し、平家・謠・アミドブシ等の類だけ残しておいた。

一、本書の校訂は額原退藏氏を煩はした。

藤井乙男識

目次

解題……………

伊勢物語……………

初段目……………

二段目……………

やへがき姫道行……………

三段目……………

四段目……………

五段目……………

大曾我……………

ふじのまきがり……………

中之段……………

三四

二七

二〇

一五

一〇

九

五

一

鬼王圖三郎道行……………三七

下之段……………四二

時宗三部經……………五二

新版腰越狀……………

第一……………五七

第二……………六七

第三……………七四

若草姫道行……………七七

第四……………八四

第五……………九二

源賴家鞠始……………

第一……………一〇一

第二……………一〇七

第三.....一一四

第四.....一二一

まんじゆのまへ道行.....一二五

第五.....一二七

辨慶誕生記.....

武藏元山寺兒.....一三五

第二.....一四二

第三.....一四八

なぎのまへ道行.....一五二

第四.....一五六

第五.....一六〇

大福神社考.....

第一.....一六七

曆

第二.....一七六

第三.....一八三

策四.....一九一

第五.....二〇〇

第一.....二〇七

第二.....二一一

第三.....二二四

第四.....二二九

朝顏姬道行.....二二一

第五.....二二二

東山殿追善能

第一.....二二九

第二……………二三四

第三……………二三九

第四……………二四五

第五……………二五一

一心五戒魂道中評判敵討……………二五六

賴光跡目論……………

上之段……………二六七

中之段……………二七五

しほがま……………二八〇

下之段……………二八二

冬牡丹女夫獅子……………

上之卷……………二八九

中之卷……………三〇二

牛若ひたゝれの模様

三〇五

下之卷

三二四

閏十三段

三一五

解 説

伊 勢 物 語

藤原繼蔭が持ち傳へた都鳥の傳授一卷を、大鶴鵜刀禰太郎が奪ひ取つた事に端を發し、繼蔭の女八重垣姫が紀有純に嫁して、業平の幽霊に見え、伊勢物語を作つて女院に差上げることが骨子とした作である。それに繼蔭の遺子松壽兄弟が父の仇刀禰太郎を討つことがからまつて、最後は曾我の十番斬をもちつた目出度い仇討で終つてゐる。全篇に亘つて所々に伊勢物語の歌や文句を取入れた點が、作者の最も趣向を凝らした所で、近松の作と推定される「徒然草」や「龜谷物語」などと同様の行きかたである。随つてこれも亦近松の初期の作ではあるまいかといふ疑も持たれるが、遽かに決し難い。業平の幽霊は謠曲「井筒」からの着想であらう。

原本は八行四十九丁の大型献上本。刊行年代不明であるが、八行本の板式は延寶七年の「牛若千人切」が最初であるから、延寶八・九年頃の刊行であらう。加賀掾の正本としては「外題年鑑」にも見

えず、稀覯の書といふべきである。

大曾我富士の牧狩

曾我兄弟の仇討として殆んど本筋だけを運んだもので、曾我物語の外に特に趣向を設けたといふ程の所はない。近松の頼朝濱出・百日曾我・曾我五人兄弟等は、この大曾我に據つたと思はれる所が多いが、近松自身の作とは認められぬ。只曾我物として大曾我が最も汎く知られて居たので、特にこれに據つた事が多かつたのだと見るべきであらう。帝國圖書館本には時宗三部經の一節が多く、百日曾我の三部經も勿論これを踏襲したのであらうが、流石に近松は本文と巧みな連絡を取つて、唐突な不自然さをいくらか除いてゐる。

原本八行九行十行取交三十丁(帝國圖書館本は八行三十二丁)。正本の所屬は奥附を缺くため明かないが、上の段の幕盡しの一節は「古播磨風筑後丸」中に收められた富士の牧狩幕づくしと全く一致し、「富士の牧狩」と題する繪入本とも全部同文である。又「外題年鑑」にも井上播磨の正本としてあげてある。

新版腰越狀

平家物語を題材として仕立てた義經物の一つである。與一の妻若草をして全篇を通じて巧に平家方と義經と關係を保たせる役を勤めさせ、又逆櫓・那須與一・大原御幸等平家の文句を多くとり入れてゐる所などに作者の苦心が認められる。種々の題材をとにかくこゝまで纏めあげたのは、相當の手腕ある作家でなければならぬ。しかし文體から見ても近松の作とは思はれぬ。或は錦文流あたりの作か。

原本八行六十丁。竹本義太夫の正本で、「外題年鑑」によれば元祿十年四月六日の興行とある。

辨慶誕生記

室町時代の作たる「辨慶物語」をもととして、これに多少脚色を加へたものである。廣盛を終始敵役に使つたり、なぎの前といふ姉を點出して柔か味をつけたりしたくらゐが趣向で、文章も内容も拙劣といふ外はない。

原本十行二十八丁。山本角太夫の正本である。「外題年鑑」の義太夫の條に「辨慶出生記」として

元祿七年正月九日興行のものが見えるのは、これと同一であらうか。

大 福 神 社 考

將門の非望ミ秀郷の蜈蚣退治とを骨子とし、これに豊日皇子とつぐ姫との情事をからませた作である。趣向は拙劣といふ程でもないが、長門の局と賤男との情事が唐突で且つ全體の筋と密接な關係がなかつたり、秀郷の蜈蚣退治も獨立した一挿話の如き感があつて、全體としての統制を缺いてゐる。殊に末段の豊日王子は西宮の惠比須、將門は八頭大蛇、つぐ姫は稻田姫の再來だと落ちをつける如きは、そこが即ち作者の眼目であらうが、あまりに荒唐無稽と評せざるを得ぬ。第一段に八人藝の盲人を忍び込ませるなどは、當時の流行をあてこんだものであらうか。

原本八行五十六丁。義太夫の正本であるが、「外題年鑑」などにも所見がない。刊行年代も不明である。但し末段の都の恵方を云々して居る所から、ほど推定する事が出来るかも知れぬ。

曆

西澤一風の「操年代記」に西鶴の作と記されてゐる「曆」が、即ちこの正本である。義太夫に拮抗

すべく特に加賀掾のために作つて與へたといふのだから、西鶴もかなり骨を折つたものであらうが、何分西鶴の素質はかの多くの浮世草子を見ても分る通り、まとまつた長編の作には適しなかつた。この「暦」は彼の淨瑠璃の作として殆んど唯一のものであらうが、やはり構成上の統一は決して成功してゐるとはいへない。彼の才にしてこの外には全く淨瑠璃の作に手を出してゐないのを見ると、彼もまた自らその短所を自覺して、敢へて近松と覇を爭ふ如き野心を起さなかつたものと思はれる。

「暦」は從來「操年代記」によつて名は知られてゐたが、原本の傳はるものなく、僅かに「小竹集」の中に、しやれ物語・朝顔姫道行・富士の十二月等の景事道行が收められてあるだけだつたが、先年越路太夫の藏架中からその丸本が発見されたのである。而して「操年代記」によれば加賀掾が大阪に下つたのは貞享三寅年とあるが、「暦」もこれと對抗して語つた義太夫の「賢女手習并新暦」も共に、貞享二年正月の刊行であるから、その興行もまた同年の事と思はれる。原本八行四十二丁大型献上本。

源 頼 家 鞠 始

千葉介胤政を主人公とし、義秀万壽等の人物を配して比企能員の隠謀を發くといふ筋である。脚色

も文章も共に相當の出來榮であるが、作者は何人とも推定する事が出來ない。或は近松の作でないかとも疑はれるが、近松としては些か拙だと思はれる節もあるので、遽かに決し難い。第四段の胤政が萬壽の家で義秀に見あらはされるをかしみは、狂言花子の翻案であらうが、「凱陣八島」の第四段や「吉野忠信」の忠信が貞順と知らずに廓の惡口をいふ滑稽程原據には忠實でない。

原本八行五十五丁奥附を缺くので正本の所屬を明かにしないが、繪入本には卷首に加賀掾正本とある。

東山殿追善能

萬榮丸と直衣前との戀物語が主で、題名に相應する追善能のことはむしろ添へ物といふ形である。按ふに京都で義政の何百回忌かが修せられた時、それをあてこんだ興行で、その爲に全體と殆んど何の關係もない第一段をとつてつけたのであらう。末段の富士十二月は前出「曆」の一段をかり用ひたので、萬榮丸の預けられた所をだしぬけに清見寺としたのも、この十二月をこゝで語らせるためである。近松作と推定される「東山殿子日遊」とは別に關係はないらしい。

原本八行四十三丁。加賀掾の正本である。刊行年代不詳であるが、かりに義政の二百回遠忌の時とすれば、元祿二年に當ることとなる。

道中評判敵討

元祿十四年五月九日伊勢の龜山で石井兄弟が親の仇を討つた一件を脚色したものである。この事は都の錦も「元祿會我物語」と題して書綴つて居り、當時世の耳目を集めた事件なので、早速これを淨瑠璃にとり入れたものであらう。石井兄弟が草履取に住込んでからの事を主題とし、守介と敵波之丞の娘との戀をからませてある。しかしこの戀は結局どうなるのか、最後は仇討だけで終つて戀の結末をつけてないのは些かあつけない。

原本繪入十二行九丁。近松の「一心五戒魂」の切淨瑠璃となつてゐるが、文章は拙劣でこの方は到底近松の作とは思へない。刊行年代不詳であるが、仇討のあつた翌十五年の興行と推定される。利太夫といふのは義太夫の弟子で、當時切だけを語つたのであらう。

頼光跡目論

近松の作と推定される「多田院開帳」の粉本となつたもので、「多田院開帳」では橘姫の趣向を加へて多少の色を傳けたり、子四天王の脚色を設けたりした外、筋は殆んどそのまゝであり、文章までも跡目論と同一な所が多い。加之「文武五人男」もまた跡目論によつた所があり、又「關八州繫馬」の伊豫の内侍の不例を四天王の女房達が慰める條は、跡目論の頼光の病を慰める爲め遊びの趣向を書附で伺ふのを翻案したやうなものである。これ等の點から見て、跡目論も近松が初期の作ではあるまいかといふ疑は十分持ち得る。しかし海音にも「新跡目論」があるし、只古淨瑠璃として最も名高いものの一つであつたから、近松もこれを題材としたとも解せられる。なほ傍證を得て定むべきであらう。原本八行三十丁。筑後掾の正本であるが、これはもと井上播磨の正本で五段本である。（五段本は新群書類從第五に收められてある。）それを後に三段として義太夫の正本に用いたものと思はれる。文章は段の終りが少し異なる外全く同一であるが、只五段本の第三段にある馬ぞろへの景事がこれには除かれて居る。馬ぞろへは「古播磨風筑後丸」にも收められてあり、播磨の語り物としてその曲節のまゝ汎く口ずさまれてゐたので、筑後は特にそだけ除いたものであらうか。

冬牡丹女夫獅子

近松の作にかゝる「孕常盤」を改作したものである。即ち「孕常盤」の第一段を上之段、第二段を中之段、第四段を下之段として、第三段と第五段とを全部省略し、そのかはりに第四段の終りに、「かゝる所へ鞍馬山」以下(三二頁 七行以下)の文句を加へて、結末をつけてゐる。外題年鑑にも所見が無く、その興行年代も明かでない。しかしその内容から見て、これに加筆して「孕常盤」となつたのでなく、寧ろ「孕常盤」を勝手に省略して、三段物にしたのであることは明かである。随つて「孕常盤」より後に興行されたものではなければならぬ。然るに外題年鑑によれば、「孕常盤」は正徳三年七月の上場となつてゐるが、その信ずべからざる事は、正徳元年刊行の「鸚鵡が袖」に「孕常盤」の模様づくしと露のくつわ虫が採録されてゐる事でも、直ちに証せられる。況んや本曲が加賀椽の正本として現存して居るのを見ると、更に「孕常盤」興行の年代は溯らねばならぬ。近松全集第九卷所收「孕常盤」の解題の如く、これを寶永七年八月の上場とすれば、まだ加賀椽の生前の事であるから、その改作が加賀椽の正本として存してゐても差收へない。而してこの改作も近松自身の手によつたのではなく、誰

かゝ勝手にやつたものであらう。題名も牛若と淨瑠璃姫と二人の仲を匂はせたのであらうが、近松の
命名とは思はれない。

原本八行四十八丁。すでに述べた如く加賀椽の正本である。

淨瑠璃稀本集

伊勢物語

原本こゝに題名なし
今これを補ふ。

内に怨の女なく云々
一當此時也内無
怨女外無職夫（孟
子、梁惠王下）
知るよし故しるは
知行所の義、伊勢物
語の、昔男ありけり
初冠して、奈良の京
春日の里に知る由し
て狩にいけりの文
を採れり。
錦雞もと外國の鳥
形雉に似て冠毛黄金
色にして黒斑あり、
身邊尾共に紅綠黒褐
等の色雜りて美麗な
り。
河圖白澤一伏羲の時
河中より龍馬圖を貢
うて出できといふ、

扱も其後序昔大御息所と申いまそかりけり。宇多の帝の中宮に立たせ給ひ、皇太后宮藤原の温子と聞えあげ、目出たく時めき給うげる。天皇御遁世ましゝて、仁和寺に移らせ給ひ寛平法皇と申せしより、此女院は延喜帝の御養母として、國母の號を蒙ぶらせ給ひ、七條の後共申奉る。持統皇極の例にならひ、屢々天下の政を聞召し、君を補ひ給ひければ、内に怨みの女なく、外に曠しき男なく、天下太平長久と明渡る春こそ長閑なれ。かゝる所へ女院の御弟枇杷の左大臣仲平公、春の始の御禮とて御院參なされつゝ、つきせぬ年始の御壽申納候と、御盃も事終り、仲平仰上らるゝは、扱も大和の國春日の里は某がしるよし故、かの里の狩人今朝希有の鳥を持參致し候。吉凶いかゞ心得がたく御伺ひのため召つれて候也。それゝと召るれば、五色の斑ある錦雞を、獵人抱き罷出、やがて御前に差上ぐる。女院御感限りなく、唐土の聖代には麒麟・鳳凰・河圖・白澤現はれしと傳へしが、

三才圖會に、東望山に澤獸あり、一名白澤といふ、能く言語す、王者有徳明照幽遠なる時は則ち至る昔黃帝巡狩して東海に至る、此獸言ふことあり、時のために害を除く。

わくらはにーわざく。

紀島―武藏國と下總の國との間に、いと大きな川あり、それをすみた川といふ、白き鳥の嘴と足と赤き鴨の大きなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ、京には見えぬ鳥なれば、皆人しらず、渡中に聞ひければ、これなむ紀島といふをききて、名にしおはゞいざこと問はん都島わが思ふ人はありやなしやと(伊勢物語)

みて暮し給ひしが、此事を傳へ聞き、姉に八重垣十六才、次男松壽十四才、乙に梅壽十三才、母諸共に招きつゝ、此度女院の御前御參宮に付、兩宮の御山へ諸鳥を放ち給ふみて、都鳥といふ鳥を御尋ねなさる由、そもく都鳥といふ事は歌道の祕密日本の寶也。昔業平の中將隅田川にて見たるより、恐らく世上に知る人なし。され共某不思議に是を傳へたり。今御尋ある事は、武運の花の開くべき瑞相、さいはひ今宵齋宮にお宿を召すと聞てあり。急ぎ參り注進申し、世に出ん嬉しやと、かの祕傳の一卷を守袋に入給ひ、追付めでたく歸らんと立出給へば、人々は門に出祝ふ暇乞ひ、是今生の別れとは後にぞ思ひ三重知られる。既に其日も暮方に齋宮には女院の御泊りとて、人を拂ひ立騒ぎたる折柄に、件の鳥を檻に籠め、荷はせて、刀禰太郎後に警固し來りけり。繼蔭御覽じ刀禰太郎が袖をひかへ、某は此邊の浪人者にて候が、都鳥の子細存じたる者あらば、御褒美望次第との院宣也と承る。我等が家に都鳥の傳授の一卷候故、差上げん其ために參上申候へば、宜しく御披露頼奉ると慇懃に述べらるゝ。刀禰太郎横手を打て、扱々結構成物を所持せられて有ものかな。あつばれ無類の忠節よろしく申上ぐべきに、暫くそれに待たれよと、奥をさし入けるが、中にてちやくと思案し、いやく此事披露申さば、彼奴に過分の御褒美有べし。所詮彼めを打殺し、かの巻物を奪ひ取り某が差上げば、いよく御褒美厚く給はり、大福長

たますに手なし欺
くには防ぐべき手段
なし、(謔)

しかしながら一全く

明星云々一多氣郡明
星野(明野とも)の事
をさすなるべし。

者と仰がれん。天の與へ是なりと、ひとり喜びおもてに出、是々御注進の人、只今の趣披
露申て候へば、近頃神妙の至り此上は何にても望みを叶へ下さるべしとの御事也。急ぎ祕
傳の卷物を此方へ渡されよ。献上せんといひければ、繼蔭喜び守袋よりかの一卷を取出し
渡さるゝ。太郎請取り懷中し、腰の刀をすばと抜き、飛びかゝつて繼蔭の心元を突通す。
こはいかにと飛び退り、抜合せんとせられしを、疊みかけて打つ太刀は、欺すに手なし足死
も、弱々と成所を、押伏せてとゞめを刺し、草叢に隠し置き、心靜かに汗押拭ひ、さあら
ぬ體にて入りけるは、情なうこそ三重見えにけれ。去程に刀禰太郎は女房達に近付、今日某
道中にて不思議の一卷買ひ得て候。宜しく御披露頼み上ると、やがて御前へ上にけり。女
院いよゝ御感あり。時しもあれ此道にて、歌道の寶を得る事は神慮の納受、且は又狩人
が正直天道に叶へりと、かの卷物を頂戴あり。開き給へば不思議やな、一卷さつと血に染
まり、俄に虚空震動し、大雨銀河を覆へし、雷火亂れて三重おびたゞし。内宮外宮の禰宜
神主我もゝと齋宮に向ひ、是しかしながら太神宮の御咎め、御供の人々に穢れたる者
やあると、上下騒ぎて評定す。神祇の大夫申やう、詮ずる所刀禰太郎が日比殺生の罪深き
其御咎めさぞあらん、是聊かの義にあらず、先々罷歸れとて御暇給れば、是非なく都に歸り
けり。され共雨風止まざれば、社人達申さるるは、此所に神代の昔明星の天降り影を宿せし

八乙女―神社に奉仕
し神樂など奏する八
人の少女。

池水の候。かの水を掬^くび當所の火にて湯を沸^わし、是を飲む人胸中の汚^{けが}れを拂ひ、火を清め候よし、召上られて御覽ぜよ。此義尤然るべしと、四邊^{あたり}の家より湯を調^{てう}じ、君をはじめ奉り供奉の人々は是を飲み、一度に神を拜すれば、忽ち空晴れ雨收まり、各々心地清^{しづ}まりし神變自在^{じんぺんじざい}にぞ有難き。それより所を今の世に明星の名にし負^おふ明野原と申也。女院いよく、渴仰^{かつがう}の袖を連ねて兩宮の御宮めぐり遊ばされ、天の岩戸の明け初めし、其吉例に任せんと、神すゝしめの大々神樂を參らせらる。巫八乙女獅子頭青幣白幣、其役々^{やくやく}を揃へしは殊勝なりけり。ちはやふる神と君が世千代萬歲、動かぬ國こそ久しけれ。

二段 目

扱其後松壽・梅壽兄弟は、父上歸り給はぬを心もとなく思ひつゝ、女院のお宿と聞く齋宮に立越えて事の由を尋れ共、はや女院は昨日御下向ましませしが、さやうの人は知らぬと云へば、痛はしや兄弟は何所^{いづ}を尋ねんやうもなく、呆れ果ててぞおはしける。然る所に草叢より犬二三正驅^かけ出肉^{し、むら}をひつ咬^くへ、彼方^{あな}此方^{こなた}へ争ひけり。こは不思議やと兄弟は、草押分け見給ふに父上の死骸也。南無三寶^{なま}情^{なげ}なや。如何成者^{なる}の仕業^{しわざ}ぞと、死骸にかはと抱^{いだ}き付前後も分かず泣き給ふ。松壽涙を押へ、やあ如何に梅壽丸、父上の御運の程我々が行く末の

こすゑ一掃と來ずと
かく。

侍は闕を越すより七
人の敵あり一俗態な
り、男は闕をこすゑ
りともいふ。

侍冥加も是まで也。いざ刺違へ御供せん^{きしちが}と涙と共にの給へば、梅壽聞給ひ、尤也、去ながら我々はにて自害せば、身の一分は立べけれ共、母や姉を見捨てゝは其一分立難し。先此度は故郷に歸り、足弱達を片付て其後はともかくも、いざゝせ給へ、いや暫らく、父の死骸を曝し置き、虎狼の餌食となさん事口惜しく候へば、いざゝ如何にも收めんと、あたりの石を轉ばし寄せ土砂掩ひ竹垣し、兄弟目と目を見合せ、扱しなしたりゝ、こはそも如何成因果ぞやとて、地に伏し沈みて泣き給ふ、今は歎きて甲斐あらじ、いざさらばとて兄弟は互に諫め諫められ、二見をさして歸らるゝは痛はしかりける 三重風情なり。かくとは知らで二見にますます八重垣は母上に近付て、扱も父上は今日三日に及べ共歸らせ給はず。其上又迎へに出し兄弟もいまだこすゑの烏の聲常ならず候へば、心にかゝり胸騒がしやとのたまふ所へ、兄弟は悄悄として歸らるゝ。やれ氣遣はしや父上は如何にゝとのたまへ共、兄弟とかうの返事もなく伏し沈みてぞ泣き給ふ。母上興覺めこは如何に、何とて子細を申さぬぞ。はや疾くゝと責め給へば、なふ恨めしやかやうゝと言ひも果てず聞もあへず、それは誠か悲しやと、聲を揃へて泣き給ふ。げに理とぞ聞えける。されども母上甲斐ゝ敷、やあ何を歎くぞ兄弟よ。それ侍は闕を越すより七人の敵有り。門を出るたび毎に是を別れと思ふとかや。汝ら幼なきとても侍の名を汚せば、父の命を惜まずとも我が

吼面―泣き顔。

はぢんたる料簡―勢
よき勇しき思慮。
はづかし―廉恥を重
んずべし。

家の名を惜み、母や姉に知らせずとも、何處までも追懸けて親の敵を討つてこそ、父子の面目孝行とも云ふべけれ。なんぞや武士の道を忘れ、敵をば討たずして、おめくくと母が前へ歸り吼面は何事ぞや。エ、おくれたり卑怯者、未練なる心底や。親と思ふな子とも思はじ、七生までの勘當ぞ。此方へ來れ八重垣ミ、奥をさして入給ふは苦々しくこそ見えにけれ。兄弟呆れておはせしが、オ、實御尤過つたり。如何に梅壽丸、母の仰の通り武道も孝行も敵を討たでは立つべからず。去ながら名も知らず見も知らぬ敵の行方、何をしるべに誰をや狙ふべき。討たでは又道立たず、是非の料簡當惑せり。いかにくと申さるゝ。梅壽聞もあへず、いやく敵を見知らぬとの言譯は立まじき。此度我々一人なりとも、父上の御供せず出し奉る故なれば、所詮越度は我々兄弟遁るゝ所候はねば、畢竟父の敵は兄上と某、外に恨みん人もなし。二人是にて打果し、互の鬱憤晴らし申さん。御覺悟あれとぞ申さるゝ。松壽につこと打笑ひ、いしくも申せし梅壽かな。然れば御身が親の敵は某、某が敵は御分よな。はづんだる料簡徹塵遁るゝ所なし。時刻移るにいさゝらばと、左右に別れ身繕ろひし、總じて親の敵には聲をかけて討つものと聞く。兄なればとて用捨すな。日頃は兄弟今はかたき、他人より猶恥かし。尋常に打果さんと、互に太刀を抜きかざし、やあ親の敵遁さぬぞ。なふ父の敵遁さじと、兩方聲をかけ合せ打合せし太刀音に、八重垣驚

き走り出、なふ情なやこはいかにと、二人が中へ割つて入、オ、健氣成とよ方々よ。去ながら人言に能死したりとは言はずして、狂氣して死したるか、犬死など言はれては、なまなか死しての恥辱也。誠さほどに思ひなば命限りに尋て見よ。親孝行の道なれば、なか佛神三寶も憐れみ遇はせ給はさらん。平にとまれと制すれども、思ひ詰めたる二人の者、翻へすべき氣色なし。八重垣重ねて、扱はみづから女なりとて兄弟の數に入れざるか、女成共恐らくは心は男に變るまじ。死して響に成ならば妾が先に死すべきぞ、一先妾が思案も聞け。たとひ敵を見知らず共、天下に一つの巻物を討つて取たる事なれば、やれ水を潜り地を分けてもそれをするしに尋ねなば、いかでかめぐり合はざらめ。よし、それとても遇はずんば其時こそはともかくも、是非此度は靜まれとさまゝ教訓し給へば、思ひ切つたる兄弟も姉の諫めに納得し、悄悄として靜まりし心の内こそ殊勝なれ。八重垣大悦かぎりなく、誠に姉を姉と思ひ諫めにつくこそ嬉しけれ。さあらばかたゝは何方をも尋ねよや。妾は母の御供し上方をと有ければ、此上はともかくも御はからひに従ふべし。去ながら母上の御勘當を蒙ぶりは行末とても頼みなし。門へ出いかゞと有ければ、八重垣聞召し、其段はみづからが申宥め得さすべし。いざ此方へと打つて母のお前に出給ひ、右の次第を申さるれば、何々敵を尋ねんとて松壽梅壽は旅立つとや。オ、さもこそあらめ神妙さよ。

千世もと祈り一世の中にさらぬ別れのなくもがな千世もと祈る人の子のため（伊勢物語）の歌に據る。

沖つ波あれのみまさる―古今集伊勢の長歌、沖つ波荒れのみまさる宮の内、年經てすみし伊勢の蟹も舟流したる心地して、寄らん方なく悲しきに、涙の色の紅は我等が中の時雨にて、秋のもみぢと人々はおのが散りく別れなは云々とあるに據る。
かひこそなけれ―甲斐と員とかく。

一度勘當しけれども、敵を尋る門出とて、姉が深く詫びる故、只今は許すなり。本望遂げて歸る迄は必ず―勘當ぞ。許すとばし思ふな。片時も早く罷立と、愛相なげにはの給へ共、さすが別れの悲しさに、包むとすれど恩愛の涙は袂に餘りけり。兄弟も涙ながら御心安く思召せ。露の命のあらん限り敵を討たでは歸るまじ。母上の御事は姉君頼奉る。もはやお暇申とて、立出給ふ後姿母上は御覽じて、ア、情なきは武士のならひ、いとほし可愛いと思ひ子の東西だにも辨へぬを、敵を討たでは歸るなとて、勘當しける母が身を、さぞやつれなく思ふらん。千世もと祈りそだてしに、何憎しみの有べきぞ。是も家名を汚さじため、もしやは母に心引かれおくれをや取べきかと、心に思はぬ勘當を神も佛も憐れみて、敵に廻り合はせてたべ。扱恨めしの世の中やと、焦がれ―泣き給ふ。されども八重垣やう―におし宥め、旅の營なされける心の中こそ三重痛はしけれ。

伊勢物語やへがき姫道行

沖つ波荒れのみ増さる草の戸は、かひこそなけれ二見瀉、秋の紅葉と人々は、おのがちり―別れゆく。親子の縁こそ果敢なけれ。世をも人をも忍ぶ草、露は袖涙は襟に包まれて、いつ濡れめし我身とも、思はで過ぎし故郷を、今を限りと眺むれば、月は東の山の端に

藤方―安瀨郡、今藤水と改む。
波のうね／＼しげれは云々―藤曲羽衣の、雲の浮浪たつと見て、釣せで人や歸るらの文句を模る。
あこぎに―地名と深く物を思ふとかく。あらし―風と有らじとにかく。
笠を今宵の―思度の「行暮て木の下かけを宿とせは花や今宵の主ならまし」をもぐれり。
大龜谷―狼にかく。井出―出でにかく。玉水―奈良海道の地名。
嵐―不有にかく。

鳴き渡りつゝ初雁の、別れ／＼の身の上に、何を二葉の松坂や藤方鳴海うち過ぎて、あれ御覽ぜよ夕潮の、波のうね／＼しげければ、釣せで歸る蟹の業、均らせや均らせ鹽濱均らせ、網引く浦の名に寄せて、阿漕に物を思ふよな。ア、一夜に／＼床も離れぬ兄弟を、枕の餘所の旅寢には、宿もあらしにもまれたる笠を今宵の主にて、明しかねたる笹竹の、近江路過て是や此、逢坂山の岩清水、關の明神伏拜み、行くも歸るも皆人の待ちつ待たるゝ、道を急げば駒を早めて追分や、我は徒歩路の草鞋の、足を食ふも恐ろしき、大龜谷に日は暮れて、暫しはこゝに伏見山、松の煙か夕霧か雲な隠しそ、せめて都の空を見ん。靡けや靡け竹田の里、宇治の川風風の懸けたる柵も、今の憂き身はよも止めじ、堤傳ひの長細手、山城に井手の里、岸根の草に波かけて、夕日こぼるゝたま玉水のむすぶ契を頼みつゝ、母をも身をも慰めに語る名所は生駒山、立田の峯や三輪の山、いかに待見ん年經とも、尋る人も嵐吹く、春日の里に着給ふ親子の人の御有様、げに世の中の物のあはれは多けれど、是ぞ涙の限りならんと、聞く人袖をぞ絞りける。

三 段 目

去程に昔紀の有純といふ人あり。三代の帝に仕うまつりやんごとなき身なりしが、時移り

山梁の雌雉——山梁雌雉、時哉時哉、論語、鴛鴦篇、梁は雉なり。おのがありかを人に知れつ、一春の野にある雉子の悲戀におのがありかを人に知れつ、（拾遺、家持）罪も報も云々——諸曲、鶴岡の文句。十二の雌——雉は十二子を産むと言ひ傳すけて一さし込みてつけること。

衰へ世に經るたつきせんかたなく、晝夜獵をぞ營みける。今日は長閑けき春の空、雉を取らんと春日野や飛火の野への若草に、繩をさし網を張り、我身は案山子にかけ籠り雉笛を吹き鳴らせば、山梁の雌雉時を得て、おのが在所を人に知れつ、妻戀の雉子のあさる有様は、罪も報も後の世も忘れ果てつゝ面白や。爰に又八重垣は遙々の長旅に、痛はしや母上の深く惱ませ給へども、宿求むべきやすがなく、薄が本に立隠れおはせしが、あれ御覽ぜよ、焼野の雉子は世の中の物憂きものに名は立てど、十二の雛を揃へたり。いかなれば我々は、親子兄弟引別れ、かばかり物を思ふぞや。昔は上げて羽子に突き、よう舞ふ小羽子と遊びしが、今は中々かこち草、ア、羨ましのあの雉やと、暫しながめて立給ふ。時に案山子の内よりも、聲をかけ鳴子を引けば、はつと立て逃げさまに、雛鳥二三羽網に入る。父鳥母鳥悲しみて、鳴き騒ぐと見えけるが、何とかしけん母鳥係蹄に縊れたり。父鳥猶も立ちやらす身を悶え鳴き叫ぶ。獵師是をも取らんとて、頻りに聲をかけるは、あさましかりける風情なり。八重垣あまりの不便さに、走り寄りて係蹄を解き網をさばきて放さるれば、親子の鳥は喜びて行方知らずなりにけり。獵人飛んで出姫君を取つて伏せ、おのれはいづくの女めぞ。晝強盜のいき盗人め。エ、腹立や打殺さんと手を捻ぢ曲げ、笠の内を見て、や、はあ是は大事な盗人ぢや。なふさもあれ御身は何人なれば折角寄せし鳥をむざ

藪に馬柙一馬柙にて
藪を鋤き耕すこと困
難なり、無理なる意
の隠。
つまの殿一夫の殿。

狩り暮らし云々狩
りくらし榎機つ女に
宿からん天の川原に
われは來にけり（伊
勢物語）
舟流したる云々古
今集十九、伊勢の長
歌、伊勢の姫も舟流
したる心地して寄ら
ん方なく悲しきに云
々とあるに據る。
あるじ主と有とか
く。

／＼と放さるゝぞ。惣而此所のならひにて、鳥を逃せし女をば妻にする法にて有り。それ
に合點なきならば、以前の鳥をもとの如く網にかけて返されよ。さあ是非の返事を聞かん
と云へば、姫君につこと笑ひ、しやほに藪に驚杞なお人かな。鳥を逃せし曲事とて妾を
とどめ、鳥のかはりに立ならば、いかにもとどまり申さん。去ながら御連合のつまの殿、今お
返事になるものか。ならばぬ旅に疲れたる母を伴ひさふらふが、是だに痛はり給はらば、
其後はともかくもどうぞ談合なるべきとあれば、有純聞て、何母をだに痛はらば心に従ひ
給はんとや。扱殊勝なる思ひ入、どれおふくろはいづくにぞ。いざ此方へと手を取て、よ
し鳥は取らず共かへまく惜しや狩り暮し、七夕づめに假の宿、不思議なりける三重次第也。
舟流したる伊勢の蟹の、寄る瀬あるじの情にて、思はず日數を送らるゝ。或時純姫に向ひ、
扱も御身はつれなくも我に従ひ給はぬは、貧しき獵人を侮り給ふか。曲もなや是非此上は
と口説かるれば、姫君は聞召し、誠に母への御痛はり身に餘り有難く、尤御心に従ひたく
は候へ共、さがたき大願にて精進勤め候へば、つれなき振舞御免有。とかく下人と思召
し使はれて給はらば、御恩は報じ申さんと、世にしみ／＼とぞ仰ける。主聞給ひ、扱も餘
義なき仕合かな。其義ならば明暮の身をまもるは恥ならず、菜摘み水汲む業をして、共に營
み給ふべし。やあ忘れたり夕風の狩の時分と出けるが、いかさま彼等が振舞を試して見ん

曉毎の照伽の水月も
心や澄ますらん一語
曲井筒の文句。

たれかあぐべきしく
らべこし振分髪も肩
すぎぬ君ならかして
誰かあぐべき(伊勢
物語)

よし一蓮と好。

筒井筒云々一筒井筒
井筒にかけしまろが
だけ老いにけらしな
相見ざるまに(同前)
水の底にも物思ふ人
わればかり物思ふ人
は又もあらじと思へ
ば水の下にもありけ
り(同前)
枝の朝露云々一露な
がら折りてかきむ
菊の花おいせぬ秋の
久しかるべく(古今
五、友則)に基く。

と思ふにや、狩には行かて我門の一叢薄に身を隠し、事の體をぞ三重見られける。曉毎の
閑伽の水月も心やすますらん。さなきだに物思ふ身にしならはぬ閑伽の桶、柄杓の露の玉
棒、寢れ果てたよおどろのナ髪もむすばれ、誰かナあぐべき誰か引く引くべき眞孤草、よ
しと言はれん身にしあらねば、ア、戀をする身でもなや、筒井筒井筒にかけしまろがたけ、
老いにけらしな我姿、影をうつせば水の底にも物思ふ人は有けり、恨めしの水の深さや釣
瓶の繩の短かさよ。汲めばくるくくるり車は廻れども、返らぬは昔なりけり。月を釣
瓶に汲み浮けて、袖打絞るぞあやなけれ。かゝる折節あてなる男の氣高きが、菊の花桶手に
觸れて摺違うてぞ通りける。姫もいづれ生心あと見送りて、扱見事な花のといへば、かの
男につと笑ひ、さればこよ此花は思ふ方へ贈らんと求め得ては候へども、うつろふ色の見
えければ、其水少注ぎかけ給はれかしと打濡るゝ、枝の朝露やれ其儘に贈りたいその白菊
の色有方へと申さるゝ。姫片笑みてお易い事や、去ながら思召す御方へ贈り給ふ其花に、妾
が水を参らせなば、人の戀に水をさす戀知らずとや笑はれん。いや成ませぬと有ければ、
御仰はさる事なれ共乞食翁の事なれば、言葉のあやまり候とも、只花故と思召し、情の露の
一雫積りて淵は末の事、是非にといへば姫君も、今は心の弱々と、げに自が夷心の片絲に
節有る詞面無やな。さのみはいかゞ惜まんと、柄杓にたんぶこ汲み入て、男の袖にさつと懸

武藏鐙云々ゝむさし
鐙さすかにかけて頼
むには訪はぬもつら
し訪ふはうるさし
(伊勢物語)

井筒によりて云々ゝ
謡曲井筒に、井筒に
よりてうなる子の友
達からたひて、互に
影を水鏡、面をなら
べ袖をかけとあり。
そさまゝそなた様。

終にゆく云々ゝ末句
きのふけふとは思は
ざりけり。
あくた川一芥と題と
かく。

くる。なふ是は扱花の水を乞ひけるがお心にさはりしか。餘りつれなき仕方やと、顔うち赤めて云ひければ、姫はししつと笑ひ、いや是なふ、妾が目には菊よりも持ける人のお姿を花と見て懸けるが、憎しと思召けるかと、云ふしほらしき顔ぶりに、猶まめ男堪へかねて、いつまで包みさふらふべき。我は君故憧れて亂れそめにし忍摺、心ひとつに綻びて、よしなきたはぶれ申せしぞや。御身に望有事も委しく存候へば、必ず叶へ世に立てゝ参らせん。我が思ひを晴らしてたべと、袂に縄り口説かるゝ。姫ももとより心ある男の色に、等閑の己が望の叶ひなば、いなにはあらず武藏鐙、さすが別けても皮薄な顔の紅葉や涙ぐむ、目交ぜ手を締め袂を引き、井筒によりて袖を懸け、互ひに影を水鏡、面を並べしやよい殿ぢや、いやそさまこそ美しけれ、命ぞ變るな變らじと、につこと笑ひ筒井筒井筒の水も契約も、淺からずとこそ聞えけれ。此體を有純見て、扱腹立ちや討つて棄てんと飛んで出れば、彼男はつと計の一聲にて、井筒の陰に三重失せにけり。こはいかにと呆果て、苦り切てゐる所に、其様化したる姿にて又忽然と現はれ出、あら恥かしの我姿や、何をか今は包むべき。我は去んぬる元慶年中に果敢なく成し色好み、在五中將業平が幽霊にて侍る也。終に行く道とはかねて聞しかど、昨日今日とは知らずして色に耽り、数々の女を犯し迷はせて及ばぬ戀は二條の後、思へば我があくた川、負ひて出しは人が報か、又は神

神のいがき云々―伊勢の齋垣に通ぜし事をいふ、ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし大宮人の見まぐほしさに(伊勢物語) 百年に云々―百年に一年足らぬつくも變われを纏ふらし面影に見ゆ(伊勢物語) 川島の云々―文を取替はす意をかけたつを川島の水の流れて絶えじと思ふ(伊勢物語) 業平―昔になりにいひかく。 我にひとしき―思ふ事いはずにやみぬべき我とひとしき人しなれば(伊勢物語) 夕闇―言ふにかく。 業平―なり(成)にかく。

の齋垣を越え、主ある女を奪ひ取、百年に一年足らぬつくも髪、亂れ心の邪姪の罪婆婆の樂み冥途の仇阿責の責を受くる也。此數々の玉章は數多の女に川島の水莖の跡なるぞ。御身是を書集め筆を加へて草子となし、慚愧懺悔の弔ひし、苦患を助けてたび給へと、涙に萎るゝ袂より文の數々取出し、泣くゝ姫にぞ渡さるゝ。有純も涙にくれ、扱は昔に業平の其幽靈にてましますか。あらいとほしや我こそは御身の舅紀有常の末孫なれ。しからば草子を作らせ懺悔して參らせん。あさましの御姿や。歸らせ給へと有ければ、いや歸れとはあだ波の起居に物を思へとや。我にひこしき人しなれば、我忘るれど人焦れ、人忘るれど我忍び、其執心の地獄の責、扱恐ろしやと夕闇の朧月夜の木蔭より、頭は女身は蛇身異類異形の惡靈共、影の如くに現はれて、縦ひ懺悔はし給ふ共、六道四生の其間爰に消えてはかしこに現はれ、煩惱の惡鬼と成、放ちはやらしこおつ取廻せば、ア、悲しやと叫べる涙、猷と成て身を焦し、彼方へ纏ひ此方へ縋り、引立て行くよと見えけるが、なふ苦しやといふ聲の木魂ばかりに業平の、二世を一世に見る事は前代未聞の次第なりとて、二人は庵に入給ふ。

四 段 目

昔男……女はらから
住みけり。伊勢物語
の本文なり。
しるよし……一所領
ありたればの意。

春や昔一月やあらぬ
春や昔の春ならぬ我
身一つはもとの身に
して(伊勢物語)

富士や浅間の雪煙一
時知らぬ山は富士の
ないつとてか鹿子ま
たならに雪の降らん
信濃なる浅間の嶽に
立つ煙をちこち人の
見やば答めぬ(同上)

立返る波いとし
く過ぎゆく方の戀し
きに羨しくも返る波
かな(同上)

とまり一止りと泊り
とく。
武蔵野に……武蔵野は
今日はなほ焼き若草
の妻もこもれり我も
こもれり(同上)

露と答へて……白玉か
何ぞと人の問ひし時
露と答へて消なまし
ものな(同上)

角て其後昔男初冠して、奈良の京春日の里にしるよし……狩に往にけり。其里にいと
なまめいたる女同胞住みけり。此男とは業平の浮名を筆に句はせて、かく物語に作りたり。
善惡判じ給へやと、姫は机に倚添ひてあらましをこそ語りけれ。そも……西の對の夜の梅、
春や昔の月やあらぬ、我身一つもあるとだに定めなき世の教へかや。富士や浅間の雪煙、
立歸る波を恨みしは、旅寝の枕假の宿、さまり果てぬは愛き命、あるは武蔵野に今日はな
焼きそ若草の妻を重ねて戀衣、怨みつ忍びつ逢うつ別れつ亂れしも、露と答へてあだなれ
や。鬼一口に食ひてげり。是を見彼を聞時は、昔男は名のみにて、本有毗盧遮那佛法身の
内證より、愚癡顛倒の出離の要を示すかや。治生産業實相に漏れず、讀み置く和歌の言の
葉までも皆大乘の妙なる法、説くに詞もよも盡きじ。されば思ふ事言はでたどにや止みな
んと、書き果したる物語、我も現の心地して其私を忘るれば、各々あつと感歎し、在五中
將南無幽靈頓證菩提と手を合せ、一度に回向なし給ふ。姫はしばし涙ぐみ、なふ此中にも
母上さま、嘴と足とは赤くして、白き鳥の鳴の大ききなる、是なん都鳥と候は父上の御形
見、怨めしの都鳥やミ、親子は文にふし沈み流涕焦れ歎かる。有純眉を顰め、都鳥とい
ふ事に父を思ひて歎くとは心得がたしとありければ、母上聞給ひげに御不審は御理、何を
か包み申べき、此子が父は前の木工の頭藤原の繼蔭とて、伊勢の國の者なりしが、家に傳

鬼一口一釜み出したる女を販戻されし事を、「鬼はや女を一口にくひてけり」と物語に書けるをいふ。

内証一佛院の自己心中に證悟せる妙理は佛院以外の者の窺ひ知る所にあらずをいふ。

治生産業一渡世のすぢはひをいふ、沙石集の序に、龜言歌語みな第一義に歸し治生産業しかしながら實相にそむかずと見ゆ。

思ふこと云々一思ふこと言はて石唯にやみねべき我と等しき人しなれば(伊勢物語)

妻一夫なり。

あふれきりもてあまこくう一遠方の意。

へし都鳥の一卷を、一年女院御參宮の時捧ぐるとて持出しが、齋宮にて何者にか討たれさせ給へ共、敵を知らねば力なく、かやうにさまよひさふらふ也。なふ寶は仇とは此事よと又絶え入てぞ泣き給ふ。有純横手をはたと打、扱は先年齋宮にて討たれ給ふは御身の妻か。なふ其討ちたる者は當所にて大鶴鶴刀禰太郎といふ隣郷のあふれ者、此頃其沙汰有故に、伴ふ人はなけれども上より御恩賞厚く蒙り、所の法をも顧みず、分際知らずの我儘者、我も狩場の遺恨あり。かやうに因み申からは片時も堪忍成がたし。いで踏ん込んで討つて棄て、本望遂げさせ申さんと太刀おつ取つてかけ出る。姫君暫しと引止め、御志は有難けれども、去ながら恨めしや只今は討たれぬ事の候ぞや。それをいかにと云に自が弟に松壽梅壽とて二人の若者候が、親の敵を討つまでは母上勘當し給ふ故、虚空に出て候が、討たせ給ふと聞ならば、さぞや本意なく妾を怨み申べし。とてもものに兄弟が行衛を尋ね討たせてたべ。あつたら敵を目の前にしばしも助け置かん事、思へばく無念やと、涙にくれて申さるゝ。義理を感じて有純はげに尤理りと、獅子の怒りを鎮めらる。母上喜び、あら嬉しの御詞や。扱頼もしの御心入や候。それにつき自ら今宵不思議の御告有。此物語を春日の社へ奉納せよ。猶行末を守らんとあらたに靈夢蒙れば、いざく參詣申さんと打連れ宮居に三重參らるゝ。是は扱置松壽梅壽兄弟は、近國残らず尋れども本より敵の名を知ら

奈良坂一近く、
ふり袖一降るにか
く。
肱笑一肱をかざして
一時に雨を凌ぐこ
と下
有徳人一寓者。

いぬめーうぬめ（汝
奴）に同じ。

ねば、尋るに甲斐ぞなき。され共憂き身を惜まばこそ、谷を越え峯を分け、都も近く奈良坂や、春日の里に入給ふ。先々宮居に参詣し、敵を討たせ給はれと、深く祈誓し立歸らんとし給ふ所に、俄に村雨振袖の、ひじりおほ 藤笠被ひ藤の花繁れる松の下蔭は、雨のためなる三笠山、さして行べきやうもなく、立寄り晴間を待給ふ。しかる所へ有徳人と打見えて、供人引其し來りしが、是も雨を凌ぎかね足早に駈け來り、やあそれ成童共早くそこを立退け、はや立去れとてはたと睨む。はて我儘成お人かな。御身が濡るゝをいやなれば、我々も同上事、外に木蔭があらばこそ入替りても参らせん。いや只ならじと有ければ、彼者大きに怒り、エ、存外成奴めかな。我を誰とか思ふ、大鷦鷯の刀禰太郎見知らぬと覺えたり。足元の明き内はや立去れと怒れ共、兄弟ちつとも臆せず、いやさ我々は旅の者大鷦鷯にも小鷦鷯にも、つひに恩は蒙らず、土に生えたる松蔭に立寄るは我らが得、天よりも降る雨に濡れらるゝは御身の損、人の知つたる事かとて嘲笑うてぞおはしける。いや口過たる忤奴やと、郎等共飛びかかり、兄弟の小腕取り、雑言吐かば踏み殺せと、無體に取て引出すは、扱理不盡なる仕業なり。とかくする程に空晴れ雨は止みにけり。刀禰太郎肱を張り、あの餓鬼共めが爰を退かじと争ひしに、望を叶へくれんとて、又兄弟を引立て無體に木蔭へ押付けて、松は千年といへば、いぬめらが好き次第いつまでも居れやとて、どつと笑うて歸りけり。

彼等しき―彼等ぐらの者。

梅壽は齒嚙をし、いかに兄上今の如く雑言せられ生きて生甲斐候はず。エ、口惜しや果討さんと、飛んで出るを取つて押へ、ア、暫く待て短慮也。我も無念に思へ共、大事の敵を持ちながら彼等しきと討ち果しては、犬死と言はるべし。唐土の韓信は市人の股を潜つて、終に天下を治めしとや。尤彼めは憎けれども、かたきには換へられず。所詮敵を討つまでは大切な一命ぞ。平に静まれくと、是を敵と知らずして、返すくの教訓に、實にややまつたり忘れたり、後れも恥も父のため、とは思へども無念やと、兄弟諸共牙を嚙み、泣くより外の事ぞなき。ア、よしなしさいざらば、神へお暇申さんと、又神前に参らるゝ。時に有純は親子の人々打つて、宮居にもなりしかば彼物語を供へつゝ、姫鰐口の緒を取りて打鳴らさんとし給へば、松壽も同じく手をかけて互に顔を見合、なふ松壽にてあらざるか、何姉君か、やあ梅壽丸か、母上か、是は誠か現かと、思はずひしと抱きつき、悦び涙は堰きあへず。有純も悦び、扱は内々聞及ぶ御兄弟にておはするかや。是偏に大明神の御引合と覺えたり。御出世の瑞相と互に積る御物語に、母上の給ふは、やあ有純殿のお情にて敵のあり所名をもとつくと聞てあり。何とぞしてかたぐを尋ね討たせたく思ひしに、今爰にて逢ふ事も是神の御恵み、則敵は當所にて、大鷦鷯の刀禰太郎と、語りもあへぬに兄弟横手をはたと打、何敵は大鷦鷯の刀禰太郎とや、口惜しや彼奴とは最前是にて口

人は智あるを以て貴
み云々―山高故不
貴、以有樹爲貴、
人肥故不貴、以有
智爲貴（實語歌）

論し、生甲斐もなく思ひし故、討果さんとしけれども、いやいや大事の敵をさし置、犬死して詮なし。敵と知らでおめくくと、討漏らしぬる我々が武運の程の拙さを、思へばく口惜しやと、人めもわかず泣き給ふ。かゝる所へ枇杷の左大臣仲平公、女院の御代参としてさんざめかいて見え給ふ。人々いかゞと立退きて、社の脇に忍ばるゝ。左大臣殿御奉幣事終り、神前に供へたる件の草子をおし開き、やゝ暫らく御覽じて、是は希代の一物と大きに感じ神主を召れ、誰人が奉納ぞと御尋有ければ、さん候あれに見えたる人々の捧げられしと申上る。さあらば其者召せ。畏て人々をやがて御前に召れつつ、事の子細を尋らる。時に有純罷出人々の氏系圖、扱業平の物語始め終りを言上ある。左府殿御感限りなく、末世稀成かたくな。凡人にてよもあらじ。いざく都へ誘引し院の御覽に供へつゝ、よく計ひ得さすべし。それく馬よ興よとて、打つれ上洛なされける。天の下せる生民は、心の中に朽ちずして、人は智あるをもつて貴み木あるをもつて三笠山、貴き春日の御恵み、おしなべく今の世までも仰がぬ人こそなかりけれ。

五 段 目

去間延喜七年三月七日枇杷の左大臣仲平公、五人の人々召具せられ女院へ御参あり。一

烏帽子の雛形——侍烏
帽子の袴の正面中央
部の稍。

かうにき——甲に被
て。

年齋宮にて繼蔭が討たれしやう、扱刀禰太郎が罪科の次第詳かに言上あり。就中業平の幽霊は姫に見え、斯様く／＼の通りとて、書きあらはしたる物語御前に披露ある。女院聞召、扱は其時天災に遇ひしは其祟りにて有けりと思召合されて、さぞな自らを怨みつらん、ア、不便の者共やと、忝くも御袖に御涙をかけさせ給ひけり。せめて亡父が思出にと、松壽をば伊勢守、梅壽をば大和守、扱有純を上北面に補せられて、其後草子を御披見あり、誠に業平が歌の體、心あまりて詞少なく、人知れぬ心中の密事、幽霊の授けしに疑ひなし。書き加へたる詞私を捨て、本文を助け、すべからく業平が辭宜と見せんため、謙退卑下の詞花言葉、あつばれ優なる物語甚だ感じ思召、則姫をば伊勢の内侍と召れ、代々の集にも載せられし伊勢といへるは此姫なり。扱大内記紀の友則御書所の紀の貫之凡河内の躬恒を召れ、右の次第を仰られ、此草子に名を付て參らせよとの院宣也。三人烏帽子の雛形を描へ、轉是を吟覽し、扱々めでたき作意にて候物かな。丈高くよせ多く和國の至寶是なめり。唐の文にも例し多く候へば、則作者の名によそへ伊勢物語と召さるべしと謹で言上ある。院げにもと思召、則外題を御自筆にて奏覽諸社の御奉納、中宮姫宮内親王局々に書き寫し、扱こそ今の代々までも吹傳へたる神風や、伊勢物語は是なりけり。かゝる所に春日の里の土民共我もくと參上し、扱も大鶴鶴の刀禰太郎、日比御恩賞をかうに被て、

ひたかぶと一同甲冑をつけたるもの。鹿を待つ間の狸一蹠なり、源平盛衰記二十に、思ふ敵にはあらずして阿部源二郎なり、あな無懈や、鹿待つ所の狸とは此事にやとあり。へんはい大股に歩むこと、和訓栞に、へんはい、下學集に返御は天子出御之時陰陽家の行ふ事也又再歩といふと見えたり。軍家に瀧頭といふも之を諷れるにや。よろひづき一鎧の着振を整ふること

やうやく神一不詳。

田畠を踏み荒し我儘いたすのみならず、此頃は近邊の獵人浪人を集め徒黨を結び、一揆の用意と見え候故、御領内の騷動もつての外に候へば、早速討手を与えるべしと、入替へく櫛の齒を引が如く訴ふる。時に兄弟罷出、さなく共親の敵申受けんと存しに、天の授くる所なれば、恐れながら我々に仰付られ下されかしと謹而申さる。左府殿聞召實允潔し、しからは勢を加ふべしと、在京の武士の内、若武者の直甲八十餘騎揃へつゝ、紀の有純に先手を給はり、大和路さしてぞ三重押寄せける。去程に大鷲鵜が境内方一町に櫓をなし、烏網・差竿・獵道具をひつしと飾らせ待懸たり。角て松壽兄弟は大勢を引具して、敵陣近く成しかば、先鬨の聲をぞ上させける。鬨の聲も静まれば、兄弟駒の鼻を並べ大音あげ、先年勢州齋宮にて理不盡に討たれたる繼蔭が二人の子、定めて覺え有ぬべし。親の敵の鬱憤なれば尋常に名乗つて出、相手業の仕合にて勝負を決せんとありければ、刀禰太郎聞もあへず、やあ鹿を待つ間の狸、よき慰みごさんなれ。いで某荒斬せんと、太刀抜いてへんばい踏み、鎧づきして出たるは、やうやく神もかくやらん。松壽兄弟御覽じて、是ぞ親の敵よと、無二無三に飛んで出る。あたみの兵庫おし止め、大將の御身にて輕々しくはいかゞ也。某荒斬仕らん、御見物なされよと、打物抜いて渡り合ひ、受けつ流いつ戦ひしが、強力に打立てられたぢくとする所を、横になぐれば胴中より、二つに成てぞ失せにける。

しんづ〜一語々

呼吸のかね〜呼吸のかねあひの意。

かんづか〜整束。髻をいふ。

臍落〜熟瓜をいふ、熟して華落つるに至る義。

一頭〜瓜を數ふるに一頭二頭といふ。

揚卷〜鎧の背に結び下けたる組。

中〜ちう(頭方)

刀禰から〜と打笑ひ、手にも足らぬ腰折武者にあつたら太刀を汚せしと、しんづ〜と引けるはさも憎體にぞ見えにける。松壽腹に据ゑかねて、餘さじと追つかくる。刀禰が小姓に小鷹の才藏駈け出て斬り結ぶ。嵩にかゝつて打來るを、ひつばづし後より袈裟にすつぱと斬られけり。舞三番には瓜生の小源次十六才と名乗て出、素槍を提げ梅壽丸に渡し合ふ。兩方器量の若侍花めづらしき見參に、偃月水月呼吸のかね、祕術を盡して突きけれども、梅壽輕げにひらりと飛び、槍の鹽首むす取、手繰り寄せてかんづか掴み、瓜生が細首打落し、なふ輕微ながら臍落の手作の瓜生一頭、是々進上申さんと敵の中へからりと投げ、靜かにこそは引かれけれ。四番には鴈摺みの鷲の助と名乗て出る。紀の有純御覽じてオ、事々しそこ引なと聲をかけ、二打三打は打つぞと見えしが、引組んで揚卷掴み、目より高くさし上て、大地へどうど打つけ給へば、微塵に成てぞ失せにける。五番には網平太、大鉦提げ出けるを、松壽是にありやとて、走りかゝつて丁ど斬る。眞向より弱腰まで梨割に斬り据ゑられ、弓手馬手へぞさばける。六番には勿係蹄の亂酒坊とて強力者、大鉦を振擔げ、一軍と進みける。もとより彼奴は強力と名にし負ふ者なれば、兄弟共に渡り合ひ疊みかけ捲り立て、しとゝ受けてはひらりと外し、はつしと打てば中にて拂ひ、木の葉隠れの神妙劔、獅子の洞入夢想の太刀、刹那の隙もあらせねば、兄弟あぐんで見えける所へ、

有純中に駈け入て、斬結べる其隙に、兄弟亂酒が左右へ廻り、兩の腕を斬落し敵陣へ追返す。羽拔鳥の報かと簾をたゝいて味方の勢、いや／＼どつとぞ笑ひける。今は兩陣入亂れ切尖よりも火炎を出し、花を散らして三重戰ひけり。寄手は多勢敵は無勢の事なれば、皆悉く討たれけり。今はかうよと刀禰太郎槻の棒を振り廻し、只一挫ぎと打てかゝる。三人の人々は大勢に渡り合、疲れたる腕なれば、暫し支へし其隙に、味方の軍兵鴈の突網持來り、いきほひかゝりし刀禰太郎が後よりかつばと被けけり。こは無念と悶ゆるを踏み倒し取て伏せ、兩腕兩足引張れば、兄弟悦び立かゝり、日頃己が好みたる悉皆鳥の料理よな、よくも／＼我父の科もなき身を討ちけるよ。廻る因果を思ひ知れと、づた／＼に斬散らし、勝鬨どつと作らせ、本望／＼千秋樂とわが本領に入部ある。それ日本は神國の神の名に負ふ伊勢物語、めでたし／＼とて貴賤上下おしなへ皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也

加 賀 掾 (印) 印

二條通寺町西入町

山 本 九 兵 衛 刊 印

大

曾

我



大曾我

ふじのまきがり

三浦黨一原本以下黨
を皆等とせり。

中條一原本中將とあ
り。

錦織一原本西こりと
あり。

惟任惟住一原本是等
是也。

既年號は建久四年五月下旬の事成に、右大將賴朝は富士の御狩有るべきよし、梶原平藏景時兼て詭意を蒙り、國々へ觸れける故遠國波濤に至る迄、我もくんと馳せ集り其勢雲霞の如くなり。景時着到御前に披露する。賴朝御覽じてそれにて讀めとの御詭なり。畏て候と、さつと披いて高らかにぞ讀上げける。先一番に御舅北條の四郎時政・嫡子江馬の小四郎義時・畠山の庄司重忠・嫡子六郎重安・三浦黨には和田の義盛一門九十三騎、御家の子穴戸安藝の四郎を初め、其外の諸大名、一々に讀み上げたり。駿河の國には吉川・舟越・高橋黨、遠江の國には横地・勝俣・伊野八郎、三河國に足助・中條・星野・荆部、尾張に本部・海東・熱田の大宮司・山田の左衛門、美濃の國に戸木・遠山・平野の平次・八矢の冠者、近江に錦織・佐々木・山本・柏木・木村の源藏、伊勢の國には加藤の彌太郎、伊賀に服部黨、大和の國には宇野が一黨三千餘騎、筑紫大名に大友・しよきやう・菊地・原田・松浦黨、惟任・惟住・別記・山住、丹後に田邊の小大夫・凡河の末竹、若狹の國にはあがのかうげんでう國政が末子青の

臨南―原本長なん。
安西―原本安在。
土肥―原本土井。

御寮―原本御寮とあり頼朝といふ。
一持―逸物の宛字。

打刀―鐔を入れたる長き刀、後世の大小といふ大にあたる。

ぜんぢやう―世に富士禪定立山禪定なぢいふは、高山に登り世間を離るゝをもて禪定三昧に入る意に心得たるなるべし、又絶頂の訛言なりともいへり(和讃菜)。

大郎鳥羽の兵衛、越前に雨谷・白崎・堀江・本庄、加賀の國には富樫のぶんぜい・林の六郎・井上左衛門、能登に土田・竹邊、越中に石黒・宮崎、越後に五十嵐、信濃に仁科・高梨・津野・望月・根津の甚平・上の諏訪・下の諏訪、甲斐源氏に取つては一條・板垣・南部・下山・小笠原、下野に那須の鹽谷・穴戸・佐竹の人々、上總に廳南・廳北、下總に安西・金切丸、武藏に横山・黨・平山・黨・私の黨・丹の黨・兒玉・黨・清の黨・七黨是等惣じて四十八黨の人々、相模の國に土肥・土屋、伊豆の國には工藤左衛門助經、惣じて馬上歩武者百七十三萬人とぞ讀上げたり。賴朝御機嫌淺からず、さあらば打立者共と、既御狩と三重聞えける。去程に御寮の其日の御装束青狩衣に立烏帽子、尾花蘆毛の一持に白鞍置かせ召れたり。御馬副には五郎丸赤地の錦の直垂を、下し給て是を着る。力は八十五人が力崩黄の腹巻着込にし、四尺八寸の大太刀一尺八寸の打刀十文字に指すまゝに、白柄の長刀馬手の小脇に掻込うで君を守護し奉る。秩父殿は狩装束鷹据ゑて御供なり。和田の義盛狩装束、千葉・小山・宇津宮、何も狩場の出立にて鷹据ゑて御供なり。犬の鈴應の鈴轡の音がざゞめいて、さしもに廣き富士の裾野に、駒の立所は三重なかりけり。去程に三千人の列卒の者、三日かけて以前より峯へ分け登り、ぜんぢやうを眞下りに、岩を起し枯木を叩いて喚き叫んで三重狩下す。かゝりける所に、幾年經るとも知らざりし野猪一つ、主知らぬ猪矢二つ三つ負ひながら、大に猛

三頭一不詳。

そろきーそは、く
する。

つて出たりけり。列卒せきその者共是を見て、我留われどめんと諍まをひて出る所懸倒かけたふし、四五人迄ぞ
かけたりける。貴賤群集きせんぐんしゆの列卒せきその者、四方へばつと辻散つじりて近付者きんつけはなかりけり。爰に伊
豆の國の住人仁田にだんの四郎忠綱此由を見るよりも、縦鐵銅てつてつどうを丸めたる猪しなりとも、いかでか
以て餘さんと、云ふより早くつゝと寄るを、乗つたる馬を主共ぬしに中ちゆうにすくうて投上げ、落
ちばかけんとする所を、向様むかふさまに乘移る。されども逆様に乗つたれば、猪は乘られて腹を立
て虚空こくうを飛んで廻りしは、身の毛も彌立よつ三重ばかりなり。仁田は手綱の名人にて、腰も切
れよと挟み付、尾筒を手綱にむんと取り、樂天傳へし三頭命限りに乗たりける。猪はいよ
く猛りをかけ、岩巖石いはがんせきをも嫌ひなく、中に飛んで懸廻かけまはれば、今は早大童わらはに成て落ちじと
ばかり心得けり。されども此猪數多手あまたを負ひぬ。少撓すこしにゆむ所を腰の刀を引ひん抜いて、胴中
突き立て肋骨四五枚はらり掻切れば、何かは以て堪ふべき、四足を土に踏立て立ち竦すくみ
にぞ死んだりける。忠綱急ぎ飛んでおり、下人共に擔かせつゝ御前みまへをさして参りしは、前代
未聞みもんの高名かうみやうやと褒めぬ者こそ三重なかりけれ。是は扱置、曾我兄弟の人々は猪に心は付か
されは、鹿かの子の壹つも留め得ず、いかにもして敵助經に廻り逢んと計也。爰に弓手の側
を見て有れば、射手の數多有る中に、四十ばかりの男子三つ有る鹿に目をかけて、雁股番
つて追つかくる。時宗誰と見るに、あは助經と見るよりも、氣もそろき身震ひして、

なふ鹿こそ通れ十郎殿、御覽ぜられて候か。鹿ぞと云ふに心得て、見れば敵助經爰にあり。天の與へと嬉しくて、弓と矢取つてうち番ひ兄弟共に追つかくる。十郎は兄なれば一の矢をと心がけ、敵の矢つばばかりに目をかけ馬の足元見ざりけり。弱き馬に強く手綱を乗る程に、とある伏木に胸を突き眞逆様に落ち給ふ。五郎あまりの悲しさに急ぎ馬より飛んで下り、祐成を引立て馬起さんと犇めく間に、助經名馬に乗りたれば谷峯隔てゝ落延びたり。行方知らねば尋ね行くべきやうもなく、實の山に入りながら空しく歸る兄弟の心のうちこそ三重無念也。扱其後會我兄弟の人々は、心盡せし甲斐もなく祐經を打洩らし、とある所にたゝずみて口説言こそあはれなれ。祐成仰けるやうは、あゝらゆゝしき敵の果報や。扱も拙き我々が運命かな。今はいつを可期すべきぞ。人目つゝみて腹切らん。五郎いかにと有ければ、時宗承り、仰の如く弓折れ矢盡くるとはかゝる事をや申すらん。さりながら爰は人目も繁ければ、閑所を求め御自害候べし。扱も〱五つや三つの年よりも、十八年が其間心を盡せし事どもは、濱の眞砂は盡くるとも我等が思ひはよも盡きじ。などや佛神三寶も捨て給ふか怨めしやと、猛き心もしほ〱と泣くより外の事はなし。かゝるあはれの折節に、秩父殿と和田殿は此有様を見給ひて、扱も不便の會我兄弟が風情かな。弓矢取る身の心ざし尤もかうこそあるべけれ。我々も若き子供の候へば、人の上とも思は

むかほきつゝみー行
藤を鼓として打ち鳴
らすなり。

上もなきこよひのー
こよひはこひの誤な
るべし、こひに火を
かけ、煙に氣振を言
ひかけたり。

けこー堅固。

こくうに存じこく
うは虚空。心の浮れ
立ちなり。
松川・松皮。

いたら貝ーいたや貝
ともいふ、帆立貝に
似たり。

れず、いざや彼等に力を添へ、夕さり夜討にせさせ申さん。尤の次第とて行^{ひか}藤鼓^{ふつぐ}打鳴らし、重忠發句にかくばかり、夏山や思ひ繁みの焦るゝは。義盛やがて付け給ふ。今宵富士野に飛火燃え立つ。曾我兄弟はこれを聞き、此言棄^{いじ}は我々をとぶらひ給ふと覺えたり。今宵富士野に飛火燃え立つとは、夕さりの暮程に夜討にせよとの言葉也。いざや我等も連歌申さんと、祐成やがてかくばかり、上もなきこよひの煙のあらはれて。時宗やがて付けにけり。天の岩戸をあけて訪へ君。和田秩父は聞召し、扱は今宵を限りなり、明けなば跡をとぶらへとや。哀れなりいたはし。世に憚りのなかりせばとぶらひ矢をも射つべきに、不便なる次第にて涙と共に歸り給へば、此人々も嬉しくて、柴折り結ぶ草屋形に泣く。歸らせ三重給ひける。去程にかくて祐成は敵のけこを見んその爲に、密に庵を立出で屋形を見給へば、明日は鎌倉入有るべしとて、馬の湯洗ひ庭乗して犇めく所もあり、又或方を見れば、大鼓小鼓六の緒の調を立て、大勢どめいて遊ぶ屋形もあり。祐成餘りにこくうに存じ、扱それよりも東へ廻りて家々の幕の紋をぞ見たりける。まづ一番に釘貫・松川・黄村濃、此黄村濃と申は三浦の平六兵衛義村の紋にてあり。石疊は信濃の國の住人根井の太夫大彌太、扇は淺利の與市、舞うたる鶴は飯原左衛門、庵の内に二つ頭の舞うたるは駿河の國の住人に天智天皇の末孫竹の下^ひの孫八左衛門、いたら貝は岩永黨、網の手は須貝黨、

大、大萬、大吉
これらの文字を紋所
とせるもの。

もよほものななし
僞しつれ來れる從者
なし。

大洲流は安田の三郎、月に星は千葉殿、傘は名護屋殿、團扇の紋は兒玉黨、裾黒に鱗形は北條殿の紋にてあり。繫馬は相馬殿、折烏帽子立烏帽子大一大萬大吉。白一文字黒一文字は山の内の紋にて有り。十文字は島津の紋、車は濱の龍王の末孫佐藤の紋、竹笠は高橋黨、龜甲輪違花うつぼ三本傘雪折れ竹二つ瓶子川越、三つ瓶子は宇佐見の左衛門、二つ頭の右巴は小山の判官、三頭の左巴は宇津宮の彌三郎友綱、鎬矢伊勢の宮方、水色は土岐殿、四目結ひは佐々木殿、中白は三浦の紋、秩父殿は小紋村濃、割菱は竹田の太郎、梶原は矢筈の紋、下白は摂御所の御紋と見えにける。爰に又庵の中に木瓜ありくと打つたるは、我等が家の紋ぞと思ひ一入懷しくて、祐成は少し休らひ見給ふ所に、敵の嫡子犬房丸幕の内より一目みて、父に向つて十郎の御通りと申す。祐經聞てやあ十郎とは誰が事ぞ、相澤の十郎か豊後に白杵の十郎か、此度富士野へ御供したる十郎はその數あまたあるぞかし。汝はいづれの十郎を申ぞと云へば、いや曾我の十郎の御通りと申す。おゝその者は昨日某谷越に見てあれば、瘦せたる馬に腰張鞍、雜人ばらにうち交はりし有様は、山田の畦の案山子にことならず。國よりもよほ者はなし、疲れに臨んで推參にや來るらん。さもあらば此方へ召して一つ盛れとぞ申ける、犬房なゝめに悦び急ぎおもてにたち出で、父の仰にて候、御入あれと申す。祐成誰ぞと見れば敵の嫡子犬房也。内へ入らぬも何とやら氣を持ち

奥野―伊豆赤澤山の
奥の地名か。
すぢなき事―條理の
立たぬ事。

さかい―境か。領
内の意なるべし。

わやう―和様か。

をんしておかん―
「思ひて盛かん」にて
恩をかけて、召使は
んとの意なるべし。

顔に益なし。心得たりとそれよりも犬房さうちつれて幕の内へぞ入りにける。祐經片膝押
立て忍小太刀に手をかけて、これへ―と請じける。折節備前の大藤内があり合せ、祐經
の色代ちつと様ある人よと見てあれば、御客たゞこれへ―と請じければ、その時に祐成
は祐經が馬手の對座に直らるゝ。いまだ祐成の膝も直らぬ其先に、祐經が初對面の詞こそ
推參なれ。誠や聞けば面々は、此祐經を親の敵との給ふよし、もつての外の僻事なり。御
身の父の河津殿は奥野の狩にて股野と相撲の遺恨にて、兄の大庭が打たとも申し、又弟の股
野が打たとも申す也。すぢなき事を誤つて僻事思ひ給はんより、常に立入りて駒に水桶さ
するならば郎等とはよも云はじ、家の子こそいふべけれ。方々が乗馬なくは、さかいに多
き荒馬一疋取つて乗り給へ。直垂なくは犬房が脱替へ取つて着給ふべし。今日よりしては
祐成と祐經が中に意趣はあるまじき、わやうの盃さすぞとて、十郎殿にさいたるは無念た
ぐひはなかりけり。祐成は聞召し、えゝあつぱれ口惜しや、をんしておかん、いや家の子
にせんなどゝいはれては、たとへ敵ならずとも死なではいかでおかるべき。酌んだる酒を
祐經が面にさつと投げかけ、眞向二つに切割つていかにもならんと思ふが、いや待てしは
し我が心、時宗一人残し置き難兵の手にかけん事の口惜しさよ。とやせんかくやあらまし
と、酌んだる酒をほしかねてぞ見えにける。祐成心を取直し、よし―時は變ると日は變

らじ、今宵討たん敵なり。此世の内の思出に何といふとも咎むまじ、されども心ぐるしきは大藤内が見る所、西國武士の見る目也。現在親の敵を目の前に置ながら、かゝる推参いはせつゝ聞きながら立ちぬるといはれん事も口惜しや。よし／＼それも言はば言へ。夕さり恥を濺ぐべし。とかく座敷に長居して、無念度々重なりて所々の死をせば、五郎が恨みん所もあり、立たばやと思召し、扱續けさまに三献酌んでさらりと干し、祐經に戻し、今宵はこれに宿直申さんが、北條殿の方様に聊か所用の候へば、明日五郎を召連れ参るべし。暇申してさらばとて座敷を立つて出様に、敵のけこを思ひのまゝに見すまして草館にぞ歸られける。かの祐成の心の内口惜しかりともなか／＼申すばかりはなかりけり。

中 之 段

庵にありし時宗は祐成を待ちかねて、既に出んとせし所へ、十郎やがて歸り給ひ、時宗を見給ひてそゝろに涙を流さるゝ。時宗此よし見参らせ、こは怪しからぬ御風情、何事か候らん覺束なしと申ければ、祐成聞給ひ、さればこそと思はずも敵の屋形に立入て祐經に對面し、初對面の詞の無念なりし其時は、刺し違へんと思ひつれ共、おことに名残が惜しき故、つれなき命長らへて再び逢うたる嬉しさに、今の涙やこぼるらん。時宗承りこは有

慈悲は上より降る
謎。

きまん國一不詳。

やツすく易々。

龍門に云々―遺文三
十軸、軸々金玉座、
龍門原、土、埋骨不
現名（白樂天、和漢
朗詠集）
さんしよぢく―さん
しふぢく（二十軸）の
謎。

難き仰かな、慈悲は上より降るとは今こそ思ひ知られたり。かく申す時宗ならばたまに遇うたる敵と思ひ、座敷に直らぬその先に、只一太刀に本望遂げ、とにもいかになるべきに、五郎が事を思召し出されて、これまでの御歸りはよに有難き次第也。とてものに敵の樣態、ちと御物語り候へ、承り度候。祐成聞給ひさればその事敵の體は、馬は築土人は亂れなれば、たとへばきまん國の鬼王、羅刹國の羅王、鬼を搦めし白澤王、扱本朝にては定光・季武・綱・金時・田村・俊仁・餘五將軍、二相を悟る人なりとも、たやすく此陣にて親の敵を打おほせ、やツすく―と出でん事は思ひも寄らぬ事なれども、それは和殿と某が心一つに有るべきなり。敵のけこはよく見たり、五郎いかにとありければ、扱は案内疊りなし、夜更けは思ひ立ち申さん。宵の程のつれ―に、故郷へ文を認めん。此義尤然るべしとて、矢立巻物取り出し、燈火微かに搔き立て、ありし昔の思ひより、今の憂き身の果までを思ひ―に書かれたり。十郎はともすれば、大磯の虎が名残を書かれたり。五郎が筆のすさみには、箱根の別當の御事、扱其外はいづれも同じ文章也。取分け五郎が悦び申すは、不思議に母の御不興を許され申、父母孝養の命をば富士の裾野に捨て置きぬ。骨を野外に埋めども、名を萬天に揚ぐる事、父が子たればとり傳ふ家引起す弓矢の名、龍門に骨は朽ちながら家門の名を埋まず。金玉の聲はさんしよぢく遠島まで疊りなし。密に是を

惟ただみれば、刀さきを握にぎり劔けんを帶おし、弓馬の道に携もはり、戰場に出て命いのちを棄すつ。これ高名かうめいの爲なりき。五つや三つの時よりも十八年がその間、思おもひ歎なげきはわれ／＼二人で留とどめたり。年長としなが月日去のちつて後建久四年五月下旬八日の夜、天は暗くらしと申せども思おもひを今宵晴はるゝなり。祐成判はん、時宗判とばかり留とどめ、次第かたみの形見取集め筆を捨てゝぞ泣なき居たる。さて祐成には鬼王丸、時宗には團三郎とて、二人の者を召よされ、いかに汝等古里ふるさとに歸り文をば母に奉たれ。弓と鞆うづは會我殿へ、鞭むちと礮ひは二の宮の姉御前あねごぜ、馬と鞍をば和殿原、恩愛主しうの形見ぞと思おもひ出さん折々は念佛申得さすべし。わざと文には書かぬぞや。扱と又母上に申べきは、給はる御小袖參まゐらせたくは候へども、最期に着て死ななため參らせず候。その恐れ候へども、御小袖を身に纏まとひ死なん事は、最後に母上を拜み申す心地して立出候と必ず／＼申すべしと、言いひも果さず又はら／＼とぞ泣なき居たる。鬼王も團三郎も涙にくれて居たりしが、酌しやくと直し申すやう、えゝ口惜くちしや、何處どこにていかほど見落され奉り、かゝる御誂うづの候ぞや。御兄弟の人々のあれほど多おほき敵かたきを討うたんとと思おもひ立ち給ふに、只二人有る下人が見捨てゝ歸る法はや候べき。仰おほに従したがひ故里ふるさとに歸り候へて、はじめて人を頼たのむとも譜代ふだいの主を見捨てゝ死なぬ程の言甲斐かひなしが、何の益えきにか立つべきと目かくる人も候まじ。たとへ入道つかまつり世を厭いとひ候とも、恩を知らぬ奴原が、道心みちこころ如何有るべきと、後指うしろさしをさゝれなば出家しても

面目なし。上臈も下郎も死ぬべき時に死なざれば、生きたる甲斐も候はず。いかに團三郎、たとへ夜討の御供こそは叶はずとも、臈病至極の我々が腹切るやうを見せ申さんに、爰へ寄れやと云ふまゝに、大肌脱ぎに肌脱いで、刺違へんしたりけり。祐成も時宗も慌てて中へ割つて入り、二人を左右へ押分けて、おゝ思ひ切つたり、汝等よ。されば柙櫃の林は荆棘までも香し。我等が思ひ切りければ、汝等までも思ひ切りけるか。やれ見落す事はなきぞとよ。國へ形見を届けずは、時の珍事口論にて死したりと人も思ひ、また母上も思召されん口惜しさにわざと下すぞ。只下れ。たとへばな、味方に千騎萬騎あるとても、此富士野にては思ひも寄らず、一人なり共忍び入らば討ちおほせん。人數多にては叶ふまじ、はや疾くとの給へば、二人の者承り飽かぬは君の御説かな、此上はともかくも仰に従ひ申さんこ、形見と文を給はりて主なき駒の口を取り、涙ながらに立出れば、是が此世の別れかや、さらばとの涙の別れぞあはれなる。別れに三重なり給ふ。

鬼王團三郎道行

行かんとすれど五月闇、涙にくれて道見えず。思ひ駿河の富士の根の煙は空に横折れて、隔ての雲となりにけり。裾野の草は露滋く、まだ秋ならぬ道の邊に、螢微に飛びつれて、

思ひひに火をか
く。

きんさつと一金札
を。

身より思ひの餘りつゝ虫さへ胸や焦すらん。いとど涙の多かるに、何と蛙の鳴き添ひて、井出の屋形を別るらん。馬も心があればこそ北風に嘶ひけめ。實心なき畜類も馴るれば慕ふ習ひあり。ましてやいはん我々は、形に影の添ふ如く、明くれば鬼王暮るればまた、團三郎と召されしに、今宵離れて明日よりは、祐成とも時宗とも誰をかさして申すべき。同じ浮世に生るゝとも、曾我の祐成時宗の、その殿原にてなかりせば、かほどに物は思ふまじ。我等ばかりと思へども、昔を傳へ聞く時は、悉陀太子は十九にて王宮を忍び出で、檀特山の寶嶺、阿羅々仙人を師と頼み、御出家ならせ給ひし時、玉の冠石の帶御衣もろともに脱棄てゝ、きんさつと書き添へ、健陟駒諸共に王宮へ返し給ひける。健陟駒も車匿も君の別れを悲しみて、山谷に嘶ひ悲涙涕泣せし事も、今の別れにあひ同じ。それは佛の濟度にて終には廻り逢ひ給ふ。かの祐成や時宗に、今宵離れて其後に又と逢ふべき君ならず。かゝる憂き身の思ひの果何となりなん悲しやと、泣く／＼曾我へ歸りける。とにもかくにもかの鬼王團三郎が心のうち、これぞ誠に世の中の物のあはれはこれなりき。

かくて其後曾我兄弟の人々は、あら嬉しや此者共、今ははや富士の原をや過ぎぬらん、いざや最期のいで立せん。此義尤然るべしとて、やがて支度をせられける。祐成その夜の装束には、肌には母上より給はる小袖引違へ着るまゝに、上は群千鳥の直垂、下は紺の小袴

かいこうで―掻き込みての音便。

さうの火―強盗提灯の火が。

の稜高らかにさし挟み、箱根の別當より賜はつたる黒鞘卷の刀をさし、三尺五寸の赤銅造りの太刀を佩き、巻松明弓手の脇にかいこうで、火はもつたるか時宗とて、先に進んで出らるゝ。五郎がその夜の装束には、是も母上より給はる小袖引違へ着るまゝに、質布に蝶を二つ三つ所々に付けさせ、下は紺の小袴の稜高らかにさし挟み、赤木の柄の刀をさし別當より給はつたる兵庫鐐の太刀を佩き、どうの火もつてぞ出でにける。忍びて敵を狙ふには、暗きにしくはあらねども、辻々の篝火は天をも照らすばかりにて、草の下なる細道迄も隠るべきやうあらざれば、たゞ日中の如く也。され共舍人草刈の馬飼ふ體にもてなして、屋形くの前を過ぐる。あやしや誰そと咎むれば、これは御内の草刈と答へ給ひ、御寮の假屋の御所中へ忍び入るこそ危うけれ。され共世間静まり人影も更に見えざれば、松明に火をつけ静かに振つて見てあれば、南無三寶祐經屋形を替へて爰に寝ず。兄弟大きに呆れ果て、扱ひかになりなん弓手はやがて御所なり、妻手は秩父、前は和田、後の陣は横山黨、警固の武士は箒を焚き、矢先を揃へ楯を突き、御用心くと呼はるは、たゞ鳴神の如くなり。運が盡きてさとられ敵屋形を替へたりと、兄弟の人々は羽拔の鳥の中空に、立ち煩うてぞ居られける。かゝりける所に誰とは知らず、腹巻着たる男子の、長刀もつて寄りければ、兄弟あは敵と思ひ太刀抜きもつてかゝり合ふ。されども此男子長刀取りも直

さす、近々と立寄り小聲になつて云ふやうは、いや苦しうも候はず、秩父殿の後見本田の次郎親常と申す者にて候。昨日狩場の言葉引矢の情とはん爲め本田を出し候。宵までは祐經此屋形に候ひしが、大藤内に諫められ、御所の左の妻戸の脇に宿して候。まづ松明をもしめし、刀も鞘に納められよ。たそといふとも物言ふな。此親常に言はせられよ。此方へくゝ手をぞ引く。嬉しさたぐひはなかりけり。中門わたりを打過ぎて、あやしやたそと咎むれば、秩父殿の後見本田の次郎親常非番なりと言ひければ、さして咎むる人はなし。扨祐經が臥したりし妻戸の脇に押入り、なふ人數に親常も御供せんと申す。兄弟聞召され、誠の時の志、秩父殿の御芳志、本田殿の御情とかう申すに及ばれず。もしも此事しおほせで、雑兵の手にかゝらん時、必ず御手にかけれ亡き跡をもとり隠いてたまはらば、最期の供には抜群にまさりなん。人數多にて叶ふまじ、はや疾くくゝとありければ、親常承り、扨も是非なき次第かな、その義にて候はゞ弓矢の禮儀これまでなり、お暇申候と本田は宿所に歸りける。扨それよりも兄弟は、互にとり傳へたる弓矢の禮儀これまでと、二人目と目を見合せて、口説き事こそ哀れなれ。風はいつも吹きけれど、今宵の風ぞ身にしみぬ。名残はいつも惜しけれど、今宵ことさら惜しき也。七度契りて兄となる、六度睦びて弟となる。今宵離れてその後に来來の契り定めなし。いまだ敵に逢はぬその先に、別れの姿よく

母かうぞ一母はかう
その意。

行方もしらぬー「ぞ
この馬の骨と分ら
ぬ」といふ程の意。

あゆみの板―通路の
爲に渡せる板。

見よや。父幽霊が見たくは此祐成を見給へ。母かうぞと思ひ、時宗を見んと松明ばつと振り立て、互に顔を見合せて、脆きは今の涙なり。諸事の哀れと聞えける。かゝるあはれの折節に、不思議や風も吹かぬに妻戸がきり／＼ばつと開く。あはや敵と見る所に、さばなくて大磯の虎が妹龜壽と申す女也。人々の夜打のよし夢ばかり承り、もしさもあらば此妻戸の懸金外さんため、宵より待つこそ久しけれ。此方へ入らせ給へとて、祐經が寢屋に導き、今ははやこれまでなりお暇申候と、行方知らずになりけり。兄弟なゝめに思召し、さて松明振立て見てあれば、祐經と大藤内たゞ二人ばかりぞ臥しにける。祐成仰せけるやうは、いかに時宗、幸敵も二人我等も兄弟、御邊はあの大藤内を斬るべし、我は祐經を討たんといふ。えゝこは口惜しき仰かな、五つや三つの時よりも、心を盡し狙ひたる親の敵をさし措きて、行方も知らぬ瘦男子斬つては何の益あらん。總領にてましませば一の太刀を遊ばされよ、二の太刀に於いては某仕らんと申す。おゝあやまつたり時宗、たゞし寝入りたる者を斬らん事、死人を斬るに異らず。あつたら親の敵を生顔見ていざ斬らん。尤然るべしと、跡や枕にさし挟み、三千年に一度花咲き實のなる西王母が園の桃、桃花の節會優曇華の親の敵に遇ふはまれなりといへども、思へば易かりけるぞや。いかに祐經、大事の敵もつ者がかく不覺には見えけるかと、歩の板をどう／＼と踏んだ。祐經さ

かた一肩。

しよけん一初見にて
明日第一番に見参せ
んとし意か。

おと、い——昨日
(ラトト)。太藤内
は常時祐經のとりな
しにて召上られたり
し所領に安堵せしな
き。
のつけ——仰向。

しつたりと云ふまゝに、太刀おつ取り起上らんとする所を、祐成もつて開いてちやうど打ち、弓手のかたより馬手へ斬つて落せば、時宗これにありやとて腰のつがひを斬り離す。五郎が太刀はつるぎにて疊三疊裏返し、歩の板に切付けえいやつと引くまゝに、鐔を返してちやうど切る。せめては斬つて慰み、日頃の念を晴らせやと、躍り上り飛び上りずん／＼に斬るほどに、果報いみじき祐經も、遂に空しくなりけり。側に臥したる大藤内太刀風に目を覺し、かつばと起きて逃げけるが、夜討は曾我の者共なり、明日のしよけんは大藤内と嘗つて、揉みに揉うでぞ三重逃げにける。さる程に兄弟の人々は、しよけんと云ふが憎ければ、餘さじと追つかけ、高股斬つて落せばのつけに反す所を、時宗これにありやとて、細首中に打落す。おと、い安堵を賜はり、詮ない者にかたらひて、非業の死をしたりけり。かの兄弟の心の内、嬉しかり共中／＼申すばかりはなかりけり。

下 之 段

曾我兄弟の人々は親の敵祐經を思ひのまゝに打おほせ、小柴の陰にさつと引て、暫らく息をぞ繼がれる。祐成仰せけるやうは、いかに時宗本望は遂げつ、いざや爰にて腹切らん。時宗承り、御説にて候へども、御寮は祖父伊東の敵なれば、御所中へ亂れ入り、頼朝

卯の花くたしー卯の
花くた(驚)しの誤、
梅雨をいふ。

を^ひ一太刀恨み名を後代に揚げんと云ふ。おゝよく言うたり時宗、さりながら祐經にはとゞめを刺して有りけるか。あれほどになす上は何の子細の候べき。いやそれはさもなし時宗、明けて實檢あらん時、慌てたるか怯れたるか、あつたら親の敵にとゞめを刺さで打捨てにしたるなんど、言はれては骸の上の不覺なり。五郎いかにと有りければ、その義にて候はゞそれに暫く御待ち候へと、扱有りし所にたち返り、松明振立て見てあれば、跡も枕も見えわかず。されども死骸を引返し、空しき顔をつくぐ見て、構ひて冥途黄泉までも我等を恨むる事なかれ。日頃造りし罪科の只今報ゆと思ふべし。我等が父の河津殿に手向けんための名刀也。さぞや尊靈河津殿嬉しく思召されんと、言ひも果さず腰の刀ひん抜いて、いかに祐經、此刀こそ御邊が秘藏せし刀、いづぞや頼朝箱根詣での有りし時、御邊は時の御供にて、此山に河津が三男あると聞く。對面せんと呼び出し得させたる刀也。御邊は本の主なれば、返さんがその爲に失はでもちし也。金はかねて知つらん。試み給へといふまゝに、馬手の小耳の下よりも弓手へ通れと三刀刺し、これまでなりといふまゝに兄弟もろとも御所をさして切つて入る。宵には晴て有りけるが、敵打ちけるその時に、俄に空かき曇り五月雨卯の花くたしぞ。三重降りにける。さる程に辻々の篝火一度にばつと消えければ、東西俄に暗うなつて、落ちんとだにも思ひなば心にまかせて落ちぬべし。され共思ひ切

つたる事なれば、只今御寮の假屋の前にて、親の敵祐經を打つて出づる兵を、いかなる者と思ふらん。伊東が孫河津が二人の子、十郎時宗こゝに有り。當君の御内に弓取はおはせぬか。などおり合ひて打留め名を後代に揚げぬぞと、聲々に呼ばはらる。暗さは暗し雨は降る。御陣俄に震動し、弓一張太刀一口に二人三人取付いて、わがのよ人のと奪ひ合ひ緊馬に乗りながら、鞭を打つ所もあり。上を下へと三重かへしける。さる間爰に武藏の國の住人新開の荒四郎と名乗つて、敵は何十人もあらばあれ、それがし一人にや越ゆべき。對面せんとぞ申しける。祐成此由聞召し、やさしき汝が言葉かな。そこを引くなといふまゝに透もあらせず飛んでかゝる。詞は主の恥をも知らず、御免あれ言捨てゝ取つて返し逃げにける。十郎あまさじと追つかくる。逃げ所なくして小柴垣を引破り、高這してこそ逃げにけれ。され共一番に大樂の平馬允と名乗つて、夜討は誰そめづらしや、我々が目の前にて狼藉はせさすまじ、手並のほどを見せんとして、大聲あげて切て出づる。祐成は聞給ひ、かほど多き人中に、一人名乗て出づるこそ類少なき弓取なれ。曾我の十郎爰にあり、受けて見よと言ふまゝに、小柴の陰よりつつと出で、もつて開いてちやうど打つ。弓手の腕首打落され、詞には似ざりけり、早御内をさして引きにける。二番には愛甲の三郎と名のつて、五郎にむずと渡り合ひ、頬先切られて引て入る。三番に御所方の黒彌五と名乗て、十

あいらーあいらの
誤か。

郎殿に渡り合ひ、肩先切られて引て入る。四番にはもてきどの五郎にむずと渡り合ひ、膝口割られて御内をさして引給ふ。五番の度には伊賀の國の住人吉田の三郎諸重、十郎殿に渡り合ひ、諸膝薙がれて引て入る。六番に吉川と名乗つて五郎にむずと渡り合ひ、高股切られて引て入る。七番に品川と名のつて十郎殿に渡り合ひ、馬手の小脇を刺されて幕の内へぞ入りにける。八番の度には紀伊の國の住人市川別當太郎忠純、大音あげていひけるは、夜討と言はんは何程の事の有るべきと大聲あげて切つて出る。時宗これを聞き、やあ汝は音に聞えたる碓氷の峠なんどにて盗みこそは能なり共、晴業の切合はこれがはじめにて有らん、手並の程を見せんとて、もつて開いてちやうど打つ。細首中に打落され朝の露と消えにける。扱九番には筑紫武者曰杵の七郎諸重十郎殿に渡り合ひ、眞向割られて引て入る。十番の度には仁田の四郎忠綱大音あげて言ひけるは、何さま東西暗うして物のあいろが見えざるに、松明出せと呼ばはつたり。祐成は聞き給ひ、かほど多き人中に松明好みする奴に手並の程を見せんといふその際に、松明をわれ劣らじとさし出す。簀・靱・蓑・笠まして傘などをば、よき松明と火をつくる。萬燈會に異ならず。扱祐成と忠綱は鎧を削り鐔を削り、追うつ捲つつそれよりも暫しが程こそ三重戦ひける。され共仁田は新手なり、十郎は宵よりの疲れ武者、多くの人を斬りければ太刀より傳ふのりにて手の内や廻りけん、

せんと先達と。

慶王の一還城樂に慶王入日を錦にて招きかへす事あり。ひとをやり一躍か。犬居一犬のつくほひたるやうに臥すこと。

太刀鐔元より折れにけり。祐成差添ひん抜いて爰をせんと切結ぶ。少し足立肩下り上手になつて十郎殿、仁田を白洲へ追ひ下さんと走りかゝつて打つ太刀を、仁田さらりと受流し柄を突いて裾を薙ぐ。十郎の馬手の力足膝の口をさし上げて、すんど切つて落しける。弓手の足ばかりにて半時計戦うたり。これや此慶王の暮日向ふ錦の手、入日を返しひとをどり後を防ぎ越す刀、百手を碎き戦へど、弓手の足ばかりにてさのみはいかでこらふべき。犬居にどうど轉びつゝ口説言こそあはれなれ。やああたりに五郎や有る、祐成こそ仁田に合ひて打たるゝ也。御邊は命を全うして君の御前に参り、我等が有様申して死ね。はや首取れや忠綱、心得たりといふまゝに、やがて首を打落す。満する年は二十二、あつたら剛の若者やと惜まぬ者こそなかりけれ。あら無慚や時宗は、弓杖二杖三杖隔てゝ戦ひしが、祐成の最期の由を聞くよりも、はや打つ太刀も弱り果て、是非をもさらに辨へず。かくては叶はじと御内をさして切て入る。爰に御所の五郎丸薄衣取つて上に掛け、とある所にひつ添うて今や遅しと待ち居たり。これをば知らで時宗戸をばつと蹴破り、御内をさして切て入る。五郎丸やり過し、えたりや應さいふまゝに弓手すがひにむずと抱く。えゝ女と思ひ見損じて抱かれぬこそ口惜しけれ。されども事ともせず中にひつ立て七八間ぞ走りける。五郎丸かなはじとや思ひけん、夜討をば組留めたり、下合へやつと呼ばはつたり。大

らいてう一語勢にて
普観するなり。

下り上り一原本「折
のぼり」とあり。

勢はつと折り重なり、手取り足取り繩をかけ、大將殿へ追^{おっ}つたる、無念なりける三重次第なり。さる程に時宗を高手小手にいましめて、君の御前^{ごまへ}にひつ据^すうる。頼朝御覽^{らいてう}して、時宗とは汝が事か。さん候といふまゝに、繩取^{ちう}中にひつ立つる。警固^{けいこ}の者共狼藉なりとて引据^{ひき}うる。その時新開^{しんがひ}の荒四郎狩野助^{かうしやう}が館^{だて}より、やあ申上る事あらばたと今申せといひければ、時宗聞いて大の眼^{まなこ}を見出し二人をはつたと睨^{にら}んで、やあ見苦しきぞ汝等、御前^{ごまへ}遠くばさもあらん。ほど近ければ人傳^{ひとづて}は頼むまじ。骨折りにそこ立退^{たちひ}けとぞ怒りける。君聞召しげに／＼頼朝直^{よりとも}に聞くべき也。いかに時宗親のかたき祐經を打つは道理といひながら、京鎌倉の下^ふり上^{のぼ}り道の末にても討たずして、頼朝^{よりとも}が祝ひの座敷に血をあえす條いはれなし。その上祐經一人討たずして、當番の者どもに手を負ふするは僻事^{ひが}也。いかに／＼と御説ある。時宗承り、さん候祐經を京鎌倉の下^ふり上^{のぼ}り道の末にても討ちたく存じ候へども、君の御覺えめでたうて、うつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎には劣り申さず候。我等は君の御不審蒙^{まう}むりて。身は獨身^{どくしん}となり果て、兄弟^{きやうてい}より外睦^{ぐち}ぶ者もあらざれば、つき添ひ狙ひ廻れども折を得ざれば打ちも得ず。此狩倉の人ごみを幸^{さいはひ}と存じ紛れ入て打て候。御説の如くかねては祐經一人をこそ討たんと存候處に、當番の面々^{めんめん}が愁^{なまじ}ひに名乗て出で、臆病^{おくびやう}刀使^{がな}うて逃足踏むが憎さに、そつと太刀風を負ふせつるにて候。誠に重恩^{じゆうおん}を被^かぶり、妻子

たはんー賜はん。

懼りをたてー懼りを
越つて

報いはー原本「むく
えは」とあるを今改
む。

とにー外に。

責一人歸して一人
の下に字を脱せる
なるべし。論語魯曰
篇「百姓有過在予一
人」増補「責一人に
といふらん事にや」

を扶持し身を立つる方々が、夜打の入て亂るゝに、誰あつて君の御前に立たんと存する者も候はず。外様なれども仁田と御内の五郎丸より外、御用に立つべき者もなし。その外の手負ひ共皆召寄せて實檢候へ、向ふ疵は候まじ。かほど臆病なる人々に、あつたらしき御所領たばんより、我々にすこし賜はり御芳志に預からば、これほどまでは憎まじや。たとへば祖父伊東は不忠の者にて候程に、子孫我等に至るまで御憎みあるは御道理、さりながら文書には懼りをたて恩に報いば又敵も味方となる。親子兄弟なれども、隔心内に含めばとに敵對と書かれたり。先非を悔い古語の書に従へと、古人も教へ置かれたり。それに伊藤が子孫をば疎み果てさせ給ひつゝ、命をつぐべき便りもなく、籠鳥の雲を戀ひ。罟中の魚の網に息つゝ風情にて、生きてかひなき浮身となる。とても消ゆる露の身の親の敵と打死し、名を後代にあげんため也。我が君いかにと申しける。頼朝聞召しさほど剛なる者が何とて五郎丸には捕られけるぞ。又敵打て後内證をさして切て入り、われに敵をなす條いはれなし。此義いかにとの御説也。さん候祐經は親の敵と申しながら、さして怨みも候はず。責一人歸して御怨み盡きせぬは、わが君にてとゞめたり。それをいかにと申すに、名ある者の子孫をばいかでか絶やし果てんと、二人が中に壹人召出され、懸命の地の片端に安堵をなしてたぶならば、たとへ祐經討ちたくとも、本領に思ひかへても過ぎぬべし。さ

とくして「疾くし
て」か

れば侍の命にかへても欲しきは懸命の地の本領なり。それに一つも残らず召上げらるゝのみならず、あまつさへ敵祐經に一圓に下し給はり、上見ぬ驚と振舞ひし、かゝる怨みの數々は君の御身にとゞめたり。祐經より先に存じ心がけしに、五郎丸衣引かづき居たりしを、女と思ひ見損じて、左右なく捕られ候なり。五郎丸と知るならば、たゞ一太刀に打て棄て、おほそれながら君の御佩刀の金をも見奉り、此時宗が腐り太刀の刃のほどをも御目にかけて申さんものを。とかく君の御運強き所と覺え候と、憚りなくこそ申しけれ。賴朝聞召しあつばれ大剛の者かな。思ひの色を残さず申す事こそ神妙なり。時宗が最期に祐成が首の見たくや思ふらん。仁田はなきかと仰せければ、忠綱承り群千鳥の直垂に包みたりし祐成の首に、打損じたる太刀をそへ時宗が前に置く。あらむざんや時宗は一目見るよりも、今までは剛の眼を見出し、猛き氣色も變り果て涙をはらゝと流し、さても早くも變らせ給ふ御面影や、竹馬に鞭を打ちしより一つ所に起き臥して、少しも見えさせ給はねば、とやあらんかくや渡らせ給ふかと、心をそへて思ひしに、悲しきかなや今ははや、ありし形も變りはて、いたづら事となりけるよ。とくして我もかくなりて同じ道へと思へば、包めどこぼるゝ涙には、庭の白洲も濡れぬべし。諸事のあはれと聞えける。爰に夕べ柴垣破つて逃げたりし新開の荒四郎、祐成の太刀をつくゝ見て、人々に向つていひけ

これはぬ事——ちが
る事。

帝國圖書館本「驚が
岡へと急ぎける」の
次に時宗三ぶきや
う、八行二枚あり。
最後に参考のため添
へおけり。

るは、曾我の者共は敵を打て高名はしたれども、よき太刀はもたざりけり。かゝるえせ太刀にて本望遂げしは不思議なりとぞ申しける。時宗聞て、やあ汝はそれをえせ太刀と申すか。只今申して無用の事とは思へ共、侍の悪き太刀を持たるは恥なる間申すなり。ヤレその太刀はな、平家に聞えし新中納言知盛の太刀なるが、八島の合戦に船中に取落し給ひしを、曾我の祐信取て九郎判官へ参らせしを、義經神妙なりさりながら御分が高名して取りたれば、汝に得さするとて給はりし、それは奥州丸といふ太刀よ。祐成元服せし時に父祐信の賜びたるなり。思ひのまゝに敵を打ち、其外兄弟が手にかけて、切留むる所の奴原大方一貳百人も有るべき也。これほど堪へたる太刀をばえせ太刀とは、おのれ推参なりと怒りをなす。いやさ既に折れける上はと言ひければ、五郎からくこ打笑ひ、オ、人の太刀を惡しといふ人、定めて御分はよき太刀持ちぬらん。但しあのえせ太刀に合ひ追はれて、柴垣破つて逃げたれば、御分がよき太刀も近頃心にくからずと、嘲笑つて言ひければ、荒四郎は言はれぬ事を云出し、面目なさに赤面して、有りし所を立ちけるを笑はぬ者こそなかりけれ。其後頼朝の御説には、大剛一の時宗なれば鷹が岡にて切れとの御説也。すなはち繩取は堀の小二郎承り、時宗を引立て、鷹が岡へと三重急ぎける。かくて時刻も移りければ太刀取背後に廻り、すでに打たんとせし所へちん平かけつけ、やあ其時宗な斬つそ。安塔の

見聞衆—原本義名にてけもんしゆとあり。

御教書みぎやうしよ是に有り。これ／＼拜み給へとて時宗が膝に置き、やがて繩をぞ解きにける。さつと開いて讀うよだりけり。下くだす狀相模の國の住人會我の五郎時宗はやく寛宥くわんいうす。本領なれば宇佐美うさみ南美河津三箇みなづの庄宛あて行ふ所なり。源の頼朝判はんと讀み上げたり。貴賤上下の見聞衆けもんしゆは一度にあつとぞ感じける。時宗御教書みぎやうしよ三度おしいたゞき、涙をはら／＼と流いて、あら有難や同じくは舍兄しゃきやう祐成諸共に拜むとだにも思ひなば、いかばかり嬉しかるべきに、總領の祐成今は淨世におはせねば、時宗一人ながらへて總領を繼ぐ事本意ほんいと更に思はねば、生きたる甲斐も候はず。たゞ／＼斬つて給はれ。又此御教書は冥途のみやげに仕り、父河津や兄祐成に拜ませ、本望遂げさせ申すべしと、扱太刀取の脇差を乞ひ受け、腹十文字にかき破り臟ぞうを搦つかんで投げ出し、其跡へ御教書を押込め、さあらば介錯かいしゃくを頼み奉ると首をのべてぞ待居たり。太刀取力及ばず、やがて首を切りければ、檢視の人々急ぎ御前へ立返り、かやう／＼と言上す。頼朝あはれに思召し、かほど剛なる侍さむらい上古さへうこも今も末代も例少れいせうなき者なれば、あら人神と祝ふべしとの御詔にて、富士の裾野すそのに社やしろを立てさせ給ひ、兄の宮弟の宮といはせ給へば、貴賤是をぞ感じける。末代末世にいたる迄親の敵を打つ者は、此社に参り祈るとかや。かの會我兄弟の人々、例れいすくなき侍にて猶々源氏の御繁昌めでたかりとも中／＼申すばかりはなかりけり。

時宗三部經

とつとし「たつとし」の誤か。
ほうまんとく一寶滿
徧か。
直道一迂曲せず直に
涅槃に至る道なり。
ときんは一時は。

妙樂大師一天台の六
祖蒞溪湛然。
しよきやう云々一諸
經諸勝多在か。

これはさておき、むざんなるかな時宗は、鷹が岡になりしかば、九本の松の下に敷皮敷かせ、西に向き直りいふやうは、幸ひ時宗が九本の松の下にて斬られんことは、ひとへに九品の淨土とおぼゆる也。いかに太刀どり繩どりよ、すこし暇を得さすべし。時宗が最期に淨土の三部經をあらく説いて聞かせ申さん。ヤア見聞衆の人々も、なりを鎮めて聞き給へ。それ法華一乗の功力はとつとし、有難きは彌陀えしやうほうまんとくの位、三世の諸佛出世の本懷は衆生成佛の直道なり。經にあらはすとくんば妙法蓮華經の五字につゞめり、名にとく時は南無阿彌陀佛の六字に攝する也。趣意といつば座禪の異名、座禪の修行のてんちにいたり難きものは、六字を誦して極樂に往生す。愚痴なる凡夫にいたつては、向う上の法門なり。一指を捧ぐる其時は、大千世界もここにあり。たけをうちもゝをみて悟道すること分明なり。妙樂大師の御釋に曰く、しよきやうしよさんたさい彌陀西方をもつてさきとせり、己身の彌陀唯心の淨土なれば、本來無東西何處有南北と觀すべし。それ六字の名號を集むる時の經文は、華嚴經にて南の字を作り、阿含經にて無の字を作り、方等經にて阿の字を作り、大般若にて彌の字を作り、法華經をもつて陀の字を作りて南無

阿彌陀佛と申す也。十方三世佛一切諸菩薩、八萬諸聖教皆是阿彌陀と説く時は、さやうもんの老若も頭を地につけ、時宗を拜まぬ人こそなかりけれ。かの時宗と申すは幼かりける時よりも、勤行怠らず、一心三觀の月は無明の闇を照し、觀念の窓の前には眉に八字の霜をたれ、一じらうとうの車は、無二無三の門に轟き、一乗菩提の駒は、平等大慧の園に嘶ふ。等覺一轉の時鳥は、妙覺大乘の峰に鳴き、入重玄門の鶯は下化衆生の谷に轉り、諸行無常の春の花は是生滅法の風に散り、生滅々已の秋の月は寂滅爲樂の雲に隠る。ばんさんにふん／＼しかくのことくと有るものをたゞ念佛申すべしと、及ぶも及ばざりけるも皆念佛をぞ申しける。



新
版
腰
越
狀



新版腰越狀

竹本義大夫正本

風月の本主文道の大
祖以下菅丞相の記
事は、太平記十二、
大内裏造營の事附聖
廟の御事の條に據れ
り。
鹽梅の臣一書經説の
の若作和衆爾惟鹽
梅の語より起り、食
味を調ふる意より、
政事を料理する義に
用ふ。

序 孝子は父の美をあげて父の惡をあげずとかや、穀梁傳の十一字今此將の事なんめり。搦も源九郎義經公先祖の仇に命を輕んじ、さしも固めし兵庫の岬、經の島の新京を逆落して押破り、平氏の一類悉く西海に追ひ下し、猶船造り有るべきため福島に御陣を召れ、元暦二年の初春をめでたく迎へ給ひけり。時なるかなや本陣より吉方に當らせ給ひければ、天満宮に參籠有て朝敵退治の御祈り、御湯御神樂を捧げらるれば、神職の中務幣帛を奉る。柏手遠く飮して、松の春風吹傳へ、梅綻ぶる神垣は、宮さびてこそおもほゆれ。扱御供には龜井・片岡・伊勢・駿河・鷺の尾・熊井・鈴木の三郎、其外御旗の手の諸大名、鎧脱ぎ捨て衣更始、いづれも烏帽子をかたづけ謹而畏る。時に大將仰下さるゝは、我いとけなかりしより文武兩道に心をよせ、此御神を信仰す。其神徳の明らかなる事言語筆紙に盡し難し。理なるかな風月の本主文道の大祖たり。天にあつては日月に光を顯はし、天降らせ給ひては鹽梅の臣に成、群生を利し給ふ。遠つ昔を窺ひ奉るに、菅原の宰相是善卿の南庭に童子と現じ降誕有り、恩愛の衾の下に菅丞相ならせ給ひ、習はずして道を悟り、御才覺

五度のつゝ不詳此
語太平記にも見ゆ。

あまの命を拾ふー辛
うじて命を助かりた
るをいふ。

あはきありきーひろ
がりて歩む。
まぎろしきー紛らし
さに同じ。
すてつべいー頭をい
ふ。

世に越えて、弓馬の道も暗からず、既に大臣の大將に至らせ給ふ。又貞觀年中の事なつしに、都良香の御許にて、始めて五度の十を射させ給ふと也。何と方々幸是に的矢有り、神いさめ弓始いざ一拳と仰らるれば、梶原平藏景時・猪俣・小玉・野井の七郎、心々の弓矢を持ち、椽の前に居流れたり。大將遙かに御覽じて、龜井の六郎重清を以て御弓初めらるべしと有りければ、景時何の會釋もなく、一禮にも及ばず、よつ引てひやうど放つ。此矢椽を打越して後の松にはつしと立つ。二の矢をせて打番ひ暫しかためて切つて放つ、矢取の男が髻を射割りて七八間外れたりけり。彼男ぎよつとして首の骨を撫で廻し、扱も危し恐ろしし、あまの命を拾うたり。扱も射たりや御弓取、いやくどつとぞ笑ひける。梶原大きに立腹し、イヤ推參なりおのれ、弓矢は離れ物にて有り、たとひ逸矢を射たればとて、諸侍の面前にて恥辱を興ふる慮外者、弓矢八幡堪忍ならじと太刀の柄に手をかくる。男少も騒がす、賤しき者の高笑ひ思慮も工夫も候はず。神前と云ひ御祝義と申し眞平御免と手をつかね、さしうつ歩いてぞ居たりける。景時猶も勝に乗り、イヤサ只今の的矢全く射損じ申す所でなし、それをおのれが一番に笑ひ出し、椽の前をあばきありき、人影のまぎろしさに思はぬ恥辱を取りし也。おのれ大蠅の高上り、飛びすさるべしうつけ者、サア今一言吐き出せ、素天邊を踏み碎かんと怒りをなす。矢取の男捻ぢ戻り、何と候梶原殿、人

くらがさー鞍邊に同じ。

かつふつー少しも、全く。

あぜりー校倉（アゼクラ）に同じ
小串ー小笠懸は槍の板にて作り、串に挿み地に立つるなり。
圓物ー圓形の的。

かけ鳥ーかけ鳥とはがけり鳥なり、鳥の高みにかけり飛ぶを射る心なり。（貞丈雜評十二）

一間ー一間の折目と折目との間。

格ー鐵砲の的をいふが常なれど、弓の的にも通用せしと見ゆ。

影のちろつく故思はず弓を射損じた。ア、事あたらしき仰かな、何と戰場に打向ひ生きたる人の動くも、射にくしとて許さるべきか。落人など止むるには、鎧踏張鞍橋につつ立上り、駿馬の四足を拍子に取り、馬上ながらも拳を定め、逃げゆく敵の後様弱腰母衣付嫌ひなく、鞍の前輪に射付けてこそ弓矢取身と云ふべけれ。狼狽へたる言葉の末、察する所御自分は弓矢の道かつふつ御存知なきと見えたり。左候へばこそ的前故實に合はず、それ楊弓は公家の御業、採をば弓杖九丈弓鉞は三尺六寸、雀小弓が貳尺七寸、四寸の的の中に吊り五間を隔て是を射る。扱笠懸は貳丁半あぜりの形は三角也。小串の會は大弓也。的は六寸遠近は其家々に定有り。圓物は尺二寸、採を築く事七丈也。別而は御射初の是弓法の一大事、御大將の弦音にて三々九度の禮義有り。是が弓取候か、イヤ是が的場の作法なるか、詰めかけー云ければ、景時今は堪へ得ず討て捨てんと飛びかゝるを、大將暫し止め給ひ、射場の男を近く召れ、おのれ辯舌賢く弓矢の作法をのゝしるが、若弓もや仕ると御尋有りければ、さん候小兵には候へ共、翔鳥などは申すに及ばず、眼にだに遮らば、恐れながら蚊のよる骨も通しはやらじと言上す。君廣言の憎しみにや、皆紅の御扇を投げさせ給ひ、然らば是を的に立て、骨を避きて一間くを射揃へよ。若射損ずる物ならば方々通すな、射取れくーとせき給へば、彼男おし戴き、さつと開きて格に立て、野弓に野矢を取

ゆんぐふし一弓たなしの誤。

五善一太平記十二聖廟の如き廟を押脱ぎ打あけて引おろすより、暫くしばらくて固めたる體切て放したる矢色弦音弓倒し五善いづれも遅しく勢ありて、矢所一寸ものかず、五度のつゝをし給ひければ云々とあり。五善は論語集解に馬融曰、射有五善焉、一曰和、志閑和也、二曰容、有容儀、三曰主皮、能中質也、四曰和順、合雅頌也、五曰興武、與錫同也と見ゆ。

添へてやがて射場にぞ直りける。雪の片肌押脱ぎや、打上げて引下し、暫し固めて切て放つ、矢色弦音弓どふし五善いづれも遅しく、矢壺違はず射揃へしは、ためし少なき三重弓（勢也。君を始め一座の諸武士、思はず聲を立合せ、いや／＼射たりと褒むる聲、暫しは鳴も靜まらず。男扇を開きながら御前に返上す。君御悦喜のあまりにや、是を汝に與ふる條、響の印と致すべし。其上汝心あらば此度八島の供をせよ。本國生國はいづくの者ぞ、弓はいづれの誰が弟子ぞ、氏やあらん名乗れ／＼とせめ給へば、有難の御詫や候。我こそ御家人下野國、那須の太郎祐高が一子與一宗高と申す者、親にて候祐高は故殿義朝公の御勘氣を請け、幾程なくて相果て候。それより保元の亂出來り、野間の内海の御最期より源氏は日々に衰へて、平氏盛んに候へ共、父祐高が遺言にまかせ二君にも事へずして、二度舊主に召出され、かゝる御詫を蒙る事は天神の御利生也。此上は只軍門に駭を曝し、父が末期の望を叶へ申さん事有難くこそ候へと、悦びあふこそ道理なれ。君も御心よく見えさせ給ひ、誠に以て初春の弓矢始むるめでたさに、猶めでたさを重る事、是ぞ吉左右面白しと、御土器を傾けさせ宗高に下されつゝ、又納まれるは君が世の久しかるべき三重ためし也。世の例ともならばなれ、濡れぬさきこそ厭ふらめ、濡れての末は戀草の、露と消えなば消えましよ。可愛がらるゝ事一つ、是を浮世の樂みと、男次第になるは只、女心の習ひかや。

いたはり一病氣所
勢。
都崩れ一都落ちをい
ふ。

我夫一原本我妻とあ
り。
隠所がなかせぐらん
一遊里なごへでも出
かけしならん。

業平もあるまい一こ
れ程にはあるまい。
ならぬ世帯一苦しき
くらし。
盥垂らさす一汚らし
き服裝さす。

若草姫と申せしは女院の御所女、御側去らぬ宮仕へ時めき給ふ身成しが、折からのいたは
りにて都崩れの御供も叶ひ難さの里住居、平家二度安穩に都へ歸し給はれと、此御社に詣
でしを的矢の與一に口説かれて、忍びくの假枕馴染み易きはいもせの中、世帯姿とはや
成て、共に營む世ぞつらし。いかなれば我夫の射場は飾りて有りながら、いづち行くらん
見えざるは、又悪所がな稼ぐらん。ろくな事では有るまいと思へばいと嫉しく、暫し佇
み居たりしが、よし一言うても詮なき事。戻らぬ内に賣勝ちて、お錢くらべて厭がらせ
ん。只商ひこそ仕勝なれ。天神花や花召せく、花召さぬかと商ひけり。かくとは知らで
與一宗高、御盃には酔ふ心は勇む、下し給はる色よき小袖小褌小高く引違へ、太刀脇挟む
立姿男盛りや器量好し、我男自慢や業平も有るまいものと思ふにぞ、若草ハット驚きて、コレ
そこなうんつく殿、ならぬ世帯は苦にせいで、有りもせぬ物借着して、誰に見せうと男ぶ
りたしなまいでも大事な、只世渡りを本にしや。女房ばかりに世話焼かせ盥垂らさする
が手柄かと、縋り付きかき口説き泣くより外の事ぞなき。宗高何の心もなく、されば君よ
り給はりて、ここさら忝き御一言身にしみくと覺ゆる也。和御前も悦び申されよ。何自
らに悦べとや、あたじたくるい何の嬉しからう。エ、身が燃え腹が立つわいの。女房有り
とも憚らず、しこなし顔の初小袖、着せも着せたり着も着たり。是見よかしの憎さよと、

肩に喰ひ付おもかげのそゞろ震ふも恐ろしし。與一可^{そかし}笑^{あざわら}きたまられず、オ、跡^{あと}先^{さき}も聞かず合^が點^{てん}の行かぬは道理也。是は大きな君^{きみ}違^{ちが}ひ、其有難い君と申すは源氏の大將義經公、又は某は下野ノ國那須の太郎祐高が一子與一宗高と申す者、意^い趣^{しゆ}はかやうの子細にて御勸氣を請けし身なれ共、今日不思議に召出され戰場に趣く也。然れば今日より大名ぞ、龜^{かめ}相^{さう}な待^{まち}遇^ぐし給ふな。さすればそなたは奥様也。前垂姿も今ばかり、どれ見納めにと抱^かきつく。女房思はず手を打て、扱は左様にましますか、知らぬ事とてよしなくもあらぬ疑ひ許させ給へ。ナフそれに付き、少^{ちとせ}訴^{せう}訟^{そう}の候が、若^{もし}聞てもや給はらん。與一重て、ハテ何事もつゝむに及ばぬ夫婦の中、語り給へといひければ、そも自^{みづか}らは若草とて左京の大夫顯輔^{けんぽ}が一人姫、父母身まかり給ひしより、女院の御所方にて召使はれ候が、心地惡しさに引籠り、都落させ給ふにも里に留^{とど}まり、剩へかうした色に絆^{はだ}されて、御音信^{おとづれ}も絶え果てたり。八嶋とやらんに越^こし給はゞ、何とぞ御身の計らひにて、女院様と尼公をどうぞ助けて給はれと、涙ながらに頼みぬる女心ぞ愚かなる。宗高大きに驚きて、扱も／＼心に任せぬ世の中や、かく敵味方と別れては女院様でも親にても助くる法はなきぞとよ。とりわき名乗合ひぬれば其方とても許されず、いもせの契も是迄ぞ、必ず恨み給ふなよ。是は又離^{はな}別^{べつ}の印^{しるし}、則君より給はつて響^{ひび}の印也けれど、なき身の印と思はれよと涙ながらにさし出せば、若草とかうの

いきなり一意識地
といふ程の意。

構ひて一原本のま

詞なく、夫の膝にひれ伏して歎き沈みて居たりしが、漸として顔振上げ、實武士のいきどほり尤かうこそ有るべけれ。何が扱此上はふつ／＼歎き候まじ。サア是からは敵味方、未練の振舞なし給ふな。與一遁さぬ崇高やらぬと振上る。扇小太刀に打つくるを小腕取つて組み敷いたり。若草下より聲をかけ、最前名乗れば名乗るもくどし、ヤレ首を討て首取らぬか、怯れたか宗高殿、腰が抜けたか與一殿、敵を助くる法や有る、何とて首を召されぬぞ。主様ならで我命やるべき人は持たぬぞや。はや殺してと言ひ残す跡は涙に咽びぬる。與一もうろ／＼目も合はず、袂を顔に押當て、オ、思ひ切たり出来したり、去ながら爰を聞かれよ、假令敵の娘をも女につれまい物でなし。併しながら某は新參者、平家にかゝる縁有りとて御疑ひの深かるべし。然る上は是忠功の妨げ也。妨げは又親への不孝、とかく添うては侍立たず、爰にて殺せば卑怯の至り、よし此上は是非に及ばじ、和御前も八嶋へ下られよ。源平兩家の戦場にて潔く死を定めん。先それ迄は命を預けた、中々命を預つた。そなたの命も預しぞ、構ひて粗末にし給ふな。さらば／＼／＼と別れぬる、詞ばかりがすゞしくて、心の内のせつなきは戀の責めける三重故ぞかし。戀さいふ字の無い國があればや生れ變りたし。取分きて又色里は、こてもかくても止め難き迷ひの中の迷ひにて、起きては現寢ては夢、結び止めたき假枕、夕の實は今日のあだ、あだし浮世と思ふより、

親のいさめ云々―徒
然草「親のいさめ世
のそしりをつゝむに
心のいとまなく」

とれにとれたる―い
たく寝入りたるをい
ふ。

親の諫め世の誹り己が心とわざくれて、ぞつとして来る戀風の思はず知らず吹き分くる吉原の里とかや、色の初明初景色、堅い所の春よりは餘情勝れてゆたか也。さればにや義經公御船卸の暫し間と、御物の具の上の帶心の外としやら解けて、下紐ゆるき寢屋の伽、初代といへるにぞ、御心をかけまくも神かけ變らぬ私語、判官仰下さるゝは、思ふ子細の候へば御身の名を改むべし。故は今度の舟軍に驕る平家の一門を海底に追つばめて、追付凱陣致すべき、是は船路の門出なれば、只波風も靜くと召さるれば、コハ忝き御説やな、誠に上つ御方の自ら如き賤しきに、御心を寄せさせ給ふも一世ならざる御縁也。此上只自らが二つ共なき命かけ、君にとばかり其あとを言はぬ所が物ぞかし。靜重ねて小聲に成り、扱それに付疾くより申上ぐべきを、人目繁さが障と成遅なはり候也。何とやらん今宵の景氣、主が風情も常とは變り、殊には知らぬ男共宵より多く入込みていと騒々しく候也。どうで一度の別れしな、辛いは同じ事ぞかし。歸らせ給ふまじきやと頻りに伺ひ奉れば、判官御思案ましますに、いかさま是は心ならず、武藏くと召さるれ共、とれにとれたる一睡り高駟して居たりしを、判官靜と諸共に漸々としてかき起し、かやうくと言ひければ辨慶目をすり欠ながら、それ何よりも面白からん、此比軍事絶えて、腕骨痒くうぢづくに、是能程の春慰み、君達見物し給ふべし。去ながら是は是主の長めが平家に頼まれ、我々狙

しめさせー消させ。
給ふまじー給ふ勿れ
の意。
上する女子ー上女
中。

も身んだえー身悶
え。

ふに紛れなし。大方おほかたの仕組しぐらには毒酒などを盛る物ぞ。聞召きこしめさるゝ事なかれ。只燈火ともしびをしめさせ給ひ、御寢所おんしよ見せさせ給ふまじ、何事も此武藏めに御任せ候べし。はや御入とすゝむるにぞ、連れて忍ばせ給ひける。既に其夜も更け行きて丑三つ告ぐる比しもや、上する女子ななこと見えけるが、鉾子こ盃携へて、辨慶が前後に居寄り、宵よひよりの御宿直ごのめさぞ御淋しく候はんに、御酒一つとぞもてなしける。辨慶につこと打笑ひ、近比の心さし誠に正月と云ひ夜中と申し、先御亭主方より初められよと云ひければ、いや別條も御座なきに只召されよとさし出す。辨慶盃押戻し、今宵こよひの様なる盃は必ず別義の有る物也。是非心みとつつ返せば、すは顯はれしと左右の腕うでしつかさ取る。辨慶くつゝと笑ひ出し、興きようがる女中の強酒落おちやと小腕こでもぢりに取て投げ、胸板をどつかと踏へ今一人をつつまさし上げ、車輪しゃりんの如く振廻し、大地も抜けよと打ちつくれば微塵に成てぞ失せにける。とかくせし間に下成敵跳ね返さんくゝと身を跳はなければ、爰な女中の身もんだえはしたなしくゝ、さてもの事に置手拭取つて御見けんに入れべいと、かたつばしおつ手繰れば、有りしは男の姿なりと成。是我々は平家方の者にてなし、皆此所の若い者、今宵の大將越中の次郎兵衛盛次殿、判官是にまします由何とぞ毒酒を參らせて、討て出する者ならば恩賞過分に給はらんと、御頼み候故かくはしつらひ候也。御免下さるべし。扱あつかも苦しう候と手を合せてこそ居たりけれ。辨慶態わざと聞

別足一雄の足を應じ
の家にて別足といふ
より、足にて踏むを、
かく蹴れたる也。

かぬ顔、珍しや。末代末世に至りぬれば、女の元服する世有り。いで御祝義に此別足、少分ながら参らせんと、肋の骨を踏み碎けば、あつとばかりを身の一期、朱に成てぞ失せにける。所へ雑兵取懸けて面も振らず斬り込うだり。時に辨慶足踏み直し、大の眼をくわつと見開き、いや推参也おのれら、一院の御使檢非違使五位の尉、九郎大夫の判官義經公の御座近く、いはれぬ己等が太刀三昧。サア引くまいかと怒りをなし、鐔元くつろげ睨め廻せば、あへて近付く者もなし。庭に控へし大將盛次縁のはなまで駒駟けよせ、さも穢なし方々よ、身動きもせぬ辨慶に後を見する卑怯の至り、返せと下知すれば。詞にや恥ぢたりけん、又おづく。取つて返すをまだうせぬかと反うてば、鐔音に氣を取失ひはふく。逃げてぞ歸りける。然る所へ鈴木ノ三郎・龜井・片岡・駿河の二郎・鷲の尾・熊井・江田の源藏、迎ひのため参上し抜きつれ。斬つて廻れば、暫しが程もたまり得ずして逃げて行く。大將盛次馬乗捨て御寢屋深く斬つて入りしを、辨慶柄にて太刀打落し、片腕取つて振ぢ据ゑたり。かくとは知らで龜井を始め皆おひく。取つて返し、口惜しや盛次めを見失うたる残念さよと、尋ね廻れば、辨慶上より聲をかけ、こりやく盛次尋ぬるな、欲しくば得させんそれ計らへと投げ出す。勢ひ虎の毛を振ひ千里を走るもかくあらんと、語り傳へ書き傳へむべ武夫の手本なりとて、寫さぬ人こそなかりけれ。

第 二

後朝—きぬぐいとよむ

頬垢きく—口をきくしやべる。
報へよ—原本のま

あたかな—「虫のよい」といふ程の意。

後朝の涙の程をくらぶれば、歸る袂は何處やらが物に紛れて切離れ、強い所も有りつるが、跡に止まる枕こそ朽ちぬが物の不思議なれ。靜は寢屋に只ひとり涙にくれておはせしが、さすが別れの悲しさに寢卷搔取駒下駄に、霜踏みわけて松の陰、爪立てゝ見つ伸び上り、心ばかりの遺瀨なき所へ主駈け來り、おのれ女めいき盜人、我々平家に頼まれて判官殿を打殺し、大分褒美に預らんと折角巧む謀ようもく知らせたな。褒美を取らぬ事のみか、汝奴が頬垢きゝし故、盛次殿迄殺させて、大きな罪を作らせし其科をおのれに報へよと、髻を取つて引倒しさんぐに打ちければ、靜は杖に取付て、何々の誓文ぞさらく私に覺えなし。許させ給へと手を合せ泣くより外の事ぞなき。主の長腹を立て、いやおのれが空誓文つねぐ立つる口諭言、聞きたくもなし面倒也。所詮おのれを生け置いては平家の聞えも恐ろしし。いつその事に討て捨て宗盛公へ首を捧げ、右の通を言上せば身の難遇れて、折よくはせめての褒美や給はらん。立上らぬかと引起し、松の下枝に縛り付け、既に討たんとせし所へ、女房驚き走り出で、コレ爰な氣違ひ、何ぢや靜が首を切り、宗盛公へさし上げて御褒美に預らん。あたゝかな、ナフ平家さま褒美所へ行く事か、一日暮しの舟

み一昔より分とわへ
る君有、是より十分
あまりては宜しから
ずとし分て値五分宛
に定めありし、近れ
和氣と稱す(澤也)。

和氣一命令、采配を
ふりて號令するより
すふ。

住居、主さまたちの御身さへいつを限りの波枕、願ふにかひはなきぞとよ。只近道がよい程に鎌倉方へ賣てやりや。それ下部等と呼ぶ内に、靜が繩を切解き、やれ御事等は此女をつれ下り、大磯にては玉屋の長鎌倉にては龜が谷、何れへなりとも賣つて來よ。年期の間がいやならば分と極て置いて來い。急げ／＼と云捨て、夫婦は奥に入りければ、靜は涙にくれながら春を見棄つる雁がねに聲を比べて、吉原を立つは物憂き三重 姿かな。すでに時去り如月や中の六日の事也けり。御大將義經公御舟揃有るべきとて、福島川岸迄御出陣ましまして、御旗本は申すに及ばず東國の大名小名、思ひ／＼に物具固め皆々御前に相詰めらる。時に大將仰出さるゝは、誠に某院宣を承り鎌倉殿の代官として西國に發向す。されば源平兩家の晴業殊更天下分目の勝負、是非此度に極りたり。然る間備への立様軍船の番組攻口の相詞、萬混亂なきやうにかね／＼評定致さるべきとの御説、いづれも畏而申さるゝは、誠に我々東國者舟軍の様いまだ調練仕らず候。只御采を相守るべき由言上す。時に梶原進み出、此度の兵船には逆艦を仰付けらるべし。陸の軍は馬上徒步立駆引自由に候へ共、舟は行く事ばかりにて引くべきたより候はず。とかく艦舳に艦を立違へ脇楫を入れ候ひなば、懸引心のまゝにして甚だ勝利候べし。常の艦權を頼にて罷向ひ候段、何共愚案に落ち申さずと嘲るやうにぞ申しける。判官や、打笑せ給ひ、いや／＼戦場の習ひにて、

片趣一方向にのみ偏すること。

かのしゝ一席。

みようし一船首。

胴の間一船の中腹。

引かじと思ふ軍さへ折悪しければ引くもならひ、ましてさやうの逃支度、向はぬさきより拵へて何と軍が成べきや、あら心憂や汚はしや、殿原達は逆艦をも反様艦をも入れ給へ。此義経はいつとても只無二無三に攻め入て、軍に勝つこそ面白けれ。逃ぐるは嫌ひで候物をこ嘲笑つて仰せらるれば、梶原大きに氣色を損じ、いやは大將軍のよきと申すは懸くべき所は懸けても乗取り、引くべき所は引退き、命を全う敵を滅し世の亂逆を治むるを良將名將とこそ申せ。左様に片趣きの大將は猪武者とてよきにはせずとぞ申しける。義経猶もせかせ給ひ、ゐのしゝかのしゝはいさ知らず、それはわ殿が發明にて軍理に叶ふ所なし。そも舟軍の大事といつば、互角の争ひとて軍勢共を表に立て、みようしとを突合せ少も舟の歪まぬやう、是軍船の祕密とす。随分向ふの歪を見すまし胴腹を貫き、忽ち舟を覆へす、是櫂取のはたらき也。左様に艦艫に艫を立てなば、軍勢共はいづくに立てん。皆胴の間に立つべきか、何とそれでも勝利や有や。おのれが軍慮の疎きは言はず猪武者とは舌長也。只今討て捨つべけれ共、大事を前に置きながら同士軍せんやうもなし。疾うく鎌倉へ罷下れ。さあ行くまいかとせき給へば、梶原とかうの詞もなく、もぢくとして歸りしを笑はぬ者こそなかりけれ。摂御大將義経公水主櫂取御前に召され、多くの舟を待合せ日數程経るばかりにて、八嶋へ着く事有るまじきぞ。残るは追々出船すべし。先手廻の舟

伏鎗伏弓―倒せる鎗
弓。

垣楯―楯を垣の如く
並べたるをいふ。

ばかり出せしとの給へば、さん候順風にては候へ共普通すこしに少過ぎて候。暫く風を御待ち有て御舟仕らんと申上ぐれば、判官大きに怒らせ給ひ、いや臆病也おのればら、乗懸りたる海上にて風強きとて止まるべきか。野山の末にて命の終るも又海川にて溺るゝも是皆前世の宿業也。向ふ風に渡らんと言はゞこそ義經が癖事がこならめ、順風成が過ぎたりとて舟出すまいとは怯おそれたり。急いで船頭仕れ、さなくば其奴めら一々に斬つて棄てよとの給へば、御近習の侍共御説成なるぞ早く御舟仕れ、さなきにおいてはおのれらが命を取らんと太刀の柄に手をかくれば、水主かざり機取力及ばず、何れの道でも命は無いもの只馳せ死仕らんと、纒解まとづないて押し出す。先本船は紫の楯紅すくねなるに中白や紺と柿との一重幕、金の采さいの舟印に伏鎗伏弓飾りしは御大將の御召舟、雨にも風にも怯まばこそ、羽搏はうつが如き早舟とて翼丸つばきと名付けり。其次に出潮の波に兎の淺黄幕、三蓋笠がいがの舟印に貝鐘太鼓を並べしは、淀の郷内忠利とて此度の舟奉行、御座舟の跡を守護し靜まり返つて漕ぎ出す。爰に垣楯かたてかきならべ無紋の幕の紅くれなるを半絞なかほつて結び上げ、金の馬簾うれんの舟印に鬼神の首を貫きし大の鯡ほこをさし添へしは後藤兵衛實元が韋駄天丸と漕ぎ出る。沖つ波間の蟹小船あまうらみし程に遠ざかり、よるべをぞ待つ難波江の、蘆に千鳥を染分けて裾立波の地白幕、花籠の舟印に般若丸と打つたるは金子十郎家忠、扱水色に吉野川櫻流しの染幕に、矢車の印を立て、艫拍子揃へて押し出

ひた甲一一同甲冑を
替したるをいふ。

せがい一船の兩側に
舳艫のやうに取付け
たる板。

傾城一美人。

手むれ一熟練者。

召らるゝにぞ一召さ
るゝにぞの誤なら
ん。

おほくびはた袖一お
ほくびはおくみに同
じ、はた袖は直衣、
直垂などの袖を長く
する爲に、袖の端に
又半幅につけたる
袖。

すは、田代の官者信綱の小鷹丸とぞ聞えける。總じて兵船貳百餘艘が中よりも、思ひ切つ
たる五艘の舟、帆を八分に引かけて普通に過ぎたる荒追手、暫しの撓みもあらばこそ、波
切る音のさつ／＼さ、さつと吹上げ吹下し三日に渡る海上を、二時ばかりに馳せ着きしは
恰も射る矢の三重如く也。かくて平家の人々は思ひよらざる事なれば、度々の軍に利を失ひ
剩へ内裏をも後藤兵衛に焼き出され、皆々舟に取乗つてよるべ定めぬ磯の波、心を冷すば
かり也。源氏方には次信討たれたりけれ共、少も怯む氣色なく直甲三百餘騎、總門の渚に
控へ素引して待懸けしが、何かは知らず小船一艘汀へ向て漕ぎよせたり。陸には源氏の兵
共我射取らんと待つ所に、廿たらずの女房の尋常に出立ちしが、皆紅の扇をば舟の檻
にさし挟みて陸の勢をぞ招きける。判官後藤兵衛實元を召され、あれはいかにと仰せらる
れば、さん候、大將軍矢表に進ませ給ひ傾城を御覽候はんを、手だれに仰せて射落すべき
との謀事とこそ存じ候へ。去ながら扇をば射させらるべうもや候はんと申上れば、味方に
此矢射つべき者與一ならでは有るまじきぞ、それ射させよと召らるゝにぞやがて御前に参
上す。判官與一を近く召され、あの扇の眞中射て敵味方に見物させよと仰せらるれば、一
定仕るべきとは存ぜず候へ共、御説にて候へば一矢射てこそ見候はめと、すでに御前を下
りけり。其比與一廿餘りの優男褐に赤地の錦を以て大領端袖色へたる直垂に、萌黄緞の鎧

足白の太刀―太刀の
帯取を通す所の金具
を白銀にし、總柄の
金具を金又は赤銅に
したるもの。

切斑―鷹の羽の斑
の、上下黒く中間白
きもの。

一も―逸物の宛
字。

丸ほや摺つたる―老
狐の形を摺りしも
のか(平家物語)又和
名抄に寄生木を保夜
といへるより寄生木
を丸くしたる紋を貝
にて摺りたるなりと
もいふ。
くつはみ―くつわに
同じ、口食の義より
いづ。

を着て足白の太刀を佩き、廿四差いたる切斑の矢を負ひ、重藤の弓小脇に挟み、一寸斑の一もつに丸ほや摺つたる金覆輪の鞍置かせ、手綱かい繰り歩ませけり。思ふ矢頃や遠かりけん、海の中一段ばかりぞ打入たる。折節磯吹く夕嵐に舟をゆり上げゆりおろせば、扇も定かならざりしが、宗高弓と矢打番ひしばし固めてよく見れば、こはいかに若草姫打恨みたる風情にてしほくと佇みしが、さしもの與一途方にくれ、引も引かれず放ちもやらでぞ控へける。沖には平家舟を並べ陸には源氏衛を並べ、今や今やと見物す。與一は希有の晴業に引きは返さじ武夫の、やたけ心の一筋に縦へ女は打殺す共、おのれ家名は汚さじものをと思ひ定むる心の内にも、残るか戀よ情の道、南無八幡大菩薩別而氏神那須野の權現、女の命安穩に扇の正中射させてたべと心中に觀念し、しばし固めて切つて放せば、過またず要際を射落して、鎧矢海に入りければ扇はさつとぞ散りてげる。敵も味方もおしなべて、神代は知らず戦場にてかゝる晴業よあらじ。さつても射たりや若者と簾を叩いて褒めにけり。若草猶もせき狂ふ姿あらはに物の具かため、長刀引さげ陣頭に躍り出で、那須の與一宗高に見参やつと呼ばはつたり。源氏方には興がる敵の願ひやう、我討取らんと先を爭ひ駆け出れど、彼女びく共せず長刀杖につきながら、方々には手向ひせじ、自らが一命は宗高殿に先約有り、傍輩達にてましまさば一目逢はせて給はれと、しやんと立つたる

身振にはいかな劔もよも立たじ。大將遙かに御覽じつけ、重ねて與一を御前に召され、敵に詞をかけられて源平見る目も恥かしし。急いで搦め来るべしと仰下るを幸に、太刀ひつそばめ斬りかくれば、若草長刀取直し、てうくど打つ手もたゆく返す所を打落し、取て押へて繩をかけ御前に引出す。義經公馬上ながらそも汝いかなる者ぞ、是程多き寄勢より與一を選ぶいぶかしさよと仰せらるれば、さん候自は那須の與一が離別の女若草と申す者、飽きも飽かれもせぬ中を平家に仕へし者なれば、御疑ひ候はんと暇をくれし其辛さ、とても死せんす我命剛染の夫が手にかかり、未來の縁を結び度は迄參候也。與一殿早う殺して給はれと、しつと睨めたる目の内にあらゆる思ひを含みつゝ、涙にくれてぞ居たりける。君もあはれとおぼされけん縛めを許させ給ひ、あつばれ賢女や武夫や、去りも去つたり立ても立てたる貞女の道、末頼もしし出来したり。此上は義經が媒をして得さするぞ。夜討駆けの一戦に互の勝負を決せよと、御たはぶれと諸共に傾而御陣に具せられけり。然る所へ渚より徒歩立の武者四五十騎、其女返せく追駆けたり。源氏方には田代の冠者・金子の十郎・後藤兵衛を先として騎馬の武者七八騎取つて返し、イヤ返せとは心得ず、若草姫は與一が妻女御用があらば返し申さん、サア請取るかと乗り崩せば、此勢ひに駆け立てられ後をも見ずして逃げて行く。源氏彌勇みをなし障泥を打つて追かけたり。渚近うは逃げ

延びたれ共舟に乗る間もあらばこそ、せめて命や助かると前なる海に崩れ込み底の水層と成にけり。人々鞍の前輪を叩き、心地よし深し、軍は明日いざ先此方へくと、返す手綱を直様に輪乗四五遍乗廻し、乗戻しては乗廻す轡の音高嘶き、洲崎の松に聲添へて、さつと引たる武者振は、四天龍馬に打乗りて阿修羅を追ひし勢ひも、かくやと覺えてすさまじし。

第三

げにや世の中のうちつる夢こそ誠なれ。保元の春の花めでたき眺めなりけるも、今元暦の春の風花の敵と吹き變り、ちり／＼に成給ふ平家の御運ぞいたはしき。すでに屋嶋も攻め落され潮路遙かに漕ぎ越えて、長門國赤間が關に御陣を召す。中にも御所の御舟には主上女院二位の尼、其外の女房達、御心を痛ましめ歎き暮させ給ひけり。しかる所へ知盛卿大童に戦ひなされ御所の御舟に來らせ給ひ、扱も味方の軍勢共度々の軍に利を失ひ、或は落ち失せ討死し残り少く相見えて候。いと心の怯るゝ折節熊野の別當湛増も、平家の重恩深かりしが忽ちに心を變じ、貳百餘艘の兵船に若王十の御正體を乗せ奉り、金剛童子の旗をさし源氏へ參候へば、うつろひ易き浮世の有様、阿波の民部重能を始め阿野の一族さし加

山鳩色の御衣―麴塵の袍―いひ天皇の常の御服。

はり、彼は兵船七千餘艘味方の舟をおつ取巻く。多勢に無勢叶はずして遂に軍に打負けて、大臣殿父子時忠卿其外の人々も、皆生捕と成給ひ、残るは某能登の守御防矢を仕らん。はや御最期も只今也。見苦しき物候はゞ残らず海へ捨てさせ給ひ、とく／＼御用意候べしと申上れば、上臈達コハそも夢かと聲をあげ歎かせ給ふぞ哀れなる。中にも二位の尼若は思ひ設けし事也とて、鈍色の衣二重に練の裳袴稜高く、結び上げさせ給ひつゝ、寶劔は腰にさし神璽を脇にさし挿み、さも甲斐々々しくつつ立ち上り、自ら女の身なれ共敵の手にはかゝるまじ。主上の御供申す也。心ざし有る人々は急いで續かせ給へやと玉體に近付き給ひ、誠に前世十善の戒行にて萬乗の御位には生れ出させ給へ共、惡縁にひかされて御運も盡きて候也。先々東に向はせ給ひ伊勢太神宮にお暇申させおはしまし、其後は西方淨土の來迎に預らんと御念佛候べし。此國は粟散邊土と申しつゝよろづ物憂き所也。又あの波の下にこそ極樂淨土とて不生不滅の都有り。去によつて玉體を彼方へうつし奉ると様々慰め奉れば、御勅をもましまさず御舟端へ出御なる。御年いまだ八歳にていと美しく照り輝き、御髪黒くゆう／＼と鬢結はせ給ひしが、山鳩色の御衣もたゞ御涙に濡れながら白う細やか成御手を合せ、東に向はせ給ひて後、又西方を伏拜みよにいたいけなる御聲を上げ南無阿彌陀佛／＼と諸共に二位殿抱き入り給へば、御母女院女房達共に勸むる御念佛、

分限あり六道の衆生が
その業力に随つて感
ずる所の果報の身に
分限あり形段あるを
いふ。

印一廻。

是が限りか悲しやと御席きせきを打ち身を悶もえ、流涕りゅうてい焦これておはします。中にも御母女院はさも
すさまじき海上を怨めしげに御覽じて、定めなの世の中や、君玉樓の内にして誕生ならせ
給ひし時は、百官百寮ことぶきて殿をさしては長生と名付け、長き住家と是を悦び、門を
さしては不老と號し、老いせぬとさしと祝ひしも、いつしか今日は引變へて、分限ぶんげんの荒き波
玉體奪ふ世となれば、十善帝位も頼みなし。悦びし事も飾りしも皆徒事ただごとに成けるは、そも
又いかなる因果ぞと、かき口説くはきひれ伏して嘆き沈ませ給ふにぞ、知盛卿を初めとして上
藤局に至る迄、こは御道理ごだうり斷ことわりやと御有様を身に比べわつと叫ばせ給ひける。是ぞ哀れの
限りなる。扱有るべきにあらざれば印しるしの御箱かき抱き、南無阿彌陀佛と諸共に海へさつふ
と入り給へば、有りつる人々御跡慕ひ物の具碇をかき抱き、飛び入り／＼給ひしは、目も
當てられぬ有様也。源氏は兵船漕ぎよせ／＼御所のお舟に乗り移りて、神寶あらんを尋ぬ
る所に、御母后女院はいまだ沈みも果て給はず、内侍所の御箱に取付き流れ給ふを、判官
早くも見咎め給ひ、あなあさましや女院にて渡らせ給ふぞ、過ちなしそ、それ引上げよと
仰せも果てぬに、多くの陣勢波に下り立ちなんなく引上げ奉る。伊勢の三郎義盛も二位の
尼公神璽寶劍小船に乗せ奉て、是も御舟に移し入るれば、三種しゆしゆの御寶事故なく納り揃はせ
給ひけり。所へ忠信龜井の六郎御前に參上し、去程に能登の守教經、安藝の太郎同二郎を

左右にかい込み、只今海底に沈み候て、はや御敵も是迄也。御凱陣のやういかゞ仰付けられ候べきやと申上れば、判官御悦喜まし／＼て那須の與一を近く召され、汝夫婦の者共は女院二位の尼公を急いで都へ具し奉れ。道中船中心を付け随分劬り申さるべしと、はや御暇を下されけり。扱本船には三種の神寶眞先に押立つれば、七千餘艘の兵船は生捕八十三人を眞中に押包み、勝鬨の聲諸共に凱陣有ること三軍常ならね。

若 草 姫 道 行

頃は彌生の末つ方春の形見と後咲、花まだ若き山々の笑ふが如き風景も、心ならざる詠には物の哀れに思ほゆる。御痛はしや門院は、御母尼公諸共に八重の潮路を漕がれ來て、御津の浦曲の此方より、陸路を過す御有様、去し昔に似もやらず、御幸車に引替へて牛飼舎人もあらばこそ、武夫共に守護せられ、憂さも辛さも悲しさも、今の御身にとどめたり。され共與市若草は御先に立ておいらへを申上ぐれば、御車の物見々々を晴れらかに、南の方に御指をさゝせ給へば、宗高はされば候、薄霞そびき渡れる山陰に九輪ばかりのほの見えて、青葉勝ちなる高根より蔓續きて松深く、念佛吹きこす一風し、間遠に鉦のチャン、ちやんとして扱聞ゆるは、高きが佛法最初の靈地下は有栖山の寺、爰は一年法然上人流離へ

さびく一變く。
九輪一塔の九輪をいふ。

小早一舟の種類の名
松の落葉四、岡山通
ひ跡に、岡山通ひの
六ちよ小早に體を入
丁立て、朝のおまへ
の三ぼが瀬戸を小女
郎戀しきとな、歌う
て名のりてお清さや
るはえい、云々。
ねよけに見ゆる若草
いふら若みねよけに
見ゆる若草を人の結
はん事をしぞ思ふ。
(伊勢物語)

給ふ舟待に、御法を説きし靈場と、詳しく教へ参らすれば、佛の御名と諸共に、御手を合
させ給ひつゝ、ウタヒ誠に平家都を出し門出に御血脈を給はり鎧に入れて下りぬれば、此本
願の力にて、佛果の程も頼もしし。跡に残りし我々はいか成憂を見もやせめ。なり行く果
の淺ましと、御涙せきあへさせ給はねば、宗高若草東武士、共に涙の瀬を比らぶ。苗代水
に鳴く蛙かゝる思ひはよも知らじ。鳴く音止めよ暫し間も、おぼし忘るゝよすがぞと、跡
振返り眺むれば、歌尼が崎からコッチノお舟がく、來るとヤツシツシ、艫權を揃へて一二二丁、
三丁の四丁の五丁、六丁小早で押せヤツサ難波艶江の月を見しよ、オホ、ンしつとんオホ、シし
つとん、しつとん唐艫の音のよさと、君に語れば夫は猶御つれづれを推量り、取交へたる
道の草、袂に入れて奉れば、少の憂さも忘れ草、思ひ草とて露草の寝よげに見ゆる若草は、
名にめでゝやは摘み残す。忍ぶ草かとの給ひし御言の葉の恥かしく、妹背雲雀の友呼ぶに
紛らはしつゝ行末は躑躅色濃き長繩手、茅花交りに咲く菫、誰が紫に染めなして畫くばか
りに見えけるは、ゝ小袖模様に生寫し姿寫してとてもなら、着せて立たせて歩ませて、
連れて行きたの男山、隔てぬ中の水入らず、二人連れなる旅ならば、名所尋ねて折々は夕
べくくの私語語るよすがもあらなんに、人の見る目を恥らへば、目で締め心ばかりにて締
めて寝る夜はなきものを、賤の女が裏の茶園にナ晝寢してナ、殿とコノ寢たといナア、夢

とけしなく―待遠く。

を見る夢も結ばぬ我はたゞいつを伏見と里問へば、淀野の渡りとけしなく牛の運びの遅きにぞ、心の駒の鞭に打つ竹田を越えて見渡せば、はや九重のしるしにや行きかふ人の品かたち、田舎めかぬを見るに付け語るに付けて變りしは、君が面影なりけるよと、思ひ出すも露涙止めかねたる三重袂かな。

引手數多の憂き身にも、實は實にて通れとは誠也けり。靜御前鎌倉の龜が谷萬が本におはせしが、其別れ路の程暫し忘れかねつゝ、うかゝと外の勤めもそこゝに思ひ煩ひ給ひしが、いつを限りの御便り、待つ間命も定めなし。ともかくにもならばなれ、此身一つは棄て物よ、死ぬる共生くる共もはやそれからそれ迄と、廓忍びて出でけるが、見咎められじと思ふにぞ、泥土を以て面を掩ひ髪はおどろの如くにし、木葉衣を身に纏ひ、道のほとりに佇みて庵なれば露霜や雨三けんに聲濡らす、此一節はかゝる身の上を助くる便也。歌所縁求めて若紫の草の籬を今來て見れば、花か紅葉か其面影の見えつ隠れつ木の間の月よ。浮氣ならねど身は高瀬舟、上りつめたる身の果に、物たべなふと立寄れば關守共立出でて、こりやゝ狂女、關所にて有るぞ、急いで跡へ戻れとこそ。是は不思議の御仰や、扱は狂女をとむる關か。いやゝ狂女を止むる關にはあらねど、鎌倉殿の御弟九郎太夫の判官義經公西國の合戦に打勝ち、生捕共を召連れられ鎌倉へ入り給ふを、囚人斗を請取て

白波の云々此歌、
新古今十六にいつ、
第三句世をつくすと
あり。

色人―辞客をいふ。
血文―血にて認めし
文。女より深く恨む
る事ある時送る（色
道大鏡）。
十枚起請―牛王の紙
七枚をつぎ合せて書
きたる誓詞。
日文―ひぶみ、毎日
遣はす文。

おつ返し奉れとの説意によつて、此腰越の關所をば五十嵐小文次殿に仰付けられ、其上御
舍弟義經公御謀叛の其聞え、鎌倉殿より御詮義強し。去によつて老若男女の貴賤を分かた
ず、手形^{てがた}を以て出入也。何と汝も手形や有ると尋ねれば、靜ははつと氣上りて、扱もく
嬉しやな先々^{まうく}御身は恙^{つが}なし。是幸也去ながら、關の此方^{こなた}に控へては御目にかゝらんやうも
なし、何とぞ宥^{なだ}めて越えんと思ひ、こは仰共覺えぬものかな、其義經を止められんに此物
狂が入る事か。義經共判官共いさ白波の寄する渚^{なみ}に世を過す蟹^{かき}の子なれば宿も定めず。宿
がなければ所縁^{ゆかり}もなし、何とそれにも手形^{てがた}の入るべき物か、をかしの人の云事やとせゝら
笑うてゐる所へ、關屋の大將立出でて、いか様是は乞丐^{こつがい}人故も所縁^{ゆかり}も有るべからず。いか
にも通して得さすべし、しかしながら白波の寄する渚^{なみ}に世を過す蟹^{かき}の子なれば宿もなしと
や、アレ遊君のなれる果世界^{はて}の腔^{うそ}の脱殻^{ぬけがら}ぞ。よくく見置け若黨共、可笑い物かさ蔑^{さみ}すれ
ば、彼女取つて返し、こゝな殿様^{どうさま}譯しらず、其腔^{うそ}と云ふ詞こそとりも直さぬ誠なれ。廓^{くわく}へ
通ふ色人の見付所の一大事、是傾國^{けいこく}の傳授事情^{でんじゆじやう}争ひ意氣比べ、指切髪切入黒子、爪を放す
の心中死^{しんじふ}、血文日文の付届け、七枚起請金手形、是は勤の習ひなり。見付所の秘密とは戀
といふ字につゞまりぬ。其戀故に巧^{たく}ますも千萬無量の腔^{うそ}をつく。是誠より出し腔^{うそ}、可愛男
つ立てたさよ。さのみな穢^{きた}み給ひそよ。腔^{うそ}と誠の其二つ、こゝを悟らぬ其時は、地獄の釜

色道修行の能化―能
化は所化に對して師
匠先達をいふ。

遷而―たつて。

申は―申せ給。

へほつたりと落ちてはまりが強いぞや。此外萬廊沙汰いへばいふ程古めかし。色道修行の能化達歌にも詩にも俳諧にも、又草紙にも作り置く、番所の隙にそろ／＼と勤學をして置かしやんせ。あつたら御器量よい殿御まちつと粹にしたいまで。玉に疵ぢやミ打笑ひ、行方知らず成にけり。すでに判官腰越に着き給へば、五十嵐の小文次は關所の前に畏り、扱も我君頼朝公いか成御所存候にや、此小文次めに仰付られ牢與共を請取て、君は是より都へ返し奉れとの御事にて罷向ひ候と申上れば、判官大きに立腹有り、こはされば何事ぞや、去年の春木會義仲を追討せしより此かた、今年の春に至る迄野に伏し山を家として、又或時は漫々たる海上に風波の危うきを凌ぎつゝ、さしも手剛かつし平家の一類悉く討滅ぼし、三種の神寶事故なく都へ遷し入れ奉り、剩へ大將軍大臣父子を始めとして、多くの平家を生捕て遙々下りたらんをば、一度の對面にも及び給はずおつ返せとは何事ぞ。たとへばいか成憎しみ有りと、此度の勳功には九國の總追捕使にも仰付らるゝか、さなくは山陰山陽南海道何れ成共預置かれ、一方の御固めにもなされんするを、僅かに伊豫の國ばかりをば知行すべき由の給ふのみ、鎌倉へだに入られず追出さるゝはいか成事ぞ。申は過言に似たれ共、凡そ此日本國中を鎮むる事は此義經が所爲にあらずや。先に生るゝが兄なれば弟も變らぬ父が子よ、達而恐るゝ所にあらず。イデ此關を踏み破つて、兄佐殿に對面し、お

さへぎつて一強ひて
親兄一肉親の兄。

恨の様承らん。人々續けと駈け出で給ふを、小文次暫しと押止め、こは勿體なき御風情や。此關破つて入り給はんは何より以て易く候。將又人數ならぬ某、此所を承り罷向て候へ共、何もお主の事なれば敵對申さんやうもなし。罷向ひし印には錯矢一筋射かけ參らせ、直に御供申さんに何條事の候べし。去ながら某推量仕るに、是は正しく梶原めが讒言したるに紛れなし。然る所を遮つて無體に入らせ給ひなば、却つて狼藉の沙汰に落ち給はん。たゞ親兄の禮を重んじ、是非此度は御歸京有て然るべう存候。此小文次めが御爲惡しくは仕らじ、御身にあまりなき旨を一通殘し下されなば、老中共に申合御中直し奉らんと、涙を流し理を盡し様々諫め奉れば、判官打うなづかせ給ひ、オウ、誤まつたり小文次、此上はともかくもよきに計らひ申さるべしと、思召るゝ事共を殘し留むる筆の跡、末の世迄も義經の腰越狀と三重申す也。かくて靜は御歸るさを受けんと、ある松が根に寄添ひてさしうつぶいておはせしが、先陣既に行過ぎて、御大將義經公御先道具徒侍御馬廻り跡備へ、御勢三千七百餘騎靜まりかへつて打給ふ。靜は今や名乗らんと小松の蔭より這出づれば、御先拂ひの侍共、御目通見苦しし罷退れと追拂へば、重而名乗らんやうもなく、涙にくれて逃げ轉び薄が隈に身を隠し、震ひ戰く其隙に御陣は過ぎさせ給ひけり。靜は御跡見送りにて、口惜しや恨めしや眼前側に有りながら、それ共見えぬ面影は變り果てたる故ぞかし。變り

果てしは何故ぞ、御目にかゝらん爲ばかり。コレ、後陣の侍達申届けて給はれと、聲をはかりに泣き叫び慕ひては又伏轉ふしころび口説くちごとき立ててぞ嘆かるゝ。所へ六郎重清は後陣に下つて打て通る。靜それよと見るからに、コレ龜井殿六郎殿と呼びかくれば、重清ヘット振返り見れば女の乞丐こつがひ人、やら不思議ふしぎや某それがしが名を呼ぶべきいはれはなし。そも先まづおのれはいか成者なるぞと咎とがむれば、ナフ見忘れ給ふも斷ことわりよ。是は靜がなれる果はて、か様／＼の子細にて、又鎌倉へ賣渡され憂うれきを勤めて候ひしが、とてもかくても君の御事思ひ忘るゝ隙ひまもなく、廊を忍び出様や道の程人目の程のがれん爲めの謀事はかり、かくはしつらひ参りし也。どうぞ逢はせて給はれと又さめ／＼と歎かるゝ。それでも六郎合點あてん行かず、いや／＼詞が靜でも顔が靜で候はず。所詮あれなる川岸にて面おもてを雪いで見せられよ。それ／＼櫛笥くしけといふ隙ひまも、有りし川瀬にさしかゝり水を濺そげば、土は流れ落ちて面影残る水鏡、恥かしながら櫛取て引裂紙の引扱ひしき、二重廻してしやんと締め、結ぶ片手に脱棄ぬぎつる、木葉衣このはの下一重取繕つくらはぬ風俗は、雨雲覆ふ月影の晴間はれまを得たる如く也。重清先陣呼返せばすは事こそよと引返す。靜嬉しく走りより判官の直衣なほしの袖に縋すがりつゝ、嬉しさも悲しさも恨みも戀も憂き事も情も仇あだもつれなさも、又ゆかしさも戀しさも涙ばかりで知らせたり。

壬辰令月一嘉辰令月
歌無極、歳千秋樂
求央（朗詠、雜言
詩）

第 四

嘉辰令月歡び極りなしとかや。兵衛の佐頼朝公御舍弟三河守範頼九郎御曹司義經に御代官を給はりて、驕る平家を討亡ぼし征夷將軍に居官有り。凱陣の御家人には恩賞厚くなし下され、日々夜々の御祝ひ萬々歳とぞ奏でける。中にも與一宗高を召れ、誠に此度不思議に九郎が手に屬し、源平兩家の戦場にて類稀成弓勢先達て隠れなし。去によつて故殿の御勘氣を許すの上本領下野國を得さする條、急いで入國致すべきと御暇を下さるれば、其外の人々も皆々御前を下りつゝ本所へに歸りけり。扱其後に二階堂土佐房を召され、扱も九郎義經院の御氣色よきに誇つて世を亂さんと欲す。仍此度生捕共を引具し腰越迄下りしを、五十嵐の小文次を差遣はし、囚人ばかり請取つて九郎はそれより追返す。事延引に及びては是又天下の騒動也。汝は京の案内者急ぎ帝都に馳せ上り、九郎を討て下るべし。其勳功には安房下總兩國を給はるべきとぞ仰せらる。土佐房謹而承り、誠に人多き其中に此入道めを召出され、御一門を滅ぼし奉れとの御仰承候事歎き入存する也。其上御謀叛と仰せ候へ共、さして見えたる御事とても候はず。あはれ今一度御詮義の上仰付けられ下さるべうもや候らんと申上れば、梶原平藏進み出で、いや／＼御謀叛なきとは申されず。義經公の

經卷一槍、長刀等の柄々、問をおきて銀の延板又は藤にて巻きたるをいふ。
千手院一劍工の名。

我儘は是御謀叛の致すの所、先此度の生捕にも女院の御所二位の尼大納言の介の局、是等は鎌倉へ引きも給はず直に大原へ送らせ給ふ。其上西國の合戦に城の三郎高家本三位の中將以下を搦め取り、範頼公の御手に渡し候へば、判官大きに怒らせ給ひ、奇怪の者の振舞かな、いざ押寄せて蒲殿討たんと給ひしを、此景時が有めてこそ判官鎮まり給ひつれ。殊更平家を討取りなば關より西は九郎が物、天に二つの光なし地に兩星はましまさねど、此後は天下に二人の將軍あらんと給ひしを思へば、恐ろしし。武功は古今の御達者、鶴越の坂落し其外八嶋壇の浦、所々の詰軍に一度も弱氣を見せ給はず、漢家本朝にかゝる名將よもあらじと、東國西國の兵共何も心を通はせり。本より世に望み有る大將なればたゞ人毎に情深し。是士卒を思ひ懷けん謀、定めて御謀叛遠かるまじ。此君天下を知り給へば、其方や我々は一番軀に首がない。何と狼狽へ申さるゝ重而讒し奉れば、入道大きに驚いて、いかにもさうよ梶原殿、首が有つての賢人だて、何しに御説を背き申さん。たゞともかくもよきやうに御前を頼み存すると、謹而こそ居たりけれ。頼朝御機嫌麗しく、納戸の御方より蛭卷白き手鉢を給はり、是は大和の千手院に鍛はせ秘藏して持たれ共、頼朝が敵討には柄の長きを吉例とす。是にて九郎が首を貫き追付凱陣致すべしと、御座を立たせ給ひければ、土佐は都へ三重上りけり。かくとは知ろしめされずして、九郎御曹司義經公

氣の毒―心を惜ますこと。
洗鬢―鐵の鬘をいふ。

おがみ―尾髪。

御判はんじ―印刷の吉凶を判斷すること。

一算おくべい―算木にてうらなはし見るべし。

震下連―0000

卯腹辰腿寅背申未の頭の中―尾―鉞灸に日によりて忌む所なり、申の尾は申の腰ともいふ。

都へ入らせ給ひしより四海波風吹治まり、豊か成世の例ぞと、夜晝分かす御酒宴にて明し暮させ給ひしが、武藏坊辨慶は物事油斷なき心底にて、御酒宴の座に心も留めず、いまだ平家の討洩らされいか成事をや仕出さんと、毎日姿を寝しつゝ町々里々野はづれにて事を窺ひ居たりけり。然る所を土佐房は四五十騎にて打つて通る。辨慶すはやと見る所に、熊野詣でと思しくて、淨衣烏帽子は申すに及ばず、長櫃乗替乗馬迄いづれも幣を切りかけさせ、さも殊勝氣に行過るを、辨慶遙かに見送りて、イヤ心得ぬ土佐が風情や、つく／＼事を案ずるに、我君と鎌倉殿御中不和に成給へば、今さらかゝる物詣でも心にかゝつて覺ゆる也。問はばやなど思へ共、土佐めが辨慶見知つたらん。ハテ氣の毒やと思ふ所に、暫し下つて舍人共、黒き馬の逞しきに洗鬢を食ませ、是もおがみに幣切かけてぞ通りける。辨慶ちやくと居直つて、御年八卦當年中の吉凶を知る事、御判判じ即座の卜形失物相性何にても御手の筋を考へて其儘生死を見る奇妙、卜算／＼とぞ呼びかけけり。男共立寄りて、扱々是は幸や、いで／＼一算置くべいと馬繋ぎ捨て振ぢ据れば、辨慶書物を繰り廣げ、お年は何と卯の年な。八卦のおもては震下連、是卯の方を司さどる。震下は則雷にて只黒雲を走るが如し。扱も危い御身の卦體や。卯腹辰腿寅背申、未の頭申の尾、申酉荒れて戌温し。犬には犬の聲有て、一犬吠ゆれば萬犬叫ぶ。扱は其方主人たる人は、人の討手に

向ふと見えたり。其主人の一犬動く故に士卒の萬犬共に動く。一犬却つて犬の體、人道を離れし畜生道、是はまさしく主か親か何分道に當らぬ討手成べし。何と違ひは有るまいかと譯もない事云散らせば、流石下腐のあさましさ、扱も見通し〜と舌を卷いてぞ居たりける。辨慶猶も可笑しが、とてももの事に生死至極を見て取らせん。いづくよりいづくへ通る人成ぞ、有體に申されよ。されば候、我々は二階堂土佐房正尊殿の馬屋の者、頼朝義經御中違ひまします故、堀川殿への討手を蒙り罷越され候也。構ひて御披露詮なしと言はせも果てず取て伏せ、あら無慚や八卦の表絶對絶命と占うたり。念佛申せと首捻ぢ切つて捨て〜ぱり。辨慶につこと打笑ひ、御所迄歸るも手間遠也。直に土佐めが宿所へ踏ん込み、事の様子を見届けん。是幸ひに馬引寄せゆらりと乗りて打つ鞭に煙を立てて飛ばせしは、只稻妻の三重如く也。程なく辨慶土佐が宿所に駆け付け、と有る所に馬乗棄て、案内もなくつつと入る。折節土佐房一家の武士、車座に居並びて夜討の評定有る所へ、辨慶ぬか〜とさし入て、入道が馬手の座敷にどつかと直り、これさ土佐房、惣じて御當家の御作法にて、是より關東へ下る輩は京都の子細を取敢へず鎌倉殿へ訴る。又關東より京へ上る輩は一番に堀川殿へ子細を云ふ。それを御邊も知りながら、只今迄の遅參近比無禮千萬以外の外の御機嫌也。早々罷越さるべきとの御使に武藏が參つて候ぞ。疾う〜罷出られよと襟上揃

んで責めつくれば、さしもの土佐房返事にあぐみ、先々こゝを許されよと、もち／＼として居る所へ前後の若黨反を打ち、参れとならば参らんには是は餘りの狼藉也と、つめかけ／＼云ひければ、いや推参也蛆虫奴等、此辨慶に立つ刀、おのれら如きは得差すまじ。黙れといふに黙らぬと、片端素頭を撲り碎かんと睨め廻せば、あへて近付く者もなし。元來土佐房思案者、やれ慮外也おのればら、武藏殿の御使は義經公の御名代、それに向つて太刀三昧、扱々いはれぬ力み立、それ／＼馬に鞍を置け。辨慶殿の御供して申上げんと云ふ所を、小腕もつて引立て、馬はこなたにお供は辨慶、かた／＼お構ひ有るべからず。いざ御立と引ずり出し弱腰摺んで馬に乗せ、其身も續いて乗たりしを、末の世迄も辨慶が後馬とぞ三重名付けける。御所にはかゝる御沙汰もなく、靜を始め多くの遊君其外家の諸侍、南面の廣庇に酒宴してこそおはしけれ。所へ辨慶土佐を具し御前に参上し、概略を訴ふれば判官御盃をさし置て、いかに土佐房、おのれ義經追討の使として遙々罷上る由、勢はいか程持たるぞ、軍は明日何時成ぞとの給へば、土佐謹而申上るは、全く左にて候はず。我君三の御山へ御宿願の事候ひて、御代官を承り熊野へ参詣仕候。早速登城仕り御斷をも申上んと存ずる所に、路次より風氣五體を苦しめ候故、今晚養生仕り明日お目見え致すべき旨申含め候所に、辨慶殿のお使故延引ながら参上仕て候。追討の御使とは大權現も御照覽、ゆめ／＼存

かんせんーかつせん
(合殿)の謨なるべし。

牛王を以て一牛王の
神符の裏に誓詞を書
くなり。

候はずと辯舌賢く言上す。義經聞きもあへ給はず、何と西國のかんせんに創を被る軍勢共、生創を持ちながら熊野參詣苦しからぬか。何共おのれが面魂思案に落ちぬ所有り。眞直に白狀せよと御氣色變つて仰せらるれば、土佐房重而左様の仁一人も具せず候。津の國和泉を打越て紀の路にかゝり候へば、山賊みちく候由承候間、若き奴原少々召連れ候なり。とかくか様の無實を受け私には申開き難し。あはれ御免を蒙つて神文を書認め、御申譯仕度候と申上ぐれば、判官御氣色直らせ給ひ、神は非禮を受け給はず、疾くく神文致すべしと仰下れば、土佐房は牛王を以て書認め御前に獻上す。判官是を孟となし三献酌みて罷立てこ御盃を下さるれば、コハ忝しとさらりと干し、御土器を懷中し、土佐は旅宿に歸りけり。武藏を始め龜井片岡一座の諸武士口を揃へ、神文起請は小事にこそ、是程の御大事に輕々數御振舞、今宵は御用心候べしと申上れば、シャ土佐房めが寄せたり共、勢二百騎にはよも過ぎじ。只義經に任すべし。方々は六條にて心任せの酒宴せよ。疾くくとの給ひて、はや御枕召さるれば、皆々お暇賜うでける。され共靜心賢しき女にて、うちも寢入らぬ添臥しは袂片敷くばかり也。すでに其夜も丑三つ告ぐる比しもや、関をどつとぞ上げにける。靜驚き走り寄り、御敵寄せて候ぞや。起きさせ給へくと動かせ共、酔ひ臥し給へば夢とのみ現心もつかざりけり。靜は餘りのせん方なさ、御所中を駈け廻り、人はなきか侍達は

おはせぬか、敵の寄せしを知らざるか。御召なるはと呼ばはれ共、宵にお暇賜ひければ音する人もあらばこそ、たま／＼寢覺むる女房達、軍といふが恐ろしさに深く忍びて影もなし。靜は度々の寄聲に彌々心せき狂ひ、又ゆり起せど櫓れど叩けど搦れどうつゝ事、只寢よ／＼とばかり也。せめての事に御寢姿敵に隠し參らせたく、衣に包みてかき抱き一間に隠し奉り、振返り見る細殿脇、イヤ人影のとさし覗けば、下部の喜三太呟きて何事かはと立寄れば、こは喜三太か嬉しやなふ、是々敵の寄せけるぞや。かゝる時こそ男の役、コレを着て軍しや。其間に御目も覺むべしと、御着背長を投げかけて上帶しむるその隙に、兜打着せ馬引寄せ、さあ／＼是に打乗て急ぎ表に駆け出し、檢非違使五位の尉九郎太夫の判官、源の義經と大音聲に名乗られよと、馬引寄せれば、コハ靜さま、軍するまで候はず。先此具足ばかりでも中々身動き成申さず。其上に又此長名是が何とて覺えられん。いやもう許して給はれと逃げんとするを引留め、ア、辛氣やの爰な人、和御前ばかりを遣るではなし、自ら共に行く事ぞ。はや／＼馬にとかき抱き打乗する間も有りやなし、其身も物の具さし固め、長刀ふつて立添ひしは男勝りの女也。去程に辨慶は己が宿所に臥したりしが、夜こそ寢られね土佐めも京に有るぞかし、御所の御事氣遣はしと太刀脇挟み棒突鳴らし來りしが、土御門は御門さゝりぬ、東の小門をつつと潜つて入る所に、靜は何の心もなく駒の口

のせんず勢一長刀に
のせて斬らん勢。

取り駈け出る。兩方一度に出給ひしが、喜三太土佐よと見るからにぞつとして来る臆病風、
わな／＼震ひて目眩めき馬より下へどうど落つ。武藏は君と心得て立寄り見れば喜三太也。
こはいかに喜三太／＼と引立つれば、やう／＼心や付きたりけん、檢非違使／＼五位の尉
さぞ名乗りける。辨慶靜可笑しが、いやはや弱き大將軍、扱も似もせじ似氣なしとどつ
と笑うて立つ所へ、判官御目を覺まさせ給ひ物の具固め御出で有り。法師々々と召さるれ
ば御前に畏り、さしも申上る事を御承引もましまさで、腕にも足らぬ奴原を、門外迄馬の
蹄を向けさせぬるこそ安からね。いざ蹴散らさんと主従三人、辨慶御先給はりて一度にど
つと駈け崩せば、むら／＼ばつとぞ逃げにける。喜三太やう／＼思ひ出し、大手の櫓にか
け上り早鐘を撞き鳴らせば、御内の侍在京の武士すは事こそよと駈けつけ／＼参り合ひて
ぞ三重戦ひける。さしもに勇む鎌倉勢、此一戦に切立てられ、今は土佐房只一騎鞍馬の方へ
と落ちて行く。熊井・片岡・龜井の六郎向よりおつ返す。後には鷲の尾・鈴木の三郎・忠信・
義盛・源八兵衛、鎌を揃へ待懸けたり。下には辨慶車の如く長刀ふり立て、落ちばのせんず
勢ひ也。土佐房逃ぐるに度を失ひせめて命や助かると、堀を向ふへ飛び越す所を横手切に
切つて落す。大の法師のいき袈裟かけ二つになつてぞ失せにける。斬殘されし土佐が勢面
も振らず切つてかゝる。味方は前後一つになりなぐり立て／＼なぐり立つれば散り／＼に

なつて、行方は嵐吹く木の葉の如くに成にけり。

第五

御給事―御奉公。

長子「長ずる」の誤
にて、増長殿とする
意。

守る人も据ゑなで過る世の日數、はや其年も暮れくゝて又明渡る春も立ち、水無月はじめの事成しに、義經公の御方には武藏を始め諸侍、いづれも御前に相詰めて、土佐房を討ける上又ぞやいか成御沙汰あらんと、詮議區々成所へ那須の與一が妻女、聊か御訴訟の事有りとして一通を献上す。判官何事やらんと開かせ給ふに、何々此度生捕の内女院ならびに二位の尼公・大納言の輔の局・阿波の内侍、我君の御情によつて御命恙なく小原の奥寂光院にて御出家有り、中にも二位の尼公は世を早うし給ひて、女院の御惱み以ての外に候由國にて傳へ承り、閑居の御有様をも訪ひ参らせたく候てはるゝ参候へ共、今比御家人の妻女と成参らせて候へば、夫にて候宗高が後日の御咎めを恐れ存じ、一通を捧げ伺ひ奉候き。あはれ御許されを蒙りて、今は時の御給事致し参らせたく候まゝ御披露を頼み奉る。静様へと書たりけり。判官あはれと思されけん、若草を近く召され、誠に舊主の捨て難く遠くも來る心ざし、女ながらもしほらし。讒臣長ず浮世の中與一が思ふも道理、某とてもさの如し。十善天子の御母公なれば棄て参らするにあらね共、世を憚かりて延引す。いか

覺破れては—平家物語小原御幸の條に據れり。
瓢箪歴空し云々—瓢箪歴空草滋—顔淵之巷—瓢箪深鎖雨濕原窓之楯—(橘直幹申文)この邊の文章すべて平家物語の小原御幸に據れり。

にも許すぞはや参れ。いか様是は能折からいざ野遊に事よせて、我も共にと行く道の御供とては嵐吹く野路の若草嬾かに、御先に進み出でければ、跡は靜の立姿窈し——て三重野飼の牛を、引くかと思れば引くではあらでム、ヤアコレノ、色に追はるよの、ム、ヤアコレノ二つの綱をほどいて見れば、思ひと戀とム、ヤアコレノ、あだと情をの染め分けて、青葉に變る茂みこそ春の名残と惜まるれ。茂りにけりな夏草の、葉末の露を分け——て、行けば程なく今ははや寂光院に着き給ふ。こ有る櫓の木の本に牛の綱手を結び置き、若草靜立寄りて御寺の方を打眺め、あさましの御有様、世を厭ふ御習ひとはいひながら、かくも變らせ給ふ物かな。覺破れて扉落ち軒には葛の葉葛や、忍交りの名無し草、瓢箪屢々空し草顔淵が巷に滋し、藜藿深く鎖せり雨原憲が櫛を濕ほす。時雨も霜も置く露も漏る月影に争ひてたまるべし共見えざりけり。アレ御覽ぜよ、後は山前は小笹野風騒ぎ、世に堪へぬ身の方便とて憂き節繁き竹柱、都の方の音信は間遠に結へるませ垣や、僅かに言問ふものにては、峰に木傳ふ猿の聲賤が爪木の斧の音銜くらぶる外はなし。ハテ人がなといふ所へ四十餘りの尼一人、手馴れぬふりや閑伽桶に水を掬びて戴きて、岨を傳ひに來りしを、是幸と立寄れば阿波の内侍のなれの果、互にそれと見るよりも、こは珍しやと立添ひて先立つものは涙也。内侍やう——涙を止め、思ひよらずや若草姫、扱只今は何のためは迄御入り候ぞ。されば候御

御一門を―御一門の
とあるべきなり。

夏の花―一夏百日中
佛に供ふべき花。

一念―念佛を一返す
ること。
衆衆の來迎―佛菩薩
の來迎。

莊嚴領―佛を莊びす
るための領地。

惱み次第に重らせ給ふと聞き、遠き田舎の果よりも遠々參候也。此方に渡らせ給ふこそ我
君判官義經公、訪ひ入らせ給ふはと申しも果てず立寄りて、さて忝なの御入や、女院の御
命又我々が一命迄御許しなし下され、御念佛を修行して御一門を菩提を弔ひ、佛果の縁を
結ぶ事是大將の御恵み、いつの世にかは忘るべし。彼方さまにも幾程か御悅にて候也。此
比迄御いたはりにて渡らせ給へど、廿日ばかりも此方は御心地よげにましゝて、夏の花
手折らせ給はんとて上成山へ入り給ふが、定めて追付御歸りにて有るべき間、御入有て待
たせ給へと申しも果てぬに女院歸り入給へば、内侍の尼は立寄て御花筐給はりか様くんと
申上ぐれば、誠に一念の窓の前には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御訪ひ返す
くも嬉しけれ。去ながら今かゝる身を見え參らする恥かしさ、昔戀しき御涙止めかねさ
せ給ひけり。判官謹而涙ながら、扱々變れる御有様や、疾くにも登山申すべきを、明暮と
禁庭に膝を屈し候へば存じながらも禮を失ひ候也。去にても只今迄は誰か言問ひ參らせし
ぞ。さればこそとよかゝる身を訪ふとし人はなけれ共、信高高房の北の方絶えく申送る
也。あはれ實其昔あの人共のはごくみにて、世を過さんとは思はずよ、生きて甲斐なき我
身の果。恨めしの浮世やと又御涙堰きあへず。判官も共に涙の隙よりも、こは御道理去な
がら某かくて候上は只御心安かるべしと、莊嚴領三百丁御墨付を參らせらるれば、御志は

天下は一人の云々
六曜文師篇・呂氏春
秋貴公篇等に出づ
る語。

三時一朝盡夕の三
時。

すゝめ一進みの誤
か。或は眞の道心に
入るべきを勧めの意
か。

今日影一宮ふにか
く。

嬉しけれ共、一度敵よ味方と分れ今更施物は受け難しと、御手にも觸れ給はずさし戻させ
給ひければ、義經嘲笑はせ給ひ、何と敵の布施物は堅う御受け有るまじとや。御身は墨に
染まれ共いまだ染まらぬ御心、さすが女中の御身なれば尤とは申しながら、事の道理を御
存知なし。夫天下は一人の天下にあらず、則天下の天下也。敵味方と分れ源氏の天下と成
けるは、是清盛の政道正しからざる故天是を免し給はず。草木國土悉皆成佛と聞く時は敵
もなし味方もなく、只平等施一切同發菩提心の往生安樂國にてあらざるや。然ば此度の戰
は御身の爲には善知識、かゝる憂へに遇ひ給へばこそ不思議に釋迦の遺弟に列なり、忝く
も彌陀の本願に乗じて五障三從の苦しみを遁れ、三時に六根を清めて一筋に九品の淨刹を
願ひ、もつばら一門の菩提を祈り常に佛の來迎を待ち給ふを、何と有難いとは思召されず
や。但し御身を助けん空道心か、其御心にては中々往生は遂げられまじと座を打てすゝめ
給へば、女院ハット御手を合せ判官を合掌有り、扱有難の御教化今日の釋迦只今の阿彌陀佛、
僧僧にあらず俗又俗にあらずとはかゝる事を申すらん。ナッあやまつたり許させ給へ。南
無阿彌陀佛くと歡喜の涙止めかねさせ給ひしかば、二人の尼も諸共に手を合せてこそ泣
き居たれ。義經重ねて、誠に一念の御發起世に有難う存ずる也。彌々怠りますますな又こそ
登山し奉らん、はや御暇と夕日影山の端近く入相の鐘の鳴音を限にて別れ出でさせ 三重給

おろしやうー輕蔑の
しぶり。

御上使ー原本御説便
とあり。

釜山十一大峯のぼ
り。

ひけり。後は彌陀山・鐘鼓峯・花園近き山隈より、武士とも杣とも知れぬ者、四五十騎お
つとり捲き、関をどつとぞ上げたりける。義經少しも騒ぎ給はず、若草靜を後に圍ひ早御
太刀の鐔元四五寸おしくつろげ、イヤ推參也山賊奴等、暮にかゝりし山間を足弱連れて行
く者が、おのれら如きの瘦盜人に恐るべきか。鯉口の離れぬ先そこ押開いて通すべし。さ
なくはおのれら素首を落し獄門の木に曝さん物をとの給へば、大將と覺しき者小高き所に
つつ立ち上り、山賊盜人とは近比餘りのおろしやう、身不肖ながら某は去年堀川の夜討駆
け、御身に討たれし二階堂正尊が一子土佐の太郎近則也。其節は折惡敷此山蔭に引籠り、
興力の勢を相待て折を窺ひ居る所に、幸の御通まだ天道にも棄てられず、一つには父が敵
且は又頼朝公の御上使成ぞ。急いで御腹召さるべし。我々が介錯し御首を給はらんと、前
後左右より討つてかゝる、所へ山伏數十人とかゝと駈け來り、是は北國方より釜山上の
客僧、何事かは存ぜね共此喧嘩は貰ひ申さん。何と早々呉れ召されうか。否でも應でも貰
ひ申すとねぢ据われれば、近則急いて身を跳ぎ、いや面倒成山伏共、そいつら共に討取れと
群りかゝるを前に受け、大石大木投げかけ、隙あらせず打挫ぐは、人間業とは三重見え
ざりき。され共近則危うき命を搔潜つて義經を目がけ飛んでかゝるを、先達の法師と見え
しが忽ち天狗の姿を現はし、羽風を立てて追懸來り中に掴みて上りしは、凄じかりける三重

勢ひ也。雲中に聲有て、いかに義經御身しやなわう遮那王丸の其昔平家追討の大願有り、我に祈りの深きによつて是まで付添ひ、其危うきを救ふ事彼は七十三度に及ぶ。正に成就致せし也。去によつて今より後、御身を離れて此僧正是本の鞍馬へ歸るぞと飛去り給へば、有りつる客僧皆悉く羽叩き來り、敵を引裂く其血煙ちゆうふりは只紅くれなゐの雨と車軸し、立添ふ魔風に谷風川風山嵐、木の葉吹立てくくして山路遙かに入り給ふ。義經を始め奉り御迎ひの武士、同音にあら有難やと伏拜む、天長地久の君が御代、五穀ごこく豊饒にように民安く、榮え榮ゆる豊津國、限りなきこそめでたけれ。

右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加秘蜜令開版者也

竹 本 義 太 夫



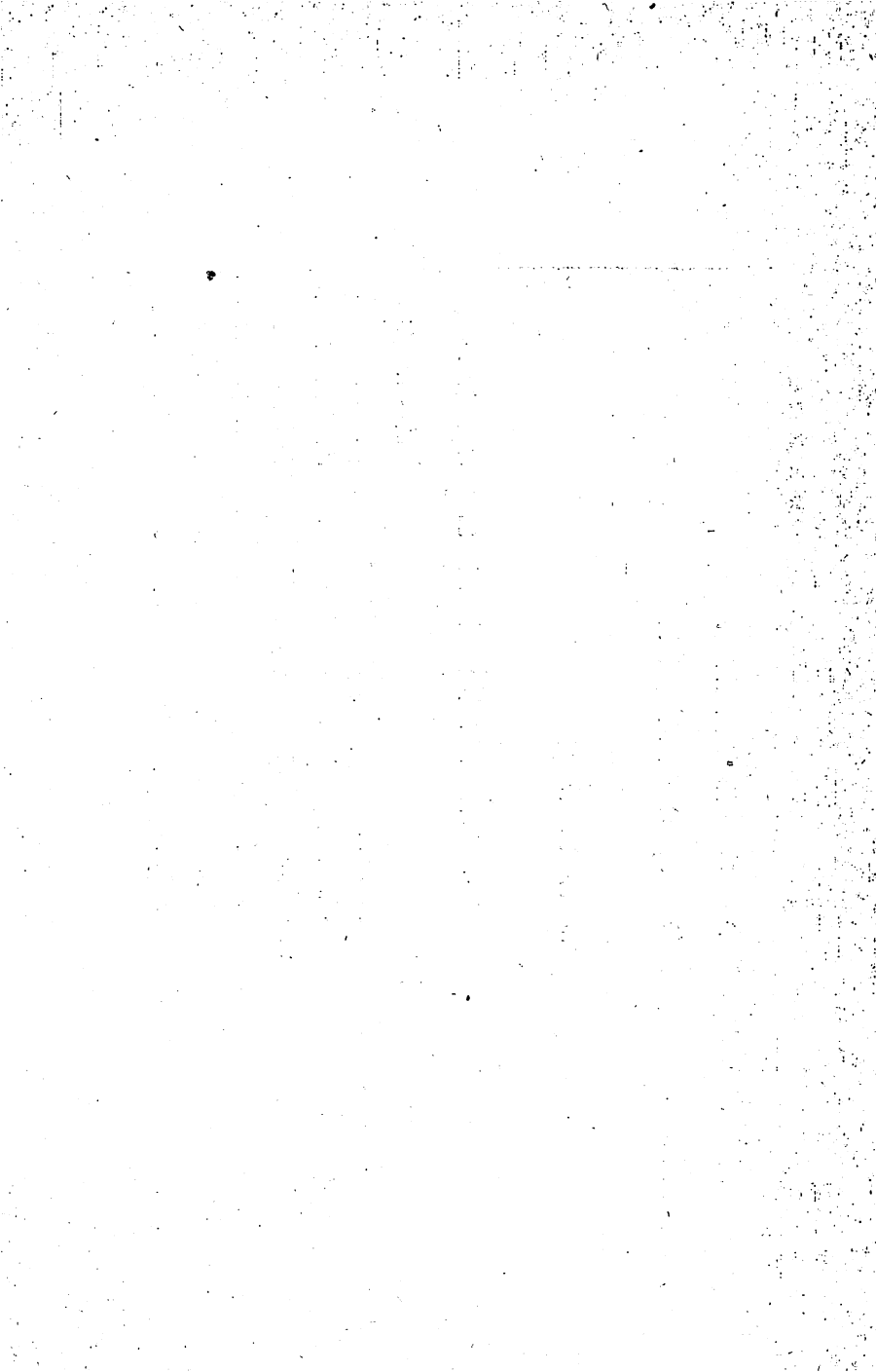
繼 義

京二條通寺町西入町北側

山本 九 兵 衛 板 團

大坂高麗橋壹町目

山本 九 右 衛 門 板 團



源
賴
家
翰
始



源頼家鞠始

かなはざらんやいか
なはんやの誤なるべ
し。

望願署一體記曲禮下
に、侍於君子不三
顧望而對非禮也。
注に顧望して後對ふ
るは、敢て他人に先
たちて言はざる也。
同書に、立則望折垂
也。注に優折望の背
の如くにして、玉佩
兩邊より懸り垂る。
これ立容の常なり。
しな一尋、姿なごの
意。
をりしか一折柄と同
じ。

親愛を以て是に従ふは私情の與する所、豈是正理に叶はざらんや。爰に鎌倉二代の名將左衛門督源頼家卿、征夷大將軍に任ぜられ父頼朝卿の跡をつぎ、四海を鎮め御代安全の勳功は、四民こぞつて千代萬歲と仰ぐに飽かぬ時とかや。幕下の掟に彌増して問注所を新造り、民百姓の訴へも直きを本の御政道、天性賢くましますば、たけき道芝踏み分けて八雲の道も淺からず。蹴鞠は又紀内行景とて、名を得し鞠の達者をば都より召置かれ、御指南申上げければ世に勝れさせ給ひけり。扱御舍弟千幡公十二歳、御器量他に越え智惠敏く、是御成人の後鎌倉右大臣實朝公と申せし也。御乳人子には大和前司友行晝夜御側を離れ奉らず。同御一子一幡公三歳にならせ給ふ。是は比企判官能員が娘若狹局の御腹也。扱又天下の執權には御母方の御祖父北條の四郎時政、並に一幡公の御親戚比企判官能員兩將として執り行はる。比は正治二年改まる元日の御儀式、大名小名殘なく望願署折是ありて頼家仰出さるゝは、誠に毎陽の式法例に違はぬめでたさは、治まれる代の例文を以てしなとせり。されば海内靜謐の春文に基くをりしか也。聞けば來る四日こそ大内の鞠始、いざこなたにも

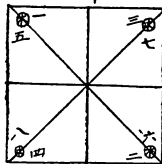
かはらか―清爽に。

意趣―遠恨。

蹴き初はつせんと御機嫌ごきげんますくうるはしく、御簾ごれん下されば揚卷あげまきと共にゆるぐや注連飾しめかざり、げに永き日の長閑のびやかかに治まる御代こそ三重めでたけれ。既に御會ごかいの日にもなれば、在鎌倉ざいの諸大名出仕遅しと出でらるゝ。爰に千葉の介常胤すけのつねの嫡子千葉太郎胤政ちやうたろうのつねまさとて、文武に達し器量は又世に類にひなき美男也。今日蹴鞠けいこくの御詰ごあつめとてかばらか成し装束けしきにて、三十餘人に前後を打たせ馬上ばしやうゆゝしく登城とうじやうある。然る所に向ふより、笠ふかゝと顔隠かおかくし清はらけ成なり若侍わかしやう二人左右さゆうに立別れ、行違ちがひふさまにて胤政の馬の兩口引止む。供の者共こは狼藉ろうじやくと騒さわぐを千葉しばしと鎮め、してかたゝは何の意趣有てかく振舞ふぞ。子細を聞かんとあれば、いや別義べつぎにも候はず、千葉の太郎さまと見受け奉り少頼すよりみ上度事候て、卒爾そつじながら御馬を止め候といへば、千葉聞給ひ、何某それがしと見請け頼み度事とは、若人わかしを討つて追手おひのかゝれば影を隠してくれよとの事か、但し敵には行合うたれども多勢に無勢叶はずして加勢を乞ふか。遠慮なく申されよ、本意ほんいを達し得させんと有り。扱頼母だもの敷しきお詞ことばなれどもさやうの事にて更々なし。只御一言にて埒らちのあく事にて候といへば、千葉眉をひそめ、汝らが申條でう一圓合がてん點てんゆかず。先侍の笠をも脱がで頼む事とは法に背く緩怠者、誠頼む事あらば笠を取つて申せと赤面あかめんして怒らるれば、御腹立ごはらだちの段至極仕候。去ながら深く人を忍ぶ身にて候へば無禮むれいは御免ごめんなされ、只頼まれんとの御詞承りたう候といふ。胤政いよゝせきにせき、おのれらは某それがし

武勇を引見んとたぐの巧、弓矢八幡慮外千萬それ侍共笠もぎとれ。畏つて立ちかゝり笠もぎとればこはいかに、四十餘りの女房と二八の春の花過ぎて廿はちに及ぶ上臈らふの、山の端出でし月の顔雲のびんづらぞつとして覺えず馬より轉ころび下り興さめ顔にて立たれけり。時に乳人めのどと見えし者千葉に向ひ、妾わらわはあのお子を育て上げし者なるが、いつぞや大山詣での時御姿を見そめられ戀焦こいれさせ給ひ、文の數々参りしは定めて御覺えましますさん。しかるに一度つれなくも御返事だに候はねば、今は憂き身をなき物にと歎かせ給ふうたてさに、やう／＼と賺ますし参らせかやうにしつらひ申したり。頼み上度御事とは是にてこそ候へと、涙にくれて口説くづきけり。さしもの胤政呆れ果てしばし返事もなかりしが、扱々思ひまうけぬ御仕方ほうど困つて候よ。いかにも／＼再三の御文は得たれども、武道に背そむける事なれば御返事せざりしぞ。とかくお許し／＼と振切り行かんとし給ふを、姫君袖にすがり、こはそも新らしき御仰、出家沙門しやもんの身ならばこそ。武士の女に相馴れて道に背き申すとは、いつの世よりも始まりて誰の掟て候ぞと少色だち見えければ、ホ、是はおせきと見えし先鑲まづめて聞給へ。某それがしやもめの身にしもなし、たゞひ妻なき身なりとも人の知らぬ縁組は侍の本意ならず。まして正ただしき妻ありて二歳になれる子までもち、今また御身に從したがはゞ二妻ふてめ狂くるひ名なの立たん。いかに御志の切きつなればとて武士の法は破られじ。思召しきりてたべと云捨てて、

軒



待つ一松にかく。

お道具一箱をいふ。

八人、六人、又は四人にて蹴る例なり、三角形の内を自己の境内とす、木は柳は裏、櫻に良、松は乾、楓は坤の方なり。露一狩衣などの袖括の緒の垂れたる端をいふ。色さらふかく一色殊更に深く。軒一鞠場にて上座をいふ。又一の座。葛袴一瑛布にて作りたる指貫。ほら一織物の名。

駒引寄ぜ乗らんとすれば、こはいかにそれはつれなき御仕方、今暫らくと絶ちたるを若黨共押隔て、なふあれ見給へ後よりもどなたやらんお道具の見ゆるに、先重ねてといふ際に胤政駒を早むればせんかた名残惜しげにて、跡を見送り歸らるゝは、本意なさうなる三重有様なり。

鞠の亂曲

ウタ鎌倉の御所のお庭に、あらたまの年の始まり蹴初とて、軒はことさら傾垂れて、君待つ色に千世ぞ知る。軒の向ひの七重なほ常磐の影に色深し。軒脇柳下座楓、深き心に吹きと吹く風も穏やか末共に、萎むも知らぬ時受けて、治め知る世ぞ久しけれ。折しも長閑けき春の空霞たなびく山の端に、朝日の出る御有様、御装束の結構には鬱金小袖一重紫紋紗に金糸を入れ、朽葉の袴無文の露、烏帽子の懸緒紫の色さら深く大様に軒に移らせ給ひけり。千葉の太郎胤政は縹色なる緞の社、梅に鸞羽を休め、獅子に牡丹稻葉に雁、雪折竹の笹分けて塙求むる群雀、四季の色香をありくと筆を盡せし繪袴や。錦の露の光添ふなる風情して軒向ひに伺候せり。北條の義時は雲龍織りし紋紗の上、萌黄裾濃の葛袴有文の露に蝶の紋軒脇にこそ参られけれ。扱又秩父の重安はほらの上に柿袴、赤地の錦の露深き楓

ラツたがはん一疑は
ん。

かゝり一鞠を蹴る處
をいふ。

序破念一鞠には序破
急あるべし、初は我
木の下深く立ちて分
に隨て、鞠たけのび
やかに殊更自他分見
分けてのびやかに蹴
べし、是は序分の時
なり、破分には聊か
木の下を立出る様に
て鞠たけひかへて、
時々曲をまじへ蹴べ
し、晩氣に及び急分
にならば、いかにも
蹴をも勵み、木にか
けてず鞠鞠たけをもつ
めて、互に曲をつく
し興を催すべし（鞠
指雨大成）
鳥帽流、鳥帽子付、
額付、大流し、いづれ
も曲鞠の名稱。
高足一高く蹴上ぐる
鞠。
あり／＼一鞠を蹴る
時の掛壁。

の下に畏まる。其次は小笠原緋の上に白袴色猶深き藍の露、跡に續いて富部五郎躰金檜皮
に織分は、桔梗と人やうツたがはん、紺の袴を着したり。其外お詰の人々も思ひ／＼の装
束し、懸の内に伺候ある。軒の移りや軒向ひ鞠に心も浮き立ちて、露打拂ふ地鞠や序、拍
子ゆたかにどん／＼と蹴上げてうつほすり、破に移り急になり鳥帽子流しや鳥帽子付
け、額付に大流し受けて蹴上ぐる高足の、くるり／＼あり／＼と聲をかけ、一つ二つ
三つ四つ五つ、或ひは三間一二間、もしくは四五間大延の切るれば受け、流して渡し、やを
ら落つるといふ期なし。各々はつと感に堪へ終るを惜める三重ばかりなり。

去程に朝比奈の三郎義秀もとより鞠は無好なれば時刻移して館を出で、馬も靜かに乗りな
がら築土の外面を行く所に、蹴切りし鞠がかゝりを越し朝比奈が馬の鼻に落ちかゝる。馬
は驚き跳上ればさしもの朝比奈仰向にどうど落ち、直垂は泥まぶれ鳥帽子の緒も切れちぎ
れ、さも見苦しき有様なれば、義秀大きに腹を立てむく／＼と起上り、鞠踏み潰し立たる
所へ内より小坊主駈け來り、なふ其鞠は君の遊ばす御鞠なるに、狼藉也と立寄れば、何君
の遊ばす御鞠とや、それは足にて蹴給はん。我は手鞠を突かんとて、彼小坊主を引寄せ二
三間投り上げ、落つれば中におつ取り投上ぐれば、彼小坊主やれ人殺しよとわめく聲御殿
の内に聞ゆにぞ、各々驚き走り出見れば朝比奈、こはいかに呆れて佇むばかり也。中に

も秩父立寄給ひ、いかに義秀狂氣にては有るまじきが何としたる體たらくぞ。近比見苦しきと宣へども聞入れもせず、小坊主を又片足にてどうど踏まへ、鏡の様な兩眼をくわつと見出し睨め廻し、立ちすくんでたじろかず。こは狼藉と思へども、さすが天下の大老義盛の子なれば何と批判も成難く、只まもりつめて居るより外なし。苦々しくも笑止なり。父義盛たまられず、やあそこな狼狽者おのれは氣ばし違ひたるか、誠にめでたき御鞠始とて上下悦び合ふなれば、たとひいか成事有りとも堪忍ならずは後日の沙汰にも成べきに、何ぞ見苦しき田夫野人の振舞、近比尾籠千萬そこ立去らぬかと怒らるれば、朝比奈苦笑ひにて、ホ、様子御存じなければ御尤も、某は此鞠故落馬致し、腰骨を打ちたれば今更僻事共存ぜず、して先武家の遊びに蹴鞠始とはさらに合點參らず、鞠を蹴歌を詠むは公家殿上人の業、武家ならば弓始か馬の乗初若は初狩なんどこぞあらめ。但し強敵向うても鞠にて防ぎ給はんや。先以て此有様我なればこそ堪忍すれ、心短き大名ならば目前の騷動ならん。然るを拙者が誤りとは聞き憎き仰やと、臂を張つて置れば、義盛齒嚙みし、やあそれは私の宿意、たとひ心に染まずともめでたき御遊を蔑するは上を輕しむる緩怠者、おのれ手討にと思へども、御悦びの庭なれば一命は助る也。七生迄の勘當ぞ、やあ侍共あの道具を奪ひ取れ太刀刀挽ぎ取れと、猛つて下知をなし給へば、怖々ながら侍共、御太刀を

潁川に耳を洗ふ―其
山の隈十許由、幾の
天下を顧らんといふ
を聞きて、耳の汚な
りとして、潁川に耳を
洗ひたりといふ。

と立寄れば朝比奈はつたと睨み、いっかに父の仰として侍の太刀刀渡せとはいかに。義盛彌々と立腹有り、おのれ何の侍、父が勘當受けし上天下に對せし慮外者、いづくにありて侍を立てん。早く刀を渡せ、渡さずは押へて取るぞと詰めかけ、宣へば、さすが親子の間とて鬼を欺く朝比奈も、憎々として渡しぬる父子の禮儀ぞ殊勝なる。各々は餘りなりと色々に詫び給へど、義盛かつて受け給はず。それ侍共追拂へと言捨てて入り給へば、力及ばず人々は、笑止ながらも入り給ふは苦々しくこそ見えにけれ。時に朝比奈突立ち上り、無念や親なればこそならぬ所の堪忍すれ。成程勘當蒙りたり、朝比奈が源氏の奉公是迄ぞ、あはれ頼朝公の御代ならばかゝる事はあらじをと、怒れる眼の内よりも涙をはらくと流し、行方知らず成たりける、彼朝比奈が振舞は粗忽とやせん誠とや言はん、其評とりくさまぐながら、先はやさしし殊勝なりとて感ずる人こそ多かりき。

第 二、

潁川に耳を洗ひし賢人の、名のみ残るを今の世に恥ぢぬ私欲の人心、扱も比企判官能員は嫡子富士太郎を密に招き、情我君の御餘命伺ふ程頼少し。若御他界あつても一幡公いまだ幼少なれば、北條一家として千幡公を代に立てんといふは必定、然らば我々が日來の忠

戀せずは第二・三句「人の誠は知られまじ」といふ。一種の諷刺的に俗間に傳はれる歌。

白波の―知るにか
色をも―君ならで誰
にか見せむ梅の花色
をも香をも知る人ぞ
知る（古今）。

わんざくれーま、
よ。

功無になし北條に従はんも無念、さかく千幡公せんぱんこうが有る故なれば、汝密ひそかに本國につれゆき人知れず討て棄てよ。然る上は一幡公せんぱんこうを代に立て、我將軍われしんの御祖父と人に崇敬そんこうせられ、おことも天下の御伯父おほふち諸大名に仰がれんは掌てなごころの内なるぞ。いかに―と有りければ、父に勝れる無法者むはふしや何辨なんべんへもなく打領うちうけづき、日本一の御手立てだて、かれ一人を殺さんは本國迄も候はず、拙者が袂たもとの内にも捻ひねり殺し申さんが、盗出ぬすみだす手だて何共心得がたしといふ。やれ是程の一大事思立とて其思案もなくいふべきか。心安く思ひ必ず人に悟られなと、相圖あひづを極め能員は御所をさしてぞ三重上りける。戀せずは人は情なさけのなからまし、物の哀は是よりぞ、知るも知らぬも人毎ごとに、迷ふは色の道ならめ。爰に千葉太郎胤政ちのばなたろうのぶまさの北の方藻鹽のほのほうものしほの前と申せしは、李夫人貴妃きひも面おもてを恥ぢ志の深き事賢けんとやいはん貞ていとや書かん、筆もしば―ためらへり。一子玉若いまだとて未二歳ふたさい成なりければ、夫婦の寵愛けうあい淺からず、ある時北の方胤政のほのほうのぶまさに打向ひ、思草葉末しそはつまつに結ぶ露の間も忘られもせず切きなれども、お主様ぬしさまの御心いかでか汲みて白波うつの現なやと宣へば、扱ああらたまる仰かな、我われでもいかで粗略そろそに思ふべき。色をも香をも知る人ぞとあれば、いやなふそれにつき申したき事侍らへども、其御返事には何共と様やう有りさうに見えければ、ア、何事は知らねども詞の残るは異なもの、さあはや語られよとあれば、ア、しんき申さねば埒明らちあきかず、わんざくれ申さんが、しかしお腹を立てられず、御了簡れうけんなされ

給はらばとあれば、はていかやうの事成とも談合づくぞいの。はあいや別の事でも侍らはず、此年比自らを戀焦るゝ者侍ふが今はや玉の緒も絶え入るばかりと告げ侍ふ。哀れお許し給はらば、一夜契りて彼者の命を助け得させたる侍ふがと、わりなき體にて宣へば、胤政興さめ暫しいらへもなく、たゞ咳拂ひして居られしが、はあ是は凡慮の外ほかの沙汰、して御身の心に其者と我と思ひくらべてはどうぞとあれば、いやなふ先様はいかやうの人か終に見た事も侍らはねども、たゞあこがれて身も絶えゝと聞傳へ、不便ふびんのあまりにかくは申候也。よしそれとてもおのさまの御許しなきものを是非とは申侍らはずとあれば、それは言はるゝ迄もなし。尤御身先様を見ぬ事も有るべし。しかし名を聞かれぬ事あらじ、是非名ばかりをと尋ね給へば、いやゝそれは明し申されず、畢竟仇名立つ事ならば何しかくは申すべき。たゞ御許しと強ひ給へば胤政は聞給ひ、扱々言ひにくき所を明らさまによく言はれたり。誠に我妻程ありけるよ。よし此上は世に聞え人非にんひの沙汰にもならばなれ、ともかくも其方そのあほうの心に任せ給へとあれば、扱も嬉しや去ながら、逆もの事に御誓言ごせいごんにて聞きましたら候。何がさて弓矢神も照覽あれ。ふつつと妬み申さじとある。こは有難し此上は、先様より参りたる文を読み聞け申さんと、袖の内より取出し押開いてぞ讀まれける。戀こひすてふ我身の遣る方かたなきまゝに、御妬みをも推し量らず、恥かしながら染め参らせ

泣沈む一無きにか
く。

いとせめて一糸にが
く。

御つもり一心に思ふ
所。

詞。すもじ一推量の女
御かもじ一おかみさ
ま。

候。さいつ比大山詣での折柄に、御方様の御殿御ちらと見染め参らせて、束の間も忘れず深き思ひの数々文して申侍らへども、遂に返しも泣沈む戀の淵瀬の涙川。堰くにとまらぬ心から、いつぞや鞠の御會の折、御馬に縋り女の身の有るにあらぬ思ひのたけ、明し参らせ候へども、御方様へ深き思はく有るなれば思ひ切れとの事なれども、切るに切られぬいとせめて戀しさも猶増鏡、曇りを晴らすお情とはなか／＼に及びなし。只お盃ばかりこそそもじさまのお情に数々頼み参らせ候。御つもりをも憚らず筆に餘れる涙をば御すもじ／＼、さかく情は方様へ任せ参らせ候かしく。胤政さまの御かもじさまへ、數ならぬ身と讀み給へば、胤政横手を丁ど打ち、こは大き成はまり扱も／＼面目なや。いかにも度々文もこし又鞠の御會の日路次にて逢うたも定なれども、御身の嬉しからぬ事を言聞けいらざる事、我だに心亂れずはと隠せし事も顯はれて、いやはや詞も候はず。其段は許されとかく捨て置き給へとあれば、いや是なふ初めより御誓言をと申せしは爰にてこそ侍へ。さなきだに執心深き女の身の思ひを空しう過しなば、いとほし可愛と思ひ子の行末とても覺束なし。先は妾を大切に思召さるゝ御心底、此文にて見えたれば、たゞ外様と覺えずとも、妾に一夜のお情と思し叶へ給はれと、餘義なき體にて申さるゝ。胤政しばし感に堪へ、さりとは昔よりかゝる例は聞傳へず。エ、我妻ながら恥かしき心根かな。然らば御身の

わくらは一たまさかの意、わくらはに問ふ人あらは須磨の浦藻鹽たれつ、陀と答へん。(行平)
あるじまうけ一應應接待の意。
仲人は宵の程一語。

夕の露一言ふにか

詞に従ひたんだ一夜は靡かうが、必ず後にせかるゝなや。ア、ひよんな事後にせく氣の候はど、何しにかくは申すべき。思へばく嬉しやな、我目にばかりよい殿と見えしかと思ひしに、人もさこそ見るかと思へば其上藤の大切さ。片時も早く告げ知らせ悦ばせ申さんと、文こまぐと書き認め、急いで送らせ三重たまさかに松の落葉の落ちてだに、離れぬ中^{なか}立にて、人の思ひや晴るゝ夜の月に嘯^{うそ}き、胤政は肘突^{ひじうち}かしておはする所へ、障子押明け藻鹽の前かの人伴ひ、申しく客人の御出とあれば、胤政今更氣の毒さうに、只ようこそこばかり也。北の方わつさりと一つ二つ挨拶し、御心置かれずともゆるくとお語りあれ。わくらはのお客なればあるじまうけの用意せん。中人は宵の程と言棄てゝ立ち給ふが、いや是大事の殿御なれども今宵は貸し参らす。情の枝は折らるゝとも、根引には成ませぬと戯^{たは}れながら入り給ふ。扱^あ彼上藤少震へる聲音にて、誠に恥をも恥とせず心をつくすを察せられ、奥様のお情にて是まで参り侍ふに、否應の事もましまさぬは餘りつれなきお心と、さんともたれかゝらるれば、胤政むづくせん方なげに、尤奥が差配^{さはい}ながらいかにしても氣味悪^{きみわる}し。許してたべと立ち給ふを引止め、こはいかに今宵は奥様より借参らせ侍へばあなたへ返し申す迄は妾^{わらは}がまゝこは申しながら、御心に染みませずはさぞうるさく思されん。よしや憂^{うれ}き身はあだし野といはゞ夕の露の世に、消ゆるを哀れと思さずやと、汗^{あせ}

ふづまりーきまりの
わるきこと。
やりくりーきづか
ひ、かけひき。
うたかたのー歌にか
く。
あはれー泡にかく。
白波のー知にかく。
そこはんーそこはの
音便。底にかけたり。

かはたれ時ー黎明の
また薄暗き時をい
ふ。

を浸して縋らるゝ。いやとよ我身も岩木ならねば御志いかばかり忝く候へども、妻の手前
ふづまりなれば今宵はひたすらお許しと、宣ふ所へ北の方銚子土器携へ出で、なふ輕忽是
はどしたる御仕方ぞ。自らがさばきの上何の遺練ましますん。先々酒一つ妾試み致さん
と、たぶく受け流し胤政へさし給ひ、それあなたへと挨拶し、聲張上げてうたかたの、
あはれ情を白波の、沖の石とは何をかいふ。戀をする身のそこはん扱袖を見よ。れろく
れれんぼれくつろちゝんでれちてんつんと通らぬは神ぞ氣の毒夢の世にたゞと、歌ひ戯れ
しみくゝと北の方宣ふは、率爾ながら御身様はいか成方にてましますぞ。包まず明し給へと
あれば、恥かしや古を語るもつらき自らは、頼朝卿に召仕へし唐糸が娘萬壽と申す女な
るが、君亡くならせ給ひてより、寡住こそましなれと思ひ定めて侍ひしに、いか成縁に
や此殿を垣間見しより遺瀨なく、むすぼゝれたる糸筋を、分けてや深きお情にて、今宵御
見の嬉しさをいつの世にかは忘れんと、語り給へば北の方、何萬壽の姫にてましますとや。
さればこそはじめよりたゞ人とはおもほえず。今よりしては自らを御身の姉と思召せ。妾
もそさまを妹のいざ契約にと盃を取りかはし、夜も更けゆくやかはたれ時、少まどろみお
はしませ、言ふはくだかは知らねども、どちらもお心置かれずとしつぽとやとて入り給ふ藻
鹽の前の御貞節、類もあらぬ賢女やと聞く人感ずる三重ばかり也。是は扱置朝比奈の三郎

義秀は、とかく浮世は喧しと伊豆の高根に引籠り、髻切て様をかへ我と其名を改め、義秀を其まゝに義秀法師とつき行ひすまし居たりけり。抑此高根と申すは前には海水淨々として月真如の光をかゝげ、後には靈松巍々として風常樂の夢を破る。松にだに馴るれば慕ふ思ひあり。奥より奥の山陰に柴の庵を引結び、石を金輪に土釜一つ、小さき桶に竹柄杓昔に變る住居也。壁には達磨の繪像をかけ、桶を叩いて木魚とし唐音にて經を讀み、つく／＼と御影を守り、我も達磨を師匠とし座禪して見ばやと思ひ、衾と名づけ蓆を被り、繪像を見合眼をくばつゝ見出し半時あまり坐しけるが、エ、悟つたり眼に風の泌み渡るは一睡せよとの悟道ぞと、肱を曲げつゝ枕とし暫くまどろみ居たりけり。扱も比企の富士太郎は千幡公を輿に乗せ、甲斐々々しき若黨四人に昇かせ此山陰に輿を据ゑ、若君を引出し御装束を剥ぎ取れば、若君興さめこはいかに何たる事ぞと宣へば、富士太郎聞きもあへず、オ、合點ゆかぬはことわり也。北條の四郎時政謀叛を起し、頼家公を失ひ我一家をも滅し御身を代に立てんとの謀、然れば其方一人故多くの者の討たるゝ事歎かしく思ひ、只今爰にて害するぞといへば、若君途方にくれながら、やあ人非人め、たとひいか成事有りとして、主たる者の弟を殺し天道にかなはんや。エ、口惜しやたばかられ無念の死をする物かな。あたりに人はなきか、折台はぬかと宣ふ聲、義秀寢耳にほつと入り、むく／＼と起き見奉れ

かんづかー髻（モト
下リ）。

ば主君千幡公、南無三寶と駆け出で飛懸つて富士太郎を俯伏に蹴倒し、藤繩にて縛むる。郎等ども遁さじと弓手馬手に組付くを、取つては引寄せ引伏せ押伏せ一つ繩に搦みつけ、扱若君のお前に参り事の由を承り、扱も危うき御命、不思議なるは某勘當の身ならずは、いかでか爰に有合ふべき。御壽命めでたき若君やと、扱富士太郎が髪束取つて引仰向け、人の皮着る四つ足め、忝くも三代相傳の御主をよくも失はんとはしけるよな。おのれずだくゝに刻みても飽き足らぬ奴なれども、思案あれば先只今は殺さぬぞと、残る四人の若黨共には大石を括り付け、中に提げ前成海へどうくゝと投込みて、扱もよき音候と戯れながら若君を先に立て参らせて、富士太郎を引立て庵をさしてぞ歸りける。朝比奈が勇力には獅子象虎も逃げぬべし。心地よし共中々申すばかりはなかりけり。

第 三

比企の判官能員は嫡子富士太郎翌日暮れに及べども歸りもせず便もなければ、心もとなきあまりにや、郎等早瀬の新左衛門景次一人引具し密にかしこへ立越えて、爰かしこと尋ねれど深山嵐や磯打つ波の音凄きばかり也。彌々不審晴れやらす猶山深く尋ねれば、千幡公の烏帽子狩衣御重代の御佩刀松の下枝にかけて有り。扱はしおほせしにまがひなし。去な

ぐれんをかへす—俗語なり、紅蓮は地獄の名にて、物を尋ね求むる事にいへり。
(和訓栞)

がら富士太郎が行方の知れぬは、エ、思ひ付たり、爰は名に負ふ魔所なれば狗賓ぐひんの所爲しよゐにてありもせん。よしそれとても力なし、先まづよき手立てだての種たねこそあれ、それ／＼とて景次に御太刀装束取持たせ、鎌倉さしてぞ三重歸りける。是は扨置朝比奈の義秀坊ぎしうぼうつく／＼と案ずるに、尤もつと若君の御命は救ひたれども我一人さへ狭せまき庵いはり、もし又追手おひてのかゝらん時隠し奉らん所もなし。いかゞはせんと思ひしが、オ、究竟くつじやうの事を思ひ出せし。爰に駿河國木枯の森に頼朝卿の思ひ人萬壽こそ居れ。男勝まさりの者なればかれが方へと案じ付、扨若君の御供申密ひそかにかしこへ立越えて、萬壽の前に對面し、初終しじうをつぶさに語り偏に頼むと有りければ、こは情なき浮世の中やと暫く涙にくれながら、先はいたうも御成人ごせいじんなされしものかな。誠に朝比奈殿のましますさずば危うかりける御命御武運めでたし我とても御恩の君の御子なれば、何しに疎おろかに存すべき御心安く思召せ。妾こそ女なれ心は男に劣るまじ。先々爰は端近はしし、此方へ御入ましますと奥をさして請しやうすれば、朝比奈大悅限りなくお暇申し歸らるゝ、兩人の忠義の程頼もしかりける三重次第也。去程に鎌倉には千幡公見えさせ給はねば紅蓮ぐれんをかへす騒動にて、大名小名御殿に詰め詮義評定取々也。頼家仰せ出さるゝは、誠にいか成天災ぞや。某それがし病惱重しやなうければ餘命更に頼みなし。一幡いまだいとけなければ千幡に天下を譲り、近き内方々へも披露せんと思ひしに、こはそもいか成事なるやらん。御母公ぼこう聞召され

なば我を恨み給はんに、何と答へんよしなやと、忝くも御涙に咽び歎かせ給ふにぞ、御前伺候の各々座席に涙を浸さるゝ。時に北條宣ふは、誠に不慮の御歎き推し量り奉り、何も途方にくれて候。とかく先國々へ申遣はし、御有所注進の輩には數多の御褒美下されんと急ぎ觸れさせ候はんとあれば、比企の判官押取つて、成程此義然るべう候。急に仰付けらるべし。して先御乳人子の大和の前司は此御座敷に見え申さず、出で會はぬは心得がたし。いかさま子細候はん。呼びに遣はし詮義を遂げんとやがて使を立てらるゝ。無慚やな友行かねて覺悟やしたりけん、白衣に淺黄の上下着、しほくとして御前に出で、涙を流しおしうつぶきとかうも言はず居たりけり。能員居直り、如何に友行、何と千幡公の見えさせ給はぬを其方は知られぬか。誠に是程鎌倉中上を下へこかへす所に、御邊はどなたの御乳人子にて出仕をも致されず、只今お尋ねに付き上らるゝは何共合點ゆかず。定めて千幡公の御在所知らるゝ故に騒がれぬな、君御心もとなく思召せば包ます申上げられよと云ふ。されども友行とかうの返事もせざりければ、頼家御氣色變らせ給ひ、必定彼奴が知つたれども思慮あつて隠すと見えし、有のまゝに申さぬかとあれば、友行少頭を擡げ、恐れながら御説とも覺えず、何故に若君を隠し置き奉らん。とは申しながら御道理、晝夜御近習離れぬ身が今更存じ奉らぬぞ申すも未練、とかく覺悟仕候へば、哀れ御慈悲に切腹仰付

けられなば有難く存奉らんと、餘義なき體にて居たりけり。判官聞きもあへず、いや／＼友行さやうのまだるき詮議ではなし。聞けば御邊は逆心の者に與し、一幡公は勿論君をも失ひ奉り、千幡公を御代に立てんとの謀と聞て有り。去とは勿體なし、天罰いかで遁れんや。眞直に申されよと席を打つて罵れば、友行興さめ顔にて、やははさて、いやはや笑止千萬、諸人の輕薄につのり方圖もなき過言、して其謀叛の徒黨とは證據あつて宜ふか。オ、サ其證據こそ慥なれ。必定汝が館に千幡公御座有るべし。誠争はゞ只今家搜して出さんがそれにても陳ぜんか。友行居丈高になり、なふ時の權も事による。數ならずとも侍たる者の屋敷を搜し、若若君の御座なき時はいかに。判官えせ笑ひ、やれ其時は此能員が生鼻を削れ、汝が面へ投げつけんぞ。オ、其口忘るゝな、然らばとつく搜させて見よ、今に思ひ知らせんぞと齒嚙みをなして居たりけり。判官つと立ち郎等の早瀬を近付け、汝は侍共をつれゆき前司が屋敷を搜し、千幡公ましまさん急ぎ御供申して歸れ。若家來共異議に及ばゞ討つて捨てよ。必ずうかと心得な、大事の使ぞ、やれうかと心得なと詞を返し云付る。早瀬相圖の事なれば、畏つて候とやがて御殿を出でにけり。半時ばかり程を経て早瀬御所に立ち返り、いか程搜し候ても千幡公は渡らせ給はず。去ながら不審成物に尋ね當り持參仕候と御前にさし上る。能員請取封を切り、見れば千幡公の烏帽子狩衣御重代の御佩

刀、是々御覽候へ、疑ひもなく御行衛は彼奴が知つて候ぞ。先はよくも正々敷争うて有りけるよな。おのれ眞直に申さぬかと手ぐすねして詰めかくれば、友行とかうの詞なく呆れ果てゝ居たりしが、さりとては不思議也、夢にも覺えぬ事なれども、とかく申せば命を惜むに似たり。此上はいかやうにも御行ひ候べし。とは云ひながら口惜きは身にも覺えぬ科を得て非法の死をする物かな。天道あらば程を経ず今に佞人顯はれん。其時こそ某が無實を得しと知り給はん。是に付けても君々たらばかゝる死はせまじきに、思へば／＼無念やと恨みの涙を流しけり。君御立腹まし／＼彌々言分心得ず、いかに能員急ぎ由井が濱へ引出し拷問して尋ねられよ。陳ぜば直に責め殺せと御座を立たせ給ひければ、畏つて候と友行を搦めさせ、由井の汀へ引出すはせん方なうこそ三重見えにけれ。程なく濱に着きければ方十間に矢來を結はせ、はや拷問と見えし所に、友行の妻子徒跣足にて駈け來り、なふそはいか成科有てかゝる體には成給ふぞと、矢來の内へ入らんとするを、こは狼藉と誓固の者さん／＼に打ち出す。打たるゝ杖を厭はゞこそ、やれ情なや科あらばこそ拷問せめ、何の科もなき人にかく淺ましく繩をかけ、責め苛まんとはいかにぞや。ア、我夫ながらふがひなし。御身に覺えなき事ならばなどか言分立つまじき。よし其上にも譯立たずは、速やかに御前にて腹搔き切ては死に給はぬ。あら恨めしの我夫やと恨み沈みて泣き給ふ。友行

至極の涙ながら、オ、道理なり去ながら、かつて覚えぬ事なればよもかほど迄あらじをこ、後れて不覺の恥辱を取る。とは思へども侍の無實を受けて死する事、有るまじき道にもなし。只おことらは命長らへ、かゝる憂目にあはせぬる讒者がなれる果を見よ。骸こそ朽つるとも魄は娑婆に残り居て、追付本望遂げ今の怨みを晴らせんと、甲斐々々しくは言ひながらも恩愛の悲しさは、止めてもあまる涙にはよその袂も濡れぬべし。能員からくと笑ひ、いやはやかたはら痛し、やあ友行いらざる空威言言はんよりはや疾く明せ。責められて白狀せば恥辱の上の恥辱ぞと云ふ。オ、其白狀は汝が心にあらん。哀れ命を二つほし。濁れる世にあらんよりなまじ一つは責殺され、今一つは長らへおのれが行方を見たと云へば、やあそれ物な言はせそ、彼奴が耳を削げ。畏つて兩耳削ぐ。姫や内方肝潰れ、なふ悲しこはいかに、殺さばたゞは殺さいで扱も酷き仕業やと、矢來を揺り駈け廻り伏轉びてぞ歎かる。判官重ねて今度は左の腕を切れ。畏て立寄る時親子の人々聲を上げ、なふ暫く待ちてたべ。それへ参り我々が有のまゝに申さんとあれば、警固の者共聞きもあへず、然らば疾くに申さでと、枝折を開けば駈け入て友行に抱きつき、こは情なき御有様やと平伏し沈み泣かれけり。警固の者共引退け、さあ先白狀せよといふ。いやなふ餘り遣る方なさに申さんとは云ひけれど、もとより知らぬ罪科を何と申さんやうもなし。たゞ我々

が命を召され、夫を助けて下されよと手を合せてぞ歎かるゝ。能員親子をはつたと睨み、己奴等は女の身として、某を颺るか。所詮言ふまでぞ、やあゝ急ぎ腕を落せ。畏つて友行が左の腕を打落す。判官立寄り何と是でも落ちざるか。いやはや情剛し去ながら、是程苛みても言はねば知らぬ事も有べし。何と其體にても命を助けば助からんと思ふか。友行聞て、オ、生甲斐はなけれども、思ふ子細あれば助かりたしと答ふ。ゝ、聞得た、それ右の腕も打落せ。畏つて打落す。さあ此上は助くるぞ、いづくへ成共行けといふ。友行つつ立ちあがり、やあ畜生め我命を助かりたきと云ふを未練也と思ふか。たとひ如何體にて成共命だに長らへば、無實を申開きまつ此如くおのれめを行はん爲にこそ。是にていかで命あらん。おのれよつく覺えよ、今に一念の惡鬼と成、子々孫々迄纏み挫ぎ此仇を報ぜんこ、つつ立ち上ると見えけるが舌くひ切て死してげり。親子の人々判官にしがみ付き、なふ我々も諸共に殺してたべやと聲をあげ、流涕こがれて歎きしは目も當てられぬ風情なり。判官振放ち、エ、おのれらも命取るべけれども、女なれば助け其上死骸を得さするぞと、言捨てゝ歸りしを、憎まぬ者こそ無かりけれ。いたはしや親子の人、あへなき骸を引起し、ア、神ならぬ身の悲しさは、夢にも斯くと知るならば何とぞ思案も有るべきに、思へばく本意なやな。ア、あさましくも苛まれ、かゝる無慚の死の縁は、よっく佛神三寶に憎み果て

氣ほうじー氣保じな
るべし、保養、氣は
らしの義。

られ給ふらめと、死骸に取付き縋り付消入く給ひけり。かゝる哀の折ふし友行の下人共追々に駈け來り、扱も是非なき事共哉。先々人目も候へばと、死骸を輿に昇き入て、泣く館に歸りける。定まる事と云ひながら是や非業の死と云はん。哀成ける次第なるはと聞く人涙に咽びけり。

第 四

御いたはしや千幡公、萬壽の前が情にて木枯の森陰に、隠れ忍びておはします御有様こそあはれなれ。ある徒然に萬壽の前、銚子土器取持たせ若君のお前に參り、誠にいぶせき庵の内、ことさら人目忍ばせ給へばさぞお氣詰りもやと推し量り、恐れながら心ならず侍へば、ちとお氣ほうじに酒を上げ參らせんとあれば、千幡公聞召し、誠に他事なき御身の情、いつの世にかは忘るべき。去ながら某は人の猜みに身も狭ければ、たゞ世を遁れさまを變へ、父上の御菩提を弔ひ參らせたる思ふ也。しかれば酒は飲酒戒佛の深き戒めなり。許し給へと宣へば、萬壽涙に咽びながら、扱いまくし何とてさやうに御心短く宜ふぞ。日月誠を照らせ給へば忽ち讒者顯はれて、追付鎌倉へお歸り有り、めでたく渡らせ給はんとさまく諫め奉る折節、表を靜かに音づるゝ。乳人誰そと戸を開き、なふ胤政さまにて

うさねらーうさねら
は。

天が下ー以下香の名
盡しなり。

ましますか。よくも御出でなされしと鳴子を引けば萬壽の前、はつと驚き若君を奥の一間に隠さるゝ。胤政内に入り給ひ、先々久しう打絶えて便りをも聞ざる故、餘り懷しさのまゝ公用を忍び参りたり。藻鹽も文をことつてし。是々とて出さるれば、よくぞく自らも此程の御ゆかしさ、申さぬとても御すもじと、口には云ひて心には若君の御事をいかゞせまじと思ふ所に、胤政申さるゝは、なふ此比はさもなかりしが、今日の路次の寒さいやはやと聞きも果てず、誠にさもこそや、幸ひ風呂の候へば御入りませ、さぞやさぞ路次の御難義察し参らせ侍ふ也。いざ先入らせ給へゝあれば、それこそ望む所なれ、いざさら寒氣を晴らさんと座敷を立て入給ふ。萬壽ひそかに乳人を近付け、若君さまの御事を語りてもしも悪しからんかと、わざと包み参らすれば必ず色を悟られな。追付あがらせ給はんにそれくと有りければ、乳人心得御手箱香爐に火をいけ参らすれば、御髪清めにどの香かあれかこれかと取上げ給へば乳人申すやう、さぞ此香にはとりく名こそ侍はめ、語り聞かせ給へと云へば、オ、其數は多けれども、まづ名香は天が下初音手枕新枕時雨松風、短夜の有明道芝東路の、逢坂藤川法性寺夕霧龍田空蟬の衣手にしつく白菊蘭奢待、らんすあまはり鹽竈の蟹の炷さし柴人の、歸る山路は深草や、苧環小車玉椿、名月仙人山人の、面影寫し繪三吉野の早苗白菅東雲や、古木胡蝶に法々華經中川八橋杜若、似たりや菖蒲

通り者一粹人。

奥一麗くにかく。
しやらしやれた挨拶との意。

いはれぬ一結はれぬ
にかく。
すがり一香の餘燼を
いふ。

紅葉の賀、富士の煙に濡標、語るに盡きじ名香の、品は概略是なりと、詞も終らざるに浴衣ながらに捌髪、しどもなげにて胤政縁に出でさせましませば、はや御上りかなぜにゆるりとなされでと、後へ廻り髪押分け櫛たよくと梳きながし、恥かしやいつぞやは囁うるさくましまさんを通り者の奥様のお蔭にて、晴るゝ思ひと云ひながら、思へばそな様の胴慾ぢやいのと恨まるれば、いかにもそれはさうなれども、侍の道ならぬ事と一立立てしを破られて、今は中々戀草の葉末の露の奥よりは、御身こそと聞きもあへず、オ、しやらせて十に一つならばいの。しかしさうしたお心なるにや遙々問はせ給りたり。奥様のお文にも二三日もゆるくと留め参らせよと侍へば、昔の思ひ引替へて今は嬉しさ身に餘り、云ふもいはれぬ亂れ髪、今宵初音の伽羅かや君は、幾夜留めても留め飽かじつと香爐を取上げて、暫しすがりもたゞならねば胤政聞給ひ、扱々名香やして此木の名はいかに。されば山人と申すげに候。いやなふよい木や、いで某もつがんとて懷中有りしを取り出し、火合うかどひ炷き給へば、なふ此木は有明にては侍らはぬか、君御私愛の木なりしが何とて持たせ給ふぞや。オ、よくも聞き給ふ物かな。我十三の年頼朝卿子細有つて下されし御形見なれどもと、聞くにつけて萬壽の前涙ながら思ふやう、此障子のあなたにこそ若君のましませば、父上の御形見とて参らせたくは思へども、胤政を憚ればとやせんかくやと思ふ折

づなう一方國もなく
非常に。

節、又表の戸を音づるゝ。誰そと云へばいや苦しからず、朝比奈と答ふにぞはつと驚き胤政一間の障子を明けらるれば、若君是はと動顛し側成衣を被かるゝ。胤政是に又驚き前後しどろに二度びくり、されども是も衣引被き、押俯向いてぞゐられける。朝比奈かくとは露知らず靜に入て萬壽に向ひ、ホウづなう寒じ申すが何事もなく候か。して若君はと尋ねれば、萬壽とかくに度を失ひ赤面ながら、されば山人と申す木、いや風呂が立つて候と、しどもなく言捨てゝ是も一間に逃げ給ふ。朝比奈不審晴れず跡につゞき行き見れば、何かは知らず秋の田の案山子の如く衣引被きつくづくと坐してあり。入道呆れ果て暫し詠めて立たりしが、エ、お淋しさのまゝ此入道めに手を取らせん爲成か、但お寒さのまゝか。朝比奈こそ参りて候。御目見えをと云ひけれどもとかくの事あらざれば、やら心得ね、いづれ若君は御一人の筈なるに二方は合點ゆかず、率爾ながらと一度に衣を引捲れば思ひもよらぬ胤政、こはそも如何にとばかりにて興さめ果てゝ居られけり。暫らくあつて朝比奈、是は先何ミ思案しても合點ゆかず。いかさま様子有るべし。是胤政つゝまず明されよといへば、胤政今は力なく、恥かしながら恥を言はねば分立たず。何をかつゝみ申さんと始め終りを残らず話し、此わけ故に見舞へども、若君渡らせ給ふとは萬壽さらゝ知らせざるが、して又御身はいかにと有り。朝比奈くつゝと笑ひ、いやはや浮世は異なるものかな。

御身はぬれ故思ひもよらぬ若君へ遇ひ奉り、我は親の勘當故思ひもよらぬ若君の御命を救ひ奉り、萬壽を頼み申せし故思ひもよらぬ御身に遇ふ。扱若君は讒者故思しよらざる御難義に遇はせ給ふ御事よと、是も始終を委しく語り、此上は其方も仲間へ入れねばならぬと云ふ。オ、サ申さるゝ迄もなし。先以若君の恙なく渡らせ給ふは、是偏へに御身の働き、ミかう言ふもおろか也。扱鎌倉には此君見えさせ給はぬ故、御乳人子の友行は遂に比企めに責殺されてあり。かれこれもつて比企めが業、いざ鎌倉へ参られよ。某も一命にかけ諸共訴訟申上げ、判官一家を滅ぼし若君の御憤り休め上げ奉らん。はや疾くゝとありければ萬壽の前も朝比奈も、扱頼もしし且は又かやうに不慮に出會ふ事、若君御運を開かせ給はん天運循環時得たり。此上は何をか憚り申すべき、幸ひ胤政こそ馬を引かせ候へば、若君を乗せ奉りいづれも御供申さんが、して又御坊の持参の箱は具足櫃と見えし、某が下人に持たせられよと云へば、オ、俗の時の具足櫃、只今は若君と某が守り本尊封じ込め候へば、片時も身を放つ事なり申さず。とかく是に構はずとも、はや御用意ましまして、各々、うち連れ 三重

まんじゆのまへ道行

白菅―不知にかく。
もりて―守と漏とかく。
松原の―待つにかく。
三保―見にかく。

興津―盛にかく。
白雲―不知にかく。

富士の根に降りおく
雪―富士の嶺にふり
おく雪は六月の望に
けぬれば其夜ふりけ
り(萬葉三)

夕潮をもつや田子の
浦―諸曲融に、―い
ざや汐を汲まんとて
持つや田子の浦、東
からトの汐衣―とあ
り。夕潮は言ふにか
く。

黄瀬川―著にかく。
みとしろ小田―神の
御稻を作る料の田、
神田。
神もしるしの箱根山
―蟹の箱にかく。

木枯の森の下庵露深く夜深く出し月の顔、誰とかいさや白菅の、笠深々と萬壽の前若君御馬に乗せ参らせ、義秀胤政御供し、憂さも辛さも止むべき人も名に負ふ清見が關、もりて榮えを松原の濱風潮風烈しくて、眞砂立つなる海の面、舟漕ぎ出て三保が崎蟹の苫屋に休らひて、浦人へのみ譚磯馴れ松の立つるや夕煙、柴こいふ物折りくべて、民の竈の賑ひは、治まりし世や久かたの天つ乙女の天降り霓裳羽衣の舞の袖、今日の前に荒磯の打寄る波はさんざらくく、どうど打つてはさつと引く、網を興津の里を過ぎ、あなたは淺間薩陸山、由井蒲原をあとになし、若君かなたを御覽じて、あの天空に山かともいさ白雲か白く見ゆるはいかにぞや。太夫萬壽御馬の口を取り、あれこそは常に御所より御目馴れし富士の高根、二人世々の歌人さまに詠め置きてし富士の根に、降り置く雪は水無月の望に消えてはその夜降りつゝ年経ても、雪の無き間はあらざれば、花か雲かはウタ雪かとのみぞ見えの、山とも夕潮を持つや田子の浦東掲げの蟹衣、疲れこそせめ愛鷹山、夜寒の風凌がんと、旅寢の衣黄瀬川や、向ふは三島大明神、暫らく各々神拜の酒瓮据ゑ祭る乙女子が袖振る山の瑞籬の、久しき世より御戸代小田、今ぞ色づくいや色付て搗きて、三杵の御饗する、神もしるしの箱根山、げに眺め有る景氣とて、暫し止むる足柄や、歩みくゝて山の端にかゝる短き冬の日の、暮れてもよしや星月夜、鎌倉山に着給ふ此人々の心の内、忠有

り義あり誠あり、天道いかで守らざらめと世の人感するばかりなり。

第 五

まうす一禪家にて帽子をいふ、吳音なり。

鎌倉には國々の諸大名晝夜殿中に相詰め、千幡公の御行衛さまぐ評定まします所へ、若君の御在所注進の者として沙門の姿成者参上仕候が、帽子にて顔を隠し、いかさま不審がましき體に候と訴ふる。各々大きに勇ませ給ひ、やれ何者にもせよ急ぎ此方へ召せ。畏つて罷出で、かうく御通りとあれば、承り候と少も臆する氣色なくやがて御前に出でにけり。重忠御覽じ、先以て若君の御在所注進仕る段君御機嫌甚だしし。併しながら御前なるに帽子を取て申上げられよと宣へば、仰御尤に候、去ながら某は一天下日陰者にて候へば、御前へ罷出る者にては御座なく候へども、口惜しやたゞも死なれぬ命とて飢ゑに及ぶ悲しさに、せめてかやうの事にて成とも命をつなぎたく存じ、彼方此方と尋ね奉り是迄御供仕候と、背に負ひし具足櫃あら重たやとどうどおろす。重忠聞きも敢へ給はすするく立寄て、エ、推したり御身は朝比奈の三郎義秀ならずや。先久々にておどけ詞を聞きし也。たとひ重々の科ありとて此度の忠節に思召替へらるべきか。急ぎ開いて朝顔の花珍らしく御目見え致されよ。率爾ながらと帽子を取る。さればこそく、先々君のおせき成に若君

せき急ぎ。

の御在所を早く申上げられよ。いかに〜と有りければ義秀謹て、誠に信あれば徳有りとや。いざさらばとて具足櫃の蓋を取ればとはいかに、思ひもよらぬ富士太郎高小手を搦められ、あら窮屈やと伸び上れば、各興さめなふ朝比奈、是は比企の富士太郎成を千幡公とは心得ず。いかさま子細有るべし。有の儘に申されよとある。朝比奈聞きもあへず、何是が若君と見え申さぬか。やら不思議や、當世は鷲を烏に詐りて成とも謬ふ者が出頭し、御褒美厚く下さるゝと聞きしが、さやうにては無く候かと云へば、義盛はつたと睨み、おのれ父が勘當を受け許しもなきに御前へ出で、剩へ御老中へ對し方圖もなき過言、弓矢八幡大菩薩御前とは言はせじと、太刀に手をかけ給へば北條押止め、暫らく〜待ち給へ。退いて考ふるに是義秀が過言とは思はれず。いかさま富士太郎を搦め出しは子細有るべし。いや義秀、包まず心底の通り眞直に申されよと宣へば、朝比奈しほ〜として押俯向き、誠に父の御立腹重々至極仕る。去ながら勿體なくも餘り濁れる浮世の中、若清める時こそと伊豆の山陰に引籠り、誰を頼まん方なければ、木實萱根を食ひつれなき命をつなぐ所に、天命盡きて此富士太郎、若黨四人に興昇かせ、某が庵の前にて千幡公の御命、既に害し奉らんとせしを、不思議に某出合せ御命を救ひ奉り、則ち千葉の太郎胤政に預け置奉りて候。注進の輩には御褒美望次第と候へども、金銀所領の望なし。とかく御前の御勘氣と父の

不興ふけいを許されば有難く候はんと、鏡のやう成眼なるまなこより涙をはら／＼と流さるゝは、殊勝にも
又あはれ也。何もほとんど感に堪へ、搦神妙成申條、此上は恐ながら御前の義は勿論義盛
殿も御勘當許し給へと詫び給へば、はて何がさて各おの／＼の仰をいかで背くべき。先々早く若
君を御供申せと宣へば、朝比奈大きに悦びのやがて使を立てければ、千葉若君の御供し急
ぎお前に出でらるれば、君を始め奉り上中下に至る迄、嬉し涙と悦びの御賑ひは限りなし。
頼家御機嫌きげんの餘りに則ち千幡公へ御代を譲らせ給ひ、御實名じつみやうを源の實朝卿と改められ、其
後仰出さるゝは、某が不覺故倭人の讒言にて、科しななき者を痛め苦しめ、今更後悔先に立た
ず。急ぎ惡逆の能員めを押寄せて誅すべし。軍神の血祭に先づ富士太郎めを八裂やっせつにせよと
宣へば、朝比奈謹て上意至極仕候、去ながら彼奴やつ奴を爰にて殺すは費つひえにて御座候。押寄する
軍勢の眞先まきさきに引かせ、父惡人め眼前に引出し、づだ／＼に刻くちみ候はんと申せば、此義尤然
るべしと、則朝比奈に五千餘騎を給はり千葉の太郎加勢とし、都合其勢七千餘騎馬物の具
とひしめいて比企が館たてへと三重押懸ける。去程に比企の判官能員も早先立はやさきだつてかくと聞き、
木戸逆茂木さかふぎをひしと固め、寄する敵かたきを待ち居たり。時も移さず寄手の軍勢追手搦手一同に閑
どつとぞ上げにける。其鳴なりも靜まれば富士太郎を引出させ、朝比奈鞍馬くらかまにつつ立ち上り、
いかに能員巧みし智略天運盡き、只今忤せがれ富士太郎が最期なるぞ。よく／＼見よと呼ばゝれ

金剛力士十仁王。
「甲斐一飯にかく。」

は判官下知して、やあ味方の者共富士太郎を人手にかけな。射取れや射取れと身を揉めば、承つて精兵共矢種を惜まず差詰め引詰めさんぐに射懸くれば、雑兵の悲しさは恐れてたじろく其隙に、富士太郎繩取を中に引すり駆け出でたり。是はぐと騒ぐうち、富士太郎内に入り門をひつしと固めけり。朝比奈大きに怒り一期の浮沈仕出せしと、馬より飛下り大手を廣げ門の扉に手をかけて、えいやぐと押しければ、破られじと軍勢共立ちかゝり防げども何かはもつてたまるべき。金剛力士の朝比奈えいやつと押伏せた。無慙やな軍勢共只鯨魚の言甲斐なく、いやが上にぞ死してげり。是にも怯まず城中より我もぐと切つて出で、命限りの死軍、火花を散らして三重戦ひけり。されども城中負色に見えければ、富士太郎物の具し一丈餘りの鐵の棒輕々と引さげ出で、今こそ富士太郎が誠の最期ぞ。我と思ふ者あらば討取つて高名せよと、群がる中へ割つて入りはらりと三重薙ぎ倒す。すさまじかりける次第也。時に寄手の陣よりも若武者二騎乗り出し、鎧押取延べ突かんとせしを、太郎鐵棒振上げて無二無三に打ちければ、微塵に成て失せにけり。其内に寄手の大勢一度にはつと飛懸り、棒に取付き手足に縋り引伏せんとする所を、或は四五間二三間取つては投げぐ、又は捻ぢ首踏殺し、其數知らず投げ倒し棒押取つて立ちけるは、偏に二王の如く也。朝比奈たまらず駆け出で、やああのれめを人手にかくる者にてなし。い

のるゝをり反る。

で義秀が手にかけて往生を遂げさせんと、飛懸りむづと取り目より高く指上げ、大地へどうど打付けた。うんと云てのりけるが又起上り搦みつく。や爰な倅めと膝の下に押搥ぎ、首捻ぢ切て捨るを見て、判官今は叶はじと、馬一散に乘出し搦手より落ちけるを、朝比奈すかさず大手をひろげ跡を慕うて三重追駆けけり。程なく追付馬の尾筒をおつ取つて引伏すれば、判官あへなく落つる所を腕をむづと捻ぢ伏せ、前代未聞の大悪人何と行ふやうなしと、二正の馬に能員が片足づゝ括り付け、兩方へ追立れば馬は左右へ驅け出る。無慚やな能員は二つにさつと引裂かれ、朝の露とぞ消えにける。各一度に悦びの勝鬨どつと作り立勇みをなして凱陣ある源氏の御代の御繁昌、千秋萬歳めでたかり共中々申すばかりはなかりけり。

辨慶誕生記



辨慶……直傳以上
十二字原本になし。
今便宜補へり。

辨慶誕生記

山本土佐掾直傳

武藏元山寺兒

あたはぬ事一力に及
はざる事。

さて其後序長閑に明けし四方の春、今日汲み初むる若水の、源清き千代の松、はなさい
ゑこそめでたけれ。こゝに清和源氏の嫡流源の義經の後見西塔の武藏坊辨慶が出生世の常
ならぬおさなだち、其俗姓をあらはすに、そも、紀州熊野の別當辨心と申せしは、天兒
屋根の御苗裔中の關白藤流の後胤なり。しかるに辨心水葱の前と申て女子は一人ましませ
共男子の世嗣なかりし故、若一王子へ深く祈り、ある夜の夢想に鳶の羽を給はると見て、
北の方懐胎有りしが、十月に満つれど誕生なく、不思議ながらも日を送り、すでに三年に
及べ共、平産無ければ定めて懷妊にては有らじとて、夫婦諸共三所權現に參籠し、奉幣を
捧げ神慮をすゝしめ三重奉り、扱神前に畏り、誠に我々あたはぬ事を御神に願ひ申せし御
咎めにて、かゝる事と存する也。あはれ神慮の御許しを蒙り、病苦をはらさせ給はれど深
く祈請かけ給ふ。しかる所に北の方俄に御腹痛ませ給ひ、産の心地しきりなれば人々驚き
先神前を抱きのけ、傍らへ入れ奉れば程なく御産と聞えける。母子共に恙なく願の通り男

たさあゝいゝ幼児。

六趣 六道に同じ。

産髪―産毛に同じ。

子也。され共彼幼き者ことくしく大きにして、其様人に變りければ、御介錯の女房たち
なか／＼不思議に思ひし故、やがて辨心の前に抱き出る。別當つく／＼見給ふに世の常の
三才ばかりの子程にして、髪長く眼大きく、奥歯向歯生ひ揃ひ、もとより手足遅しきも
恐ろしき赤子のかたち、不思議也と見給ふ内に、寢させ置きたるをさあい脰をついてむく
／＼と起直り、東西をきつと見まはし頭をふり上げ、あらあかやと言うてから／＼とぞ笑
ひける。辨心見給ひ、えゝあさましきこと共や、とかくよしなき願ひ故鬼子を授け給ひし
よな。所詮きやつを生けて置かば、必ず親のあたと成るべし。片時も早く害せんとすでに
危うく見えけるを、有合ふ者共押止め、先御待とぞ宥めける。さればにや北の方、さすが
女性的事なれば失はんことの歎かしく、尤仰はさることなれ共、六趣四生の其中にいか成
人か我々が子とは成て來るらん。たま／＼人界に生を受けしものを、月日の影だに拜ませ
ず、又にかけて修羅道に、落さん事こそ不便なれ。とにかく親の慈悲なれば、先助け給は
れと深く悲しみ給ひける。別當もいかゞせんと暫し案じておはします。こゝに辨心の妹
御前は都五條山の井の三位と申せし人の妻なりしが、此比爰に下り給ひ右の段聞召し、げ
に兄上の御心底尤にては候へ共、傳へ聞く唐土の老子は胎内にて七十年やどり、産髪白く
成て誕生有りとしかや。此若も胎内にて三年が間を送りぬれば、形大きく物を云ふこそ道

あたはず思召さしそ
はのまゝにしておく
事が出来ぬと思はれ
るならば。

そうやうい皆々。

理なれ。去ながら御心に是非あたはず思召さば、なふみづからに給はるべし、上方へ具して上り、成人の後は出家を遂げさせ經の一卷をもよませなば、罪作らんよりまさるべし。妾にたべと申さるゝ。別當此由聞給ひ、其義ならばともかくも御身次第との給ひて、其まゝ助け置給ふ。伯母御前悦ばしく、則ち其名を鬼若丸と付給ひ、五十一日過ぎぬれば、つれて都へ上り給ふ。是辨慶が出生也。ためしまれにぞ三重聞えける。かくて年月過行けば鬼若丸成人して今ははや學問の其ため比叡山の西塔櫻本慶心の坊へぞ上りける。去程に彼寺には數多の兒達、終日の手習にたれ追ひ抜かん我人に追ひ抜かれじと、身をつめて各學問きはめ給ふ。鬼若も其中に交はり手習致せしが、學文は器用也、され共是を心に好かず、只力業・腕押・臍押・相撲などを好む故、傍輩の兒達といさかふこと度々也。餘の少人は一筋に硯を馴らし手習へ共、鬼若は只筆をとつて太刀刀のやうに振廻し、切眞似突く眞似受けつ開いつことくしく、机を叩いて遊びける。爰に兒の中の兄弟子に、けん王丸といひし若は、平家清盛の一門、但馬の大將廣盛の子成故、平家の威勢をかうにきて、常々ともなふ兒達をも、下目にかけて居たりしが、此體を見てあゝ喧しや鬼若、筆にて物は書かずして、假初にも机をならしこと騒々しき體たらく、そうやうの妨げ只心を鎮め、手習をよくせられよと恥しめければ、殘る兒達諸共に、ちとたしなみ給へ鬼若と、口々にぞ言は

梅か枝に―古集の
歌。末句「雪に降
りつゝ」。

れける。鬼若何をがないさかひの種たねにと思ふ所に幸と悦び、やあ何と某それがしがいづれもの學文の邪魔に成との給ふか。おゝ道理也尤也。今よりしてはかたゝの意見に付き隨分手習を致すべし。去ながら異あな事にて某は、紙に物書く事は嫌きらひにて、只人の顔に書く事が好きにて有り、さらば手習致さんと、筆に墨付けけん王丸の頬ほにべたりと付けければ、是はと驚く其内に、あれにも是にも付けまはれば、又鬼若の我儘よと言うてどつとぞ三重逃げらるゝ。其折節けん王丸の父但馬の大將叡山に上らせ給ひ、櫻本の坊に入給へば、僧正對面ましゝて、よくこそ登山とうざんなされつれ。先こなたへと奥に請じ給ひける。あまたの兒達残りなくいづれも座敷かしこまに畏る。廣盛見給ひて、某此程久敷參詣申さぬ其内に、どれゝも兒達の成人有て候よ。定めて皆々學文に精氣せいきも疲れ給ふらん。かたゝを慰めんため、珍しからねど酒飯の用意し参りたり。それ侍共と言付くれば、畏り候三銘酒様々珍物共色品多く取出し、各酒を盛りにける。僧正悦喜淺からず、かゝる酒宴の興なるにいづれにてもをさないもの共、一曲歌ひ奏かなでよとあれば、畏り候とて廣盛の一子けん王丸並に櫻田春若丸、二人つれてぞ舞ひにける。面白の春の氣色や四方山々に霞立ち、木々の梢も色深く、匂ひ妙なる梅が枝に、來居きゐる鶯春かけて鳴け井いまだ雪降れば、花なき里の花ぞ散る、ながめことなる折からに、汲む盃の數添へば、榮華の春も萬年經ると、謠ひ奏で、をさめける。

つゝやくー唄くに同
じ。

扱其次は件の鬼若控へたりしを、廣盛見給ひて、内々かれめが我儘をし、けん王丸共中惡しき由。何がなして此ついでに恥を與へんと思案し、さあ／＼鬼若も一曲^{かな}葵で給へ。か様の酒宴の折からなれば、且は御身も慰に、謠にても舞にても一つ所望と申さるゝ。鬼若聞きもあへず頭を振つて、いや／＼某々學文ばかりに心を入れ、外の藝はかつてたしなみ申さねば、何と致すべき事なし。只某が慰には何よりかより酒／＼／＼と、言ふや其まゝ酌^{しゃく}が持つたる銚子をみづからおつ取り、自酌^{じしゃく}にてあく迄酒をぞ呑みにける。残る兒達つゝやきさゝやき、やれ心地やや鬼若が恥をかきたる嬉しやと、目引き鼻引き笑ひける。鬼若是を見て、やあ方々^{かたぐ}は我を侮るな。歌や舞こそ叶はず共、さあ此中に某ミ力を比^{くら}ぶる者有らば、只今出て何にても望次第に勝負をせよ。恐らくは二人や三人は片腕にても投げ殺し捨つべきぞ。近比申しにくき事ながら、たとへ廣盛殿共くらべ申たる共よも負けは致すまじ。お望ならば何時にても取て投げて見せ申さんと、腕をさすつて申せしは苦々^{にくく}しくぞ見えにける。慶心^{けいしん}御覽じ、いかに鬼若それは何たる雜言^{ざごん}ぞ。座敷の興をさまし言語道斷の有様、罷^{まが}りしされとの給へば、獅子象虎の勢ひ有る鬼若丸もさすが師匠の詞に恐れ、平伏せし禮儀の程こそやさしけれ。廣盛とかうの返答せず、其後酒宴をさまれば、もはやお暇^{いそ}申すべしと、僧正に禮儀正しく相述べて、やがて座敷を立たれたり。扱廣盛は譜代^{ふだい}の家の子

ひらかけーひらは平
なるべしこれ下駄の
類の物か辨慶物語の
外にひらかけの名を
見ず（柳亭記）。

市原文藏武元（にげもと）を召して、あの鬼若が風情にては定めてけん王丸共口論し、いか成事か有やせん。とかく心もとなし、汝を相添へ置くべき間随分心を付くべしと、言渡して残し置き、搦山を下らせ三重給ひける。角て其後鬼若は、右の大酒に酔ひ亂れ、客殿の脇（わき）なる一間所に引籠り、前後も知らず臥し居たり。かゝる所にけん王丸、市原文藏召つれて件の所に來りしが、此體（てい）を見てけん王丸、やあ武元目比彼奴めが我儘何かに付けて憎さよ、かゝる折を幸に何とぞ恥を與へたしとあれば、文藏承り、心得て候、致すべきやう有りとやがて硯を取來り、鬼若が顔に二首の歌を書きたり。先左の方に「鬼若は平足駄とぞ成にける頬（ほ）を踏め共起きもあがらず」と書き、又右には「面附（つら）もひらかけにこそ似たりけれ目より鼻緒を上げて履（はか）かばや」と書いて、しすましたりと主從悦びやがてそこをぞ立退（たひ）きける。時移りて鬼若丸目をさまし起上り、ずんど立て學文所へ行く道にて、小法師共鬼若が顔を見て皆くつゝとぞ笑ひける。鬼若是に不思議をなし、やがて庭におり立て蓮（はす）の池にて水鏡を見て、横手をてうど打ちて南無三寶、エ、口惜しや是何者めかしつらん。何とぞして此主を掴（つか）み殺して捨つべしと、齒嚙（はぐみ）をなして立たりしが、よしゝすべきむね有りと、やがて鐘樓堂（しゆろうだう）へ走り上り、撞木（しゆもく）おつ取り力に任せて早鐘（はやかね）をぞ撞（つ）きにける。此音に驚き僧正の寺中は申すに及ばず、方々の寺々より大衆あまた走り出で、只今の早鐘は何故の事成ぞ

よつぽうにし給へー
宜い加減にせよ。

と皆々評定する所へ、鬼若傍よりつつと出で、やあいづれものかやうに大勢出給ふは、今の鐘を撞きし故か。いや／＼騒ぐまい／＼、ちつとも氣遣ましますな。某が撞いて候。其子細といつば、僧正の寺中に我面を足駄に履かうと言ふ者有て、か様に面に書付を致せし故、よに珍敷事なれば、辻の事に多人數を集め、其中にて履かれんと存じ、其知らせのため此鐘をひよつと一つ撞いたれば、よう鳴るが面白さにひたと撞いて候と、あざ笑ひてぞ申しける。時に僧正の弟子しんおん坊を始め其外大衆口々に、あゝ鬼若狂ひもあがきもよつぽどにし給へ。御身の面を書きし主には遺恨を遂げずして、よしなき人を騒がせ給ふはあまりなる仕業やと我も／＼ミ申しける。鬼若聞きもあへず、されば其事書たる主は僧正の寺中の者の内なるべけれど、名のつて出ねば力及ばず。えゝ扱卑怯者何奴にてもあれ、か様に書く程の心底ならばなぜ誠に履いて見ぬぞ。やあ腰拔め臆病者、是程に言はれても出ぬか／＼。えゝ随分揃うたる菜虫共の集りやと、にが／＼しくこそ申しける。時に市原文藏堪へかね、ヤア鬼若殿たれと相手も知れざる事に、よしなき雑言無益也。さ程に世話を焼き給はず共其書付する程の者ならば、定めていつぞは必足駄にはいて踏み付申すべき間、左様に思ひておはしませ。誠に御身は色黒けれ共美しげなる顔ばせなれば、あつばれ究竟の塗足駄候はんと、から／＼とぞ笑ひける。鬼若聞ておゝ是は文藏よい見立、

のしたりけり一のし
は疑しにて平たく測
る義なり。

ふゝ扱はおのれが我面^{わがおもて}に書付^{かきづ}をしたるよな。其聲聞かんためにこそ態^{かたち}と惡口^{ごこう}したるぞや。
いでおのれを低下駄^{げんげだ}に履^はみひしやいで見せんと、飛びかゝつてしがみ付き、引被^{ひきか}いて雨落^{あまふり}
の石たゝきへえいというて投げつくれば、うんこいうて伏したるをひた踏みに踏付け、こ
りやゝゝおのれこそ足駄^{あしだ}に履^はけ。慮外^{りぐわい}者奴覺^めえたるかといふ所へ、けん王丸かけ付け、鬼
若^わに取付くを物々しやと取て引寄せ、主従共に一々首を捻^{ひね}ぢ切つたり。大衆驚きやれ鬼若
こそ人をあやめた。のがさじと犇^{ひしめ}くを、えゝにつくき法師原やと捨て置たる棒提^{ひつき}げ、打つ
てかゝれば此勢ひに恐れつゝ、どつと一度に逃げ散つたり。あたりに人も有らざれば先傍^{かたはだ}
へ引たる有様、誠に生正眞^{いっしやうじん}の鬼若やと、皆恐れぬ者こそなかりけれ。

第 二

角て其後、人にかはりし鬼若丸、と有る所に立忍びつくゝと思ふやう、とかく我是より
すぐに何方^{いづかた}へも立退^のくべし。是をついでに法師に成^{なり}て行かんと思ひ、折節其あたりの坊に
人なければ幸と、やがて湯殿に走り入り、剃刀^{かみそり}を探し出し盥^うの水にて髪を洗ひ、所々を自
剃^かにこそはのしたりけり。扱鬼若まづ法師には成^{なり}つるが、名をば何と付くべきと思ひしが、
げにゝ我内々聞きし事有り、昔此山に武藏坊といへる惡を好む法師有て、年六十に及ぶ

へんがへー縛換へへ、
縛改の詔なるべし。

打物―太刀刀薙刀等
の總名。

茶道―茶道坊主。

迄遂に不覺をとらずに聞けば、我も武藏坊と付くべし。實名は父の辨心の辨の字と師匠の慶心の慶の字を取て、辨慶と名乗らんと思ひ、西塔の武藏坊辨慶とぞ付にける。かく僧徒の身となる上は、戒を保たんと思ひ、やがて佛前に向ひ今よりして殺生偷盜邪淫妄語飲酒、此五戒よく保つやいなやと我といひ我と又はつと答へ、み佛と御契約して出でけるが、はあ待てしはし、先五戒の内に第一殺生戒は物の命を殺さぬ事、あゝ尤もちたき物なれ共、憎き奴有る時は殺さではかなふまじ。扱偷盜は盗人せぬ事、何しに此戒背くべき。又邪淫戒は女に近づかぬこと、おゝござんなれかゝる法師となる上はいかで此戒犯すべき。次に妄語戒、尤常に偽をいふまじけれ共、我に背くともがらを殺さんための謀に偽りたばからずんばかなふまじ。扱又飲酒戒の事、此辨慶においては一日も酒を飲までは堪忍ならず。いかに御佛、堅く立てんと申したる五戒の内、偷盜邪淫戒は保ち、残り三戒はへんがへ致申す也。よつく覺えて給はれと言捨て、それよりも京のかたへぞ三重急ぎける。去程に武藏坊辨慶は小原の別所といふ所に知る法師の有て立越えしが、つくづくと思ひけるは、とかく某今よりして日本國を喧嘩の修行に馳せ廻り、天下に一人の大剛の者名を取るべし。殊に敵を持ちし身なれば、先よき刀を求めんと思ひ、忍びて都へ立出て其比打物の名人三條小鍛冶宗近が許へ行き、案内乞うて對面し、某は平家右大臣宗盛公の茶道に

辨阿彌あみといふ者なるが、ちと火急に其方の道具求めたきやう有て、自身是迄参りたり。太刀刀二口今日けふの日中迄にうつて給はれ。代物はいか程も與へんとぞ申しける。宗近聞て、何とやらん此者の風情ふうせい心得なく思ひけれ共、其比平家の仰とあれば何事も異議に及ばぬ時節なる故、仰の旨承り候、併火急しかしの御所望近比迷惑致し候。其義にて候はば去方より御詔の太刀刀、此間出来致御座候。若是が御氣に入候はゞ進上致し申すべしとて、件の打物取出し辨慶にぞ見せにける。武藏つくゞと見て、成程―某が思ふやうなる打物也、いかにも是を申請けん。いづれなりとも下々しもぐを我等に付けてこされよ。代物だいぶつは渡し申さん。近比わりなき所望過分―と禮義を述べてぞ出でにける。宗近が下人辨慶が後に附いて行け共―値あじをやるべき共言はざれば、下人申す様何と代物は何處いづくにてか下され候ぞと問ひければ、辨慶ふり返り、されば我も早く渡したく思へ共、此金味かね知れざれば何者にても切つて見て、其後値あじをやらんと思へ共、今に左様の者なし。いで―おことが首切つて見て、其後代物取らせんと、打つてかゝれば下部しもべ驚き、あゝ許させ給へと云捨てゝ、はふ―逃げてぞ失せにける。辨慶かゝら―と打笑ひ、扨々逃足の早き奴かな。先望まづのちの太刀は求めたりと悦び、ア、誠にかくすれば盗同前也。扨佛の前にて保たんと云ひし二戒の内、偷盜戒を破るなれば、いかゞはせんとぞ案ぜしが、實々じやく心付たる事有り、當時都に隠れなき田邊

有徳一金持。

至極しぬれば―道理
平極なれば。

玄蕃丞といへる有徳の者あり。かれに財を乞請け小鍛冶に作料を取らせばやと思案して、田邊の館へ三重立越ゆる。其折節玄蕃の丞遊興の其ため廣縁さして出でけるが、辨慶案内にも及ばずつと入り、是は奥より熊野參詣の修行者、糧米に盡きぬれば藏一つ明けて勸進に入り給へとぞ申しける。行春大きに腹を立て、こは興がる法師かな。いか様夜討強盜のたぐひなるべし。あれ若黨共召捕れと云ふ所を辨慶飛びかゝつて行春を取て伏せ、あたりをはつたと睨んで、やあおのれら某に指でもさしなば、主の首を忽ち捻切り、又汝らも片端から引捕へ、彼世此世の境目を見すべきぞと、大きに怒つて申しける。此勢ひに御内の者おぢて近付く者もなし。所へ行春が女房、武藏が傍へ走り出で、なふ御僧様の御腹立御尤にて候也。浪人の習ひにて人を見知り申さず候。妾に免じて許させ給へ。いかやう共御望を、叶へ申候はんこ、手を合せてぞ拜みける。辨慶聞いて、盜賊と言はれては勘忍ならぬ所なれ共、妻女の言葉に至極しぬれば、いかにも許し申さうが、して亭主も何と、某が望を叶へうといふ心入か。行春震ひく、あゝどう成共仰の通り叶へませうと申しける。武藏さあらばとて許しける。行春はたゞ鬼にとられし心地して、いまだ震ひはやまざりき。女房悦び此うへは御所望次第に寶を參らせ候はん。辨慶聞いて、いやゝ多くの望みはなし。巻物十本程給はるべしといひければ、それこそやすき御事とて、藏の内より取出し、

類を調へ名異にして
實同じき處。

武藏が前にぞ出しける。辨慶悦び、とても事の事に人に持たせて給はるべし、重ねて参り此禮を申すべしとて、暇乞して卷物持たせ小鍛冶が宿へぞ急ぎける。扱案内を乞ひければ、最前の下人立出で、やれ又最前の法師こそ來れりと、あわてゝ内へ逃げ入れば、宗近何事やらんと表に出る。辨慶對面し彼卷物を出し、是最前の打物の返禮也。定めて不足に御座有るべけれ共、とめ置給へし申しければ、宗近右の様子と格別違ひ却つて恐しく思ひしが、又辭退せんもいかゞと思ひ、只忝く候と抱き持ておづゝ内へぞ入りにける。扱其後に武藏坊、先宗近が作料は取らせぬるが、玄蕃が寶を無體に請たる事なれば、悉皆たゞ頼を顔へ直したるといふもの也。えゝ是非もなし。又重ねて何とぞ恩を送らんと、小原の里へぞ歸りしが、日は早暮に及びける。辨慶暗紛れに向ふを見れば、何かは知らず人十人ばかり集りて申しけるは、扱々此頃は打續き不仕合せなり。いかゞはせんと寄合ひ、夜討強盜の詮義とりぐに評定す。中にも晝寯のかけの助申すやう、都に隠れなき田邊玄蕃の丞が所ぞと、談合極めて盗人共皆々別れてのきにけり。辨慶是をとつくと聞きすまし、扱々玄蕃が恩を何としてかは送るべきと思ひしに、幸是はよき事を聞て有り。急ぎ行春が館に行き、今の奴原残らず討取り、最前の恩を送らんと、思ふやいなやかけ出し、玄蕃が館へ三重急ぎける。程なく館へ着きしかば、幸小門のあきたる折節、願ふ所とつと入れ

胸がい—胸ぐらに同じ。

番太—番太郎ともいふ町々の木戸を守り夜廻りを勤むる者の稱。

ば、番の者見て、又晝の御坊の來り給ふぞやと、あわてゝ行春にかくと申せば、夫婦驚き、それは何故やらんと立出れば、辨慶見てなふ人々、某只今參る事少も氣遣ましますなと、右のあらましを語り、もし又我も盗人の同類かと思ひ給ふなよ。叡山より出でたる武藏坊辨慶といふ、ずんだたしかな坊主也。今宵夜盗を從へ、右の恩を報ぜんと思ひ來りたりとぞ申しける。夫婦悦び、扱々是は忝き御心ざし、一入頼奉ると申さるゝ。辨慶聞て、おゝ心やすかれかたゝは中門をよく固め、成程ゆるりと寢給ふべしと、皆々奥へ入置て、其身一人門の際にて、夜盗の者をぞ待ちゐたり。すではや子の刻ばかりに盜賊共、門外に來りどしめく音せり。辨慶今こそよき時分と思ひ、内より切戸をそつとあけ、あら騒々しやといふ所を、盗人共天の與へとばらゝと立て入る、其あとを武藏はたと閉て、錠をしつかとおろしける。盗人共是を見て、やがて武藏が胸がい搦んで、やあおのれは番太めか。此屋の寶の有所を詳しく案内致すべし。さなきにおいては只今、打殺すぞと怒りける。辨慶態とこはさうに聲を震はし、あゝ扱はいづれもは盗人様にてましますな。いかにも案内申すべきが、さもあらば私にも、何ぞ褒美を下さるゝか。盗人共聞て、おゝいかにもく望次第にとらせん。しておのれは先何が欲しきぞと問ふ。辨慶聞て、某はいづれも様の首が欲しい候と、言さまに腕をひん捻ぢ取て投げた。是に驚き、やれ痴者よと一面

に打てかゝるを、辨慶好みし棒打振つて力にまかせて三重打伏する。盗人共は散々に挫ぎ付けられ、逃げんとすれ共門は打たりせんかたなくて聲を上げ、なふ御慈悲に助け給へと一所に屈みて降参す。辨慶笑ひて、やあどろばう達よい氣味な。誠命が助かりたくは、おのれらが着たる物を脱ぎ、太刀刀共に置いて行け。それならば助けんといふ。夜盗聞て、あゝそれは餘りに胴慾なる仰と言へば、辨慶聞て、しておのれらは脱ぐまいかと、棒振上ぐれば盗人共、あゝ脱ぎまするゝと、皆々残らず裸に成り、打物共に投げ出せば、其時辨慶門を開き、夜盗の奴原追出し、件の着類太刀刀を、悉く玄蕃に與へ、最前の恩を送りし辨慶が心ざし奇特也、又強者也とて皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

第 三

角て其後、但馬の大將廣盛は比叡山に馳せ登り、鬼若丸が行方尋ねけれ共知れざる故、是非なく京都に立歸り、洛中洛外探しぬれ共、近き比まで有りつるが今は行かたなきと聞き、扱はとにかく熊野へ隠れ下りつらん。此上は右の旨清盛公へ訴へ、紀伊の國に尋ね下り、是非に討たでは置くべきかと、やがてそれより六原さしてぞ上りける。御前になれば、廣盛有りし次第を言上し、彼鬼若めが惡逆山門において其隠れ候はず。彼奴を浮世に住ま

せなば後々は天下に對して敵をなすべき程のあふれ者と存候。あはれ上意を蒙り南海道に下り、彼曲者めを探し出し討取度候と、憤り深く申上る。清盛聞召し、おゝ御分が心底至極せり。左様な邪曲者片時も生けて置く所にあらず、早速下り心の儘に行ふべしとの御説なり。廣盛悦び御前を立て手勢數多引具して熊野をさしてぞ三重急ぎける。是は扱置熊野には辨慶が父辨心は、過し比世を去り給ひ、今は母上ばかり也。され共鬼若丸の姉姫に、水葱の前とてましますを、たよりとなされ暮さるゝ。過し比より母上は心悪しくおはせしを、なぎの前權現へ日參有て祈らせ給へば、其しるしにや此程ははや常の如くに成給ふ。なぎの前悦ばしく、今日は又御禮のため参りて歸り候はんと、母上に暇を乞ひ、御供少々召つれ給ひて宮居に參詣なされける。去程に廣盛は、夜を日についで熊野に着き、別當の館に取かけ、か程多勢にて來る上は只押入れと下知をなし、どつと云うて亂れ入り、爰やかしこと探しけれ共、尋ぬる敵はさらに無く、只老母一人残りは御内の者共呆れし體にて居たりけり。され共母上騒ぎ給はず、やあ和殿達は何處の誰にてかやうに押入り、かく狼藉に及び給ふ。こなたに覺えのなき事也。様子を聞かんと給へば、廣盛聞て、ふゝ扱は其方は鬼若が母よな、何程御身知らず顔にいふ共言はせては置くべきか。鬼若はいづくに置きしぞはやとく出せ。天下の主清盛公の上意を蒙り來つたり。隠し置く共かひあらじ

と、大きに怒つて罵れば、母上おふく彌々心得がたく、扱は鬼若を御尋のためか。なふ其者は産屋の内より人に取らせて、親子の久離きうりを切りぬれば、いかゞ成しもいさ知らず。又たとひ是迄來りしにもし給へ、幼き時さへ親の仇あだとなるべきと思ひ捨てし物を、殊に今又科さかをして逃げ下りしを、何しに是に隠し申さんや。夢にも知らぬこと也と申切ておはします。廣盛聞て、ふゝ扱は是へは來らぬかや。いかゞはせんと案ぜしが、とかく母を生取り置きなば、彼曲者くせもの奴を打取るべき術てだてならんと思ひ付き、是々御身の申され分道理一々至極せり。しかし今度の一義といつば、彼鬼若丸比叡山において、數多の人をあやしめ、行方知らず成しによつて、方々はうぐと尋ね此所迄來りしが、是非において行衛知れずは親を召取り都へ引くべしとの上意也。それ侍共といへば、畏つて母上をひたゝと取圍み、いなやを言はせず引立てつれて行くこそ痛はしけれ。有合ふ者共是はゝと跡を慕へど其かひなく、御行方もなかりけり。かくとはいさや白雲の風の便たよりもなきの前、母の病氣平癒へいごの、禮參れいさんつとめ給ひつゝ館やかたに歸らせ給ひける。御内の者共出迎ひ、なふ姫君さま歸らせ給ふか。御留守の内に母上様はか様ゝの難義にて、都の武士に捕はれて行かせ給ふと語りはてぬに姫君は、なふこはそも誠か悲しやとわつと叫ばせ給ひしが、やうゝ心を取直し、やれ母上はいづれの方かたへ捕とらられて行かせ給ふぞや。いで追附かんと其まゝ走り出給ふを、皆々止め奉り、

あゝ御道理尤也。去ながら、母上様もはや遙かに行かせ給ひ候はん。我々も其折節何とぞ止め奉らんと悶ゆる内に、大勢取付き連行き申せば是非に及ばぬ仕合也。只御心を静めさせ給ひて、何とぞ此後母上を取返させ給ふべき御思案なされ候へと皆々留め申しけり。姫は聞あへ給はず、えゝ曲もなき者共や。いか程敵大勢也とおめゝと母上を渡すべき事や有る。浮世にひとりの母上を、かゝる難義にあはせ参らせ、いかで是にはあられんや。命限りに追付て、身はひしゝと成るとても母の御難を救ひ申さん。妾行くとて汝等は頼ましと泣き叫び、制する者を突きつけ振放ち、かけ出させ給ひける心の内こそ三重道理なれ、かくて其後但馬の大將廣盛は、老母召取置きぬれ共敵もあらはれ出ざる故、都へ引具して行く道の、泊りゝ宿々にても、心を付けさせふれをなし、程なく今は泉州設樂の宿に付て、右の通りをふれさせければ、所の者共廣盛の前に出で、御ふれの様子承り候に、此程あやしき法師、近きあたりを徘徊仕候。もし御尋ねの者にては御座有まじく候やと申上る。廣盛聞てげにさやうの事も有るべし。然らば此所に逗留し、何とぞ敵が出る手だてをせん。其儀といつば此宿はづれに矢來を結はせ、其内に母を入れ置き、諸人に曝し見すべし。さあらば辨慶此あたりに有るならば、本より人を人共思はぬ曲者、奪はんなどとして來らん所を、おつ取搔がんと侍共に申付け、すでに用意と三重聞えける。

なぎのまへ道行

たらちめ一母
昔無瀧一熊野川の上
流を音無川といふ。
糸我山一有田郡糸我
村の南湯淺町に至る
途中の坂路をいふ。
くれども一來と繰に
かく。

岩代・岩田川・吹厥
浦・吹上・藤代一皆紀
州の地名。
こがれ一漣と焦とか
く。
紀三井寺一來にかく

急げどかひもなぎの前、涙とまらずたらちめを、慕ひ焦れて出給ふ。み熊野の地を離るれど、いまだ母には逢はぬかや。たれに問へども音無の瀧津心もせきかねて、亂れ亂るゝ絲我山、くれども長き道の邊の千草の花も色々に、薊しゆんきく櫻草美しげなる鼓草、數の草花は多けれど、今の身なればなかくに、口傳それをそれとも見も分かず。かゝる思ひをしほやつの子の宮は思ふこと、汲みて叶ふる神なれば、鹽屋に跡を垂れ給ふ。今の我身の願ひをも叶へ給へと岩代の、神の恵みを頼めども末をいかにと思ひやる、袖も濡れけり岩田川、言はねど歎く我が心、今の胸にも天つ風、ふけるの浦に立つ波の音騒がしき折柄になほ吹上あまあらし。霞も果てぬ紀の路山松にかゝれる藤代の、御坂を越えて見渡せば、名におふ和歌の浦々に、歌須磨や明石の月を見し時は、の、女波がどん／＼どんどろめきやよう夜の目もよ寝られぬ朝霞、たゆたふ舟や由良の門を渡る船人楫緒絶え、行方も何と白波に、こがれ／＼て浮き沈む、深き思ひは我とても、母を焦れて紀三井寺大悲の誓ひ頼もしく、なほ足曳の山口や、山中難所越え過ぎて、思ひもよらぬ憂き旅を設樂の宿にぞ着き給ふ。なほ行先を見給へば、宿のはづれに矢來結び怪しき體の見えけるを、折節先

より農人一人來りしを、姫君かれに近付き、なふあの向ふに矢來の結ひて候は、何事やらんと尋ね給ふ。百姓聞て、おゝあれは天下よりお尋ねの者有て、今度紀州熊野より其母を召取り是迄來られしが、彼尋ぬる者此あたりに有りとやらん申して、今日も其母を、あの所にて曝し給ふと、語りてこそは通りける。なぎの前聞き給ひ、嬉しくも又悲しさもいやまさり、其まゝ行かんとし給ひしが、あゝいや待てしばし自らあれへ立越え、母上の御身代りとなり老母を助け奉れば、是以て本望なれ共、若敵が同罪と申せし時は、彌々母に憂き目を見せ奉る、あゝ何とぞして母上を助くる思案は有るまじきかと、行かんとしては立戻り、居て見立つて見ウレと節身を悶えてぞ泣き給ふ。然る所に辨慶は古郷と聞きし故、熊野路に赴き母の様子を聞くとひとしく上方さして上りしが、旅疲れにや辻堂に休らひて居たりしが、此有様をつく／＼と見て、扱も／＼我身の上によくも似たりし事共かな。様子を尋ねたく思へ共、あゝ何共問ふべきよすがなければ、折節地藏のめしたる綿帽子を、これ幸とうちかぶり、錫杖を突鳴らし、いかに姫汝親に孝の心ざし佛神是を哀れに思召し、我に様子を聞けとて、則ち諸神諸佛の御使として、もとより千々の願我汝に擁護を加ふる也。急いで様子残らず語り給へとあれば、姫はあつと感にたへ、扱々有難き御事かな。自らは熊野の別當辨心が娘なぎの前と申す者にて侍ふ也と、母を捕られしこと共始終を語り給へ

ば、ハ扱は姉にてましますかと、帽子錫杖振捨て、なふ我こそ昔の鬼若丸今は法師に成て辨慶と申す也。姫は夢共辨へず、是はくとはかりにて悦び涙はせきあへず、扱々不思議に對面致せしもの哉。扱は廣盛めが我々を尋ねんため、母上に辛き目を見せ奉るよし。御心やすかれ我等か様に行合ひ申すも、ひとへに親子の縁盡きぬ故也。たとへ警固の者幾千萬有り共、踏破つて奪ひ返し申さんが、去ながら荒氣にては母の御命もあぶなし。何とぞ手だてをもつて奪ひ取るべし。いかゞはせんと思ひしが、暫らく思案し、あゝげに此綿帽子にてよき事思ひ付たり。さあく姉君こなたへと、打連れかしこに三重急ぎける。去程に廣盛は母上を矢來の中に押込め、さも厳しく守りける。かゝる所へ辨慶が、丸綿帽子に顔隠し、八十あまりの老の波女姿に身をやつし、腰には梓の弓を張り、やたけ心の一筋に矢來のもとに立寄り、我々は此所の土民にて侍ふが、只今此捕はれ人の子とやら一門とかや申して、侍數多奪ひ取らんと談合のためか、我々が住所に踏み込み狼藉致し、あまり物恐ろしさに娘に手を引かれ、やうく爰迄逃げ参りかく告げ知らせ参らせ候と誠にやかに申しける。もとよりも智惠薄き廣盛、辨心が侍共と覺えたり。急ぎこなたより押懸け打つて取れと下知すれば、心得たりと若侍我さきに急ぎける。時に廣盛、もとより好色第一の男なれば、姫君をつくぐと見て扱々器量すぐれし娘かな。いかに老女汝が娘か孫か、

いまだ夫は無きかとあれば、うば聞て、あれは妾が娘にて侍ふが、いまだ婚とても候はず、あはれ殿さまに召置かれ侍らはゞ、有難く候はんミ申せば、廣盛聞て、おゝ扱は汝が娘かや、是へくと申せ共、姫恥かしげにさし俯向いてぞおはします。うばもどかしく、ハテ恥かしい事はない。うばも若き時には始めは胸が震へ共、後には大事なもののぞや。どれくうばがつれ行かんと姫君の手を取り、なふ殿さま今より後は御不憫に思召下されよと、廣盛が腕をしかと握る。扱々こゝなうばは力の強き者哉。爰を放せ、放せくと扱け共、ハテ大事の殿さまへ二世の媒介申す也。是が夫婦の固めぞと、なほく強く握るにぞ、残りし侍、やあ爰なうば何とて放し申さぬぞ。二人一度に立寄れば二人が腕もひつ捕ふ。なふく痛や骨が碎けてのきます。お許しあれといふ隙に、姫走りより母の縛しめ切解き、すでに逃げんとし給ふ所へ、討手の侍立歸り此體を見て、おのれ大將を助けずは、此者共を遁さじと母上姫君おつとりまく。其時老女帽子上衣かなぐり捨て、三人を兩の足にてどうど踏へ、やれ汝ら、我こそ尋ぬる辨慶よ。えゝあつたら物なれ共、命惜しくは助けてえさすべし。やれ其かはりに母上や姉御前を乗物に乗せて送るべし。さなくは彼奴らを踏み砕くぞ。さあ送らうか送るまいか。廣盛下より聲をあげ、なふ術無やどうなりと御氣に入る様にせよと、身を悶えてぞ申しける。侍共是非なく乗物昇いてぞ出しける。辨慶見てさ

あゝ二人を一所に乗せて昇^がけ。かゝずは忽ち首一々に引抜くぞ。廣盛やれ世話焼かすな、急げと申せば侍共、ふせうく乗物昇くとひとしく、さあ助くると廣盛を突放せば、廣盛あれ餘すなと下知すれば一度にとつと崩れかゝる。辨慶心得たりと番所に有りし棒おつ取り、むらゝばつと追散^{おっ}らす。此勢ひに驚きあたりに近付く者もなし。其隙に乗物をヒヤウシおつ立てゝ都をさして急ぎける、辨慶が智謀のほど勇あり義あり孝ありとさて感ぜぬ者こそなかりけれ。

第 四

かくて其後、辨慶は母上を思ひのまゝに奪ひ取り、とある所におろし置き、嬉しくもあひ奉るもの哉と、我身の上を具に語れば、母上も又有りし事共語り、盡きぬ今の涙也。辨慶申せしはさき程廣盛めを討洩らしぬるも母上姉君の事を思ふ故、甲斐なくしき働きもなし。扱^{おっ}是からはたとへ追手が何萬何千來る共此辨慶が請取り申すぞ。御心安く四方を見晴らし慰みにそろりと國へ御供申すべし。あはれ追手の來れかし、道の徒然の慰みにせんと、事もなげにぞ申しける。然る所へあとより追手の者共眞黒に成て追ひ來る。武藏ふり返りきつと見て、おゝ扱こそ願ひの通り面白し。いかに母上姉君某事は氣遣ひなしに

うんざい—人を罵り
ていふ詞。有財餓鬼
の詭略ならん。

先さきへ歩ませ給へ。彼奴原を一なぐり追拂うてあとよりおつ付き申さんと、言ひもあへぬに程なく敵近付けば、辨慶心得たりと、傍なる大木根引にえいと言うて引抜き、大音上げて、やあ汝等があとをしたふ鬼若が母兄弟は、ミつく先へ行かれたり。少分ながら其かはりに、彼鬼若丸成人致し、法師と成し辨慶是に残つたり。いでかたぐに馳走せんと、持つたる大木振廻し、群りかゝる追手の勢を思白微塵になぎ伏する。只大風に木の葉を散らすにことならず。さしもの大勢たまりかね、むら／＼ばつミ引退く。辨慶笑つて、おゝそれに懲りようんざいめらと大きに罵り、それよりも母上姉におつ付き、兩人一所に肩に引掛け、山路遙かに分けて入る。追手は猶も逃さじと、あとについて追かけたり。程近くなりぬれば、辨慶一人を下し置き、やあ又来るか弱者共と、側なる古木をひん抜きて、四方へどつと追散らし、扱又二人を一所に背負ひ、ゆらり／＼とあゆみ行く。追手は彌々憤り深く喚き叫んでかけ来る。武藏坊是を見て、扱も懲りぬ奴原やと、又人々をおろし置き、手ごろの木の枝捻ぢ折り、一文字に打つてかゝれば、こらへずわつとぞ逃げにける。辨慶から／＼と打笑ひ、扱々揃うた逃上戸、此うへは手だてをもつてきやつばらが、根を絶やさんと思ひ、人々もろ共右手のかた成る高みに上り、岩の挟間に身を隠し、追手の者を待ち居たり。程なく敵件の所に來りければ、辨慶上より大石を押取り／＼投げかくれ

ひねり！武器の一種
敵の着たる物に掴み
つかせて自由を失は
しむるなり。

ば、落花微塵となりけり。僅か残る者共はいや人間にてはあらじとて、後を見ずして逃げて行く。重ねて慕ふ者なければ、心靜かに親子三人打連れて熊野をさしてぞ三重下るゝ。是は扱置、其比又鞍馬寺には源の義朝の末子牛若丸とておはせしが、いまだ幼稚の比よりも御心猛くましゝ、いかにもして平家を滅ぼし源氏の代となすべきと、骨髄に思召し、夜に入つては僧正が谷に分け入り、大天狗を師匠となされ、兵法早業に御身をなげうちさまゝの術を得給ひしが、牛若思召すやう、我今既に武藝に長じぬるといへ共いまだ遂に人と勵みし事なし。所詮忍びて洛中に出で、往來の者に渡り合ひ、我が習ひ得し兵法の威力の程を試みん。されば當時は平家の代なれば、むかふ木草に至る迄皆是敵の事なれば、一つは父の孝養のため千人斬を始め、亡父尊靈に手向け奉らんと、一筋に思ひ立ち、夜なゝ五條の橋に出で、諸人を討取給ひける心の内こそ三重不敵なれ。去程に、武藏坊辨慶は母上や姉君を片山里に忍ばせ置き、其身は忍びて洛外を廻り、何とぞして廣盛を討たんとねらひ居たりしが、此比聞けば五條の橋に諸人を惱ます者有る由、聞くとひとしく彼奴を従へ我郎等に召使はんと、はや装束して出立雲の、光り耀やく月の夜に、著たる鎧は黒革の緘しに緘す大腹巻、草摺長に着下し、好む所の道具には、熊手、薙鎌、つげの棒、拵り、刺叉、鉞など背にひつしとさし並べ、外にすぐれし大長刀、眞中取つ

白波の―不知にかけ
立つの序詞とせり。

柄長くおつとり延べ
―槍、薙刀の石突に
近き方を持つをい
ふ。

楯弓の―盡きにかく
やたけ心―矢にかく

て杖につき、ゆらり／＼と只一騎五條の橋へぞ三重急ぎける。去程に牛若君、下には直垂
腹巻し、上には常の装束に、薄衣取つてかみに懸け、橋の此方に佇み給ふ。辨慶かくとも
白波の、立寄り渡る橋際にて、牛若君をきつと見付け、詞をかけんと思ひしが、女の姿と
見えし故不思議ながらも打過る。牛若少しやり過し、拔打に辨慶がうしろをはたと切り給
へば、背にさしたる道具の柄を四本切つてぞ落されける。辨慶大きに動顚し、こは口惜し
や女と思ひ不覺をとつたる無念さよ。おのれ如きの小冠者めは長刀までに及ばじと、切殘
されしつげの棒輕々と振廻し、走りかゝつてはつしと打つを、牛若つつと潜り抜け給ふを、
武藏つゞいて投ぐる棒、ちやう／＼ど切り給へば、忽ち三つにぞ折れにける。辨慶是
はと驚き、今度は又鉞を打振つてかけ向ふ。牛若少も騒がせ給はず、おゝ今宵の客は健
氣也。随分馳走致さんと、太刀さし翳し稻妻の如く疊みかけて打ち給へば、さしもの辨慶
合せかねて、橋桁を二三間退つて鉞にて受けければ、此柄もふつつと切れたりけり。辨慶
六つの道具を失ひ、今ははや長刀ばかりになり、搦々おのれは小さき形にて世にむつかし
き彼奴奴かな。よし何にもせよ遁さじと、長刀柄長くおつ取伸べ、爰を大事と切つてかゝ
れば、牛若君も上にめしたる小袖を脱いで捨てさせ給ひ、兵法の秘印を結び虚空をかける
秘術の早業目を驚かす三重ばかり也。随分猛き辨慶も今は精力楯弓の、彌猛心も弱ると見

少人―少年。

こつかに碎き―こつ
かは國家。主家のた
めに齟齬するをい
ふ。

六原の御前―清盛。
六原は六波羅。

えしを、牛若やがて長刀をはつたと蹴倒し給ひければ、こは口惜しや手取にせんと、飛んでかゝれば其まゝ見えす、陽炎稻妻水の月、縋らんとすれど便りなし。せん方なくて武藏坊、扱も希代の少人やと呆れ果てゝぞ立つたりけり。扱々御身は誰なればまだいとけなき少人のか程健氣にましますぞ。御名を名告り給ひなば主君と仰ぎ申すべし。牛若是ぞ幸ひと、今は何をかつゝむべき。我は源の牛若丸、さ言ふおことは何者ぞ。武藏聞て、扱は君は義朝の御子にでましますか。某こそ西塔の武藏坊辨慶と申す者にて候也。降参さん御免なれ。位も氏も健氣さも、あつぱれ此辨慶が主君に頼みて不足なし。殊には某様子有つて平家に恨候ふ者也。本より君は先祖の御敵、此後は猶君諸共此身こつかに碎き、平家を亡ぼし申すべし。家臣となさせ給はれと、それより主従の契約固く仕り、薄衣被かせ奉り、辨慶も長刀を打かづいて、悦び勇みて歸らるゝ、誠に三世の奇縁なるはと扱感ぜぬ者こそなかりけれ。

第五

角て其後、牛若辨慶主従の契約して、平家を狙ふと風聞有り。廣盛早くも聞付け、急ぎ六原の御前に参り、内々某のかたき西塔の辨慶、源の義朝の末子牛若丸と心を合せ、山科

洪恩—原本「こうおん」。厚恩・鴻恩・洪恩いづれにてもあたるべし。

うつぞやは—うつか一度は。

邊に隠れ有り。御一家をねらひ候よし。あはれ某上意を請け、即時に打滅し申すべしと、勢ひかゝつて言上す。清盛聞召し、こは安からぬ事共かな。其牛若は當座に誅すべき小冠者なるを助け置きぬる洪恩を忘れ、却つて此一門を亡ぼさんと工み、剩へ辨慶といふ曲者めを相語らふこそ奇怪なれ。さあらば其方が望に任せ討手の大將たるべしとて、究竟の力者すぐつて廿四人、雜兵共に二百騎をぞ添へられける。廣盛悦び御前を立ち、軍勢を引具しそれよりも山科さしてぞ三重押寄する。さればにや、牛若君辨慶諸共山科の里に隠れ居て、平家を狙はせ給ふよし、御先祖譜第の御家人共聞付け次第に馳せ集る。凡そ百騎に及びけり。所へ廣盛大勢にて取りかけ、関をどつとぞ上げにける。辨慶此由見るよりも、定めて是は但馬の大將廣盛が寄せつらん。某荒斬する其内に皆々用意せよとて、長刀提げ門外にかけ出で、やあ只今爰へ寄せられたるは廣盛殿と推したり。かく申すは其方のお尋ねなざるゝ辨慶なり。まづもつて日外より某故に方々と苦勞をなされ、近比笑止千萬に存するなり。然るにいつぞやは御館へ参り御身の首を申しうけんと存する所に、幸ひ是までの御越し故先これまで出店をいたしたるに、早くも聞付け給ひ、遠路是迄あつたら首失ひに御出の段痛はしく存する也。何ぞ御馳走申さんが、先是に持合せたる長刀を振舞ひ申さん。望次第に味はひを心み給へと罵つて、かけ寄る勢に渡り合ひ片挫ぎにこそ三重薙いだりけ

あんだ辨慶——なんだ
辨慶ともいふ。「な
んたわけもなし」と
いふを誤辨慶にかけ
し秀句なり。

念もない事——とんで
もない事。

ひつそはめ——身體の
側面に近く引寄せ

り。武藏坊が荒ごなしに五十騎ばかり薙ぎ伏せられ、むら／＼ばつとぞ引きにける。其隙に味方の武士、我も／＼と用意して六原勢にかけ合せ、爰をせんとぞ三重戦ひける。去程に寄手多勢と申せ共、辨慶が働き故過半討たれて進み得ず、爰に六原の力者とさしれし鳴瀧半平盛村、あぐばら馬之丞國かげ一陣に進み出で、とかく辨慶は我々二人が内ならでは、仕留る者はよもあらじと、廣言吐いて立つたりけり。武藏坊きつと見て、げに汝等は諸人にすぐれいか様力も餘程有りさうに見えてあり。とてももの事に辨慶と組打の勝負をせよ。去ながら汝等一人や二人はあんだ辨慶手に足らず。五六人も一度によつて組んで見よとぞ申しける。鳴瀧聞て、えゝそれは餘りなる力自慢、先づ我々が手練を見て其後廣言吐き候へと馳寄つて引組み、弓手へ捻ぢ馬手へ捻ぢ、やあ是でもゆかぬか／＼と汗を流してもみけれ共、辨慶ちつ共たじろかず嘲笑つて言ふやう、えゝいや／＼念もない事、それではゆかぬぞ。爰にすんどよい手が有るぞ。いで教へて得させんと、提げどうと投伏せ、なふ鳴瀧殿、なんとよい手でござらぬか。よく覚え給へと頭をちやうど毆り。扱もよう鳴る頭かな。御身は鳴瀧にてはなうてよく鳴る頭かなと、拍子にかゝつてひたもの打つてぞ居たりける。馬之丞腹を立て、棒ひつそばめ駈寄るを、武藏鳴瀧を掴んで受受けければ、馬之丞が棒にて頭微塵に碎きける。辨慶大きに打笑ひ、おゝ是は見事なおはまりかな。敵をば打たで傍輩の

あまむく一嘲るに同
じ。

孝養―供養。
引色―退却せんとす
る様子。

頭を碎く棒三昧、必ず御無用く〜とあざむけば、あぐばら彌々齒嚙をなし、無二無三に打つ棒を武藏潜つてしつかと取り、さあ此棒は辨慶が物なるぞ。早く渡せと言ひければ、寄手より又武者二人かけ出で、やれ其棒を取られては猶々此方の恥辱なりと、三人もろ共えいや〜と、汗を流して引きけれども、武藏はいつかなぎく共せずにつこと笑うて、えゝ扱も揃うた弱者共かな。某が片手に持つたる此棒を取りかねて、二人三人が汗水にて其すう〜は何事ぞ。えゝしやまだるし放さぬかと、えいやつと引きければ、三人後へよろ〜と轉びしを、さん〜に打ちければ落花微塵になりける。廣盛大きに驚き、とかく彼奴と懸合の勝負はかなふまじ。只矢ずくめにせよと下知すれば、畏つたりとて精兵共、さし詰め引詰めさん〜に射たりけり。辨慶が鎧に立つ矢は、さながら蓑の如く也。いかゞはしけん武藏坊、よろ〜としてどうど伏す。廣盛見て、扱こそ某が思案に違はず辨慶は仕留めたりぞと悦べば、軍兵共討取らんと駆寄るを廣盛抑へて、あゝ暫く〜、いで我子の孝養に某武藏が首取らんと、傍近く寄る所を、辨慶むくと起きてかい掴み、よう心安く死なうよな。おのれを討たんはかりごとゝ、首ふつとと捻切れば、是を見て残る軍兵引色になる所を、四方へばつと追散らし、それよりすぐに牛若の御供申して奥州さして下りける、辨慶が働き末繁昌の御吉相、千秋萬歳めでたし共中々申すばかりはなかりけり。

右此本は我等持本の通ちがひなく板行致し候。初心稽古のため也。さればことごとく
かながきにして、くぎり、ふししやう、三味線ののりかた、ほどひやうし、三重、を
くりのしなく、秘密を残さずあらはし候。なをしんぐの口傳は筆紙のおよぶべきに
あらず。
かしこ。

山 本 角 大 夫

京二條通寺町西へ入町

正本屋 山 本 九 兵 衛 板

大
福
神
社
考



大福神社考

竹本義太夫正本

大呂一十二月の異名。
荷前の使一十二月中吉日を選びて十殿八幕に貢物の初穂を奉るをいふ。
御佛名一毎年十二月朝廷にて行はれし法會。
實にすまじき云々
一源氏物語「世の人のすまじき事にいふなるしはすの月夜の云々」
錦鶏障一錦鶏を置くる宮中の御立。太平記一に「御臨すに二八にして金鶏障の下にかしづかれて玉座殿の内に入り給へは」

雲を排きて空を見れば則ち天文清し、風をすまして水を見れば則ち川流平らか也。惡を退け國家を見れば則ち泰平なるとかは。故人のまなしる所かな。いでや人王六十一世朱雀院と號し奉るは、昌平二年の春霞晴間を待たぬ御陵に崩れ失せさせ給ひければ、一の宮豐日の皇子寶祚を保たせ給ふべきを、御年よろしからざるとて明け行く春を待つ程は、御后皇太皇后御代をしろし召れつゝ關白基經攝政にて事の儀式ぞやごとなき。賢所の御拜より御まつりごと私なく、すでに大呂になりぬれば荷前の御使立つべきとて、御陵毎の贈幣勅に任せてたて並ぶ。御佛名の満ての日は地獄繪の御屏風までいとこまやかに翫覽あり、大殿籠らせ給ひしが、實すまじき物とかや、師走月夜の雲冴えて風に狂ずる木々の聲、蕭々たる夜の雨の、窓を撲つかと疑はれ、御寢覺がちなる所に不思議や音樂四方に聞え、先帝の御陵へ立たせ給はん荷前の御幣、狂ひ出させ給ひしは不思議なりける三重次第也。暫く有て御聲をあげ、あら恨めしのまろが黄泉や、娑婆に有りつる其時は十善のたうくを踐み、玉樓殿の花に愛で、錦鶏障の月にたはぶれ、後世を知らざる命の終り、あな憂しとのみ

中有一人の死後七日間をいふ。

執柄—攝關をいふ。

三家—關院、花山、中院の三家。

一の人—攝關。

金剛經—具には金剛般若經。

思ふ氣の、猶宮中に止まりて、中有の闇に迷ひしが、不思議に佛の御名聞付けは是まで顯はれ來りたり。こひねがはくは一の宮豊日の皇子を出家になし、跡弔ひてたび給へと、耿々たる燈火の影照り添ひて幣帛はもとの如くに立ち給ふ。君はとかうの宣旨もなく、玉體を打投げて御衣に落ち來る御涙止めかねさせ給ひしが、また御枕を離れ給ひ、扱あさましの御事や、誠に天子の御身にも、かゝる迷ひはある物か。明けなば皇子に出家を勧め御跡とはせ奉らん。さるにても今一度御聲をかはさせ給へやと幣に向はせ給ひつゝ、南無先帝出離生死頓證菩提と御廻向有り、やゝ額突かせ給ふ間に夜はほのく明けて行く。内侍命婦のおもと人御簾をかゝげ參らすれば、執柄三家を始として諸卿冠の纓を並べ玉體を拜し奉る。君一の人を御簾に召れ、朕去りし夜不思議に先帝の御告を蒙る。されば明けなん頃かとよ、夢の下に音樂聞え、御陵への贈幣自ら動き出させ給ひ、かやうくの靈勅也。急いで皇子を出家になし、御跡とひて參らせあげよと勅詔ある。基經の卿謹んで、誠に綸言をかへし奉るに候へ共、是は正しく御夢にてぞ候らん。傳へ承る金剛經に一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と候時は、萬に頼なき事を夢の如く影の如く露電の光りの如くと候へば、御告なりとて頼まれず。されば夢を見候を其品十二に分ち候。是皆十二因縁流轉の道理に等しくして、其肝要をあぐる時は三の品に極り候。一つには正夢二つに

は妄夢、三つには思夢と申つゝ人心中におもんばかりの候時は、其氣胸中にむすぼれ脾の臟苦しめ候也。さるによつて其思ひ一心の影になつて必夢見候也。君打續き此比は御佛名を聞し召れ、叡慮陰氣に落ちさせ給ひ候故、かゝる御夢候と才辯貴く勅答有る。主上重ねていやとよ基經、まろが見たるは夢にてなし。あり／＼見し現也。ぜひ／＼皇子を出家になし、多くの御堂を建立し御跡を弔ひ參らせよと、御涙ともろともに再び宜旨有りければ、さしもの基經せんかたなく諸卿の方に打向ひ、兩度の綸言何共勅答申し難し。但かた／＼思し入るの旨有らば、今一度奏聞有り諫め給へと有りけれども、基經の申さるゝ上誰か一言いふ人なく、靜まりかへつて音もなき所に、禁中守護の侍形部太夫秀國の一子依藤太秀郷若年より武勇に長じ、十三歳より昇殿許され今年十九になりけるが、卿の御前に畏まり、近比高位高官をさしおき若輩者の東武士、千萬推參の至ながら仰に仕せ言上仕候。先以て此たび靈勅の事何共愚意におち申さず。尤人死して中有に住し香を食すと申せ共、極善極惡無中有と候へば、極善の靈魂いかでか中有仕らん。先皇正に萬乗の御位なれば則ち十善具はれり。其上天照らす御末人王六十一世の賢王朱雀院と謚り奉れば、是神靈にてわたり給はずや。それ日本は神國也、其神德をふり捨て御出家あれとは候まじ。殊更靈勅有りし時、御尊の下より音樂聞え候よし、猶々心得奉らず。それ音樂を奏する事佛菩

薩の來迎ならでは候まじ。中有に迷はせ給ひしに何の音樂候べき。扱來迎の樂ならば虚空にこそは聞ゆべけれ、御尊の下にて聞え候は察する所爲の所爲にて候らんと、其理を盡し奏すれば、基經卿を始とし一座の諸卿手を打て、よろしき心の付所、尤是はさぞあらんと皆々同じ申さるゝ。關白基經六位を召れ、いかさま秀郷申さるゝ如く何とぞ子細の有るべき間、それ狩り出せと仰も果てず、御階の下を切落しあらはになして見てあれば、何かは知らず暗きより暗きに迷ふ盲人の、樂器を並べ座してあり。スハしれ者よと引出し、御前に引据ゑたり。時に秀郷大音あげ、おのれ何所の何奴ぞ。盲目の分としてかく禁中まで忍び入る、いづれの誰が手引なるぞ。サア眞直に白狀せよ。少も偽る物ならば、坊主頭を踏碎かんと怒らるれば、さん候私は四條あたりに隠れもなき八人の座頭の城雲とて、一人の業として、八人の役をなし興を催すものなるが、どなたかは存ぜぬ共かやうゝに致せとて、大分お金を給はりて深く頼ませ給ふ故、内裏様やら禁裡様やら夢にも知らず参りし也。寒氣の時分長の夜を土中に座して候へば、持病の疝氣さし起り腰腹痛め候也。まつぱら許して給はれと震ひわなゝく計也。秀郷をかしたまられず。尤是はさもあらん。して又御幣の躍りしはいかに。但同類有りやゝと尋ねれば、いやゝ同類とても候はず。是は女の髮筋をいくらもゝもつぎ合せ、天井に細穴明け爰にてかやうに動かせば、さきにて御幣動

あくちもきぬめー乳
臭・黄口などいふに
同じく年少なる事に
いふ。あくちとは小
児の口吻に生ずる小
癢をいふなり。
盗人といへば手を出
す。盗人と咎むれば
實際盗みし者は手は
出して反抗し、却て
己れが盗人たること
を明かにする義の
證。

き候。此外様子は存じ申さず、御詮議相すみ候はゞ早う去なせて給はれと、涙にくれて居たりけり。關白や、御思案あり、いかにも鳴物靈勅はおのれが細工になるべきが、天井より髪筋おろし此幣帛に結び付けしが合點ゆかず。此義いかにと御詮議有る。藤太おつとりさん候かゝる一大事を存立つ義に候へば、あの盲目づれによもや知らせは候まじ。きつと推量仕るに、是は荷前の御使よく御存じ候らんと申さるれば、阿濃の中將つと出で、ヤア粗忽なり秀郷、いまだあくちもきれずして此御大事にさし出、尾籠なり罷しされ。

して又某存すべきとは何を以て申すぞ。藤太からくと打笑ひ、盗人といへば手を出す。扱は御邊に極まりしと言ふより早くとつておつぶせ、胸板をどつかと踏へ、コレサ中將先此荷使の御使は其方請取申されずや、然らば禁裡の御作法にて、其役たらん人の外指さすものも候はず。さすれば御邊が知る筈よ。何と知らぬ言はれうか。有體を申されよ。お公家方の御詮議は御思案過ぎて手間遠也。又武士方の物吟味は少し手ひどく候はん。遅いと微塵に踏碎くかと一きめきむれば、ア、苦しや是なふ秀郷、爰をばそつと緩めてたべ。いかにも様子を詳しく申さん。此たび將門朝家を傾け奉らんと、某方へ窃に來り、八方より押取卷き異議をいはせぬ無理頼み、ぜひなく頼まれ申也。命を助け給はれと涙ぐみてぞ申さるゝ。基經打うなづかせ給ひ、扱は將門逆心とや。いよく尋ぬる子細あり。兩人共

いづな一狐に類する
妖神にて之を使ひて
人を呪ひなぐすとい
ふ。

竹の園―皇族をい
ふ。

に搦め置き禁獄させよと仰付けられ、秀郷を近く召れ、此體ならば築地に定めて一味の多からん。一旦敵のはかりごとに乗せられ、一先皇子を三井寺にて受戒と偽りもてなして、江州眞野の長者迄竊かにうつし申されよ。天下を望む將門なれば、定めて有所は知らせまじ。萬に心を付けらるべし。豐日の皇子御出家と世間に沙汰の有るならば、敵の有所も顯はるべし。禁裡は親父秀國と心を合せて固むる條、氣遣ひあらねなくと、すゝむる智謀勇みぬる武勇の程こそ三重ゆゝしけれ。さる程に常州相馬大手助將門とて猛惡無道の弓取あり。其生れ付異相にして殊には飯綱の魔術を行ひ、大地を潜り虚空を翔り水中火中の自在を得る。世の人は是に歸服して荒人神ともてはやせば、惡行次第に超過して何ぞ王位を傾けんと、本國常陸を立退きて都近なる山陰に黒木の御所とて殿を建て、剩へ此比は平親王將門と、自ら竹の園に登り世の有様を窺ひぬる。ある時將門百官を集め、此度某朝廷を傾け一天を治めんと存立つ所に、早速駈付申さる段旁々もつて祝着せり。追て此勢を催し早々取かけ申さんが、しかし大將たらんものは士卒を損じ失はぬを是第一の秘密とす。さるによつて我居ながら見事な智慧を出し、王位を失ふ手段を作り、阿濃の中將光遠を語らひ八人座頭を忍ばせて、靈勅也と言はせぬればそれを實と思ひてや、今日皇子三井寺へ登山のよし、是計略の當る所、かたゞ道に待伏し先々宮を搦め捕られよ。此驢

夕暮の一言ふにか

當千一騎當千。

日の岡峠—三條城上より山科に至る途中の峠。

混甲す—べて甲冑を帶せし者のみなるをいふ。

霜折—天氣の曇りて寒き事をいへど、こゝは霜柱を言へるならん。

ぎを幸に某内裏を打破り、即時に王位を奪取らんと、平の朝臣信西に三百餘騎を相添へて早打立てと夕暮の、鐘の鳴る音を相圖にて別れ別るゝ三重道直にげに武夫の心かな。かくて藤太秀郷は當千の家の子廿騎計に装束せさせ、御免を蒙り鳳輦昇かせ其身は御跡に引添うたり。扱御籠愛深かりし上總の局長門の局、姉も妹も同じ色同じ姿の御隨身、弓押張り矢かき負ひ太刀脇挟み左右に立ち、君を守護し給ひけるは、誠にやさしき風情也。すでに鳳輦日の岡峠を越えさせ給ふ所に、十善寺の松原より混甲三百餘騎道を過つて立塞がり、是へ臨幸なりけるは一の宮にて渡らせ給ふか、供奉はどなたぞ、御輿を渡さるべし。子細有つて名を名乗らず、渡せ—と呼ばはつた。秀郷を知らぬ顔附にて、ヤア緩急也おのれら、當時日本に隠れなき依藤太が供奉したり。皇子御出家まします故園城寺へ臨幸なる。汝等が留めて何用ある。蛆虫如きのへろ—武者千萬群り來ればとて、此藤太が小指一つに足るべきか。土足に疵のつかざるうち早くそこを逃げ去るべし。但しは命に死花咲き藤太が太刀風待ちけるかと、好む所の五尺八寸眞向にさし翳し堅割胴切車切、高脛諸臍嫌ひなくはらり—と三重薙いで行く。比は極月廿日あまりの雪曇り、暗さは暗し烏羽玉の夜の軍の亂れ足、痛はしや長門の局歩み習はぬ道芝の霜折沓の裏をかき、立つかひもなき羽拔鳥泣くより外の事はなく、並みける松の下枝に辛さ譲りておはします、所へ旅人

腰―祝儀に與ふる金。

わんざくれーまよ。

雁は八百―鵞「雁は八百矢は三文」の略。僅かの資本勢力にて銀貨きものを得る險。

とおぼしくて、きがへかたに樽付けて破魔弓羽子板色々のつきも重しと行きけるを、御局暫しと呼びもどし、コリヤ下々おぬしは何處へ行くものぞ。みづからは都より江州眞野へ通る者、送りてくれよと有りければかの男ねぢ戻り、ハア女子の萬歳樂はて扱早う出られた。なふいかにも送つてやりたいが、こちは津の國難波の者、歌大津奈良屋に居たりやこそふみもなろたよ碓を、百日勤めて年取に在所へ去ぬる者にて有り、今に近江へ行く者が通らう程にと行過るを、御局重ねていやと我はさやうの賤しき者ならず、宮様方に召使はるゝ者なるが、君逆臣に襲はれ給ひ江州眞野へ臨幸ある、所に敵と出合つて皆ちり／＼になりけるぞ。あはれと思へ民草よ、露取らせんと給へば、男おづ／＼傍によりさしのぞき見る御顔ばせ、此世の人共思はれず、いとあてやかに衣の香の薰り零るゝ御面影、田舎で見たる事はなし。そゞろ震うて居たりしが小酒には酔ふわんざくれ、とかく男は氣でせよぢや。雁は八百なんでもあれ口説き落してつれ下り、在所女にしてながめんと思ひ、扱お笑止や痛はしし、併御敵十方に満ち／＼てもはや跡へは戻られまじ。先此度は私等が在所へお下りあり時節を待たせ給ふべし。家は貧しう候とも某隠まへ奉らん。夜寒淋しう候はゞハテ我等が抱いて寝せましょと、お腰にそつと抱付けば二八餘りの一年も過る計のお年配、浮氣盛りや戀盛り、女子心のあどなさよ。賤が詞にほだされて、誠に民と言ふ者を初めて

氣の毒かり—自分の
心の不快なるをいふ
今の用ひ方と異り。

ゆひあひ—言合。

時—閑。

年取り物—正月を迎
ふべき物。

見しが、さりとはほんに優しい美しい武士によう似た者なれど、それがそちらとそれが
ア、いやぢや恐いとの給へば、賤の男何とも氣の毒がり、コレあまりに卑しめ給ふなよ。
此道ばかりは王様もこちとも情に隔てはなし、身共らが戀ぢやとて別に變りはござらぬと、
小腹は立つ也氣を持たせ、オ、恐い在所方お下りなされていらぬ物、さかく近江へ行き給へ。
あら恐ろしや厭らしい關東べいの刺りこかし髻面共が取巻いて、あのゝものゝと言ふなら
ばなんぼ若くと一夜さの内に命があるまいと、荷物擔げて行く袂、じつと捕へて縄り付、
コレナフそれは胴慾な、ハテ此上はどうなりと助けてやいのと宣へば、彼男機嫌を直し、然らば
御供申さんが、いかにとしても御姿賤の連には相應せず、先づ裝束を脱がせ給ひ是召されよ
と綿帽子、有合せしを幸と上を締めたる手拭を、結ぶ片手に帶締めて裾小短う立つたるは、
ぼつとりとしていとしらし。とてももの事にお詞も今よりしては女房共、こちのござれとゆ
ひあひの袖振合はすも三重縁なれや。とは知らずして人々は危うき圍を切抜けて、やう
くとして小關越え山科近くさしかゝれば、討殘されし敵の勢とつて返して追取巻き時を
どつとぞ上げにける。秀郷驚く氣色なく、ハテ死にたがる奴原かな。そも先おのれら度々
の狼藉いかなる望み有りけるぞ。但しは所の山賊なるか、年取り物が欲しいかと憎體に蔑
めば、信西大きに立腹し、イヤ、慮外也秀郷、所の山賊盜人とは眼が眩みて見えざるか。忝

年の内に云々古今
集巻頭の歌。末句
「言はん」。
そめー初と染とかく

くも平親王將門位に望みこれあつて御旗揚げさせ給ふ故、宮の討手に向うたり。世變り時の移りけるは是天性の道理也。急いで宮に自害を勧め降参せよ。さなくば無體に奪ひ取らんと、抜きつれく切かくるを秀郷堪へぬ男にて、イヤ性懲りもなき腰拔め。いでく暇とらせんと、鳳輦にかけ隔たり右手にあひつけ弓手になし、薙りたて捲りたて切立てく三重追ちらし立歸りぬる其隙に、宮は落ちさせ給ひけり。秀郷今は心安しと靜々と立歸るを、信西すかさずとつて返し、賺打に打付くるを、沈んで此方へ飛違へ横手切に薙ぎければ、さしもの信西たまり得ず、跡をも見ずして逃げけるを、袈裟にすつばと打放し、かへす太刀にて首打落し、猶も進む奴原を東西へ追散し、宮の御跡慕ひ行く勢ひ獅子の怒りをなし、鳥獸を追て身を震ひ花に戯れし有様も、かくやあらんと書傳へ今の世迄も言傳へ語り傳ふる物がたり。

第 二

年の内に春は來にけり一年を、去年とやいはん今年とや祝ひそめてき紫の頭挿すてふ枝終、飭るかぎり至今宵こそ獨り寝ぬ夜ことぶけど、妻持たぬ身は名のみなれ。爰に江州眞野の長者の一人姫繼姫と申せしも、けふ節分の神參り雪の晴間を幸に乳母計を伴ひて、忍び

はうりーはふり（説
神、職の名。

やかに三囁くは、何祈るらん神垣や、馬場先近くなる所へはうり一人さしよりて、夢違ひの寶船お厄落しや厄拂ひ、御祈念くくと附添へば、乳母の女房心得て、初穂参らせ祈念頼むと有りければ、ことくしげに印結び、お年は幾つ十六歳、殿御は幾ついや、まだ嫁入はし給はずと、言はせも果てず小腕とり合圖の聲を立合せ、多くの宮つこ走り出で有無を言はせず引立つる。乳母の女房聲を上げ、コハ、狼藉や何事ぞ、出合へくと叫びぬれば、いや喧騒ぎ給ふな。かねて當社の御祭りそなた方にも知らるゝ通り、あけ十六の嫁せざる女初に参るを今日の身御供に供ふる也。もはや嘆きて叶はぬ事と姫君を引立て行く。乳母は詮方涙にくれ、なふお姫様暫く御最期待たせ給へ。今に迎ひに参らんと言捨て屋形に三重歸りけり。かくて宮つこ神前の御手洗川の岸陰に一間四面の床をかき、四方に幣帛切て押立て魚鳥果物繼姫を身御供に供へ刻限を今やくと待居たり。あら痛はしや姫君は思ひよらざる身の難儀、死する命は惜しからねど跡に残りし帚木の、さぞや歎かせ給ふべしと、伏轉び泣くより外の事ぞなき。母は乳母が告ぐるにぞこはそも夢か現か、人目も分かね徒裸足姿あらはに馳付けて、とかうの事はの給はず、縋り付いてぞ歎かる。繼姫涙の隙よりも、御歎きはさる事なれ共、もはや歸らぬ死出の道、草葉に置ける末の露本の雫や世の中のおくれ先立つためし也。必ず歎かせ給ふなと、さも潔くは宣へ共、流石

荒磯波―不有にか
そこなき―其處と
底とかく。

身の成る―實の生る
しかく。

別れの悲しさは、胸にせきくる涙川止かねたる計也、母は猶しも悲しくて。誠に夫の郡司殿身まかり給ふ御時は、とにかくにもなるべきと思ひ定めて有つれ共、そなた一人を老の身の杖に縋れる心地して、歎きながらも樂しびに十六の春秋を、蝶よ花よと守育て、人に優れし生れつき、天晴中宮后にも劣りはせじと悦びを重ね合ふ夫迎へ、二人並べて見るならば、草の陰なる郡司殿さぞや嬉しくおぼされん。いつか―と待つ甲斐も荒磯波のことなき深き淵瀬に入れんとや。玉を欺く一人子を身御供に供へ母獨り、跡に残存へて歎き死ねとの事なるか。いかなる神の託宣にも氏子一人を千金ともかへじ。不憫に思ふとは神も偽給ふかや。恨めしの神心、あさましの浮世やと、親子は顔を見合せてわつと叫ばせ給ひしは、是ぞ哀れのかぎりなる。有りつるほふり神官。げに御道理至極やと共に涙を流しけり。さりながらもはや歎きてかへらぬ道、はやとく―と御手を取り情なく引退くれば、母は猶も縋り付き、心無しとよ方々よ。若木の花を先立てゝつれなく残る老木の花、身の成る果を誰あつて母共親とも呼ぶべきぞ。とても許さぬ道ならば自ら共に沈むべし。放ちばせじと抱き付き聲も惜まず泣き給ふ。姫君餘りの悲しさに、ア、愚か也母上様、人間無常の道理は妾一人に限らぬぞや。必ず歎かせ給ふまじ。自ら故に御命共に捨てさせ給ひては、親に先立つ不孝の上又ぞや不孝重ねつゝ、冥途の障りも恐しし。只とに角に思し切り、

早く歸らせ給へやと詞清しき物ごしも、涙の雨に上疊り、目くれ心も消えくくと伏沈みてこそ歎かるれ。然る所へ藤太秀郷度々の難儀は切抜けしが、長門の局を見失ひ宮姉君の御歎き、兎角せし間に夜は明くる、人目繁しと山傳ひやうく彼處に來りしを、宮づこ共見咎めて、是はどなたの神輿なるぞ。何の爲此宮居へは昇きこみしと、とがくしう怪しむれば、藤太眞先に進み出で、^ヤ狼狽奴の馬鹿面共、是は當今第一の宮豐日の皇子にて渡らせ給ふ。いさゝかの御物忌にて眞野の長者へ臨幸なる。おのれら當社の宮づこなら御道しるべ申すべし。急げく^と睨めつくれば、母は涙にくれながら、御前に走り出で、何宮様とや忝や、自らこそ眞野の郡司が配偶にて候が、代々の御役人と思召れ、假初の御物忌にも御輿入させ給ふ事、世に有難くは存すれ共、一人の姫を當社の神事に供へ、只今命をとられ候。然れば穢れし所をば皇居になさんも勿體なし。此義如何と涙にくれさし俯向いてゐるれば、秀郷一圓合點せず、何共是は心得ず、先神法はともかくも凡そ禁中の諸役人、死罪にもせよ流罪にもせよ、訴へにより關白公其沙汰仰付けらるゝ。どなたに御免を蒙りて人の命はとりけるぞ。惣じて神は正直を表とし慈悲なるを以て神と仰ぐ。して此神はいつの御代いづれの君の勅により、神靈とは崇めけるぞ。垂跡はいかにく。神秘や有らん承らんと反打直し問ひかくれば、宮づこ共震ひく、さん候垂跡神秘はいさ知らず、百年計以前

とつこめ一愚詞。
神名帳一延喜式に出
づ。

服し一食ひ。
遮つて一無理に。

やはらかな一「しや
れたまねたして居た
な」といふ程の意。

とや此山本の川面にて、若き女を幾人か神風に吹取られ、人民歎き煩ふ故所の者共打寄りて、定めて神のお咎めならんとか様に社を建立し、三上大明神と崇め、此節分を神事とし身御供を供へ燦火をたき、御湯御神樂を奏し神慮をすゞしめ候へば、我々が計らひならず、正に神託傳授の神祇、ぜひく古例に任せんと口々に申上れば、藤太大きに氣色を損じ慮外也とつこめら。普天の下率土の内王地にあらぬ所やある。殊更日本神道の事神名帳に明白たり。然共此神は遂に其名を聞及ばず。いづれの御代に奉幣あり大明神とは崇めけるぞ。ほのかに聞く此神道に權神邪神の差別有り。かやうに咎なき人を服し人心を苦しむるは、邪神の邪曲大惡神にてあらざるや、併し遮つて食はんといふ物を止むるも是又殺生也。然る上は、おのればら年比日比安閑に、妻子を養ふ神恩也。サア身御供に供はるべしと、鰐元寛げ追立つれば、是は近比御無理也。許させ給へと涙ながら皆々床にぞ直りける。秀郷くわんくんと打點頭き、オ、よい合點く膳立よし料理もよし、御年忘れと思ひ儲けの爲に來りしと、石の鳥居の片柱手元輕げに振上げて、疊みかけく祠を微塵に打碎く。時に山鳴り川浪は砂を卷上げ卷下し、黒雲覆ふ其中に廿丈計の百足の形、焰を吹立て水底に入れば波風鎮まりぬ。秀郷莞爾と打笑ひ、おのれ年來柔らかな、女食ひし其天罰今月今日報いしな。思ひ知つたか思ひ知れ。是でもうろたへ長居せば、向後藤太が神官勤め堅い鳥

摩醯首羅一色界の頂上に位する天神。

孫臏一顧の外側現今一段低き間。

捕とらんと一原本ノマ。

葛石一殿堂などの壇の上方に用ふる石。
うんざい一人を罵る詞、有財饑鬼の轉訛。
ほでぼし一腕節。

居を參らせんと、かしこへ投捨て立つたりしは、偏へに摩醯首羅王の荒れたる氣色もかくやらん。長者親子は悦びて是ぞ誠に氏の神、あな有難や尊とやな、君々たりししるしぞと、秀郷を伏拜めば、めでたし／＼と、長者親子に案内させ、宮づこ共に鳳輦舁かせ眞野が館へぞ三重移しける。其比禁裡は宮御出家と偽りて諸卿を始め在京の武士、残らず内裏に相詰めて四門を固め守護せらる。中にも形部秀國は老武者なれ共古今の勇士、殊には大將給はつて、清涼殿の孫庇にぞ相詰めらる。扨夜巡りの武士共は、十騎廿騎卅騎役所々々を馳廻る。何としてかは忍びけん平親王將門は、紫宸殿の御庭に入り仁王立にぞ立つたりける。夜廻の武士怪しみて前後左右よりおつ取巻き、何者なるぞと咎めける。彼男物をも言はず、握拳を振上げて片端殿り廻せば、逸男の武士十四五騎手の下に打伏せらる。跡にひかへし鎧武者、七八十騎おつ取巻き捕とらんと掛け共、只大山を押す如く動く氣色はなかりけり。軍勢共肝を潰し是は不思議と身を悶き、捻ぢ倒さんとする所を一度にくわらりと投倒せば、据石捨石葛石或ひは築地門柱に、胸打ひさがれ頭を割られあへなき死をぞ仕たりける。相馬眼をくわつと見開き、尾籠也うんざい共、うぬめら如きのほでぼしに此將門が合ふべきか。命知ずの愚人めらびつくり共動いて見よ、息のねを立てたらば踏殺さんと怒るにぞ、平親王將門と名を聞くさへも恐しく、死残りたる者共も、態とひれ伏し目を閉ぎ死したる

すしな一粹な、殊勝な。
さそくの云々一索早く足さばきをする事

千度の設一中出の破
ち千度よみて斬りし
御札。

征矢一實戦に用ふ
矢。

體にて居たりけり。將門彌氣に乗つて豐日の皇子は出家する、次手に天子を取て流し我帝王と仰がれんと、猶奥深く切込みしは凄じかりける勢ひ也。元來將門案内は知らず爰を跳ね越えかしこを飛び、或は樓に攀登り御階くを打越えて、清涼殿にさしかゝり玉座はいづくと立つ所を、秀國すはとやり過し後さまにしつかと抱き、何者なるぞと引止むれば、すしなおのれが問事よ。平親王將門なるはと言ひもあへず、中に提げ七八間行く所を秀國さそくの足を踏直し、なに平親王將門とや天命知らぬ無道人、此秀國が有らん限りはならぬさせぬと引ずり出す。將門進めば秀國は折を窺ひ組伏せん、打倒さんと諍ひける勢ひ龍虎の洞を穿ち山を崩すにことならず、され共相馬力優り、片手もぢりにとつて投げ首掻切つて捨ててげり。惜しかるべきは年の程五十二歳の夕べの霜終にむら消え給ひけり。將門いよく勝に乗り、あら心よや面白しと、太刀取直しふり擔げ御簾間深く切つて入る。不思議や千度の御稜忽大日光と、影照變つて拜まれ給へば、宮中甚だ光渡り、くるりくくるくとくるめき渡る眩さは、朝日を頂く如く也。さしもの將門眼を明くべきやうもなく、度を失ひて居たりしが、エ、口惜や腹立ちやと、猶も御殿にかけ入る所に、有難や日光又もとの御稜となり、御箱の内よりも白羽の征矢數千筋あらはれ出で、雨の如くに三重射かれば、せんかたなくも將門は行方知らず逃げ失せけり。主上を始め奉り關白基經百官百

寮、虎口の難を遁れ給ふ。是神徳の妙なる所、有難し。神と君との道直に、たえずたふたり日の本の水上清き五十鈴川、流れ流るゝ細石、巖となりて苔のむす迄、かはらぬ御代こそめでたけれ。

第三

平親王將門はいかなる所存有りけるにや、又改めて隠家を江州三上に移さんと、三百餘騎を引具し猶山深くわけ入つて、爰やかしこと見立つるに、野洲川上に一つの嶮岨有りけるを、是究竟の城廓と有所定めぬ柴の庵、結ぶとばかり草深み、岩根の空に枕をそばだて、苔の蔭に袖を敷き、明け行く春を待ち居たり、將門士卒に打向ひ、俄に居所を變ふる段さぞ不審しと思ふらん。子細は某去んぬる夜禁中に忍び入り、天子を失ひ申さんと無二無三に切込む所に、神力の擁護にや宮中光耀きて、何分眼開かれず無念ながらも立歸る。是を見彼を思ふ時は、とかく天子に打向ひ劔戟の勝負なり難し。何とぞ生捕とつて流し世を治むるより外はなし、さりながら天下に名高き倭藤太秀郷が父、形部の太夫秀國は討取たり。然る上は倭藤太定めて我を狙はんと、其妨げを慮ばかりそれ故居所を變へける也。扱てれに付豊日の皇子遁世有りしは偽にて、此江州に忍ぶ由かた。妾を扮しつゝ、何とぞ窺ひ

からせー振させ。

ちゆれはちゆれーち
ぎれるならちぎれ
よ。

申さるべし。たとひ有所を見付けたり共構ひて殺す事なかれ。舟をしつらひ流すべし。必ぬかるな方々と、河内の判官定盛に手廻を相添へて在々所々をぞ三重からせける。とは知らずして秀郷は、長門の局行衛なく紛れ失させ給ひしを、姉君深く歎き給ふ御物思ひを察しつゝ、若も逢瀬や有りなんと、夜半に紛るゝさゞ波や、打出見れば白妙の雪を懸けたる長橋の此方にこそは着きにけれ、時に不思議や波立騒ぎ寒風梢を吹折て物凄じと見る所に、橋上に横たはつて大蛇の形ぞ臥してける。弓と矢持せし戸川の九郎、あら恐しさいふ聲の跡なく倒れ息絶えて、更に性根はなかりけり。秀郷近々と立寄りて、扱珍しの生類やと能々見れば、兩眼は只朝日にことならず、二つ角は冬枯の森の梢にさも似たり。黒鐵の牙上下に生え、震へる舌の紅は炎を吐くかと異しまる。元來秀郷動ぜぬ男大蛇の胸中しつかと踏へ、湖水を眺め悠々たり。大蛇は怒れる氣色を顯し、鬼一口と飛んでかゝるを秀郷得たりとかい潜つて、大の喉下しつかと抱き左右の腕はちげればちげれ、腕も傘も折れよ碎けよ、呑まば胸腹引破り、出なん物をもと思ひ切り、しめ付けゝ勵みあふ。大蛇は八萬四千の鱗逆立て振立て、水中へ取て入らんと背を立つる鱗の音はさら／＼、踏む足音はどろ／＼、どう／＼さら／＼どう／＼、とんどろとどろと踏む足音に、さしもの行桁橋柱崩るゝ如く見えにけり。秀郷もとより無雙の大力少のたゆみを見すまして、手繰り

寄せんとかい摺むを却つて大龍藤太を纏ひ、逆巻く波の引く潮に入て形はなかりけり。轉る
 び臥たる戸川の九郎漸心や付たりけん、自脈とる手を直様に弓と矢持て立上り、君は何
 處にましますぞと、呼べど叫べどおとづれば、松に言問ふ白鷺の鳴くより外はなかりけり。
 戸川漸涙を止め、扱は大蛇にとらはれて深きに沈ませ給ふよな。よし／＼存へ詮もなし、
 只御供と狂ひしがいや待て爰は分別所、某お知らせ申さずば眞野にかくこは御存じなく、
 落失せ給ふと思されん。生きてかひなき命なれ共、一先歸りともかくも成行く果をきはめ
 んと、思ひ定めて涙ながら、此御弓は一生涯御身を離たず常々の御戯れにも、身まかりな
 ば棺に籠めよと候へば、是より手向け奉ると漲る波に言傳て、歎きながらも歸りぬる心の
 内こそ三重哀なれ。かくて秀郷夢となく現心と分け難く、龍の都に入海のおぼつか波の
 森遙心細くも行く所に、日比手馴れし弓と矢の風に揺られて流れ寄る。秀郷やがて拾ひ上
 げ、さるにても此弓は正しく戸川に持せしが是迄來る不思議さよ。扱は九郎も我如く此水
 海に沈みけるか。不憫の者のなれる果淺ましの我身やと、さしにも剛なる秀郷も渡り比ぶ
 る三瀬川、涙にくれて佇みしが、おくれたり迷うたり、弓矢取る身の心的死してもよも
 や逸しはせじ。命とられし恨の一矢大蛇が正中射通して閻魔の帳に訴へんと、思ひ込うだ
 る勢ひにて、波路三重遙かに行く道の末は何所と白波の立重なれる築地に、樓門高く美を盡

みづから―おのづからとあるべし。こじり―棲たるき―の端の金具の飾。

六宮の粉黛―白樂天の長恨歌に「六宮粉黛無顏色」

せり。秀郷聞ゆる不敵者、案内もなくつゝと入り、宮中を眺めやるに瑠璃の砂厚うして、玉を切敷く敷瓦、落花みづから繽紛たり。朱樓紫殿玉の階、玉の欄杆飾りよく、金をもつて小尻とし、銀の柱照耀き、其壯觀綺麗といふもあまり有り。そもいかなる所ぞと暫く休らひける所に、怪しげなる男一人御前に畏り、誠に客人の御入歡感甚だなゝめならず、先々殿に御入あつて御休息候べしと、申上れば秀郷一禮にも及ばず、シテ先づ爰はいかなる所候ぞ。さん候大海龍の都に答ふれば、秀郷驚きこはいかに、龍宮城の習ひには死人を忌むと聞きつるが、かく請待に及びぬるは、扱は某未だ存命なりけるな。珍重く満足せり。さあらば參上申さんとやがて客位に直らるゝ。左右は紫衣の官人共威儀を正し參内す。前後の官女は鏡に海底の珍物をさも堆高う盛り並べ、善を盡せし響應は粧ひすぐれて見えにけり。暫く有つて大龍王花の姿の羅綾を飾り、透眩く出給へば、六宮の粉黛は、顔色無きが如く也。やゝ身じろきて傍に寄り、誠に遙々の波間を越え是迄入らせ給ふ事、世にも嬉しく侍る也。恥かしながら自らは此水底に年久しき龍王の一人姫はりてい神女と申す者、抑此龍宮城開元此方二千餘廻、めでたき都なりけるを、此五年はいかなれば地を争へる敵あり。龍城全う安からず、剩へ父六王敵の爲に失て、残るは自ら一人也。さるによつて神國の武威を頼まんと其ために、貴賤往來を試し見るに主様程な武士はなし。哀とおぼす心有らば

きごつなけー無骨
け。

せき弦一巻きたる糸
に漆をひき漆ごかけ
たる弦。貞丈雜記に
よればせきは關とい
ふ地名よりいふに非
ずして、弦に絹糸を
巻きしひねり目の戻
るを防ぎ雨露に濡れ
ては防ぐ心かれは、
腰弦とかくなりとい
へり。
食ひしめらしし弦を
口にくはへて濡らす
なり。
平野高根一比良の高
嶺。

仇をとりて龍宮の惱みを助け給はれと、涙ぐみたる目遣ひやとんとたれて宣へば、荒木の松の雪折れや、秀郷色に絆をうたれ、それ何よりも安い事、某かくて候上は必ず氣遣有るべからず。たとへば敵鬼王の勢ひあり共、藤太めが矢先にかけ、龍宮安穩ならしめん。若仕おほせなば日の本へ具し参らせ、わが女房に仕が、それが合點で候かときごつなげに宣へば、姫君顔を打赤め、扱もく客人のぬれにうつらぬお詞や、去ながら思はぬを偽かざるあたよりは、實な戀こそ嬉しけれ。自らも下紐を解け参らせ度候へ共、龍宮城の習ひにて餘國の人と枕を並べ、契りをはかす事はなし。許させ給へし有りければ、秀郷重ねていやさ爰にて添はんと言はゞこそ、龍神咎めも有るべけれ。我朝におはせんを誰か咎め申すべし。いさゝせ給へと手をとれば、エ、没義道なお人ぢやは。目の前大事をさしおきて心に染まぬ戀衣、染むると色は候まじ。敵を討て其後はとにもかくにもなり申さん。先々敵を討てたべ。スハ、刻限も程近し、あら恐しと龍神は上を下へと三重かへしあふ。され共秀郷少も騒がず、日比好みし五人張、せき弦かけて食ひ濡し三年竹の節近なるを、十五束三伏に鏃の中子筈本迄、打通たる大の雁股、只一手をば手挟みて今やくと待かけける。平野高根の方より物こそ怪しと窺ひより、能々見れば扱ひかに此比三上の麓より追出したる蜈蚣の形又こそ顯れ出たりけれ。秀郷からくと打笑ひ。何やらんとこそ思ひしに扱は

忽ち立ちにかく。
忘るゝばかり十分
に引絞る形容。
筈を返す一矢が響き
返るないふ。

荒磯―不存にかく。

おのれがなす業わざな。毒虫どくちゅうの分際ぶんざいにて障碍しやうひをなさんは推參也。され共矢比やひも遠ければ今暫く
と待つ所に、不思議や龍宮震動し大風大波忽ちに、渦卷上る水煙雲と成雨なりと成、龍神現あらは
れ惡虫を寄せじ入れじと三重 戦ひけり。秀郷矢比やひやよかりけん、忘るゝ計引絞しほり能引よびて
ひやうど射る。其手應こたへ黒鐵くろがねを射みるが如く筈はずを返して立たざりけり。頼む所は矢一筋南無
八幡大菩薩と同じ矢壺やうをはたさ射る。此矢肩間みけんを誤あやまたず喉下迄射抜いたり。蜈蚣むぐもは射ら
れて安からず、眞一文字に飛んで懸るを飛違とへてはたと切り、返す太刀にてちやうくく
ど切て離せば、波風も治まる都と成にけり。秀郷悦び大音上げ、さしも龍城妨げぬる毒虫
を討取うたり。龍女は何處いづにましますぞ。契約違たがへ給はずは、いざ日の本へ渡り給へと有りけ
れば、神女悦よろこび現はれ出で誠に武威の矢先を以て、龍宮靜謐せいびつなりける時悦よろこび參らせ候也。
自みづからも幾程か君が切なるお心に、迷はぬにてはなけれ共心に叶はぬ事あれば、先此度は許
させ給へ。遠からぬ内日の本にて、必見みえ參らせんと言ふかと思へば水の泡、消えて形は
荒磯の波どうく、と水庭に有りつる玉樓玉殿も、其儘もとの橋上となりてイみ居たりける。
秀郷あまり心ならず杲然ぼうぜんとして立たりしが、傾かたむく日影をつくく見て、扱うは暫しばの現うつの隙日
數立ちしも程知れず、先は長門の御局より宮の御事氣遣はしと、波を見捨つる村鳥の飛ぶ
が如くに 三重 歸りけり。戸川の九郎光定は辛からき命を助かりて、漸々眞野の御所に着き、

秀郷の入水の躰委細に申上げれば、宮御涙と諸共に、我落人の身となりて萬に便なけれ共、藤太一人を頼もしくさりともしこそ思ひしに、扱ははかなく成けるかと御衣を濡らさせ給ふにぞ、上總の局眞野親子共に、袂を濡らしける。折節春を節季候と、山草かざす男共數十人込入りしが、先に進みし荒男覆面ちぎつてつと出で、是に渡らせ給ひけるは豊日の皇子成けるな。平親王將門より河内の判官定盛が御迎に來て有、遁しはやらじと亂れ入る。光定聽て立塞がり。勿體なしおのれら、俵藤太秀郷が守護致し家來戸川が控へしが、それでも汝等が請取るかと討て出れば有つる侍、戸川が跡を防ぎつゝ亂れあひてぞ三重はげみぬる。隙を窺ひ河内判官宮を生捕り奉り、行方もなく失せてげり。かく共知らず戸川九郎彼所を切抜け立歸れば、長者親子も御局もかうくなるはと宣ふにぞ、光定堪らず馳出るを、後れて歸る郎等共先暫と押止め、宮は虜とならせ給へど、天威に恐れ奉るにや御命は取る迄なし、聞けば直様淀伏見宇治川なんどの邊より釘付の舟をしつらひ流し奉る由風聞ず。何とぞ伏見の川傳ひ、御跡慕ひ給ふまじやと申上れば、光定聞ていかにも御供申さんが、只今直に立ち給はゞ又ぞや淀か伏見にて、敵に出合給ふべし。然ば女中の御供申難義の上の難義たり。とかく敵を退けて後より御下り候べし。只御命だに候へばお舟はいつでもこなたの物、先々今宵は年とりて目出度く御立遊ばせと、光定祝ひ奉れば然らば汝とも

いねつむゝ寝るの正月詞。

ひめ始一飛馬始、密事始、癡癡始等語説あり。
かざんで一門出の音便。

長門の局一原本のまゝ。上總の誤なるべし。
白波の一不知にか。白波は盜賊の異名。

かうも能比知らせ參らせよ、いざ先かた／＼稻積まん。明日は長閑き三重

つゞ姫道行

四方の春開き初めぬる初暦、吉書始めと墨黒に濃くも色よく染めなして、着衣始、ひめ始、弓始、舟乗初、馬の乗初、旅始、かどしでよしと壽きて、櫛取初むる初島田、結下髪の御所風は、今の御身に似氣なしと、互ひに直し直されつ、長門の局繼姫は、母諸共に行く道の案内はいさや白波の立ちもしつらん恐しと、戸川の九郎其外の武夫少々具せられて、御館を忍び出給ふ、御有様こそ唯人なれ。まだ仄暗き岩戸關、明けもやすらん雲の根の、紫だちしそなたより梅の開くる音遙か、千里の外も靜かにて、ア、よい春の景色やと、あと振返り眺むれば、山は朝日に化粧して面影寫す鏡山、見えもわかぬを誰が呼びて、名にし近江の名所や、比良の高根の初緑、小松うみだす薄霞、晴間を羽搏つ諸田鶴の、八千世を籠めし竹生島、浪また浪に隔たれど、同じ流れを瀬田の橋、渡りぐるしや、此處こそよ、往來の人を渦巻きて、深き思ひに沈みぬる、水を見るさへ恐しく、手を取り又は目を閉ぢて、走り過れば石山や、歌お寺の鐘の音を聞けばの、／＼、風に／＼ヨイ、つれてのナ、鳴る音の末はこんで、／＼と告げくる、春の心や物の音も、道も朧の苦清水、人は若井と掬

大江―遠ふにかく。
粟津―逢はずにか
く。

葛葉の里―男山の南
方にあり。

べ共、我は別れの水に立つ沖の漂標木よ、明暮と流され舟を戀仵びて、乾く間もなき袖の裏、堅田に通ふ舟人に問へば答ふる御行衛、大江と言へば嬉しきに粟津の森と戯れを言うて過るが憎てさに、睨む目元の露涙、睫毛こさぬを見てとりて、御いとほしと繼姫は、あれく三井の古寺より、此方の方を御覽ぜよ。春を飾りて幾千代と、連理の松竹比翼の下羽交重ねに祝ひしは、世界の戀を一里へ、よせて商ふ所とて男結びの鼻柴垣、結び立られし浮節に、二より歌沈み果てぬる身の憂き勤め、枕よせく契りはあれど、君は來ぬく來ぬかの、お連なり共見まほしや。ア、憂枕我も寝る夜やあらなんと、面恥かしき笑ひ顔、襟に包めば御局我は枕の有りながら、君が別れを慕へばや誰と伏見の夢もないもの、ありし昔は淀鳥羽を寫繪にこそ見もしつれ。今は自ら杖行膝笠をたよりに雪霜や、霰霰に袖朽ちて、追風寒き夜もすがら、神も佛も世も人も、恨み葛葉の里過ぎて、行けば岩間に波越ゆる渚の狩の歸る里、渡り比ぶる渡邊や大江の岸にぞ着き給ふ。

第 四

扱も江州園城寺は阿字顯密の道場、殊更三井の玉水を代々の皇子の産湯に捧げ、寶祚安全民安き目出度き靈場なりけるとて、諸人尊み奉る。時なるかな初春五日朝六つ過ぐる比か

とよ、當番の若僧共御燈をかゝげ莊嚴し、御庭を清めける所に、不思議や目なれぬ寶共講堂の前に飾り、誰が捧ぐとも知れざりき。番僧共肝を潰し、一所にさし寄つて不思議な事がある物かな。宵の六つより明六つまで惣門は固めて置く、外より來べき様もなし。地よりや湧きけん天よりや降りけん、是たゞ事にてよもあらじ。とかくは下にて濟まぬ事、急ぎ訴へ申されよと、阿闍梨にかくと告げけるにぞ、御堂の前に御出あり、具にこれを御覽するに一通の添文あり。何く、今度龍宮城都を爭ふ強敵あり、滅亡既に遠からぬを藤太秀郷の弓勢にて、龍城泰平なりける事諸龍の喜びこれに過ぎず、よつて武功を報ぜんと十種の寶を送り畢んぬ。中にも一つの梵鐘は自ら成佛の爲め當寺へ寄進し奉る。法味をなしてとぶらひ給へと、讀みも終らず阿闍梨御手を打たせ給ひ、さて稀代の事どもこれ佛法の一不思議、有難し、是等の趣き秀郷へ早々届け参らせん。去ながら此比は朝廷のお騒ぎ故、宮様を守り奉り、當國眞野に深く忍びてまします由、窃かに使を立つべきなり。さて今日は最上吉日、鐘の供養を遂ぐべき間、在々所々へ觸をなし、人夫を集め急いで鐘樓へ引上げよと、仰付けられたりければ一々次第に三重觸れにけり。此事よもに隠れもなく、近郷の老若こは有難き御結縁、鐘の綱手に手をかけて、二世安樂を祈らんと皆々御寺に相詰むる。彌勒院の玉若丸佛智坊の八重若、さも清らかに立出でて、采おつ取つて引

立つを見捨て、春霞立つを見すて、雁は花なき里に住みやならへる(古今)

いづれあやめと一源平盛衰記には源三位頼政の作、沙石集には梶原三郎の作と傳へたる歌「五月雨に沼の岩垣水こほていづれあやめと引きぞわづらふ。」(沙石集のは小異あり)共に金葉集「さみだれに沼の岩垣水こほて菰かるべき方も知られず」によりて作りし話ならんといふ。今一聲の一行きやらで山路暮しつ郡公今一聲の聞かまほしさに(拾遺)とけしなさー待選し

かせけり。歌やれ引けや引け春の始の初子の日、君に引かれて萬代と松吹く風も、松吹く風もうらやかに、山より山に引く霞立つを見捨てて行く雁金、暫し止まれ暫し待て、飾り松引く綱も引く、若菜引く野の花を見しよ見せう程に届く聲か、呼べどつれなや雁の傳、引きは返さじ武士の矢走を過る越の海、帆を引く舟の其跡にさつと引たる細波、引くにつれだつ水の泡消えて二度引く虹は、西日眩き眺めなり。扱夏川に引く綱は袂涼しき小村雨、紫そくく杜若、いづれあやめと引きやわづらふ濡色を、分けつゝ行けば長繩手、舟引馬引車引ひく牛も引く、綱を手繰りて打つ鞭は、歌ライカケ中の綱見事よう揃た。やれ中の綱子共、聲をかけぬか時鳥、今一聲の聞かまほしさに夏木立、草も揺がぬ暑き日は蜘蛛の巢をひく軒の端、風鈴ばかりが涼しくて、風蘭常に香を揺ぐ、風の薫りにつれて聞く、田草引く女の揃へ歌、聲を比べて秋近き景色の森に鳴く蟬の、涙の露や染めぬらん。下葉くは色づきて、さながら秋の始め也。歌たそかれは踊り子共の身振や髪のしなぐ、振袖は姿かいとる振らぬは淺黄の帷子、當世塗笠通し紐、しやならくしやならくしと踊り浴衣の袖ひくな。襦は引く共帯ひくな。寝もせぬ帯の解けなば、他に浮名の立ちやせん。仇名立つ共よしや只、來よこ言うたが嬉しくて、眞木の板戸をひかで待つ間の、さても來ぬ夜はとけしなさ、鳴子引く屋に言問へば、雲棚引くと告ぐるにぞ、待つ夜の辛さ腹立ちて、枕引き寄せ眞二

神もうけずや一懸せ
じと御手洗川にせし
みそぎ神はうけずも
なりにけらしも（古今）
降りみ一神無月ふり
みふらずみ定めなき
時雨ぞ冬のはじめな
りける（後撰）
すこと一素琴か。

つに、嫌ふ心のはや嫉^{ねた}み引きもわづらふ折々に、己れ計が露^{つゆ}に寝て、色美はしき朝顔は、引てほかしてかなぐりて、捨てばや水の引きがてにふつつと思ひ切るべきと、誓ひを立てゝ祈る戀神も請^うけずや神無月、降りみ降らずみ定めなく時雨るゝ冬の始には、猶戀しさのいや増^{まさ}り、思ひ重なるゆかしさを、せめての事と引寄せて抱^だいてしめたる心をば、三筋の糸に調ふればつれなや松の木枯^かしは己^{おの}がすごとに引消して、憎いばかりか稀^うに逢^あふ囁^{ささや}きせぬ閨^{ひな}の内、さかく許さぬ、歌鐘を又撞^つけばエ、涙の別れヤッつれなければ共待^{まち}つ宵は、心だよりになる物ぞ。今一引きと聲をかけ力を添へて勇むれど、大盤石を引く如く、少も動く氣色^{けしき}なし。多くの綱子音頭取り、寺中の僧俗諸參詣はいかなる事やらんと、各々不思議をなしにけり。然る所へ秀郷は若黨少々引具し使僧と打つれ來られしを、阿闍梨早くも御覽^{ごらん}じ付け、扱^{さく}も久しや藤太殿先は變らぬ御重年めでたく存候也。それに付かやう／＼の子細にて、龍宮城より御自分へ様々^{さまざま}の贈り物、相届け申さんため申入候所に、早速の御入^{ごい}寺愚僧も満足致したり。誠に武士多き中に武勇に優^{すぐ}れ給ふ故、珍敷龍の都御一覽候上かゝる寶を得給ふ事武運に叶はせ給ふの所、類稀^{るい}なる御働^{ごはたら}き、ちと御物語承らんと有りければ、さん候某義不慮に龍宮世界に至り、毒虫退治仕り弓矢取つては稀有^{けう}有の働^{はたら}き致せ共、宮を奪はれ父を討たせ世に口惜しく存するなり。其上御局長者親子家來戸川を御供にて、御跡慕

ひ給ふ由傳へ承り候政、追馳け奪ひ返さん爲既に打立候所に、使僧に預り罷越候也。只今の折柄なれば寶は御寺へ預け候。先々宮の御行衛心許なく候へば、罷向ひ候條御命恙なき様に、隨分御祈禱有るべしと、言捨てゝ立給ふを阿闍梨重ねて袂を控へ、數々の御寶いかにも預り申すべし。併し一つの梵鐘は常寺へ寄進と候故、鐘樓へ上げんと今朝より大勢立寄り引く所に、いかなる故にや地を離れず、そなたは聞ゆる無双の大兵ちと御力を添へてたべ、偏に頼むと有りければ辭するに及はず秀郷、安き間の御事弓手片手に綱をとり、えいや／＼と引きければ此鐘己れと鳴出し、苦もなく鐘樓へ上りしが、龍王忽ち現はれ出で秀郷に打向ひ、誠に申交しし如く御言の葉の捨て難く、再び現はれ参りしかど、是は浮世の假の姿誠は勢田の長橋にて見候へ申せし大蛇の形、遂に隠れのあらざればとかく妹脊の中々に、添ひ果て申す身にしもあらず、必おぼし切てたべ。扱此十種の寶物は龍宮代々相傳の目出度き寶成けれど、弓矢の恩を報ぜん爲此土へ渡し侍ふ也。又朝敵將門は當國野洲川の川上に、深く忍びて有るぞとよ。急いで勢を催ほし今宵夜討に打ち給へ。自らも共に力を添へて参らせん。早く思し立たれよと、勧め給へば秀郷も心よくうなづき、よくこそ知らせ給ふ物かな。朝敵といひ親の敵有所を存する上からは、即時に討取申さんと、基經卿の御方へ忍びやかに人を走らせ、京勢を待つ其隙に阿闍梨神女に宣ふは、不思

蟹のかるもに云々
蟹のかるもに住む虫
の我からと背をこそ
なめ世をは恨みじ
(古今)

うづ兜一堆高く立派
なる兜。
世々一節にかく。

議の縁にひかれつゝかゝる尊き御寶、當寺へ入らせ給ふ事目のあたりなる奇特かな。傳へ
聞く八歳の龍女は釋尊に寶珠を捧げ、忽南方無垢の成道をこなへし例げに有難や頼もしや
今の龍女もさの如く成佛疑ひ有るべからず。逆の事に此鐘の音を詳しく語り給へと有りけ
れば、其時神女手を合せ、是に付ても彌増に法の力を頼む也。我曠劫の以前より末世の今
に至る迄、五衰江海の海に沈み、蟹の荊藻に住む虫の我から濡らす袂かな、それ撞鐘と言
つば諸佛の御聲を表しつゝ、十二律の響有り。晝夜の刻限告ぐる事生死の命期を示すこ
や。さればにや此鐘は祇園精舎の北面に懸けし鐘にて有りけるを、玄奘三藏渡天の時、龍
神法樂のの其爲に流沙川に沈め給ひしを、守護して今に至る也。我此鐘を撞初めて、一切
衆生の冥闇を晴らさんと、東方に廻りて鐘をつけば諸行無常の響あり。扱南方は是生滅
法、西方に向へば又生滅々己、北方は寂滅爲樂と撞けば、其聲心耳を澄まし聞く人菩提に至
る也。扱秀郷へは金銀瑠璃水切と名けたる浪の鎧にうづ兜、是を着する其時は廿七丁が其
中は、水中あたる平地の如し。また邯鄲の玉枕二股竹の世々を経て、裁て共盡きぬ唐錦、
一つの俵に五穀を納め取れども酌め共量れ共、盡きぬ泉の酒の壺一獻酌んで軍神、祝うて
打立つ人々よ、自らも止まりて軍の下知をなすべきと、宣ふ聲と諸共に搔消す如く失せ給
ふ。形は有りつるうづ甲に小龍残り止まりける、末の世迄も武士の甲の鉢に龍頭、此時よ

當今一今天皇。

すもり一古歌などにては辭化せぬ卵をいへど、こゝは番人などの意。

りの三重例也。すでに京勢三萬餘騎、三上の嶽に攀登つて関をどつとぞ上げにける。山には思ひよらざれ共、物に馴れたる軍勢共同関の聲を合せ、石堂彌五郎くれぬの兵藤坂口に突立ち、何者なれば慮外者、平親王將門の御前也。馬より下りて意趣を申せと呼ばはつたり。秀郷眞先に駒駟寄せ、いや舌長なりおのれら、當今の勅を蒙り形部太夫秀國が一子俵藤太が向ひしぞ。將門が逆心以ての外の逆鱗也。急いで切腹仕れ。さなくば藤太が山を崩し谷の巢守になすべきと、鞍橋に突立てば將門につこと打笑ひ、一、小癩な奴が有る者かな。あれ打擡げ者共と鎗を振立て下知すれば、兩勢互に群りあひ追つつ返しつ 三重 戦ひけり。山には無勢といひながら大將將門魔術を行ひ、山頂に水を湛へ河水に炎を吹きければ、寄手は是に氣を奪はれ少し白けて見えにけり。所へ七尺豊の法師二人黒革緘の鎧を着、素頭に鉢卷しめ氷の如き長刀を、馬手の小脇にひつそばめゆらりと歩み出で、是は當國園城寺に随れもなき光明坊遍照坊修羅道萬人切の開闢也。御信心の方々は參詣あれと待ちかけたり。石堂彌五郎くれぬの兵藤憎き法師の雜言いで物見せんとつとより、萬人切のお出家達心ざし也受け給へと、疊みかけ切懸くるを込む手につけ入り開く手に、さらりと拂へば水の波車切にぞ成てける。礪波早川松浦の者共遁さぬ引くなど追懸くる。二人の法師ふり歸り大勢づれの御參詣、近比殊勝に存する也。いでお剃刀頂かせ、法體させんと

打笑ひ、八方八花木末の風はらりくと薙倒し、味方の陣へ引たるは心地よくこそ見えて
けれ。寄手の勢は勝味に進み備へを破つて我一と、嶮阻惡所の嫌ひなく續きてこそは攻寄
せたり。大將將門イヤ物臭い奴原、一追追うて夜軍の眠り晴しをして見せんと、一丈餘りの鐵
の棒輕々と提げ、打て出でしが不思議や左右も同じ將門立並びて打挫ぐ、音は山河に飮し
て百千のなる雷、一度に落つるが如くにて凄まじかりし三童働きなり。將門の一軍に都
勢一萬餘騎同枕に薙倒し、有りし所へ立歸るは本身計ぞ立たりける。所を秀郷遙に見付け
勢をもつれず只一騎、岨を傳ひにつつと寄り馬手の脇より當てゝ組む。將門すはやと組み
直し、何者なれば卑怯者、其名を名乗つて勝負をせよ。誰とはおるか藤太秀郷、親の敵君
の敵遁さじ物をと、鎧の上帯ちぎる計ぞしめたりける。將門弓手の足踏直し向ふへきりゝ
と振廻し、おのれは聞ゆる健氣者餘程こたへて面白し。親秀國も手にかけたり、一所に冥途
の跡を追ひ、死出三途をも追越せと嵩にかゝつて押懸けたり。秀郷彼奴を仕損じては一期
の浮沈と思ひ定め、汗を出して組んでける。彼方へ押伏せ此方へ捻伏せ暫し勝負も知れざ
りしが、秀郷力や強かりけん難なくかしこへ取つて投げ、首を搔かんとする所に弓手馬手
より小腕取り、平親王將門なるはと口々に呼ばはれば、さしもの秀郷ぎよつとして、ヤア
將門が幾人ある。ム、汝等は郎等ごさめれど、星の光に透し見ればいづれも同じ將門、是

大事の手―急所の負傷。

夕波に一言ふにか。
尊まざらぬは―はまざるはの誤。

は不思議と思へ共何分是も遁されずと、二人を引寄せ組伏せん組倒さんとする隙に、下なる將門つとと抜け山の頭頂に立たりけり。秀郷是には眼も附けず二人の敵を取つて伏せ、首を切らんとしてげれば、人にもあらぬ埋れ木の切株計を取て押へ、敵は消えて行方なし。南無三寶と振仰向き彼處を見れば、コハいかに、三人一所に立並び嘲笑うてぞ居たりける。秀郷あまりの本意無さに鐵壁の心も落ち、呆れて佇みたる所に、龍王弓と矢携へて影の如く顯はれ出で、彼は分身自在を得誠の姿を人に知らせず、其上總身鐵身にて切る共突く共叶ふまじ。弓手の鬚先三寸に肉身少つゞきたり。是を矢壺に射て落し早く本望遂げ給へ。自らは宜き時分龍燈掲げ見せ申さん。幾人立つ共人影有るが將門ぞ。是を相圖に討ち給へと又こそ消え失せ給ひけれ。秀郷是に力を得相圖の火影を待つ所に、はや龍燈の影ほのかに見ゆる所を引しほり、思ふ矢壺をはたと射る。矢先は馬手の小耳下裏搔いて射通したり。將門暫しは堪へたれ共大事の手なればたまりもあへず、眞逆様に落ちければ二人の居影は消え失せぬ。秀郷透さず首打落し切先にさし貫き、鬼神と呼ばれぬる平親王將門を、倭藤太が討取つたりと呼ばはり給へば、野洲川に龍神二度顯れ出で、めでたし―藤太殿、是迄なりと夕波に入て形も無き跡を、名殘惜しげに秀郷は見歸り―それよりも、官軍引具し凱陣ある。唐土天竺我朝に、類稀なる勇士やと、貴賤老若おしなべて尊まざらぬはな

かりけり。

第五

世の中の妹脊の縁と松苗は、吹運れて行く風次第落る所が住所也。扱も長門の御局は思ひもよらぬ戀草の、根から解きし帶ならねど、丸寢ばかりもならぬ夜の枕一つをあひ逢へば、いつ馴染むとはなけれ共、威す恐さと賺す子に、つい絆されて賤の女となるも不思議の縁也。寢せば寢す世の習ひ、馴れぬ手業の袖濡れて、手桶片手に水掬ひ荒屋に歸らせ給ひけり。折節姉の御局は長者親子に誘はれ、戸川九郎御供にて尋廻らせ給ひしが、互にそれと見るよりも思はず知らず抱き付き、わつと叫ばせ給ひけり。やゝあつて長門の局、去んぬる亂の落足に後れて行かん便なく、既に命も危うかりしを、此屋の主に助けられ是迄は落延びたり。其後御跡慕はんと千度百度勇め共、はや都には關据り人の往來もならざる由、今日よ明日よと思ふ内恥かしながら自らは主の男と夫婦になり、かゝる所に日を送り、今更御目にかゝる事姉様のお心には、淫奔故とおぼされん。エ、口惜しや死にたやと歎き狂はせ給ひしを、御局は笑止がり全くさうは思はぬぞや。惣じての妹脊の縁、是いたづらの外ぞかし。とするも又かくするも皆神達の結ぶの縁、殊には命の親なるぞ。父様や母様の此世に

在^{まじ}す身ではなし。兄弟^{ふたり}としては只二人、短氣な心を持たず共、とかく男を大切に随分共いとしほがりや。それに付宮様はかうくならせ給ふはと、秀郷の入水の事又は御身の只ならぬ、憂^{うれ}きも辛^{つら}さも立ちながら、語合はさせ給ひつゝ又御涙せきあへず。所へ藤太秀郷は禁中より直^{すくま}様に御迎の爲下られける。基經卿の御長男大納言基忠卿公卿は以上十七人、隨兵は三千餘騎御輿車やり續け、すでにかしこへ着き給ひ是はくとばかり也。主^{あるじ}の男それとは知らず、かいづかに御衣冠引懸け我屋に歸り、人々を見るよりも是はいかにと騒^{さわ}ぎあふ。長門の局立寄りてかやうくと宣へば、コハ何とせん恐しやと御衣と冠を持ちながら狼^{うらた}狼へ廻る計也。秀郷立寄りは々あるじ、先以て此度は御局の命を助け、其上隠まへ置かるゝ段近比く神^{しん}妙^{めう}の至り、且又此装束いかなる子細にておことが手には入りけるぞ。思ひ合する事のあり、詳しく様子を承らん。見れば家居は荒れたれ共屋敷どり廣かりしが、先祖は何といふ者ぞ。便^{すべ}によりて召上られん。眞直^{まっすけ}に申さるべし。さん候廣田の彌傳次と申す者、父は廣田の長者と呼ばれ代々有^{あり}徳^{とく}の者なりしが、私幼少成^{なり}ける比父母深く佛神を貴^{たつみ}み多くの寶^{たから}を明^{あけ}暮^{くれ}と三寶に供養し、貧しき者に寶を分け、もはや正^{しやう}眞^{じん}の慈悲倒れ、か様の躰と罷^{なり}成^{なり}賤^{せん}しき業^{わざ}に命を繋ぎ候か、今日も沖に出入津の舟に商し、家路へ歸候刻何かは知らず釘付^{くわ}く小舟一艘流れ來り、あれなる浮^{うき}巢^すの岩に着く、内より是を着^き是^はを冠^{かむ}り、女共又男

共え知れぬ者が現はれ出で、岩の上にて四方を拜み、此二色を潔標木に懸け、身を投げ空しく成て候。幸是はよき襦袢よき懸燈蓋なんめりと、そつと拾うて参りし也。盗物では候はずと御前にさし出せば、人々驚き横手を打ち。扱は疑ふ所なし。しなしたりく、淺まし御事やと御落涙は限りなし。中にも上總の御局は御涙の下よりも、扱々是非なき事共や。去ながら秀郷も一度入水有りけれど、戻られし例もあり。何とぞ浮巢の岩ほ迄、我をば連れて行きやとて嘆き口説かせ給ふにぞ、秀郷御側に立寄りて、御歎きの段御尤、然らば御供申さんと皆々船に乗せ奉り、主の長が案内にて漕がれ、出させ 三重 給ひけり。彼處になればとある岩まに御船を寄せ、もしは空しき御屍もや上らせ給ふ事あらんと、波間を眺めゐる所に、不思議や皇子海上に浮み出させ給ひつゝ、誠に是迄跡を慕ひ、遙々下る心ざしこそ嬉しけれ。去ながら我は是、攝津の國西の宮に年久しき三郎えびすなりけるが、此度天子に御難あり玉躰に變らん爲、豐日の皇子と再來せり。故は神代の其昔八頭の大蛇といへるもの、此日の本を魔界になさんと障碍をなす。時に素戔鳴行き向つて難なく大蛇を打従へ、日本靜謐なりける事星霜遙かに越たりけり。然る所に大蛇が悪靈平親王將門となり、三上の邪神を語らひまた神國に仇をなす。さるによつて素戔鳴今秀郷と分身して、是を退治し世を治む。又繼姫は稻田姫、いよく今も夫婦となり朝家を守護し申すべし。

正月吉祥日

そもく我をえびすといへる事、そのかみ天神七代の第一國常立の尊始めて天の御銚を下し、此海底に國や有らんと探り給ふ。その逆銚の一雫落ち固まりて嶋と成、淡路を國の始とす。其第一より三代は、男の姿計にて女といへる事はなし。第四にあたり給ひぬる宇比地邇の尊より湊母陀流の六代まで、男女の姿は有りながら夫婦婚合あらざりしが、第七代の伊邪那岐伊邪那美天の浮橋の御許にて、始めて夫婦の交合あり、一女三男を産み給ふ。所謂日の神・月の神・水蛭子・素戔鳴、是兄弟の始めなり。先姊尊日の神を此國の主とし天照大神。其次は月の神山を守つて高野なる丹生大明神これなりけり。第三は蛭子皇子われ三年まで足立たず、さるによつて姉尊天の岩橿舟に乗せ、此止まらん所にて海里を守れよと、西海に押流れ波路遙かに津の國や西の宮居に世々を経て、富を施こす神となる。扱當年は此所都の吉方に當りぬれば、今より後は此浦に宮造りして影を残し、猶々富貴萬福を諸人に授け得せんと、蛭子は波の満潮に入らせ給へば 三重 其まゝに、三郎えびすと拜まれ給ふ。主が家の衰へも再び富家と榮えつゝ、七珍萬寶満ちたり。されば皇子の御神託基忠の卿白紙を綴ち、寫して禁裏へ捧げ給ふ。是ぞ日記の始めなる。祝ひを末の世々までも金銀米錢大福帳、正月十日の帳始め萬の寶かき取りて、納まる宿こそめでたけれ。

右此本者依爲懸望文句音節等悉校合加秘蜜令開版者也

竹 本 義 太 夫

京二條通寺町西入町北側

山 本 九 兵 衛 板

大阪高麗橋一丁目

山 本 九 右 衛 門 板

曆



「寡獨」孟子に出る語。
罷——腰曲り背高き病なり。史記平原君傳に臣不幸有罷之病と見ゆ。

さんれい——三令か。
三令は日令・月令・時令をいふ。

曆

乾坤開け萬物生ず。形象饒かなる時津國、抑人皇四十一代は持統天皇と祝し、世の御政正しく、くわんけん寡獨を憐み、ひつじんじつ罷廢殘疾を救はせ給へば、諸天の恵み久方の太上天皇とはじめて崇め奉る。朝暮玉座の左右には、大納言の輔少納言の輔二百餘人の宮女まで、衣紋のかざし色映えて御殿輝くばかり也。時の關白には鷹司の公經に従ひ、諸卿冠を上げざりき。扱又天下の記録者として三條前中納言兼政・大伴、朝臣忠賴此兩家として、國土の善惡を糾され治まる時も今日は早白鳳二年卯月一日に成りしかば、上一人より萬民まで着更へて今朝の薄衣錦の袂翫へす。春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天の香山と、御製の風か曙も未だ霞の八重立ちて、夏の風情はなかりけり。實に去年詠みし歌の様、此景色には本意なからんとの宣旨也。かゝる折節天文の博士木津良ノ廣信傳奏を以つて奏するは、そのかみ欽明天皇の御宇に新羅百濟國より曆の秘書を渡し畢んぬ。それより世々を経て例へば日月のめぐり、又は節の變る事つらく是を考ふるに、一年の行事にさへ一日四分度の一程縮まり候。さるによつて萬木千草の開落まで悉く違ひ、時候さんれい切ならず。願はくは新曆

筋なき腹―身分賤し
き女の腹。

梟松桂云々―梟松
桂枝孤藏園菊叢（白
氏文集）。

繫がぬ玉―涙。

の二卷元嘉曆儀鳳曆にして年中晝夜の呼吸まで審かに仕うまつりなば、萬人の喜び末世の重寶是に過ぎずと言上す。君聞召され、誠に欽明の曆書程經れば此度曆の改正すべし。則當國の大社なれば三輪と春日に參詣し、萬神慮に任すべしと兼政忠頼に勅命有り御簾は下らせ三重給ひける。古き軒端に名を埋む高橋宰相吉連とて先帝天武に仕へ給ふ人なるが、定めなき世の定めとて廿二歳にて死し給ふ。されども筋なき腹に忘形見の姫君つい宿らせ給ひ、蘭帳の内に銀燭の光りを受け、秋の夜月も明けやすく春さへ日影暮れ早く、あてなる遊び品かへて、玉琴玉筆玉手箱悔しや昔忍ぶの草、宿はさながら野と成りて、梟松桂の風の外高家の一類もましまさねば、吉連の息女ぞと申し上ぐべき便りもなく侍人迄見捨て行きしに、やうく乳母の玉水が流れを汲みて源を濁さず、嬰兒總角の御時より育て奉りて慈しみ、娥皇女英の古を欺き、見し人消ゆる露なれば、朝顔の姫と御名をなかばに變へけるが、今思へばよしなやな。所もしかも朝日の里此儘萎ませ給ふかや。我こそ賤しき腹を貸し奉れ、父の御名は朽ちまじと薦たけて匂やか成る顔ばせより、繫がぬ玉をはらくこぼし、ア、扱うたての憂身の今、さりとは恨めしや歎かし辛し悲しやと、暫し魂なかりけり。姫も思ひは諸聲の沈みは果てず袖の淵、水なき里にかなはぬは包むに洩るゝ涙川、渡りかねたる高橋の家は絶え行く女ぞと、身の上恨む明暮の、せめてや憂きを

遠く遊ばず、論語の
愛をせに云々一聞か
ずともこゝをせにせ
む時島山田の原の杉
の村立（西行、新古
今）。

男子して一男子がの
意。

一つなる口一杯酒
が飲める口。

忘るゝと、手飼の鳥の馴染籠鳥の雲を戀はざる有様は實にも優しう見えにけり。されども
此度一天の君の御恵み深き故、生けるを放てと觸れければ力及ばず、姫君は汝も名残の今
ぞとて手づから籠を開け給へば、遠く遊ばず卯の花の亂れし枝に羽を垂れて、爰を瀬に瀬
にほとゝぎす様々聲を三重重ねける。かゝる所にかつて目馴れぬ田夫野人、とがり楞に鎌
を携へ打連れて來りしが、此鳥を見付け何の苦もなく捕へしを姫は垣間見走り出で、なふ
それやこちのぢやが何故捕りやる。田夫共聞きも敢へず、何羽の有る物をこちのとはどこ
から許しを取られけるぞ。扱も世界を我儘なる言分と、一度にとつと笑ひけり。げに尤也、
去ながら心有ての放ち鳥ひらに許せと有ければ、小憎き男子して、心有りまは此の男の内
何れか思ひつき給ふ。相性よくば入聲にといへば、又一人進み出で、いや／＼無用の縁組
如何なる賤しき女ぢやも知れず。兎角論を止めて今日立つ市の味酒も今宵は是を肴にと、
一つなる口々に雑言はけば姫君堪ふるに堪へられず、守刀を抜きそばめ打つてかゝれば田
夫ども、いや大膽なる小女郎め。只打殺せとひしめく所へ、兼政春日の下向也しが此由を御
覽じて、やあ／＼こは何事ぞと宣へば、母はお馬に縋り始終を申上ぐれば、扱々につく
き爲業かな。王城近く有りながら今度の御觸聞かざるか。殊更人家の狼藉かれこれ以て重
罪也。一人も遁すなと宣ふ聲に驚き、皆散り／＼に逃げてけり。母は餘りの嬉しさに、扱

うの花―心愛と卯と
かく。

さんこー不詳。

有難やお蔭にて姫を一人まうけしと、手を合はせ禮拜すれば、
ひながら、姫君に移し心の遺瀨なく、胸ときめけど如何にとも詞をかくべきよすがなく、
扱も咲きたる卯の花かな。あれ一枝給はれかし、土産にせんと宜へば、あつと答へて姫君
惜しげもなく手折りつゝ差出せしが、暫らく扣へ持ちたる花を打眺め、うつゝなや自らは日
蔭に萎む身にし故、明暮心うの花と眺めをりしに縁とて都へ貰はれ行きぬるか。扱羨しあ
やかり物と、しをくとして差出す手を花共にじつと締め、いや此花は媒介よ。誠は御身
の花の顔幾重に思ふ縁の紐、障りなき時蔭に來て、姿の蕾手折らんに必ず忘れな忘れじと、
互に詞を残しつゝ別れくゝて三重歸らるゝ。去程に大伴の朝臣忠頼は一家一族召集め、此
度記録の兩家とて曆の改正仰せ付けられ、兼政は儀鳳曆、某は元嘉曆を差上げしに、兼政
が儀鳳曆拔群勝り一々道理に徹し言句絶すの所也と、是に御詮議極り、則兼政を飛鳥の大
納言に任ぜらるゝ事全く彼が學徳の厚きにあらず。是皆關白公經が取持つ故也。其上重ね
て宣旨有り、富士の高嶺に五丈八尺の銅の柱を立て、三日三夜の晴天を見合はするよし、
彼は以て當家の滅亡、所詮兼政と刺違浮へ世の妄執はらさんと、思ひ定めて暇乞各々さんこ
靜まれり。爰に豊油の虎若とて忠頼が甥なりしが、世上の人を人共せず公家共武家共片付
かね傍若の嗚呼の者進み出て申す様、御憤り至極せり。さりながら死して二度歸る身でな

公界十年―遊女の年期は普通十年と定まれり。

第二

15

せはしくもいませよ
りせはとかけてつ
けたり。
あとより遺手の一古
今集「枕よりあとよ
り戀のせめ來れば」
の歌をもげる。

身あがり遊女が自
ら揚代を出して休む
こと
中戸一情八と會ふに
は多く中戸にて首尾
するなり。

死一倍親死したる
時元金を倍にして返
す契約にて借る金。

わつさりと一賑に陽
氣に。

正月買一正月に女郎
を買ふこと。

め禿の時はずたるなり。扱水揚の初姿髪も形も替小袖、しゃならくくくく歩み行く。
素足素顔のなやかに、昨日に變り今日よりは宿屋の噂も様つけて呼びましや。おうお立
ちなされませはしくも、あとより遺手のせめくれば仕舞太鼓の遺瀬なく、紋日く物思
ひ、頼む方なき男あまの冷泉節幾度沈む身あがりの、鐘の別れやまだ夜深きに捨てゝ行かる
ゝ床離れ、好いた男は寝ても覺めても夢にも更に忘れず、格子叩くを合圖にて戀の中戸
の腰掛や、是さゝやきの橋となり忍びくの間夫狂ひ、たとと氣毒有る時はいつを殺して
貰ひたや。ア、まゝならぬ世の中に、思はぬ客にも逢はねばならぬ三瀬川流れの身こそ悲
しけれ。それさへあるに無理口舌、言葉の山に登り詰め書ける誓紙も聞き馴れて、神も罰
をば當て給はず。例へば爪をはなつとて誠の爪とな思しそよ。諸譯知らずのお敵達、賢顔
をばし給へどこの仲間の仕掛にて遂に身代疊まする。ましてや親にかゝりなど、死一倍
も借りたえて、所の住居もならざると聞けば我からわが心、思ひ廻せば恐しと思ふばかり
ぞ誠なる。扱親方の手前より四度の仕着の其外は、皆借錢と積り行く。年の暮過ぎわつさ
りと、正月買の初君は神ぞいとしさかはゆさの、餘りくそれながら、更に勤めと思はれ
ず。あはれ子の日の松ならば根引になりて凌ぎ来る廓の苦患を遁れんと、嘘に誠の物語隨
分洒落たる男共、それはさうよき不便がり白けて座敷は三重見えにけり。かゝる所に虎若宇

細道ながら一葦屋の縁。

ゆふつゆ一言ふと夕とかく。露は祝儀のこと。

通者一粹人。

さはりませうーさーれし盃を受けぬ時ーさはつたーと言ひてことわるなり。こみつくー手強くやりつめること。

右衛門ざゝめきて、葦屋は是かと内に入る。細道ながらお通りと、亭主が輕口聞き捨て、ばつと座敷に居流れ、扱内儀呼出し近付に成り、新七が知る如く身共らは此里嘗て不案内萬事頼むとゆふ露を重く打てば押戴き、先づお慰みに女郎様がたを借りてお目にかけうといふ。いやさ借り者はむつかしき。此所にて随分張強き太夫を逗留中の約束せよ。畏り候と、女房立てば亭主が代り、間はす語りの高笑ひ追従たらしく申しけり。時に虎若いふやうはそちは通りものさうなれば、若し都へ上りし時必ず尋ねて來れ。我は三條、大納言兼政といふもの、それなるは聞きも及ばん木津良の廣信とて日本名譽の博士なり。此度勅を受け富士にて天の氣を計る。必ず爰へ來たる事人に沙汰ばししてくれな。是は某が自作自筆さ、かの兼政の遊ばせし色紙を亭主に取らすれば、有難し。子孫までの寶也。やれ先づお銚子くんと手をはたく叩く所へ、松の位の名も高き三歌。三夕ゆるぎ出で、上座に居流れ、三夕は先づ盃を改めて虎若に差しければ、こは珍しと一つ受け、乾して戻せば三夕、爰は一つさはりませう。虎若眼を据ゑ何人のさす盃突き返すは慮外也。飲むと飲ませうが飲まずともこみつけん、腕を捲つて肘を張る。噺は輕薄笑ひして、いやは殿様、此所の習ひにてお一つ上げたき挨拶と、様々上手を盡せども、いやさ未だ馴染もなきに何の一つ。所詮我を振らんたくみ八幡其手は喰はぬといふ。三夕からくと打笑ひ、扱々素

いお客何共知れぬ仕懸かな。新七さらばと立ちけるを、取つて押伏せ何素いとは誰が事ぞ。白くて悪くは赤くせんと、三歌諸共引寄せて耳をそぎ髪切れば、こは狼藉と騒ぎつゝ、手々に棒を提げ遁すまじきとひしめけば、いや推参なりおのれらと薙ぎければ、わつというて逃げし間に、首尾こそよけれ宇右衛門と打連れ都に逃げ歸る虎若が仕業の程、見る者聞く者おしなべ皆憎まぬ人こそなかりけれ。

第三

月の影二つ一箇曲松
風「月は一つ影は二
つ満つ汐の」
吉野は磯一之に比す
れは吉野も劣れりと
の意。
鳴澤一磯になるとか
く。
夕附日一言ふにか

眺めなり富士は日本の蓬萊山、嶺は削り成せるが如く其高さ測られず。かくて兼政廣信は勅命に従ひて、行屋に入る月出る日を考へ、陰陽の高樓登りて見れば、甲斐嶺に今日も白雲立ちにけり。先正月の山の姿細眉作る薄霞、春山笑ふかと思はれ聲の鶯、初朝の雪まだ残る竹取の翁が娘の所縁かや。誰が結び置く玉篠の去年の葉の戀の道、覺えて迷はぬ人もなし。二月は雲に入る鳥の別れや歎く涅槃の空、釋迦は遺水遠近の峯は八葉ともいへり。喜見城の遊樂も心の月の影二つ、満つ潮を擔ひつるゝや田子の浦、東掲げの汐衣、暇波間の憂き仕業、彌生は花の吹雪吉野は磯に鳴澤の、景を都に優女、駕籠立てさせて此所只は本意無と夕附日、西に傾き入間川、平家水に音有り松に聲、旅の寢覺と名付けたる琵琶

水車の一東山殿追善館には「水くさの」となれり。
扇面逆しまの云々
石川丈山の詩句「白扇倒懸東海天」による。東山追善館には「せんめんぎやくのびさん也」とあり。
川社一六月祓の時川の邊に假に設くる神棚。
懺悔々々東山殿追善館には「さんびく六根罪障おしめ」に八十八金剛童子とあり。
其夜降りつゝ萬葉の歌による。
松原城にて東山殿追善館「松原こえて松原こえて」
望月一持ちにかく。五千里の外云々
白樂天の詩「三夜中新月色、二千里外故人心」その心より心詞とつゞけたり。
望月一聞にかく。牧の詩句による。
風の森一駿河國安倍川源科川の邊にあり

かき鳴して歌ひける。白日青天も頼まれず、臘の夜の山見えぬは、人の心の雲、櫻に嵐、月に雨、世にや哀れのまさるらん。卯月はさくや水車の浮島が原行く螢、里の童の打とめて、光りを埋む玉澤の、水鶏やたゞく川遊び、淺瀬の沼の花がつみ、笛に太鼓に風車、おのがさま、日暮しや、五月の空は梅の雨、晴間の山を繪にかきて、いざ唐土の人に見せん扇面逆しまの美山也と譬へてこゝに詩を作る、世々の歌人の眞砂の種、神代に蒔きて盡きせざる末は興津の川社。扱六月は富士詣、白衣の袖はさながら雪、難行難所攀ぢ登る懺悔々々六根懺悔おしめに八大金剛童子、南無淺間大菩薩、さつと消えにし罪科も其夜降りつゝ絶えぬ氷室の谷深し。七月は七夕の逢瀬ありとやいざ來て三保の師歌松原越えて、清見寺鐘の拍子がちやん、くとして扱面白面白いぞや類なき、名を望月の今宵しも、二千里の外故人の心詞もいかで及ばんと、眺に倦かぬ中空に初雁金の雲間より、ちらちらとつれて鳴く音を菊月は、四方の山々色どりて、今車を停めて坐に愛す
楓林の暮、紅葉を焼けば煙の山、是煖めて飲む時は劉伯倫が樂みも、遂に事足る盃、三國一ぢや酒になりすまいた。扱十月は山路昨日時雨して、急ぐ足柄箱根なる、葉守の神の端籬も梢淋しく、霜月は猶木枯の森の下枝の白妙に、それとも知れすすくみ驚、身の色翻す
曙に、せはしき聲の枕より、旅泊の夢の覺めて行く年の暮には、野も山も雪に風情を奪

南殿には陰陽師云々
以下宮中追儼の儀
式のさまなり。

御所染―寛永の頃女
院のお好みによりて
染められたりといふ
上品なる染色をい
ふ。
結文―立文に對して
略式の手紙。

はれて、かれくしばねふりける。それが上にも雲霞のとだえ無く願ひの晴天有らざれば、兼政廣信心中に南無大日大權現、衆生の爲めの御方便奇特を顯はし給へやと、天に向つて祈らるゝ、時に風雲晴れ續き、日月和光のめぐりをつもつて喜び、勇み山下有り大和の國へぞ三重急がるゝ。是は扱置すでに其年も除夜の暮にぞなりにける。大内の御儀式松立て飾り御垣守衛士の焚く火の耀き、南殿には陰陽師集りて祭文を讀上ぐれば、仙華門には大舍人寮鬼の形を三重勤めける。殿上人は桃の弓に葦の矢を番ひつゝ邪氣を射拂ひ給ひける。抑追儼といふ事は年中の疫を拂へる行事也。扱御吉例の衣配、禁裡の御作法官女の宮仕に帥の典侍とおはせしに、かの朝顔の姬父の御名を深く隠し、帥の典侍に従ひ御名を宮内とかへさせられ、官女の業を習ひ給ふに勝れて賢くましますば、帥の典侍も頼もしく、我もはやよる年の物事うとく成ねれば、新院様の御事どもそなたに頼み参らすべし。先此衣の色品も覚え給へと有りければ、人も多き其中に宮内は時の面目と、廣蓋に千代重ね模様さまゝ御所染の色は春とぞ見えにける。實に初色の梅重ね、表も裏も濃き紅に入日の鳴門立つ波を、白糸の貝蓋し、島に洲崎に立つ鳥のちりやちりゝ縮緬は、檜垣の左大臣道綱。扱松重ねあをかりきうら吹き返す禁色、鞠に柳のたよゝと、亂れてゝ戀風の、袖より落つる結文、誰様参ると見てあれば、近衛前の入道則房也。次は地無しに

上交—衣服の前襟の上
部。
つまか—褌と妻とかく。
腰替—練絹の絹の名
號斗目の腰の所に筋
を縫りたるものをい
ふ。

人も咎むる—人も注
目する程の。

唐花の五色の下葉玉の枝、玉の忌垣の鮮かに千早振る／＼、ふつた所がどうともかうとも、
否と言はれぬ上交の、妻かゆかしや懷しや、是はどなたと見てあれば、西門院橋ノ照政。
優しや裾に春の野の、雉子の床の草隠れ、萌黄の袂腰替、菊桐並ぶは古川の權中納言正家。
末に流るゝ水車、くるり／＼と纏はるゝ藤の懸波主や誰、大伴ノ忠春也。帥の典侍聞きも
あへず、不思議や此御小袖は幾年か三條の家に下し給はるが、若も筆者の誤りかと宣ひも
敢へぬに、本宮の中將囁き寄つて、いやなふ世は知れぬものかな。大納言兼政と博士木津
良の廣信は、此度駿河の國にて不儀なる様々洩れ聞え、本坂藏人増田式部に預けられ流人
と成つて配所へと、語りもあへぬに姫君はつとばかりに伏沈み、人も咎むる涙也。帥の典
侍見給ひて、宮内は何を歎かるゝぞ。我こそ兼政殿の母上の御取立故により、かく宮仕も
仕うまつれば外の様には存ぜぬなり。誠に日もこそ今日の暮、明日は改む春なるに、御い
とほしや哀れやと、深く悔ませ給ひける。姫君今は前後を忘れ、御涙にくれながら、今迄
は深く隠し候へども、もはや名乗らん自らは高橋吉連が娘朝顔の姫なるが、兼政殿と申交
せし事有りと、あらまし宣ひ果てざるに、帥の典侍大きに驚き、なふ今迄はゆめ／＼知ら
ず、様々に心ならざる慮外のみ、たゞお許し給はるべし。諸事はかゝる折なれば御愼みおは
しませ。此上ながらも自らに御任せあれと、よきに諫めて住み馴れし局をさしてぞ三重入

給ふ。かくて増田・本坂は佐保の川のあたりにて兼政・廣信に行合ひ、とかうの子細は存ぜねども、兩人ながら流罪の宣旨我々承て候と言へば、兼政の郎黨岡崎平内平七大きに怒り、宣旨とは何の科有つての流刑、オ、今思へば駿河にて風聞せし忠頼めが讒言よな。たとへば我々づだゝゝに刻まるゝとてもこの實否を糺さずば、君を都へも入れ奉らじ。方々にも渡すまじ。此佐保川こそ配所なれ。かく言ふが憎しとて必ず手向ひして後悔すなと、仁王立ちに立たるは面を合はせん様もなし。兼政暫しと静めさせ給ひ、允汝等が鬱憤道理なり。去ながら假令無實の讒にもせよ、勅に向ふは勿體無し。我身に曇り有らざれば、遂には月の都にて晴行く空を待てやとて、涙ながらに宣へば、流石勇める兄弟も、御一言にてしほゝと途方を失ふ其隙に、警固の武士取圍み、はや遠ざかれれば弟の平七、こは無念と馳出るを、平内とつて押止め、やれせくな平七、察するに讒人は忠頼に紛ひなし。とても死ぬべき命ならば、忠頼虎若もろ共に路次に待受け斬るものか、夜討に入て討つものか。安穩にては置くまじき。暫しゝと言ひながら、片時も遁し置く事の思へばゝ無念やと、血の涙をはらゝゝはらりゝと流しつゝ打連れ一先歸りける、兄弟が心の内道理せめて尤やと感ぜぬ者こそなかりけれ。

第四

けはしく烈しく。

自然の時一萬一の時。

若契一男色の契り。

沖つ石一盞にかく。

いたはしや兼政は罪も波路の物思ひ、赤松の伊呂波船四十八番並べたる中にも御召大船とて竹虎落網をかけ、或ひは刃物を改めらる流人の身こそ悲しけれ。所はしかも難波津や梅の濱より押出す。しかる所にさも險しく、なふく御船々々、其船待たれよ御船よと、呼ばる聲も程近く、見れば白き小袖に淺黄袴を着連れたる少人やうく磯邊に馳付き、二腰脱捨て手を束ね、是は大納言殿に召使はれし右丸左丸と申す俥共に候。かゝる時の御供をこそ御情にて頼み奉ると涙と共に申しけり。定元船縁に立出でて、志は神妙なれども、是私ならねば叶ふまじきと答ふ。なに御船へは叶ふまじきと宣ふかや。扱も是非なき次第、しからば御船暫く待て給はれ。いかに左丸、君自然の御時は殉死の契約今也。死別るゝも生きて別るゝも同じ思ひ。いざ御目前にて腹切らんと支度するを兼政御覽じ、やれ待て汝等暫し。誠に若契の誼とて、淺からざる心底返すくも嬉しけれ。世に有る時の二眺め、花に紅葉に代へて我妻なし千鳥の床の海、情に沈みし波枕の戯れし夜の誓ひにも、三つ有る命行く水の消えなば一度に泡沫と、言交せしかひもなく一人残して沖つ石、頼む島なき身なれども命だにあらばなれ。死ぬな右丸必ず死ぬな左丸。死なば恨み身を悶え

淡路灘へ遙にかく。

四つの借物―人體はもと地水火風の四大よりなる。

命々鳥―佛經に見ゆる二頭一體の鳥。

立掛髪―髪を短く切りて大形に結びし男の髪の名。もと江戸半太夫の始めし形なりといふ。
東坡が作る詩―東坡の九想詩。

口説き歎かせ給ふにぞ、かつて衆道を辨へぬむくつけ男楫取迄、女の情忘れける。定元見る目も痛ましく、たとへば後日の沙汰にあひ生害に及べばとて、いかに哀れを知らざらん。去ながら二人は如何、いづれにても一人乗られよとあれば、兩人大きに喜び我乗らんいや我こそと、押退け押留め互ひに亂れ藻の虫の、我から人からと鳴く音争ひ時節移れば、定元はせん方なくて櫓櫓を早め船は遙かに別れ行く。二人ははつと途方にくれ、なふ明石の殿様、今は二人と申すまじ。せめて一人と叫べども別れていつか淡路灘、しるしの煙立消えて物の淋しき黄昏の、星の林と成りにけり。扱もくしなしたりく。何の詮なき争ひは、あゝ暗きより暗きに迷ふ思ひの道照らし給へや佛國。いざや最期をきはめん。去ながら君刃を止めさせ給へば、所詮これなる岩に座を占めて、四つの借物を返さん。して念珠は有るか。いやはたと失念せり。オ、尤也某は持ちたりと、一連二つに引分ち、今まで結びし玉の緒を絶えなば絶えよ右丸、命々鳥の語らひも、はかなく定めし有様は傳へ聞きつる唐土の、伯夷叔齊にもまさるべき。いつの日の何時にても息絶え入らば手を擧げよ。臨終一度に舌食ひ切らんと、夢に夢見る心地して、迫る日數も重なりて夕の嵐朝の霜、立掛髪の面影は解けても波の浮藻となり、磨きなれたる向齒も、落ちて汀の晒貝に交り、芙蓉の背鳥が取り、髑髏に鳶が嘴を争ひ、是ぞ東坡が作る詩の九つの形の末、人の限りの 三重あ

山かづら一山の端にかゝれる曉雲をいふ。
家もあらなくに云々
「苦しくも降り来る雨か三輪が崎佐野のわたり」家もあらなくに（萬葉）。
今幾日云々―春日野の飛火の野守出で、見よ今いくかありて若菜摘みてむ（古今）。
歸り三笠山―顧みにかく。

さましし。是も哀れは折節の冬野となりて朝顔姫、兼政の遠島を悔ませ給ひ、互に忘れな忘れじと言ひ捨てし詞の末、世にましまさば訪ふまじきが、人の情はかゝる時、せめて訪れ参らすべし。ぜひ御暇と願はるゝ。帥の典侍涙とと共に、さりとほ優しき志、情も義理も此時なり。いかでか止め参らせん。心任せと有りければ、こは有難き仰かな。さあらば御暇申すとして乳母の玉水伴ひ、人見しりてはと變姿、杖有り笠有り抱帶、旅の振袖三重

朝顔姫道行

忍ふ道の邊くらぶの山の夜も明けず、八入の岡の村脚躑、濃きも薄きも戀ひ迷ふ、闇の錦と眺め捨て、まだ山かづら曳く方に、覺束無くも呼ぶ呼子鳥の傳授は聞かず耳梨山、片輪車に積む柴の、櫻やあたら春惜む花の八重葺せぬ家ぞなし。家もあらなくに三輪が崎、綾杉めぐむ木間より、神の神籬物さびて、舊りにし事も石の上、人の影さへ埋井の、井筒に玉の井筒に袖濡れて、別れ比翼の羽交山、飛立つ方は飛火野や、今幾日かありて旅をさめ、わがたらちめ故郷へ、歸り三笠山さほのかり、二十五絃は夜月に弾し、雲井の宿り生駒が嶽松は時雨の染め残し、衣の浦に寄せ貝の離れて逢ふも姫貝の、嬉しや憂きを忘貝、浅蜩潮噴空蛤簾貝、船は出て行く帆立貝、歌荒い風をもようややよ、夜着厭はれし三

鈴船——羅路の鈴をつ
けたる船。
おぶさ——不詳
こかの浦——加古の浦
の誤なるべし。

津の浦風瀟風、ハア寒いぞや。哀れ浮寝の旅の空、今日初島の便りかと戀ひ渡りぬる武庫の
川、心の淺みしらづくし知らぬ道にて撈取らず。誰かつげ野の妻鹿も、人に聞けとや夜只
鳴く秋は悲しさまさるべし。それを思へば夢の浮橋廣田の宮、生田の小野の花筐、手ご
に摘みし茅花交りの、つくつくくし。わけて末黒の薄原、いつか招きて草枕、それ
も叶はぬ世なりせば、執心の津の松原漁火の燃土りては消えては燃え、間なく時無くこり
すまの寢覺に騒ぐ鈴船の、おぶさは空に夕雨の身を凌ぎ行く印南野や、雫涙のさゞれ川、
君が柵強くとも破れ柳にやれさて今、顯はれ渡るほのくこの浦にぞ着き給ふ。憂
さも辛さも哀れさも、あらめくさもこそあらめさもあらめと、聞く人毎におしなべ皆絞
らぬ袖こそなかりけれ。

第 五

聖賢の世のためし大和の國壺坂に、温泉一夜に湧出づれば、俄に湯桁の數をしつらひ施藥
院を建てさせ給ふ。則典藥の頭には養壽院の法印玄昌、諸國の難病集めさせ給ひしは、君
徳古今に耀きて有難かりける次第也。某は丹後國宮津の者なりしが、世を渡る浦の習ひ獵
漁取の暇も無く、小舟の簞影消えて波間の饑に手を食はれ、かくあさましき身の痛みたゞ

みつはぐむ一老後再び齒の生えることにて、老の甚しきさまにいふ。

御慈悲とぞ申しける。我等は山城の國西嵯峨の者なるが、此子をつれて玉鉾の祇園祭の車に轆かせたいけ盛り^{さか}の足立たず、不憫^{ふびん}は親の心也と涙に深く沈みける。拙者は肥後の國八代^{やしろ}にて隠れなき荒岩と名乗りし相撲とり、四十八手は得たれども大力^{ぢから}にはぜひもなく、上げて落され骨々の碎けて、今は細石のものと巖^{いは}になり難く、いまだ若きにみつはぐみ腰拔業^{わさく}と悔みける。扱自^{あづか}らは駿河の國と申上ぐるもお恥かし。安倍河の遊女なりしが年月の勤めに肌を冷し、それ故聲の通はぬは情無しとて身を恨む。玄昌^{あきしやう}聞給ひそれは世になき事にもあらず。去ながら傾城^{けいせい}の所作^{しよさ}とて指を切るとは傳へしが、何とてさやうに耳は切りけるぞ。さん候是は大納言兼政殿とやらん、いづぞや富士詣の御時逢ひも馴れざる始めの日、科^かも無き身をこの如くさりと酷^{じこ}き御仕方^{ししかた}と言へば、音高し。何事も肯と思ひ其沙汰する事なかれとて、數多^{あまた}の看病取行ひよきにいたはり三重給ひける。其比又伊勢太神宮の御造營有りて、當秋九月二十一日遷宮に相極まり、則勅使として菊亭^{きくどう}、大納言師經^{ししん}神書の古例を見合せらるゝに、眞^{しん}の御柱^{みはしら}といふ事を書き記せり。諸卿^{しよけい}僉議^{けんぎ}あるに此事正しからず、記錄者^{きろくしや}忠頼に相尋ねても明かならず。都は只闇の如く、さるによつて兼政廣信を召返さるゝに、いづくか天子の心の海萬里^{ばんり}の風波靜かにして、はや都にもなりしかば、急ぎ參内なされけり。時に關白公經右の次第を述べらるれば、兼政謹んで笏取直し、抑眞の御柱

といふ物は遷宮の神秘也。三笠山の松を切り寸尺の大事、一子相傳なれば是を調へ差上ぐべきとあれば、國土の寶は兼政と一度にはつとぞ感ぜらる。關白重ねて仰せけるは、近日御身と忠頼を召上られ、善惡の御詮議有るべし。構へて後れ給ふなとあれば、それこそ願ふ所にて候へ。天誠を照らさせ給へば此時曇り晴れなんと、勇みに勇み御前を立ち館をさしてぞ三重歸らるゝ。かくて其日に成りければ是ぞ天下の檢斷所、攝家清華を始めとし公卿殿上諸司百家、左右へ分つて相詰むる。忠頼方には舍弟忠春同じく甥の虎若。兼政の御方には廣信續きて座を固め、風さへ鳴をぞ止めにける。時に關白忠頼に向ひ、兼政富士大願の砌遊女弄びの證據はいかに。忠頼承りさん候無き事をよも安倍河より申來るべきや。それは兼政の心に覺え候べしと嘲笑つて申しけり。兼政聞召しいや某は覺えなし。かつて跡方なき事、但し證據や有るゝと宣へば、證據こそあれ。其時御分遊女に取らせし自歌自筆是に有りと、やがて御前に差上ぐるに、兼政の筆蹟に疑ひなし。兼政暫く御思案あり。是はいつぞや櫻井の御所の御會にて、逢うて別れの御題に詠みたりし歌也。其日の披講はそれなる忠春が勤めしが、其時の詠草に紛ひなしと宣へば、忠頼聞きもあへず、否々いツかに罪が遁れ難きとて出來合の陳じ様仁體には似合ひ申さず。但し安倍川に櫻井の御所とて又有りや否や。關白暫しと宣ひ、櫻井の御會には兼政いまだ中納言の時也。

駿河下向の刻は大納言に任せらるゝに、何とてそれには中納言と記す。是不審と宣へば、忠頼たうり道理にせめられて暫らく返答無かりけり。弟の忠春見かね、いや其色紙しきしの詮議はともかくも、安倍川の傾城を兼政配所まで取寄せられし事、世に此沙汰専ら也といふ時に定元罷出で、なふ某預りのうちさやうの不義は存じもよらず。オ、爰に高橋宰相の息女朝顔そくぎよの姫とやらん、兼政へ好誼よし有りとはるゝ下り給へども、中々大納言殿には知らせ申さず、其まゝ追返し申せしが、定めて此事をやと申せば、各是は高橋家三條家の契縁けいゑんさも有るべきと宣ひ、是にても落ちされば、虎若いし討つてつつと出で、いやさ確かなる證據は、すでに兼政安倍川にて遊女が氣儘にならぬとて理不盡りふじんに耳を削ぎ、あまつさへ所の者に手を負ふせ切散らせし事都まで隠れなし。かく惡逆の兼政を、歷々御最眞ひじまと見ゆれば何を言うてもかひあらじ。是叔父おぢ者人、急ぎ館やぐちに歸り分別致されよといへば、關曰聞召し、オ、理には最眞あり非には最眞なり難し。若此列座にさやうの沙汰ばし聞きつる人や有る。時に養壽院末座はうすに有りしが罷出で、此比安倍川の遊女とて耳を削がれし者候が、是やはと申上ぐればそれゝ急ぎ召せとある。畏て候とやがて御殿に召出し、養壽院に仰付け、此内に其方が耳を削ぎし人や有るといへば、かの女虎若にひしと縋り、なふ大納言兼政様扱もゝ御情なや、科さかも無き身を此如く恥ぢ幾度いくたびか今日も又死なれぬ命と歎くにぞ、いづれも横手を

てうど打ち、さて恐しき大伴の一族、人面獸心にんめんじゅうしんの積惡罪跡遁るゝ所なし。忠頼忠春兄弟を
隱岐の島に捨て置くべし。虎若は頭かうべを刎ね公家武家の例てめしにせよ。畏かしこまつて搦め捕り斷罪だんざいに
行はれ、執兼政には朝顔姫あさぎを給はり、再び照らす都の月、日を追つての御繁昌千秋萬歲はんざいばん
々歲くさざい、改まる年の始こよろと曆の始、めでたしともなか／＼申すばかりはなかりけり。

貞享二乙丑歲正月吉日

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也

加 賀 掾

二條通寺町西へ入町

山 本 九 兵 衛 判

東山殿追善能



東山殿追善能



それ人は衣食住云々
「つれづれ」草の語。
私提「わたくしのお
きて。」
白旗の一本としにか
く。

假初にも「威光を借
りにかく。」
慈照院殿「義政の法
名。」

それ人は衣食住此三つ缺けざるを富りとす。三つの事儉約ならば誰の人が足らずません。爰に足利九代の公方征夷大將軍源義尚公は、政道に私提なく五月涼雨の如くなれば、曲れる枝も葉も伸べて、直きを本と白旗の源氏の御代こそ久しけれ。御子一人おはします。萬榮丸と申して十六歳、御器量すぐれて麗はしく艶に優しくまします。御父母の御悅申すも中々おろか也。扨御執權には畠山駿河ノ守政長・細川左京ノ大夫政元・斯波左兵衛ノ佐義廉・望月玄番國貫、此國貫は若君の御乳母が弟、先祖はかゝしからね共御憐愍の餘りに執權の座を許さるれば、さまでの智慧もあらずして、御威光を假初にも子細らしくさし出る。其外在番の國守城主日々の御出仕隙もなし、君人々に仰せけるは、慈父慈照院殿御在世の時神樂催馬樂を本とし昔物語に節し、其名を謠と改め觀阿彌・世阿彌・音阿彌に程拍子仕方を付けさせ、能と名付け興じさせ給ふ。然れ共御他界以後所々の兵亂によつて、天下數年困窮故させる道も打絶えぬ。然るに當年尊靈の二十五回忌に相當る。尤も法事は銀閣寺にて嚴かに取行ふべし。就いては御存生の時相興じられし一曲を棄て置かんは不孝の道、

つゞく一々。

泥眼、ふかひー共に
能面的一種。

づなうー法外に、非
常に。

且は御追善の爲なれば、催ほせんとぞ仰せける。各々謹而承り、あつばれ深き御孝行、是に如くべき御追善いかでか以て候はんと、詞を揃へて申さるれば御感甚だ限りなく、彌其沙汰有るべしと御座を立たせ給ひぬる、道の道たる時つ風長閑けき國こそ三重めでたけれ。かくて老中常の座席に立寄て、能の評定有る所に玄番國貫遮り出で、して其能と申すは如何様の事ぞ。某一圓合點參らず。様子承度と云へば各聞給ひ、實々年久敷事なれば御身はかつて知り給はじ、中々言語に絶し面白き事。やあ音阿彌はそれにやある。是へ出て道具の次第一々語れと有りければ。音阿彌は罷出で、つゞく覺え候はね共、先能と申す其大概は、神代の神樂催馬樂を本とし神歌の音を取り、御神樂の樂器をうつし、大鼓小鼓太鼓鞆鼓横笛、面は翁三番三、姥尉小面泥眼ふかひ、其數九十三面也。衣裳は唐織縫厚板半臂狩衣指貫等、是も二十四色也。冠烏帽子鬘鉢、木太刀長刀舞扇、舞臺の廣さは一丈八尺橋懸幅五尺長さは七九十一間、先概略と述べければ、國貫子細らしく目を塞ぎ打仰向いて聞き居しが、ッウ面白さうな事なれ共、是は圖なうお物が入りませう。如何に御追善なればとて、先年諸事御簡略と仰出され今又かやうの奢りの沙汰、先此玄番は同心ならず。たとへば上意有とても、各は御先代に其費を知りながら早速お受會申さるゝは、いやはや無調法千萬と嘲笑うてぞ居たりける。政元聞き給ひ、實々御身の中さるゝも其理なきには

愛宕白山一誓詞。

きゝめくーせりあ
ふゝりきむ。

ふつさとたぶく
と多く。

秤をため一秤の目を
熟視することため
つすがめつなぐいふ
時のタノなり。
猪が佛を笑ふ一小智
の太智を測り知るこ
と能はざる。類朝
活出に、本多くつ
く笑ひそれは狼が
佛を笑ふとやらん。

あらね共、天下を知ろしめす將軍の、是程の御事さのみ費とは申されまじ。物事其身に應じて華麗をなせとこそ聞け。總じて人の上は知り易く我身の上は知られぬもの。吟味すれば人毎に奢り多く候とあれば、國貫無興顔に成、いや耳痛き申され様、吟味すれば人毎とは拙者に當事のやうに聞ゆ。愛宕白山隨分奢らぬ男、但し微塵程にてもお目に背く奢り有か承らんとぎぬめば、オ、御身は勿論此一座残りなく身に應ぜざる奢有。いで閑度くは先其小袖、一つにても好かるべきに何故重ねては着給ふぞ。立番聞いていやせん方盡きたる詮義、これは寒さの重着奢とは申されまじと云。ホ、奢か奢でなきか、其重着さへ有るに、御分の着らるゝ小袖も公方のお召も相變らぬ絹布の類、何と是は奢りならずや。費を費と知るならば河内木綿を紺に染め唐綿をふつさと入、只一つ着給へとかんらゝとぞ笑はるゝ。立番大きに赤面し、いや言はすれば言ふ事と人も無げ成過言かな。忝も御目鏡にて御家老をも勤むる身に、下臈童の着す成る木綿衣服を一つとは侮つたる雑言と、詞を荒らげ罵しれ共政元騒がす、是々餘急くなゝ、汝が浪人の時を思はゞ木綿の衣服が相應ぞ。昨日今日まで公家方の瘡所帯を賄ひて、升を握り秤をため、厘毛を争ふ身の、今引變へて方量なき間廣き天下の御事業、汝が小さき心の定木に當ても寸法違ふべし。要らざる汝が簡略沙汰、狼が佛を笑ふに似たり、傍痛しと笑はるゝ。立番彌腹を立て、何某を畜生に譬へ

猿と云ひし頬骨を、引裂きくれんと飛んでかゝるを、人々慌て押し隔て、さりとは御前近し、先々静まり給へとは是非に宥め制せらる。政元居直りもせずええ笑ひ、エ、人がまし何をし給ふ方々、近付き寄せて踏み殺さんと思ひしに、命冥加の有る奴かなと、空嘯いて居られる。此事上へ聞えしかば千葉の城之介出給ひ、暫々各上使なるはと宣へば、はつと一度に頭を傾け謹而承る。城之介笏取直し、兩人の口論以つては君の御爲を重んじての故なればと、甚だ感じさせ給ひ、兎角互ひに論を止め、諸事宜しき様の相談然るべしとの上意にて候。時に政元、誠に上聞をも憚らず、存外成口論今更後悔仕る由、御前然るべく頼入存るに、云も敢へぬに國貫居丈高に成、何人にもせよ、早速某は返辨申す。あた胸惡しと座を蹴立も非もつかぬ料簡、上意にもせよ仰にもせよ、早速某は返辨申す。あた胸惡しと座を蹴立て我屋をさして歸るにぞ、人々齒痒く思すれど、殿中なれば堪忍し、拳を握りおはする所へ、義尙公御出有り、旁若無人の緩怠者、とかう批判に及ばれず、急ぎ政元馳せ向ひ、誅伐せよと仰付られ、御機嫌惡しく入給へば、畏て政元は手勢すぐつて三百餘騎、取る物も取あへず玄番が屋形へ三重押寄する。望月玄番國貫は急ぎ我屋に歸り郎等共を招き寄せ、我細川政元めに數年意趣の有けれ共胸を擦て堪へしに、今日殿中にての慮外最早堪忍成り難し。今宵夜討にやせん但明日晝軍にやせんずらんと、詮義評定區々なる所へ、細川勢三

大柄さはきしな一さ
はくは振舞ふ意。

渡り侍―定まれる主
人なく婢々と奉公し
歩く侍。

百餘騎、逆寄にどつと寄せ関の壁をぞ上げにける。屋形の内には思ひ寄らざる事なれば、上を下へともて返し門木戸固め騒ぎけり。政元緋絨の鎧白星の兜を着、黄川原毛なる馬に乗り門外に歩ませ寄り、やあ玄番國貫やある、汝日頃の御高恩を忘れ法に漏れたる雑言、君御立腹まし、急ぎ首を討て参れとの上意を蒙り政元是迄向うたり。尋常に腹を切れ、異議に及ばず踏み潰すぞ。如何にと呼ばれば、國貫櫓に駆け上り、何尋常に腹切れとは誰が事ぞ。定めて人違ひならんに耳垢を取て能く聞け。言うても我は萬榮殿の乳の親の弟なれば叔父分通るゝ所なし。然れば汝は家來筋、冥加の程をも辨へず馬上にての雑言天罰を蒙らんど。急いで下馬し立歸り、公方へも此趣言ひ聞かせよと罵れば、政元腹筋を攪つて打笑ひ、扱は實から左様に思ひ日頃大柄さはきしな。やれ國貫の厚皮面、それも寸法違ひたり。忝も征夷將軍の若君を汝如きの下賤の身が、戯言にも甥分とは汝こそ冥加知らずよ。其上我を家來筋とや、いでゝ家來か主筋かそれへ参て極めんと、馬より飛下り走りかゝつて門の扉に兩手をかけ、えいやつと押しければ、貫木中よりほつきと折れ、左右へばつとぞ開けける。玄番が一家肝を消し、わつとわなゝき逃げて行くを、我もゝと亂れ入り、追うつ捲つつ息をも繼がず、刃を碎きて三重戦ひけり。寄手は多勢殊に又、數代傳はる剛の者、玄番が勢は小勢といひ、渡り侍雑兵故、討殘されし者共も、一騎も殘らず落

ち行けば、玄番大きに腹を立て、エ・未練成る奴輩かな。いで某が一挫と、大長刀を振廻し、八方無窮の死狂、此勢に寄せ手の勢暫し弛んで見えければ、勝に乗りつ切て出、政元目懸けて渡し合ふ。暫しあしらひ搔潜、長刀をもぎ取て俯伏に踏み倒し、胴骨しつかと踏まへつゝ、今日始めてのお主筋に引手物致さんと、兩の耳へ指を入れ首引抜いて差し上げ、さあ悪人は仕留めたり。此陣引けや尤と勝鬨どつと作り立て、さんざめかいて歸らるゝ。彼政元の勇力は、異國の樊噲我朝の朝比奈が門破、斯くこそあらめあら恐ろしやと、見る人聞く人舌根を卷かぬはなかりけり。

第 二

政元上意を蒙り玄番が討手に向ふ由、下には端々沙汰すれ共、上にはさのみ知る人なく、常に變らぬ賑ひは大様なりける次第也。さるによつて萬榮君の御前には音阿彌を召れ、今朝父上の仰には、追付能の興行あらん、我にも仕れと仰られしが、何をかはせん此比は、打絶え稽古もせざりければ覺束なしとぞ仰ける。音阿彌承はり、誠左様の御沙汰にて候。然らば芭蕉か羽衣か、杜若もやと申上れば、實々羽衣こそ好からめ。さりながらついしか装束して舞ひし事なし。一つはそれも稽古なれば、衣紋付袖捌き足取扇の差引に、心を付て

春霞云々春霞な
びきにけり久万の月
の桂の花や咲くらん
(後撰集)春と張とか
く。三保崎一見にかく。
波も一派にかく。

君が世は云々君が
代は天の羽衣まれに
きて撫づとも盡きぬ
巖なるらん(拾遺集)
佛説に、天人が三斗
に一度來りて、大石
を羽衣にて撫で、
して、遂に其石を撫
でつくすを一劫と
す。來てと着てとか
く。浮島が拂ふ一原にか
く。

根ざし心根の意。

直せやと、御装束改めて、素面に天冠召しければ、誠の乙女も斯あらしと各心ぞ惑ひける。さも悠々と扇押取り立ち給へば、地謠聲を春霞、語たな引きにけり久方の、月の桂の花や咲く、げに花桂色めくは春の験かや、面白や天ならで、爰も妙なり天津風、雲の通ひ路吹き閉ぢよ、少女の姿暫し留まりてこの松原の春の色を三保が崎、月清見潟富士の雪、いづれや春の明ぼの類波も、松風も長閑成る浦の有様、其上天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御裔にて、月も曇らぬ日の本や、君が世は天の羽衣稀に來て、撫づしも盡きぬ巖ぞと聞くも妙也東歌、聲添へて數々の笙笛琴箏篳篥、孤雲の外に満ちて、落日の紅は蘇命盧の山をうつして、綠は波に浮嶋が、拂ふ嵐に花降りて、實に雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なると、いまだ半へ將軍出御なされ、暫々その稽古を止めよ。やあ政元が歸りしとや。是へ出よと宣へば、召に従ひ政元はやがて御前に伺候して、上意に任せ國貴を即時に誅伐仕候と、軍の次第詞戰一々言上有ければ、君暫らく打笑ませ給ひ、誠に萬榮丸を安穩に、育てあげし乳母が弟と思ふ故、人並ならぬ立身に、己れが昔を忘るゝ事、尤根ざしの三らぬ所是非もなし。如何に萬榮丸、彼奴が討たれしと聞かばさぞ乳母が歎かんに、始終の段々語り聞かせ宥めよと宣へば、さん候乳母が歎く事聊か以て候まじ。只今政元が物語にて存當り候は、姉が事は申に及ばず、某にも大方ならぬ慮外

訴訟―申出。

うたかた―歌にか
く。

長月―陰曆九月。

塙鼓鳥―関古鳥、
黒染―住にかく。
こたち―女房達。

を盡し候へ共、若輩故心易さにこそ勸忍度々に及び候。勿論姉には不孝故、内々申上げ勸當せんとの所存なれば、更々悔み候はじと仰上ぐれば、我君は呆れさせ給ひ、扱は天罰廻れざる、惡逆無道の愚人かな。彼が一言を服せしに似たれ共、人を治め天に仕ふるには、吝きより好き事はなしと聞けば、先此度は能を止むべし。ついては北山の紅葉盛りとて萬榮丸が訴訟有。何時にても心に任せ催すべしと宣ひて、御座を立たせ給ひければ、若君御悦喜限りなく、時めく色の紅葉狩花に負けじの御出立、様々つくろひ給ひしは實に異様にぞ三重聞えける。是は扱置、其比前の關白の御息女直衣の前と申して、御年は三五年の月花に心を寄せ、詠む泡沫の水に鳴く、蛙の聲まで身にしめて、情の時雨戀の山、色どる繪にも及ばじと見る人まばゆく成にけり。折しも長月初めつ方、露踏み分て入鹿の嵯峨野に近き双の岡、乳母の姉尼と成り住み侘びし柴の庵、爰も此世の内成や。いつ人訪ひし跡もなく、道は苔蒸し葛、葎横切りて戸ざしたり。偶言問ふ物とは、梢に弱る蟬の聲、岩の挾間をかすかにも、滴る水のとくくと、いそぐ日脚の影早き、時をつくるや塙鼓鳥、ア、短きは秋の日こ浮世の中と歎きてや、かゝる所に墨染の、袖の露霜雪の暮、嵐木枯山嵐、いこも寒さも寂しさも、猿狼集ひ來ん。あら怖、怖し恐ろしと、若き御達の口々に、姉女呼んで紅葉葉を拾はせ搔かせ、林間に酒煖めて戯れの尼諸共に打交り、

鳥ならはし取にか
く。

こぞり集り。

綱足―踏車の上にあ
がること。
ふたぐ―はたぐ
と騒ぐ意。

土砂ぐるめ―土砂の
つきたるまゝ。

御

昔話の二つ三つ盃めぐる折からに、公方の御息萬榮丸、御供多きは氣話と遙か後に留め置
かせ、年老いたれ共音阿彌は心輕きが御意に入り、只一人召し連れられ、伊達な振袖ふ
り振つて、歩ませ給ふ御姿、これも命を鳥ならば、孔雀もはたとけ壓されん。四方の山
々御覽じて御機嫌よろしき折節に、一通り降る村時雨、是は無興と音阿彌は御手を引
き、木陰もがな彼方や此方やと柴の戸の、家こそ見えて候と彼草庵に駄け寄れば、やれ人
音よ、簾下せ障子をさせよと女房達、ひつそとこぞり居られしは無人聲共謂ひつべし。さ
れ共若君音阿彌は、其氣もつかず縁際に立ち休らひおはせしが、何と音阿彌かゝる所にも
人住むにや、定めて隠者か遁世者か、ア、物寂びたる住居やと宣ふをお腰ども間よりさ
し覗き、差し足し跡へ返り女房達に囁くは、あれにましますお若衆は將軍の御公達、萬榮
殿とやらに紛ひあらじと云ひければ、何其萬榮殿とは名に高きお若衆、我も覗かん我も
見んと、障子を破り物の隙、高窓には織足し極子格子に取付きて、立かゝり掩ひかゝり息
を詰めてぞ覗きける。さすが姫君はふたぐ共し給はず、物見猛し騒がしとのたまひなが
ら、堪へかね女房達の後より、ためつすがみつし給ふが、餘に舉り迫り合ひて、障子をは
たと押倒し、敢へなくも二三人ころりぐと轉び落ち、是はぐとふためくは可笑しいや
ら笑止やら、興の醒めたる風情也。漸起きて逃げ上り土砂ぐるめに隠れけり。されども

とゞろくと鳴る神
も一夫の原踏みとゞ
ろかし鳴る神も思ふ
中をはさくるものか
は（伊勢物語）

さすが岩木にうあら
ざれば心弱くも立歸
る所は山路の菊の酒
一盞聞紅葉狩の句。
ちざさら一つちざ
さらば一つの意。

姫君は枯野に立てる糸萩の、いと恥かしげに口掩ひ御顔赤め、若君と目と目をじつと見合はせて、互に見とれ給ひしは、花か紅葉か月雪の光合ひたるごとく也。音阿彌お側に参り、最早時雨の止み候が、又降り申さん告有て、女房達神鳴の魁を致さるゝに、早お歸りと勸むれば、ア、忙し戀知らず、とゞろくと鳴る神も、思ふ中をばよも離れじ。よし神鳴が落ちもせよ、時雨が降らば降りもせよ。それが望みぞ落ち合ひて濡るゝ縁と成るならば、何か思はん坊主めと、背中をはたと打ち給へば、音阿彌ぎよつとし御顔を眺め、いやはや油斷のならぬ、今迄は何にも御存知なきかと思ひしに、戀知りの譯知り様。ならぬくと頭を撫で、揉手をして居る所へ姫君たよくと來らせ給ひ、一樹の陰の雨宿り、一河の流れを汲む酒を、いかでか見捨て給ふべきと、袂に縋り留むれば、誦さすが岩木にあざれば、心弱くも立歸る所は山路の菊の酒、いざさら一つと宣へば、姫君取上げ恥づかしげに若君へさし給へば、忝しと押し戴き受け持たせ給ふ時、女房達寄り舉り妾戴き奉らん、いや妾が先ぢやはの、いや妾こそ我こそと縋り貪り取付けば、音阿彌大壁上げ、はあ是は又何事ぞいの。悉皆伊勢の相の山比丘尼坂の比丘尼ぢや迄。先の障子に戀もなく、大事の此方のお旦那を押潰いて給はるなど、押分け押退け若君のお盃を奪ひ取り、姫君へ奉り、最早暮方近ければ、御所のお首尾も如何ぞと頻つて勸め奉れば、力及ばずしほくと

眞芝一増にかく。

第三

立ち別れ行く御名残、互に影の見ゆる迄、見返り見送り見返りて、涙ながらに歸らせ給ふ若君の御思ひ、扱姫君の御歎きいづれをいづれとたくらべん。あはれ優しき戀慕成るはと、感ぜぬ人こそなかりけれ。

思ふこといはで云々
— 思ふ事はいはず只
にやみぬべき我とひ
としき人しなけれは
(伊勢物語)
震ひ聲一降るにか
く。

現なや戀の山路に踏み迷ひ、思ひ眞芝の露の間も忘れもせで、若君は只うか／＼と遣る方もあらぬ風情に見え給ふ。音阿彌察し申せどもそれとはさながら憚りて、此比は君の御機嫌勝れさせ給はぬ様に見請け奉りて候。若し御心にかゝらふ給ふ事候はゞ、此坊主めに仰せ聞かされ候へかし。あつばれ思召のまゝに爲了せ上んと申せば、若君笑みの御色見え、思ふこと言はでたゞにや止みぬべき。双の岡の紅葉狩ちらと見初めし面影を、忘れもせず明暮と、思ひます穂の糸薄穂に出けるか恥づかしや。ア、異な物ぢや。心は我がまゝなれど、まゝにならぬは異な物よ。音阿彌小聲にて、さればこそ。さぞと察し参らせ早手段を廻らし置て候。今宵逢はせ奉らんに勇ませ給へと申すにぞ、枯野に雨の震ひ聲、そぞろ浮き立つ御氣色にて、神ぞ嬉しい過分など、手立の譯のよきやうを、功の入たる音阿彌に、俄に習はせ三重給ひけり。雲井の餘所に、馴れ衣、名のみばかりや直衣の前、

洩り―羽束師の森にかく。

ことなう―格別、特に。

おさ文字―おさびしこの意。

いぜー賢女。

人の見る目も恥づかしの、洩りて餘れる戀草の、結びも留めぬあだ人を、誰が見よとてか見初めけん。あら悔しの紅葉見や、恨めしの雙の岡。せめて日なりと違ひはせで、同じ日影を行く雲の、立ち掩ひたる我が思ひ、夢現にも見えよかしと歎き崩折おはしけり。爰に常々参り馴れし軒端といふ盲御前、お見舞とて來りけり。御乳母女房達、よくぞく好き所へ。今日はことなうおさ文字さう故何をがなと思ひしに、お側へ参られわつさりと、お話あれと手を引てやがてお前に連れ出る。姫君御覽じ、扱珍しや軒端、いつのまゝやら定めて此比は、月見紅葉見に彼方此方と流行りつらん。さぞ面白き事あらめ語りて成り共聞かせよと、四方山の事序に軒端申けるは、只今中京に佛と申御前候。筑紫琴の上手にて、折々連引致候と申せば、それはさぞ面白からん、聞き度いものやと宣へば、御乳母承り、ア、それはお易い事、呼びに遣はし候はん。去ながら軒端の方より能く言遣り給へとあれば、然らば公方さまのお同朋衆、音阿彌殿と申す方に昨日より参りて有り。妾が方よりとて直に御使遣されよ。心得たりとて御乳母かくと使を遣さる。斯くて黄昏過ぐれ共兎角の返事知れざれば、待ちかねさせ給ふ故、又お使をと有る所に、もはや是へと告來れば女房達出で迎ひ、是へくと手を取て靜に連れて出にけり。御乳母立寄られ、扱々能うぞ上られし、今よりしては軒端と連れお出入し給へや。なふ見れば見る程貌氣高き生れ付、顔容の美し

ふた／＼しーバタ／＼とあわたし。

總珊瑚を碎く一兩曲云々此語近松の猫間達第二にも見ゆ、白樂天五絃彈時、鐵摩珊瑚二兩曲、水寫玉盤千萬聲を誤りて、太平記卷十八に總珊瑚を碎く云々とせるに據れり。

すがりて一焚え盡きす。

さ、さぞ親達のいとほしくや思はれん。是なふ軒端、餘りふた／＼しけれ共御待ちかねなされしに、いざ一曲と云ふまゝに、螺鈿の玉琴取出し、二人の前に置きければ、引寄せて搔き調べ、韓神といふ祕曲をば、連引し唄ひけり。春風の吹き初めて散る花の花の、雪は白妙の、衣手に昔忘れぬや、花橘よ袖の匂ひもなつかしやな。秋風にもみぢ散りかゝる袖は紅ぬの、衣手に時雨降る。板屋はばらり、ほろ／＼り、降るは木の葉と窓の月に知られて、秋暮れて／＼と弾き收めし其聲は、織珊瑚を碎く一兩曲氷玉盤に落ちて千萬聲、寝むるに詞も及び難し。姫君ことなう感じさせ給ひ、扱面白き祕曲かな。今一手とは思へ共、夜々の勤に草臥れん。明日又聞いて慰まんに、今宵は是に留めよと云捨てお寢間に入り給ふ。御乳母おすゑを招き、あの二人の人々を妾が部屋へ伴ひ床取りて参らせよ。是々暫女達ゆると休み給へ。折柄ながら夜寒なれば風ばし引かせ給ふなと、いと懇に心を付け御寢所さしてぞ三重入りにける。軒の端山の夕嵐、遠寺の鐘を誘ひ來て、早初夜も過ぎ後夜近し。姫君衾に移らせ給へど只うかくと寝もやらず、叶はぬ戀に亂れ髪梳かせて留めて伽羅の香の、すがりて空に燦るにぞ、ア、辛氣さなきだに胸の煙を凌ぎかね遺方もなき埋み火に、薪加ふる果敢なさは、やああの戸を明けよ簾掲げよ、端居して月見んとあだし姿も惜々と、欄干に立ち盡し、其方の空よと眺むれば、君が方へと行く雁の、ア、心なやせ

ほにーほんに。

松虫―待つにかく。
篠竹―戀を爲にか
く。
夜々に―節々にか
く。

なけの替り節―當時
はやりしなけ節の替
り節。「歎きながら
も云々」の歌は投節
の文句。

めて扱、落ちて問へかし一筆の、文の便を頼まんによしや由なき我戀と、鳥もあはれを思はずや、憎やつれなきあの雁やと、せんなき恨みの御涙。かくとは知らで女房達、今宵の琴の連弾を、とやかく噂有所に御乳母申さるゝは、何と皆々思召す、今宵の瞽女の佛は誰にやら能う似たが、誰にやらハアと言ひければ、ほに誰にやらくゞ口々に言ひけるを、姫君は聞し召し、扱もどかしやそれ、雙の岡のと聞もあへず女房達、實に其萬榮殿よと揃ひし詞はたゞならじ。暫しゝて御庭を、しどろもどろに下駄の音、怪しやと女房達、差覗き見てあれば宵に参りし佛也。なふく其方はいまだ寢給はずや。さればの事暫し枕を傾けしに、誰松虫のりんくゝと、ものあはれげに啼く聲は、彼も戀をや篠竹の、夜々にあこがれすだくかゝ坐に忍ぶ袖の露、起き出でて待ふよ。なふしほらしや今もこて御身の噂有りしぞや。いまだ姫君さまも御寢ならせ給はぬに、参りてお話まします。左よ右よと教へつゝ、お縁際より手を引いて御側近くぞ直しける。姫君御覽じ、能くこそ來れ、誰とても、山鳥の尾の下垂尾の長々し夜の獨り寢は、物憂きものぞ語れとて、流行小歌の樣々に有るが中にも思ひ川、うき身をなげの替り節、歎きながらも、月日を暮す、扱も命は有る物よ。何と佛、戀をする身は誰とても、かく思はめと宣へば、如何にもく餘所事ならず、我身に知られ候と、互に色に出つ出ずもせめて慰み給ふうち、夜は丑三つに更け

しづもなししぞけ
なし。

せきくしきく
に同じ、たびく。

富士は磯―高低深淺
比較の限にあらずと
の意、磯は沖に對し
て卑近の意に用ふる
流行語。

にけり。夜々の宿直に女房達、睡さ頻れば彼處爰假寢射しどもなし。今は早姫君と佛と只
二人、飽かぬ咄の次に姫君宜ふは、おことは方々へ参る由何處々々へ行きぬるぞ。さん候
御所様方公方様へは取分せきく参り候と申。フウ誠其公方とやらんの御子をば、いつぞ
や餘所にて見みえしが、男にも女にも、か程打揃ひたる顔容又有るべき共思はれず。お心
いきもさぞとあれば、いや申し、それにて存じ出したり。双の岡にて貴方にも御覽じられ
候とてそれはく御なづみ、是でも命あらんかと戀ひ焦れさせ給ふとあれば、姫君そ
どろ嬉しげに、實や思ひ餘り其里人に言問はん。同じ岡への松は見ゆやと、とは言ひなが
ら我思ひに、あなたの戀を比べなば富士は磯よと宣へば、いやくあなたの御なづみも少
も變らせ給はじ。が誠さ程に思召さば御媒申さんが去ながら後にお變りましませば妾迄
も首尾惡きが、しつかとお變り有るまじきな。ア、由なしそもやそも女の身にて斯した事明
様に言ひ出すは、能くせん方なき餘りと思ひ遣りなきおことは扱戀も情も知らぬかはと、
恨み啣たせ給ひけり。實誤りて候也。然らば何とぞ計らひ首尾能く逢はせ参らせん、ア、
まゝならば妾が身が萬榮さまにて有るならばさぞお嬉しうましますさん。して先づふつと萬
榮さま爰へ來らせ給ひなば如何渡らせ給はんとあれば、はてそれは言ふが筈、兎角なしに
此如く御手を取てと佛の手を取らせ給ふ時、佛も姫君の御手をじつと締めながら、然ら

通り者一絲をまかし
て野暮ならざる者。

ば我こそ萬榮丸と御目を開き鬘を取らせ給ふにぞ、姫君興さめ御肝潰れ立て遁げんとし給ふを若君継り引留め、情なや今迄宜ふ御詞最早變らせ候かや、よし君はともかくも我が戀路の積る雪、解けて語らん其内は放つ事はならぬぞや、ならぬぞならぬと引止む。姫君御顔打赤め、ア、恥づかしの我風情、實は女の淺ましさは思ひ寄らざる御手立、眞しからで驚きしを淺はかなくや思すらん。戀路の習と云ひながら、斯く迄心を盡し給ひ由なき今宵の御姿、皆我故と思ふにぞ、いとどなづきも十寸鏡御身を映す佛は今こそ思ひ合て侍ふ。せめて夢にも現にも見えさせ給へと希ひしに是は夢かや現かや、誠と更に思はれずと餘りの事に打凭れ嬉し泣きにぞ泣き給ふ。萬榮丸聞し召し、いや／＼それは御僞、眞實思召すならばいかで驚き給ふべき。富士は磯とは宜へどもそれでは富士も磯ならじ。何方が富士ぞや磯ぞやと、詞詰めに姫君はほうどあぐませ汗たら／＼の御訖言有所に、側に臥したる御乳母むく／＼と起き上り、あら怖や恐しい夢を見しといふ聲に、慌てふためき姫君は衾の下に臥し給へば、若君ちやくと目を塞ぎ氣もない顔にてまじ／＼と、塵を捻りておはしけり。御乳母の通り者から／＼と打笑ひ、さつても能う似た暫女様や、萬榮さまに生寫し必ずお目を明き給ふな。若しも明かせ給ひなば萬榮様かと妾迄よい年をして濡れかゝり、なまじ要らざる詰開き、富士は磯かは物かはと口舌いふ間に夜が明けば、悔みも甲斐も有

まじきに、とかく妾は外しませう。是萬榮さまの佛さま、富士の磯のは古いぞえ。口舌話
はお氣詰帶紐解いて打解けてしつぽと語らせ給ふべし。是から妾が替女の番見ぬ顔知らぬ
顔ぞやと、言ひ捨て局に入ければ、若君あつたら興さめながら通り者めに氣を付けられ、
恨みも口舌も打止めて、比翼の枕直衣の前連理の衾打重ね萬榮榮花の契りの初め、めでた
かりともなか／＼申すばかりはなかりけり。

第 四

山は塵土より起り海は一滴の水よりなれりとかや。されば萬榮丸直衣の前の御方へ深く忍
ばせ給ふといへ共、早くも公方の御耳に入大きに驚頭まし／＼、御執權の人々を密かに御
前に招かせられ、斯様／＼と聞きつる也。そも此息女は當今の御后がねにも立給はんかと
沙汰の有り。若し此事世に洩れては大事の上の大事ぞ。今夜の内に萬榮丸を駿河の國へ追
下し、清見寺の住持にしつかと預け置くべし。暫時もためらふ事なかれと、以ての外の御
機嫌なれば各驚きお請を申し御前を立て、忍び／＼に若君の御下向其夜の支度ぞ三重慌し。
此事遂に姫君傳へ聞し召し、肝魂も消え／＼と戀の重荷に増す思ひ、今の歎きに歎おれば
昔は物を思はざりしと、人目包みの御涙あはれと言ふもおろか也。餘りの事の物憂さにお

庭に出て立ち忍び月に啣^{くは}ち星を拜み、あはれ願はくは命の内に今一度廻り逢せてたび給へ
と、涙貫く玉の緒も絶ゆる計に祈らるゝ。誠に天の納受にや、數年御所に住み馴れて白き
狐の有けるが、悄悄として姫君の御側近く参りけり。常見慣れさせ給ふ故お戰慄もまし
さず、扱々優しき汝が風情いつに變り萎れしは我が歎を憐む躰、人に語らぬ道なれば獨り
胸を焦せしに能くこそ嬉しやな。誠に汝は前業にて畜類と生るれ共、爲せる善根有ける
にや神變自在を振舞ひて智慧賢き物なれば、何とぞして自らを萬榮丸のおはします在所
伴ひ逢はせてくれよ。やあ年月馴染の知るべにはとて、口説き立ててぞ仰せける。實にや
別れを恨みては鳥もあはれを思ふとや。狐忽ち女性に成、御歎の体餘りとあれば御痛はし
く、假令仰せのあらずとも萬榮君の御在所へ連れ参らせんと思ひしに、御心安かれ、去な
がら、斯嚴しき御所の内此まゝにては忍ばれまじ。鳥に變じて連れ参らん。必ず御驚願ま
しますな。姫君飛び立つばかりにて、愚かな事をいふ物かな。火の中水の底なり共潜りて
行きたし逢ひたしと、思ふ心の如何でかは驚く事の有べきや。片時も早くと宣ひし詞の内
より驚と成、姫君を搔抱き東路さして飛び行きしは、不思議といふも三重餘り有り。かく
とは知らで女房達彼處や此處と駆け廻り、お姫さまはと尋ねれど誰知つたりといふ人なく、
御縁にやお庭にや其處の爰のと騒ぐにぞ、御所中驚き不審をなしお倉お文庫残りなく、餘

清見寺と申すにぞお
癒しき限なく此句
省略に過ぎて、文意
明瞭を缺く。

の事に下々の部屋へ御門の外迄も、尋ね捜させ見れ共御行方のあらざれば、父上御臺
聞し召し、こは如何に情なや、變化化生の業なるか。などお乳乳人女房共は側を離れ油斷し
て見失ひては有りけるぞ。尋ねて返せと伏し轉び流涕焦れて泣き給ふ。御痛はしや御臺所
は咽ぶ涙と諸共に、ア、しなしたり。又二人共有る子にや、女とは生るれど一人も一
人甲斐有て月花に心を寄せ、雪の朝の寒きにも歌を詠み興をなし夫婦の心を慰めしに、今
よりしては誰をかは姫とや言はん子とやせん。共に誘へ、鬼住む鳴へも露塵命は惜まぬ物
をと、消え入るばかりに歎かる。殿下も頻れる御涙を押さへ、實々歎きは理なれ共死し
て別るゝ道ならず。定めて變化の所爲ならん。天に上らば力なし。大地の上に在るならば
鬼界高麗朝鮮迄も谷峰分けて尋ねさせ、取還さで置くべきか。心安く思はれよと、様々諫
め參らさせ、先々恙なき様にと、諸寺諸山へ御祈念の御使者遣はし三重給ひけり。通力自
在の白狐なれば刹那が内に駿河ノ國興津が原の片傍へ姫君下し奉り、我は又下女と成りさ
ぞ氣疎くも思召されん、今四五町参りぬれば若君のおはします清見寺と申すにぞ、御嬉し
さ限りなく、さるにても汝が情いつの世にかは忘るべき。とてももの事に自らが初々しき田
舎住み居馴るゝ迄は頼む也。仕へてくれよと宣へば、何がさてゝ兩御所さまの御手なれ
ば追つ付け御歸洛ましますさん。それ迄は宮仕へ御供申して歸らんと、勇め申せば自から

御足輕く浮き立ちて清見寺にぞ着き給ふ。先づ姫君を傍に置き參らせ、門前に立ち寄れば内より犬共躍り出で、大きに猛り懸るにぞ、流石野干の果敢なさはつゝ驚き度を失ひ本の正體顯るれば、犬は透かさず飛び懸り何の苦もなく咬ひ殺し、門の内にぞ入りにける。姫君は恐しくも情なくも悲しさも兎角前後に昏れながら其まゝ死骸に抱き付き、扱恨めしくも死したるかや。由なき妾を救はんとて雲路を凌ぎ霧を分け來りしもあだと成、非業の死をしけるよな。ア、つれなきは我戀路、なまじ都の内にして焦がれ死しなば今更にかゝる憂き目は見まじ物、是に付ても汝が扱殺す犬より自らをさぞや恨みに思ふべき。許してくれよさりとてはと、聲も惜しまず泣き給ふ。歎きの聲に驚き、何事やらんと寺中残らず我もくんと駈け出る。萬榮丸も立ち出で給ひ姫君を御覽じあへず、なふそれなるは直衣の前ならずや。何萬榮さまなるか。是はくんと抱き付き悦び泣きにぞ泣き給ふ。され共若君不審晴れず、して先づ遙々の道なるを何として來らせ給ふぞ。其上是成狐の死骸に愁傷の體心得ず。如何成る事ぞと問ひ給へば、實に御不審は御理、斯様くゝの次第にて是迄參りて候所に、御寺の犬共駈け出て斯る仕業の情なさ、思し遣らせてたび給へ。斯様に廻り逢ふ事も是皆彼が恩なれば、如何成御業をなされて成り共、彼が前業未來をも助け得させてたび給へと、又さめくんとぞ泣き給ふ。萬榮丸は勿論寺中の僧衆諸共に、扱も不便の次第

三保の一見にかく。

斯て一審くにかけた
り。

やと感涙袖をぞ絞らるゝ。住持宣ふは、御物語を承り人間物を知らず候。畜類様々有りといへども、狐は神に通達し仇を爲せば仇にて報じ恩をなせば恩にて報ず。いで神に齋ひ得せんと、御寺の内に社を立て、稻荷明神と崇め、よきに供養ましめて、扱寺中の御鬱氣を祭し奉り候へば、幸あれ成る松原に僅かの繕にて候へ共、海面富士の眺望いと面白き所なればあれへやと申さるれば、若君笑壺に入らせ給ひ、然らば左様に致さんと、姫君を誘はせ氣疎き秋の野道をば、辿りて三保の草屋形に移らせ給ひ三重憂き事を憂しと思はゞ棄つべきに、猶色添ふる濡れ衣、昨日までは歌にのみ詠みし富士の根、今日は又居ながら三保の松風や、楨の戸叩く夕間暮、葦の枝折に濱庇、いつしめなれぬ葦簾、よしや玉樓金殿に芙蓉の袞敷くとても一人寢覺は物憂きに、君と添寢の草庭紅絹の裏ふく蒲團より、しやんとしてよや中々に背戀しと思はずと、互に解けし御心、包む方なき明暮に或は富士の四季の景、歌に連ね寫し繪に斯て月日を送らるゝ。其比同國浮嶋が原に稻妻六郎とて夜盜強盜の大將有り。従ふ盗人十餘人、是等に向ひ云ふやうは、聞けば三保の松原に將軍の若君流人と成りおはする由、定めて金銀衣服の類なきことは有るまじき。いざ忍び入り取るべきと、ある夜更けて忍びけり。折節若君御目さめ、あら不思議や何とやらん物臭し。如何様只事ならじと、御太刀取て脇挟み燈火を打しめし妻戸をそつと押開き、暫し透し見

給へば、向ふの堀下切り明けて密かに潜り入る者有り。若君靜かに寄り給ひ、太刀抜きさし丁ど斬る。心地よし首は内、胴は外にぞ踏ん反りける。夜盜共肝を消し、思ひ寄らざる次第やと暫し呆れて居る所に、程が谷喜六といふ盜人堀をひらりと飛び越せ共、暗さは暗し火は持たず、前後のあいり見えざれば沈んで窺ふ體なれば、若君は縁際の木陰に隠れおはしけり。外に在し蜻蛉四郎喜六が入りしを力にて、切明けし堀下をそろりと潜り立ちけるを、喜六は四郎と知らずして若君成りと心得、飛懸り斬り倒し、やれ物奴は仕留めたり路次口へ廻れ、明くるぞと、戸を明けに行く所を若君遣過し、横に拂へば程が谷は二つに成てぞ倒れける。大將稻妻腹を立て、すは爲損ぜし此上は堀押潰し入れやとて、我もくと兩手を懸けえいやくと押す所に、松明手々に振り立て大勢の聲々に、やれ盜人よ、強盜よ、一人も遁がすなと、喚き叫んで駈け來る。強盜共驚顛して、命有ての盗みぞや。引けよ逃げよと云ふこそあれ、皆散りぐにぞ落行きける。加勢の者共駈け集り御庭に畏る。若君御覽じして、方々は誰人なれば斯深更に及びし事を早くも知つて來れるぞ、不思議さよと宣へば、さん候我々は清見寺の寺中稻荷明神の仰せを蒙り、當國中の野干共残らず參上仕る。猶此上も我々が晝夜の守護と云ふ下より、皆々狐の面を顯し消すが如く失せにけり。若君姫君諸共に、扱は稻荷の明神と祝ひにし恩、且は又年月馴染みし姫の恩、彼是遁れぬ

且而一かつて。

親子不快—不快は不和の意。

恩愛の夫婦の中を千世迄もと、頼をかけさせ給ひける神變奇特不可思議の、奇妙有りける御神靈、有難かりける次第なりとて、信仰せざるはなかりけり。

第五

大内には萬榮丸直衣の前非義とは兼て聞し召せ共、其義は且而御穩便にて只親子不快の沙汰とし、御訖の宣旨有る故に、兩家肝に銘じ有難く、急ぎ迎を遣はされ兩人上洛ましませば、殿下には直衣の前公方には萬榮丸、御親子打連れ御禮の參内有るこそめでたけれ。内よりの宣旨には、二人ながら年にも足らで永々鄙の憂き住居、さぞ心憂く思ひつらん。付いては萬榮丸と直衣の前婚姻の結び仰せ下さるゝ間、兩家共其心得有べしと、則ち萬榮丸を官職に任ぜらる。殿下將軍冠を傾け、扱有難き勅詔やと再禮してぞおはしける。重而の宣旨には此度田舎住の内富士山十二月の風景見つらん、申し上げよとの御事也。萬榮謹而承り、さん候富士の景氣月々に替る次第、某繪に寫し留め置き候。又直衣の前は今様につらね舞ひ奏で候と申上れば、君叡感淺からず。然らば其寫繪御前かけ、歌舞し教へ奉るべし。逆もの事に庭上に田子の鹽竈をうつし潮汲む體を學ばせよ。早疾くくと宣へば、堂上堂下一同に是は興有御事と喜びのゝめく三重

富士山十二月の風景

先づ正月の山の姿は
以下前出の二一四
頁九行以下二一六頁
一行迄に全く同じ。
一二の異同は暦の方
に註せり。

ながめ也、富士は和國の蓬萊山、峯は削りなせるが如く其高さ測られず。かくて若君姫君は勅に應じて立田山、顔にも紅葉や色變る四季の次第を述べらるゝ。先づ正月の山の姿、(中略)それが上にも雲霞のと絶え無く、沖も汀も白波のさす潮時と疊少女、袖を結んで肩にかけ、いざ／＼潮を汲まんこて寄せては返る片男波、さら／＼さつと汲み受けて、もつ振袖のしほらしさ。裾に立波自ら濡れし姿の打揃ひ、聲を揃へて君が代は千世に彌千代と歌ひつれ、上下壽き治まる御代、萬々歳／＼めでたかり共中々申すばかりはなかりけり。

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也

加 賀 椽

二條通寺町西へ入ル 山本九兵衛刊

道
中
評
判
敵
討



一心五戒魂切上るり

道中評判敵討

竹本内匠利大夫正本

近江源氏一貫ふにか
なさけしがらむ一情
の纏ひからまる。
もりすけはははは
の誤なるべし。

扱も其後栗の花咲けば梅雨入の雨零、杜鵑花は落ちて葵花、咲く頃しも雨のあがりかとり
がてらに干す衣や、武器馬具調度の微る彼の土用干まで待たれじと、いづれの御館屋敷に
も、細引渡す屋の内は又焚代ふる伽羅の香の、薫じ渡るぞたゞならね。わきて名高き武士
の名にし近江源氏の末佐々木氏波之丞此屋敷にも賑々と、腰元仲居はした者男噂や戀話、
戯言交る笑草、ねよげに見ゆるお娘御さのさまざまでも手づからの衣の仕舞の玉襷、情しが
らむ姿かな。御草履取守助は男稀なる御座敷も律義者として許されて、御手道具の塵埃掃く
手もたゆき玉簪、鼻唄うたふ手ずさみや、手癖悪きはわがものと思ひこぼるゝ常なるに、
まして器量や色盛情盛の御娘御、佐野のわたりの雪見より消えは一緒に御情、忝けなし
や夜なゝに可愛がらるゝ面瘦は、猶鼻筋も高師の濱仇波かくる故ぞかし。狼御鬘斗に燃
ゆる火の胸に焦れて何となく、守助來よと召されつゝ、火熨斗の手が足らぬ。そこを持っ
てとくどからぬ御點頭に零れつゝ、差櫛もるゝ前髪の亂れかゝれる隙間より、男見る目の

夜の寝巻一寄るにか
く。

吉野の―好しにか
く。

木枕八つ打割つて―
種々工夫思案するこ
とを枕を割るとい
ふ。

襟につく―襟勢に阿
附すること。

いたづらは、親生付の外ぞかし。守助はつと御側へ夜の寝巻のはで模様、とめ木の薫御座敷へ零すが如く引散らし、守助なんと此模様思ひ付ぢやが悪いかえ。一村薄穂に出で、亂れ合うたといふ模様、自らが身にうけ嬉しい模様ぞと、わざと寝巻に染めたるは可愛らしいであるまいか。これは自ら一人でなし。妾が夫になる人は心意氣をばかあいしと思うてくれたがよい筈と、山の彼方の遠いから通ふ心の戀流し、言葉の水の淀みなく漏りて流るゝ守助が、心の淵の情河深き御恩と思へども、もしやは浅き淺澤の底見ぬかと思ひつゝ、さて―これはおぼしつき。承れば武藏野の一村薄の穂に出る月見る頃には何方へやら御嫁入りと聞きつるが、いかさまにも御二人様、一村薄のもつれ寝にしつぱりとした御挨拶、さゝめ盡きせぬ御契り二世も三世も變るまい。變るななどと合ひて、お仲吉野の初櫻、花のやうなる御子様を並べて御覽じましたらば、これほど目出度い事とは又ま一つとも候まじ。いや申し私奴も晒布半匹求めまし、木枕八つ打割つて模様を案じ出しました、が、恐らくは思ひ付、友禪染の一笔繪に不心中の草盡し、伏猪の床の一人寝に恨みの夢を見る所、一念の鬼百合が二心有る姫百合を、下に敷きたる其風情只口先でぬつべりと、男たらせし女郎花襟についたる其憎さ、男郎花が腹立てゝ面恥かうする所をば、さつと書かせて候と言はせも果てず胸つくししつかと取てこれ男、當事言うていやがらせ思ひ切ら

肩背に結ぶ一弊衣を着るをいふ。

隙づくしみの出来るをいふ。

せん企なるか。誓文くされ馴染みてより暫し忘るゝ隙もなく、親兄弟の目を忍び幾瀬の思ひするぞとよ。そなたこても知る如く去年の冬の始めより、縁につけんと仰せられ様々の衣小袖手道具までの沙汰あれど、そなたに別るゝ悲さに、女の悪き病氣と偽り親の氣に背き、御主一人を樂しみてかやうに月日を暮すなり。重ねてかくと有るならばさうく嘯もつかれまじ。何卒急に分別し、コレ此所をつれて退きや。たとへ野の末山の奥蛭住む磯の憂き住居、肩背に結ぶ世なりとも、いかで恨みと思ふべし。機嫌を直しや直してたも。なにの誓文ぞ。さもししい心は持たぬぞや。コレ此寢巻が出来てからよい首尾無さに寢る間なし。幸ひ父様もお留守ぢやに機嫌直しに寢々してたも。餘の心無き證據には、村薄の亂寢に露をこぼして際づかせ又逢ふまでの記念にせん。鬼の來ぬ間の洗濯ぢや。ちやつとくゝと抱付く。其手枕の戯れは餘念無うこそ見えにける。ところへ旦那御歸りと告げ知らすれば二人の者、小陰に隠れ終りける。一子佐源次出迎ひ、今日は御歸り常より遅く候て心許無く存ずる上、何とやら御機嫌のすぐれぬ様に候が、お氣ばし悪う候かと尋ねらるれば波の承、いやゝゝ氣分に別義なし。今日歸る途中にて不思議な事を見付けしが、いかにとしても氣懸り也。扱それに就き其方に申渡する事有り。かねく聞て置かるべし。某盛の古へは赤松源次左衛門とて人も知つたる者なるが、少しの事にて浪人し、父常樂老もろ

共に大津に住居してけるが、父常樂老別懇に語りめさるゝ侍に、石田宇左衛門といふ者有り。我浪人の身なる故奉公かせぎの其爲に、暫くこれに隠まはれ苦勞になりて暮せしが、些かの事これありて其宇左衛門といふ者を、窃かに打つて立退いた。其忤兵右衛門、我を打たんと附窺ふ。されども隠家知れさればつり出し打たん其ため、某が父常樂を思ひのまゝに打つて取り高札を立てける故、無念さ止むるに所無く添書をして出つくはし、しやつめも即時に打つて取り武運に叶ふ侍とて、此御家へあひ住んでそなたしゆをば儲けたり。もう宇左衛門一族に我狙ふべき者無きとよに心よく思ふ所に、思へば某立退く節、五つと三つとなる忤兩人有りと覺えしが、ヤレ不思議といふはこの事、今日途中で御家中の上村彦左に出合ひしが、二十五六な草履取後に控へてうづくまる。よく見れば某が手にかけて打つたる宇左衛門に似たとはくそれはその微塵も違つた所無し。某もはつと思ひ挨拶をするうち目をも放さず眺むれば、草履取奴も某を不思議と言はぬばかりにて目をも放さず眺めをる。どうやら拙者も氣味悪くそこく挨拶し、互に別れ歸りしが、いか様打つて立退きし其年數を數ふれば當年確か二十一年、丁度彼奴めが年配とその年數が相應せり。よしはしやつめに紛れなく某を狙へばとて、ありのたけとも思はねばよも打たれうとは思はねど、仇持つ身は油斷がならぬ。もしもの事が有つたり共、もう三代

の仇討其方討つ事叶はぬぞ。これに附ても悔しいはいつかに若氣と言ひながら、少しのことに人を打ち、我親までを打たせしは扱々後悔千萬也。とにかく人の短氣なは大事の基なりけるぞ。内々これを心にかけ短慮を嗜みめされうと、言捨て奥へ入りければ左源次は我部屋の扉へこそは入りにつれ。縁の下なる守助は始終をとつくと聞きすまし、喜び勇み手を合せ、盲龜の浮木優曇華の花待得たる親の仇、逢ふは稀なるものなりと思へば、易かりけり。いで／＼兄にかくと告げ日頃の本意を達せんと、思はず知らず駈け出すを娘御暫しと縋り付き、是なふ守助なにした。顔の氣色が違うたが、なんと／＼どうぞいの。もはや父様はいらしやる。退かば今ぢやと氣を急いて、おろ／＼涙に聲上り更に性根は無かりけり。守助引止め、申し只今の御話を聞かせ給ひて候か。何をか包まん私奴は、旦那が御手にかかられたる石田が悴半之介、兄傳之丞もろ共に旦那を討たん其爲にかゝる賤しき身となりぬ。もはや御前と私が契りも是までなりけるぞ。只今までの御情は死しても忘れませぬとて、涙にくれて佇めば、娘御重ねて嬉しやなふ、賤しき下部と思ひてさへ戀が因果といとて、命かけたる色の道、まして父様と同輩のお侍と有るからは、誰を憚かり忍ぶべし。そなたもこゝの一通り、とつくと合點をして見や。もはや夫婦に成るからは、そなたが爲にも父様は舅親にて有らざるや。そんなら討たれはせまいぞや。此段々

おんでもないこと—
勿論のこと。

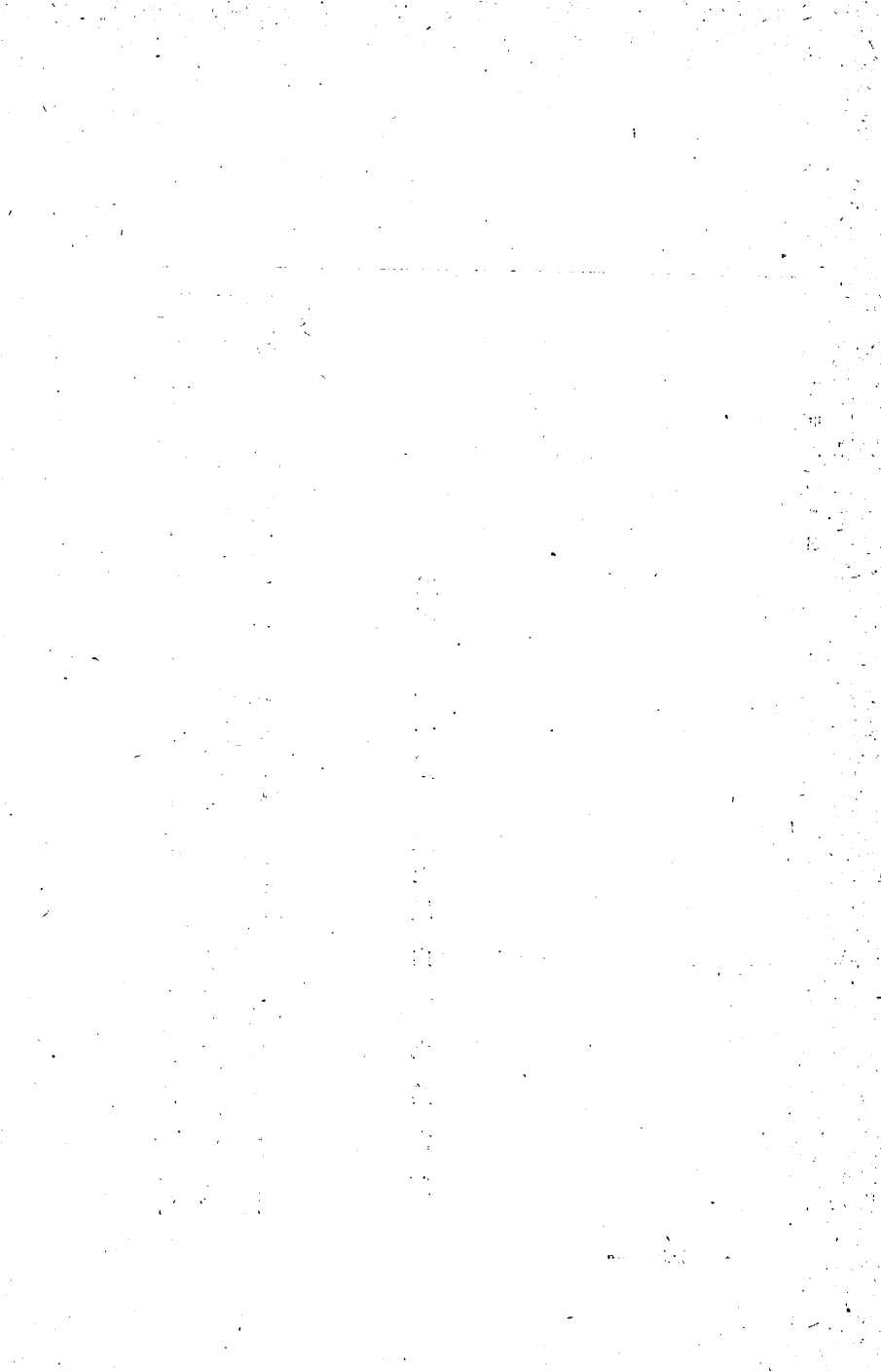
を父様へ詳しく語り参らせて仇討をばさりと止め、誰忍い共思はず女夫になつたがましであらう。我はこしてもかくしても添ひさへすれば嬉しいと、女心のあどなさな女夫詮鑿ばかり也。守介成程御尤さりながら、武士の道をば捨てゝ情とは何共世間の義理立たず。何分兄のふ右衛門に知らせて是非を相談し、日頃の鬱憤晴らさんと又驅出るを引留め、そんなら私が情を捨てずに父様を討つ心か。おんでもないことくどい、娘御重ねてやい畜生、妾が情の道を捨て夫婦の縁を切るからは、あかの他人になつたぞえ。そんなら父様を狙ふ奴、いかで助け置くべきと守介が脇差をすらりと抜いて打ちかくるを、ひらりと潜つて撈落し、扱邪魔なと突倒し、又驅出るを轉けながら裳裾に縋つて引留め、守介討たうと言ふは偽りよ。とにかく女夫になりたさぢや。死んでも女房ぢや。女夫ま一度確かに言直し、いつそ殺してどうなりと分別極めて守介も、裳裾に取付き離さぬを、むんずこ切つて捨てながら又驅出るを走り付き、袂に縋つて引留む。エ、未練也あさましと振切り／＼かけ出る。後には思はず聲高にとかく争ふ聲々を父波之丞聞付て、やら不思議やと走り出で、木の間をすかせば人影有り。やれ盗人ごさんなれ。火をとぼせと言ふ聲に、侍下部火をとぼし思ひ／＼におりあひて、よく／＼見ればおさの様下人守介只二人、同じ所にうづくまる。父波之丞立腹有り、詮議に及ばぬ不義者共、見ればなか／＼腹が立つ。そ

れ二人共打殺せと再應怒られたりけるにぞ、是非に及ばず若黨共前後左右よりおつ取巻く。守介ちつともわるびれず左右の手を上げ、これ〱各々まづ待ち給へ。拙者が一通り旦那へ申上げたき事候間、まづ靜まつて給はれ。これ旦那殿、今は何を隠しません。先年お前の御手にかけられ相果てました石田宇左衛門が悴、同苗半之介とは私でござる。ア、御前を見るも恨めしうござります。親宇左衛門が御前に討たれたるといふ事を兄の傳之丞が知らせました故、扱も無念やなと兄弟心を合せまして、此年月狙ひましたれども、御前の名はもとより、行方もさらに知れぬ故、兄弟は力無く、一所へ寄つて言ふは、ア、扱は程まで方々を尋ね廻れども、敵の行方が知れぬは、よつく佛神三寶にも捨てられた兄弟やと思ひ切り、既に刺違へて死なうとも思うたれ共、いや〱死は易し、どうぞしてと又刀を鞘にをさめ、空しく月日を暮せ共、長々の事なれば金銀も盡き果て、或時は兄弟野に伏し山に伏して寒き夜を凌ぎ、明けなば兄弟左右へ別れて仇を狙ふ。年去り月變り、あさましや兄傳之丞諸共かゝる草履取奉公をして、様子窺ふ所に此御屋敷へあり付きましたが、いか成る縁にや御娘御様と忍び〱の御情の数重なり、今宵も忍んで逢ふ時節に、旦那御歸りといふ由を聞き、はつと思ひてこれなる縁の下へ隠れて様子を窺ふ時、御前の最前仰せらるゝ事を聞けば我身の上の御話、聞くと嬉しく兄傳之丞にかくと告げ、兄弟一緒に御

前を討たんと駈出るを、御娘御別れを悲み止給ふ故、振放し行かんとするその足音が御前の寝耳に入り、かくの通りでござります。今までは主人、今からは親の仇波の丞、遁さぬと刀を寛げ側へ寄る。波の承驤が待つて、扱は汝は石田宇左衛門が半之介か。でかしたくうい奴ぢや。成程汝が言ふ通り、われが親を討つた波之丞は某ぢやが、ヤイ半之介、よく身の言ふことを聞け。其方が身で此波之丞はえ討たれまい。なぜと言へ、某は汝がためには主人でないか。其主たる者を只今討つたならば主殺しとあつて、國中を引渡し、絞首を打たるゝであらうが合點が行たか。半之介こりや、某が料簡をしてとらせうと、手形箱取出して請狀を出し、ヤイ半之介これは奉公人の請狀なり。此請狀を汝へやる間頂いて歸れ。もとより請狀が無ければ主でもなし家來でもない。重ねて兄弟心を合せ、尋常に某と勝負をせよ。此場では叶はぬ。早々立たれといへば、半之介は理に服し、扱頼もしきなされやう忝しく。兄傳之丞にかくと告げ重ねては尋常に名乗り合て討ち申さん。まづ今日はと禮儀をのべ、おさらばくと別れ行く心の中こそ三重ゆゝしけれ。治まる國の容とて民の屋影も賑々と、町の肆藏盡となく夜もすがらに店明けて、戸閉さぬ御代とぞ榮えける。所へ是も御家中にて指折方と相見えて、前後は若黨目付やら、挾箱にて後を押へ靜かにこそは通られける。所を兄弟ひつ包み、コリヤ波の承珍しや。石田が悴

傳之丞、同半之介^{のう}遁^{はな}さぬと斬りかくれば、やあ遁^{はな}さぬとは推參^{すゐさん}也。汝等^{うぬら}を遁^{はな}さぬ助けぬと、思ひく^に切込みしは危^{あや}うかりける三重次第也。誠に兄弟孝行^{しん}心^{しん}諸天^{しん}も納受^{なうじう}し給ひけん、思ひのまゝに討ちおほせ、つれて御前^{ごぜん}へ上りける。前代^{ぜんだい}未聞^{みもん}の仇討^{かみきうち}やと今に盡きせぬ話なり。

二條通寺町西へ入ル 正本屋 山本 九兵衛 版



賴
光
跡
目
論



賴光跡目論上之段

筑後掾正本

戦塵—原本「ゆきじん」と誤名書きせり。

序諸行無常と響きつゝ菩提はだいを知らする遠寺の鐘、生者必滅四季轉變てんぺんの花の色、定めなきは娑婆世界、こゝに六孫王の御孫多田ただの満仲まんちゆうの御嫡子、攝津の守源の賴光は數度すざの戦塵せんじんうち平らげ、平安城に御所を立て帝都を守護し申さるゝ。しかるにいかなる御宿運にや、過ぎぬる如月の頃よりも御心地例れいならず。さるによつて御子息賴親卿を始め、御家の臣下武藏の守渡邊の綱・播磨の守平井保昌・三河みづかわの守坂田金時・遠江の守碓井の定光・駿河の守占部うらべの季武・渡邊が舍弟三田の源太廣綱・其外在京の諸大名、日夜御殿にあひ詰めて御機嫌いかゞと伺ひける。しかる所へとゐはら入道御廣間に罷出で、扱も君の御病氣何ともはかどらざるにより、三條の大納言光季卿みつすねをもつて、跡目の義を奏聞そうもんなされ候へば、異國にもさやうの例多き事なれば、とかく國穩かなるやうに相計らへとの宣旨せんじにて候間、各々工夫をとつくとをさめ、天下の御執權御實子賴親卿か、又は御舍弟賴信公然しかるべきか、心底を残さず言上ごんじやう有るべきとの上意にて候と、委細こまかに相述べて奥をさしてぞ入りにける。いづれも大事の詮議なれば座中ひつそと靜まりける。時に渡邊扇を取直し、人々は何と思ひ給

ふぞ。是は一大事の評議也。しかりとはいへ共御尋ね有るを御返事申さでは叶ふまじ。先此渡邊が欲する所を申すべし。尤御子頼親卿しかるべしと申したけれ共、頼親卿は色に亂れ酒に長じ、萬端我儘成る御心入也。此君天下の御政道行はせ給はゞ、萬民の歎世の苦み有て、御家の滅亡遠かるまじきと存するが、していづれもは何と思ひ給ふぞと座敷をきつと見渡せば、保昌・金時・定光・季武目を目と見合せ、渡邊殿の申さるゝ如く頼親卿の御身持は、唐の玄宗とや申さん、桀紂にやたくらべん。國土を亂さんと思はゞ此君守護にしかるべし。又天下長久ならしめんと思はゞなかゝ無用のいたり也。されば君も現在の御こ、又は御舍弟頼信公いづれかと、それと上意はなけれども頼光の御心底にも頼信公然るべしと思召るゝは著しと、憚り無くぞ述べらるゝ。こゝに渡邊が舍弟三田の源太廣綱膝立直し言ふやうは、何と候かたゝは現在の御子息頼親卿をさしおき、頼信公の政道よからんとは世に新しき評定かな。各々は頼親卿にいかなる宿意有てかゝる詮議は候ぞ。世間の批判も有るべき也。よくゝ工夫候へと苦り切つてぞ申しける。保昌聞きて、いやこれ廣綱、それ天下は一人の天下にあらず萬民の天下也。たとへば五人十人の子を持つても、其子共惡人なれば代を譲らぬが法儀たり。是民安全國土泰平ならしめん爲にて有り。すでに唐土の堯王は八人の太子をさしおき、賤しき民の舜をあげて位を譲り天子となし給ふ。まづ其

例は數多し。殊に賴信公は賴光の御舍弟、賴親卿の御ためには叔父にてはましますや。しからば何の隔てか有らん。我々は御家久しかるべきことを思ひての詮議也とぞ申さるゝ。廣綱重ねて申すやう、あゝ愚か也保昌殿、其堯舜は大唐四百餘州にも類稀なる大聖人、それを定規には寸法外れ申すべし。まさに齊の龍王は賢王の首を斬り、太子に國を譲り給ひし例も有り。賴親いまだ御若年にましましてば、惡しき事は面々の家老役に諫言有り、道を道に正されんこそ眞實の忠孝ならん。座を打つてぞ申しける。金時いらつて進み出で、いやさ廣綱、さなきだに惡には移ろひやすき人心、善きを手本にせずして惡しきを定規にせよとは心得難きこと共也。されども賴親卿には某御物の具を着せ奉りし事なれば、餘人よりは大切に存すれ共、賴親卿の惡逆ゆめゝもつて直るまじと、嘲笑うてぞのべらるゝ。いやそれはさもなし金時殿、提婆如きの惡人だにも勸めによつて佛智に入りしためしも有り。まして賴親はそれ程までは候まじ。心なき草木も矯むれば直る習ひ有り。たゞ方々は賴信と一味のやうに存すると、こみ出でゝ申しける。渡邊あまりに堪りかね、やあ推參なり廣綱、汝が申す事は皆悉く惡事也。かく五人の人々は數年天下の執權を蒙り、御家長久民安全と心がけ五常をもつて身を碎く。かゝる大事の評定をおこらが省惠の尺に及ばんや。いやはや小鳥共が集りて、鷲を蔑みする心底、近頃もつて慮外たり。罷り立てとぞ怒

られける。廣綱もとより怒者、やや御分も我も變らぬ父が子にて有り。さきに生れて兄なればとていかで所存の變るべき。弟が打つ太刀兄に立つや立たざるやと、太刀の柄に手をかくる。こは推參也、おのれ首踏折つて捨てんと飛んでかゝれば人々取て押へ、さりとは大人氣なし。靜まり給へ渡邊、平に／＼と制しける。綱は大きに怒をなし、えゝこは聞えざる人々かな。かやうなる惡人奴を助け置くは渡邊が家の疵也。全く人手にはかけまじこゝを退き給へ、いや放し給へと振切り／＼かけ出るを、人々やう／＼おし靜め、まづ傍らにぞ入にける。廣綱無念晴れやらす、所詮只頼親へ御謀叛を勸めつゝ、天下を覆さんと思ひしが、いや／＼古へより親と戦ひ主に引引き、本意を遂げたる事難し。なまなかに後れをとつては末代までの後難也。是を菩提の種として娑婆の絆を離れつゝ、靜かにうき身を送らんと、髻切つて西へ投げ諸國修行に三重出でにける。此事四方に隠れなく頼親卿は聞召し、御乳母杉田の平八ときかどを近づけ、扱も三田の源太廣綱は跡目のことに付き、四天王と口論し世を恨み遁世す。これにつけても頼親が身上を案するに、父頼光我を見限り給へばこそ、叔父頼信と某といづれか跡目に定めんと、家老共に著く仰はなけれ共、頼信政道よからんと思召さるゝ所也。其上四天王一人武者が、此頼親を様々譏りし故により、叔父に權威を奪はれて此面目はいかゞせん。もはや此上は何處へも引籠り潔く討死し、

著倒し出陣の際諸方
りよ參集せる軍勢の
名を帳簿に記すこ
と。

屍は野外に曝す共名をば雲居に知らせんと、やがて近習の諸侍三百餘人召具して、忍び
／＼に館を出で越前さしてぞ三重急がる。はや杣山になりしかば、旗馬印を立並べ、與
力の勢を待ち給ふ。されば頼親卿類なき惡人なれども、日頃は頼光の威勢によりいづれも
他事なき體に見えけれ共、今は頼光の御勘氣を蒙り給へば誰か心を通すべき。只こゝかし
このあぶれ者野武士の外より加勢の者はなかりけり。頼親御覽じて、いやたゞ人を頼みて
戦ひをせばこそ、日頃のよしみを翻へし道を知らぬ愚人等はなか／＼なきこそましならめ。
我一戦の本意を得ば皆我先にと來るべし。元より此杣山は四方に難所をかゝへつゝ、類な
き要害なれば幾萬騎にて攻むるとも、すこしも危うき事はなし。さしとり引詰め射落して
敵弱らば鐵を傾けどつとかけ、眞向堅割片手斬將棋倒拂切、おつつめ／＼斬るならばやれ
浮世の慰み是ならんと、かんらからと打笑ひ木戸逆茂木菱亂杭、其品々に下知をなし寄す
る敵を今や／＼と三重待ち居たり。此事花洛に隠れなく頼光の御前には四天王を召され、
扱も頼親めはおのれが非議を恨みずして、頼光に不足をなすこそはかなけれ。親の身とし
て只一人の子を見限るは、よつく惡しきと心得ぬ、天命知らぬ愚人めを時を移さず踏潰し、
末代までの惡人の見懲りにせんと、坂田金時に在京の諸侍、五千餘騎の著到を下され大
將にぞ補せらる。金時上意を蒙りわうまう二年五月廿六日、雲居の空もゆたかなる月の都

を打立つて越前さしてぞ三重急ぎける。夜を日についでうつ程に早杣山になりしかば、東西南北一度に関をどつとぞ上げにける。かくて金時はたゞ一揉にとしきつて下知をなしければ、城の内には敵を木戸へつけまじと手先を廻し割つて出で、大手搦手入亂れ火花散らして戦ひけり。され共寄手は多勢と言ひことには名代無双の金時が、軍法の手段を盡し揉立つれば、城中の軍勢共残りすくなに討たれけり。頼親大きに怒りをなし、エ、あさましき風情やな。ヤア二瀬はなきかあれ蹴散らせとの給へば、廣春承り、いで某暫時に勝利をつけ申さん。慮外ながら廣春が働きを御見物候へと、枯木に鳩のとまりたる家の印を家人に持たせ、ゆらりと立出でて、我は是二の瀬の源六廣春也。こと新しき様なれ共、扱も此指物は我等が先祖二の瀬の會良、宿願有つて氏神八幡宮へ參詣せしむる所に、一族共俄に逆心を起しあとより押寄せ來りし時、會良あたりを見れば朽木に鳩のとまりてある。是ぞ八幡大菩薩まさに正直の誠を照らし給ふと禮拜し、多勢が中へ割つて入りこつて押へて捻首し、息をもつかず宗との首八つ討取り、件の朽木の枝にかけ、其外の軍勢を秋の木葉と打散し、急難を晴らせし事は大菩薩の御恵ぞと、それより此方代々家の印とす。されば中に作れる鳩は八幡の御正體、一念一佛己心の彌陀、八つの枝は八相成道を象る也。心さしの輩はかけ出て此木の枝に首を貫き、無爲の都に赴き給へと大音上げてぞ罵りける。

揚卷、鎧の逆板に裝飾として結び付けたる組紐をいふ。

時に寄手の陣よりもいまきの源六源内と名乗り、何二の瀬殿にてましますな。花待ちえたる見参、すはまわりさふと二打三打打つかと見えしが二人は四つになつてぞ倒れる。やがて首を打落し雪の中より咲く梅花紅まがふ桃の花と梢にこそはかけにけれ。其後寄手の陣よりも卯の花緋の腹巻に、鉞形うつたる兜を著たる武者一騎しづくと立出でて、是は江州の住人三科の兵庫元春といふ者也。二の瀬殿の働き日頃承り及びたり。そつと披見致さんと走りかゝつて切結ぶ。互に名を得し太刀打の名人なれば、上段下段に絡んで付いて廻ればひらりとしさり、受けつ開いっこをせんと勵みしが、元春何とかしたりけん右手の目付を誤まつて、左手の高股拂はれて仰向にかへす所を首中に打落し、さしも名譽の三科殿、浮世の暇を曙の日影にきゆる朝顔の花の、首ぞと打笑ひ同じく枝にぞかけにける。木芽の小太郎見るよりも、花と見ながら散らすは傍若無人なると切つて掛るをつつと入つて搔掻み、彼處へどうど押伏せ首ふつと搔切つて、おのれが分際にて二の瀬が印の數に入らんは緩急なれ共、心ざしのやさしければ是も數に夕顔と同じく枝にぞかけにける。日向の前司見るよりも、四天王一人武者二の瀬と呼ばるゝ剛の者を、木の芽が腕に及ばんやと走りかゝつてむす組み、跳倒さん打伏せんと押せ共引け共二の瀬ちつ共たぢろかず、前司が揚卷かい掴み弓手へからりと打倒し、首ふつと搔落し立上る所へ、白山兵衛本庄

刑部が馳せよつて、弓手馬手より組みけるものをくしやと兩の小脇にかい挟み、四天王一人武者ならでは二の瀬と組まん者は日本に覺えずと、前へ引寄せむずと締め一々首を捻切つて、一つ二つは常の事花の盛や吉野山、落花枝に返らずといへ共また咲けばこそ誘ふ無常の風、再び梢を耀かす花の吹雪を残せやと、枝引寄せくうちかけて、いかに寄手の人々、二の瀬が家の吉例の首もはや七つは給はり、いま一つになりてあれば心あらんこもがらは、懸合ひ二の瀬が印の數に入り、後の世助かり給へかし。いかにくと呼ばはりける。金時是を見て、げに二の瀬に及ばん者は味方の内には覺えず、時の大將蒙る身が差當つたる味方の恥辱是非なしと、太刀引側めかけ出でて、坂田金時是にあり。相撲がつくれば行司が出て轉ぶとかや。身不肖なれども某が首の數に入申さん。いかにくと申さる。二の瀬聞きもあへず、先此間は久しう候坂田殿、年頃日頃肩を並べ膝を組み、互にさいつさゝれつ酒酌みたりしも移れば變る夢なれや。二の瀬が首を御肴に進上致すか、又其方の首を申請くるか。有無の酒宴こゝ也とたゞ一打にと打つてかゝるを、金時はつしと受けひつ外して、切込めば、二の瀬又ちやうど受けて引はづし、太刀の寸は伸びたりと、捲り立てく透もあらせず打立るを、金時はづみを見すましひらりと飛び、肩先より乳の下迄はらりすんど切据ゑて、返す太刀にて首打落し、扱件の印の枝にかけ、サア望む所の八相成道よ

つく成佛仕れ。首の七つや八つを家の印と悦ぶは端武者のわざ、此金時は欲しからず。汝が、冥途の土産にせよと、かしこへからりと投捨てしんづくと引返す。かの金時が體たらく、天晴天下の稀者やと扱褒めぬ者こそなかりけり。

中之段

城の内には頼みきつたる二の瀬の源六討たれければ、今ははや城中も保ち難くぞ見えにける。頼親此由御覽じて、此上は我自身に打つて出で金時めが首を取り、二の瀬に手向け得せんと、居たる所を立ち給ふを平八やがて縄付き、さすが一家の郎黨に御手を下させ給ひつゝ、少の御あやまりもましまさば末代までの御後難、一まづ此城を御開きましゝて、重ねて御本意遂げさせ給はんこそ、さすがの君には似合ひたる御行ひたるべきに遮つて諫言すれば、頼親聞き給ひ、なんでふ金時め程の奴をいかで仕損じ申すべき。肩間二つに打割つて、残る奴原將某倒しに薙伏せんと、飛出でゝ給ふを平八猶もかけ塞がり、御疵になるべき事を某いかで申さんや。さやうの荒儀は端武者の業、只大様に事遂げられ、天下の權威を取らせ給ひてこそ、眞實の御本意たるべけれ。かくいとはしたなき御心にてこそかやうにはならせ給ひてあれ。あさましの御所存や、かく申す段憎しと思召すならば、

先^{それかし}某^がが首を取らせ給へ。命のあらんかぎりはゆめ／＼放ち申すまじと涙を流し申しける。頼親とつくと聞き給ひ、オ、此上はともかくも御分が計らひに任せんと、怒りを静め給ひければ杉田大きに悦び、然らば今宵^{こよひ}雨風の紛れに御忍びなされ候へと、扱討死したる死人を積重ね、城に火をかけ山傳ひに東の方より落ちらるゝ。寄手は火の手を見るよりも、すは城の陥るはと一度に馬を乗入るゝ。され共城には人もなくなつたゞ焼残りたる死骸^{はかり}計ぞ有りける。扱は落ち行きぬると覺えたり。いざ追懸^{おっか}けんと我も／＼と進みける。公時はを見て、暫く／＼方々^{かたぐ}よ。是は自餘の敵^{かたき}とは違ふたり。悪人とはいひながら現在の御子といひ、殊には此公時も具足を着せ申せしことなれば、よそのやうには思はれず。さるによつて落ちは落し申さんためわざと手ぬるく攻めて有り。金時程の者が是程の城内を今迄^て手間を取るべきや。所存有つてひかへたり。いざ凱陣^{かいじん}せん人々ど、諸軍勢を引具して花洛をさしてぞ三重歸りける。帝都になれば討取る所の首共を取持せ。急ぎ御所に上りつゝ戸井原入道を以て軍^{いさぎ}の次第を言上有り。戸井原やがて奥に入り、やゝ有て立出て、只今の趣一々言上仕候へば、頼親卿形^{かたち}の見えぬは定めて焼け失せてぞ有らん。たとへ落ち失せたりとても、三國無双の悪人いつまで全^{まう}かるべきや。先城を早速に乗り潰し、殊には二の瀬の源六を討取る事珍重の至也。ついでには御病氣故、此度の軍勢の働き其出立を御覽ぜざる事いづれも本

ほうじー保い。保登
するをいふ。

意なく思ふべし。かつうは御病中の御慰みの爲、凱陣の輩が武者振を櫻の馬場にて一見有るべきとの御上意にて候。其用意仰付られ候へ。委細心得候戸井原殿。さあらば申付けんとして急ぎ御殿を罷立ち、用意の品々下知をなし、一々次第に三重ふれさせけれ。ゆゑしかりける儀式也。かくて其後頼光は四天王を召具して櫓に上らせ給ひけり。其外の人々も思ひ／＼の棧敷を打ち、上下色めき渡りけり。思ひ／＼の家の幕、黄色青色紫や呉服あやどる綾の紋、錦紅様々にうつり心や染色の節にあらねど櫻馬場、今や春かと疑はる。矢竹心や武士の、取傳へたる梓弓其家々は多けれど、流れも清き源の唐土迄も響く鐃の弓矢の道、まして我朝一圓に治まり靡く日の本の源氏の威勢ぞめでたけれ。扱刻限になりしかば、様々の馬皆具傳へ置きにし手綱の秘書、爰を晴とぞ三重乗出す。花やか也ける次第也。かくて其後右京之進頼親は企みし惡逆徒らに秋の霜と消え失せて、世の中豊かになるにつけても、頼光の御氣色宜しからざるにより、御世嗣頼信公四天王保昌、其外の諸侍を召集め、内議評定とり／＼也。時の典樂の頭吉田の法印、篠村法橋御前にかしこまる。頼信御覽じて、先づ今日の御機嫌は何と伺ひたるぞ。心もとなしと仰せければ、兩人承り、さん候今日の御機嫌さして變らせ給ふ御事も御座なく候。たゞ御病氣底心迄御草臥れ候て、御心のむすぶれ深く見えさせ給ひ候。とかく御心をほうじさせ給ひ、御氣の滞り少晴れさせ給

酒功讃―劉伯倫の酒
徳頌にならひて白樂
天の作れる詩。

ひ候はゞ自おのづかから藥力やくりきも廻るべきやうに存じ奉候と謹んで言上す。賴信聞召し、いかに方々
さらば御慰みを何とぞ工夫くわふを廻らし、心底を残さず申上げられよとの上意也。いづれも暫しば
し默然もくねんたる所に、公時やがて進み出で、げに御心慰みの風景何か然るべし。先それ某がしの存じ
候は、それ人の心をいさむること酒宴しゆえんにましたること候はず。唐土たうどの樂天が酒功讃しのかうさんのまな
び、御庭前に酒の泉を湛たへ、美女を描へ今樣朗詠樣々に、音聲微妙おんせいみせうを盡さん事いかゞあら
んと申さるゝ。時に保昌進み出で、是ぞ希代きだいの風景もつともよろしく候はん、扱某さくが存ず
るにはそれ病ふと申すも邪氣じやきのわざ、その濁れるをはらはんにはしやうく、れいゝたる
にしくはなし。南の御殿の花園に仙郷せんかうの體ていをまなび、時にあらずと園そののもの、いろゝ
の風情を盡しからくみ御目にかくる物ならば、少御心も晴れさせ給はんと申す。渡邊の綱
是を聞、オ、兩人の催し尤も面白うは候へ共、それは異國のことわざ也、近き我朝の風
景を申すべし。嵯峨の天皇の御宇ぎよかとよ、融とほの大臣おほじんと言つし人、思ひや空に陸奥みちのくの、ちか
の鹽竈しほがまを堪たへ忍び、六條河原の院に鹽竈をうつし、難波の三津みづの浦よりも、潮を汲ませ遊
興きう有りしは、何とやらん妙なるやうに存すれば、御庭前ていぜんに鹽屋の體ていを飾り、美女を集め蟹かに
少女せうごにつくり潮うしほを汲ませ、又は鹽木の翁おきななどをあひませ、鹽焼く體ていの夕景はいかゞあらん
と言上ある。賴信つくゞ聞召きこめし、何れを分けて言ひ難し。とかく書付を以て言上然るべ

しと、やがて一々にあひ記させ、扱人々を召具して御前をさしてぞ出でらるゝ。御前になれば右の次第を言上あり。頼光御覽じて、先以て某が病中を悲しみて、誠精を盡さるゝの段、誠に以て祝着せり。よつて此書付の段いづれも宜しき事ながら、中にも此千賀の埴竈のことは、我盛んの古へ陸奥へ下りし時、少見物申して有り。昔の體一入懐く思ふ間、先鹽竈の風景望み也と、御機嫌宜しく仰出さるゝ所へ、紀州熊野の新宮の別當慌しく參上し、扱も若王子の社破損に及び候間、修理のため後の方を破り候へば、かくの段の物を籠め置き候とさし上る。即ち御前にて開き見給へば、厚き板に人を畫き胸板と首には矢の根を強く打込み、鎮守府の將軍頼光と書付け、裏には南無日本第一大龍權現、奇瑞を頼み奉る誓願違へ給ふな、頓首源の頼親と書記し、調伏の願書を添へて置いたりけり。人々大に驚きて、是はいかにと騒ぎけり。時に頼光御涙をはらくと流させ給ひ、扱もく、天命知らずの頼親めや。子として親を調伏すること例しあらざる次第也。それ神は非禮を享け給はず、何ぞ彼奴めが祈る共、我定業業らずは死ぬまじけれ共、運命盡くればかゝる業病ぜひもなし。されば先日 of 合戦に落ち行きぬると推量はしけれ共、恩愛離れぬ親と子の中の悲しさは、世の憂き事も身に入まば少心の直りやせん、もしさもあらば折を得て國の一箇國や二箇國は申行ひ、又さもなくては出家僧の身となしても、頼光が淨世の形見に残さんと扱こそ

優是「原本」ゆうけ
い」と假名にて書け
り。

陸奥の一見にかく。

宥免してはあれ。かの唐土の獅子王は、畜類なれ共子をかなしみて地に伏せば、子はさら道を辨へず。毒矢を放つて親を射る。是頼親めに相同じ。頼光空しく成るならば、いか成る佛事供養も何ならん。たゞ頼親めを尋ね出し搦め取り、頭を刎ねて某が塚の前に手向くべし。草の陰にて實儉し、浮世の無念を晴るべきはと、怒れる御眼に御涙を浮べさせ給へば、頼信公を始めとし鬼をあざむく四天王一人武者、げに御道理也ことわりやと各涙を流さるゝ。やゝ有つての上意には、よし何事も定なき世の有様と知りながら、申すは愚痴の至也。先かたぐが志の優景の支度あれ。せめては憂きを晴らすべし。それ／＼との給ひて御座を立たせ給ひければ、各々御前を罷立ち、俄に用意と三重聞えけり。

しほがま

心も詞も及ばれず。上下妙なる遊びきて、さゞめきわたり勇みけり。かくて其後頼光は人々を召具して紅葉の殿に出給ひ、四方の景色を見給ふに、げにもうつせる鹽屋の體、何につけても世の中は、憂節滋き竹柱、葦の垣根に草の屋根、露もたまらぬ茅屋は、月見んための蟹のわざ、萱が軒端の薦葛雲の嵐に吹きとどて、羨しくも鹽竈の煙いぶせく立登る、籬が島の景氣まで、今目前にあらはして、過ぎし昔を陸奥の名所を問ひ續けつゝ、一入興

須磨―澄むにかく。

誰を松風―待つにか
ふりにし―降と街と
かく。

今宵來ん―古今集秋
上に出づる歌
汐波車わづかなう―
諸曲松風の文句。以
風下松の文句によれ
る所多し
持つや田子の浦云々
―諸曲藤の文句

に入り給ひ、四方を遙かに見給へば、優に妙なる御遊び、心もこゝに須磨の浦、飛火の昔
あらはれて光源氏の大將は、藻に住む虫のわれからと、犯せる罪の身を責めて、三年の思
ひ絶ゆる間も、波の夜な―あこがれて、藻鹽の烟と立登り、消えては空に行平の、關吹
き越ゆると詠めしも、誰を松風身に入みて、袖そぼ濡るゝ村雨の、ふりにし方の浦曲まで、
思ひ續けて松島や雄島の蟹の濡衣、乾く間もなき賤が業、あだに暮れ行く月と日を、數へ
て今宵しも、げに初秋の七日なり。くゆる思ひ立登り空にも戀があればこそ、雲に浮
名は棚機糸繰返し―つゝ、戀の染衣織姫の天の川原に立わびて、逢瀬の波に浮き沈
み、年に稀なる契りとて別れも辛き涙川、渡せる橋や鵲の、身も紅に染むとかや。さ
れば歌にも、今宵來ん人には逢はじ七夕の久しき程に待ちもこそすれと、故事までも思ひ
出て、昔信夫の浦までも、いとしん―とすみ渡り、松の嵐の音凄く、鹽波車わづかなる
世を惜めども慕へども、返らぬものは行く水と、去りにけらしな年の暮。あゝさてはかな
き浮世やと無常を觀じおはします。其折からに蟹少女、麻の衣の袖を結んで肩にかけ、
桐戸節我も―と磯邊に出でて、いざ―鹽を汲むべし。さあなふ鹽を汲まう、だんぶ
―と汲み分けて、持つや田子の浦、東揭の鹽衣、汲めばぞ影は桶にある。げに―螢ら
で照らせ日の光り、月の出汐を汲む桶に、映るふ影はいつまでも盡きぬ泉と菊の酒と、壽

きして戯れければ、頼光御悦喜まし／＼て、おゝめでたしやめでたやと御濃嫌宜しく見えければ、其時に蟹少女鹽木の翁もろ共に皆一同に、君が代は／＼千代に八千代をさゞれ石と祝言歌ひ立ちければ、座中に在りし諸大名、皆萬歳を唱へつゝ本所／＼に歸らるゝ。千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命をのぶ。頼光の御威勢めでたかり共中々扨何に譬へん方もなし。

下之段

松樹千年遂にこれ朽ちず、誰か盛者必衰の道理をまぬかれん。あゝ悲しきかなや頼光は御年五十四歳を一世とし、遂に御他界有りければ、頼信公を始めとし四天王一人武者、御家の諸侍たゞ暗夜に燈火消え、日月の影を失ふ如くにて各々涙を流さるゝ。され共人々涙を抑へ、今はや歎きて叶はぬ死出の旅、とかく君の御命を取りし御敵は頼親卿、骨を微塵に碎きてもぜひ／＼首を討取つて、御孝養に報ずべし。扨明日は一七日の御法事なり。營過ぎて其後は各々手段を廻らさんと、先々御法事の營を皆々有こそ三重殊勝なれ。是は扨置右京の進頼親は和泉の國吹井の浦にて旗を上げ、與力の勢を待ち給ふ所に、頼光の御他界と聞くよりも、近國の諸侍我も／＼と馳せ附く事只布を引くが如くなり。既にはや

世に有り顔一當時に
權威を有せる顔つき

えんぎやう一緒行か

與力の勢十萬八千餘騎とぞ註しける。賴親諸軍勢に打向ひ、父賴光我を惡人也と見限り給へども、天は誠の鏡にて天下を我に與へ給ふ驗正に現はれたり。世に有り顔なる叔父賴信、憎かりし保昌四天王が首一々に打落し、親ながらも父賴光は敵なれば、塚も廟所も掘返し、日頃の無念を晴らすべし。はや打立てや方々と、帝都をさしてぞ三重押寄する。此事四方に隠れなく、賴信公は四天王一人武者を召され、賴光のえんぎやうとて賤山賤に到る迄憂の色をなす所に、現在の子として忽ち弓矢を起すこと、天命知らずの惡人かな。此上はぜひもなし。急ぎ方々馳せ向ひ、暫時に退治申されよ。渡邊承り、上意の如く一七日も立つや立たざるに、戦場の懸合本意には候はね共力及ばぬ仕合也。さりながら人の批判も候へばたゞ敵の仕掛を待ち、都にての一戰然るべう候はんと申上ぐる。公時間きもあへず、こは延々なる詮議かな。君の御遺言にもいか成る施佛の供養より、賴親の首を墓の前に手向けよとの上意を早くも忘れ給ふな。よし人はともかく此公時においては、過ぎにし軍に討洩らしたる故により、君を調伏せられし也。現在の親を祈りし食欲無道の賴親を、いつまで安穩ならしめんと、居たる所をずん立てば、四人の人もたまりかね皆々支度を三重せられける。是は扱置きこゝに賴親の御乳母杉田平八時景は、器量人に勝れ案深き剛の者なれば、紀伊の國の住人小鹽の源太園部の藤内とて、南海道にて其名を得たる勇士を近づけ、

事の體を察するに、頼光相果て給ふより保昌四天王怒りを含み、軍の立樣も定めず、我先にと拔駈せんは必定也。いざ道に待受け有無の勝利をたゞさんと、味方の内をぬきんで津の國阿倍野が原になりしかば、先杉田の平八は一村松を小楯に取り小高き所に控へける。二陣には園部小鹽相並び、たとへ鬼神成共洩さじと腕をさすつて控へけり。しかる所へ金時馬に白泡はませ馳せ來る。平八すは誰成らんと松の陰より立より、近づき見れば金時也。なふ久しう候坂田殿、是は杉田の平八にて候、近頃面目なく候へ共、いかやう共頼み入候とさもありさうにあひ述ぶる。何杉田成か降參とや。侍は渡者ちつとも苦しからざる事にて有り。さらば敵の案内致されよ。働きにより本領子細あるべからず申せば、さらば御先致さんと寄るよと見れば金時が、草摺を疊みあげて突かんとするをさしつたりとひらりと飛び、かいつかみ押伏せ、エ、最前より謀事とは知つたれども、おのれ程の奴が何事をかし出さん。おきて事を見んためわざと許し置いて有り。おのれ如きの腕にて此金時が及ばんやと、首かゝんとする所へ小鹽の源太かけ合せ、金時が弓手に廻り指透さんとする腕骨をひつ捕へ前へ壹所に引寄せ、二人を左右の膝にて押詰め、あまより續く園部の藤内をかいつかみ、遙の岨へ投捨て、二人が首一々に打落し、是も軍の門出とにつこと笑ひ立にけり。しかる所へ渡邊・保昌・定光・季武軍勢を引具しはせ來り、やあ金時我々を打捨て

せいこん一誓言か。
必ず頼親に弓矢を捨て
させんとの意なら
ん。

拔懸^{はくけ}はいつもの癖とはいひながら、頼親は大事の敵也。とつくと備^{そなへ}を致さんと、いひもあへぬに頼親は數萬騎^{すばんき}を引具し發向^{はつかう}し、互に関をつくりたて軍は花をぞ三重散らしける。都方は小勢なれども三國無双の五人の者、自身に手を碎き戦へば、數萬の寄手かけ立てられ右往左往に逃げ散りけり。頼親大きに怒りをなし、エ、未練なる冠者^{くわしやほう}原かな。いでく頼親が手練^{てびん}を見せんと五人張に十五束^{そく}、さしとり引詰めさんぐに射給へば、一矢に二騎三騎づゝ射落され、さしも勇みし都勢^{みやこせい}むらぐばつとぞ引きにける。時に金時進み出で、こは後^おれたり汝等と、一文字に飛出るを渡邊取て押へ、あの頼親の弓勢^{ゆんぜい}には盤石^{ばんせき}とてもたまるまじ。此人に弓矢を持たするは龍に水を與へ、鬼に鐵棒^{てつぼう}を得さするにひとし。何とぞたばかり弓矢を捨てさせ申さん。先暫くせいこんす。こはいかに渡邊、戰場に向ふ身が敵^{かたき}の失先を恐れつゝいかで働きなるべきや。運は天にありこゝのき給へとかけ出るを渡邊なほも押止め、運は天にも有り敵^{てき}にも味方にも有り。少しは人の言ふ事を用ひ給へ。是渡すぞかたぐ構ひて放し給ふなと、無體^{むたい}に取て押入れ扱大音上げて言ひけるは、それなるは頼親にてはましますや。是ぞ渡邊の綱にて有り。昔は三代相恩^{だいさうおん}の主君なるが今は八逆罪の科人也。現在の父上を調伏^{てうふく}ありし冥罰^{めいばつ}いかでか遁^{のが}るべき。あつばれ三國無双の悪人かな。かく申すが無念ならばサア近づき給へ。眞向^{まっこう}たゞ一討の勝負^{せうぶ}なりと、わざと憎さげにぞ嘲^{あざわ}

きける。案の如く頼親血氣盛んの勇士なれば、此言葉に怒りをなし、エ、推参なる惡言かな。おのれ如きの奴に弓も太刀もいらばこそ、手取りにせんと弓矢を投捨て走りかゝつてむずと組む。渡邊もとより早業なればはねつ開いっこをせんともみけれ共、三國無双の大力、物の數共せず引寄せ投げんとすれば渡邊しとゝ纏ひて放さず。コハものゝしやと弓手の方へはね倒し、首を搔かんとし給ふ所へ定光・季武・走せ來り、兩方よりもむずみ組んで引伏せ、鎧の上帶引ちぎり高手小手に縛め、今こそ本意遂げたりと残る軍勢打平げ、都をさして引上せ天下安全に治まりける。なほ源氏の御繁昌、目出度しともなッかゝ申すばかりはなかりけり。

右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加秘蜜令開版者也

竹 本 筑 後 掾

大坂高麗橋壹丁目

山 本 九 兵 衛 板

山 本 九 右 衛 門 板

冬牡丹女夫獅子



冬牡丹女夫獅子

加賀 椽 正本

祇園精舎の云々一平
家物語冒頭の句によ
る。

英雄—大臣を出す家
柄、中院、閑院、華
山院を三英雄家とい
ふ。

祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響き有り、沙羅双樹の花の色盛者必衰の道理、奢る者久し
からず、遠く異朝をとぶらふに秦の趙高唐の祿山、近く本朝をうかどふに天慶の純友承平の
將門、間近くは六波羅入道前の大政大臣平の朝臣清盛公の有様こそ心も詞も及ばれぬ。我
身の榮花を極るのみならず嫡子小松の重盛内大臣の左大將、次男宗盛中納言の右大將、三
男知盛權中納言、四男重衡三位の中將、門脇の宰相經盛、前の大納言教盛、池の大納言頼
盛越前の三位通盛以下一門の公卿十六人、其外諸國の受領衛府八省すべて六十餘人、官祿
前代に超過し、榮花天下の目を側め花族の三公英雄の公達も肩を並ぶる者はなし。されば
一朝の怒に其身を忘るゝとや、院の御所を恨み奉り天命をもちへり見ず、後白河の法皇を
鳥羽の北殿に押籠め、卿相雲客四十三人流罪に沈め、小松殿の教訓をいさゝか用ひず、
擅なる入道相國、驕る平家の行末を浮べる雲と頼みなく、思ひ積りて雪折れの小松殿の御
所勞、良藥醫療の驗もなく御病氣重らせ給ふとて、一門残らず西八條入道の屋形に預參あ
り。靈佛靈社の御祈禱の大法有るべきかこ評説取々なる所へ、播州書寫山の衆徒中として

溢れ者―いたづら者。

三衣―袈裟をいふ。

しやつ頭―しやは怒罵する時に添へていふ接頭語。

として訴へしは、去年の春より比叡の山育ちと申す惡法師、學問の爲とて登山致し候が並びなき強力劍術早業に調練し、同學の兒法師を疵付け能化指南も恐れぬ溢れ者、一ツ山もてあつかひ夜中に追拂ひ候へば松明持つたる下僧を掴んで本堂の家根へ人礫に打上げ、松明軒の檜皮に移り折節山風烈しく、諸堂學寮一字も残らず回縁に及び候。名は西塔の武藏坊辨慶と申す惡法師、搦め捕て候と引出す。面框筋骨高く頬骨荒れ、繩取六人中に引立、腕廻せる面黒く、護摩に燦る不動尊、玉眼光るに異ならず、清盛入道椽先に躍出で、ヤア憎い法師が面付かな、己如何なれば、諍喧嘩を好み、諸人に疵付け、剩大伽藍を滅盡すは、頭を丸め、三衣を着す法成か。察するに叡山法師、平家を傾うとし給ふ法皇に組し、己を頼み方々を荒れさすると覺えたり。サア、眞直に申せ、偽らば是を見よ、淨海が此握拳にて、しやつ頭微塵に撲碎んと、睨付け給ひし面色は、白いと黒いと、辨慶が二人有かと凄し。武藏かツラくとえせ笑ひ、扱色々のお尋ね、一ツも辨慶存ぜぬ事、先諸人に疵付け手を負はせし事、是は相手の臆病、なぜ其時に討留ぬと、相手を詮議なさるべし。又書寫山回縁の事は、松明持たる下僧を人礫に打て候へば、時節惡き山風、辨慶が知らぬ事、風の神にお尋ねあらば明白に知れ申さん。且又出家の法に背とは、さの給ふ入道相國、袈裟衣をかけ、頭を丸めながら、法皇を押込、諸人を流罪死刑に行ひ、此法師がしやつ頭を撲碎い

慶聞もあへず、ア、面白き御政道、元來某武藝を好み、日本にはびこる手柄したしと思へ共、手痛き奴も無かつしに、洛中に持て餘す天狗冠者と勝負せんは、嬉しや／＼なふ嬉しうて堪らぬと、すく／＼立てぞ悦びける。入道も悦喜有り、それ繩解よ、出来いたく、うい坊主、先太刀、刀、長刀などが入るならば、取らすべきかとの給へば、いや／＼此まゝ罷出で、行遇ふ人の太刀、刀目に付いたをもぎ取るべし。此法師生れてより人に物貰はず、お床に立たるあの長刀、御門に懸し突棒、刺叉、火消道具の熊手、鋸、大槌など、貰は致さぬ、欲さに取ると、引寄せ／＼一つに取てからげたり。入道猶も機嫌よく、ム、扱々氣味よい法師めかな、千騎萬騎の軍兵の頭に立ん人相有と、簾中につつと入り、銀の鉞打たる鐵の棒提げ、是は源氏の大將鎮西八郎爲朝が得道具、去ル平治の軍に、義朝一家をせめ亡ぼし、討取つたるしるし、是にてわつばを打ちひしげ。やりはせぬぞ、サアとれとなげ出せば、辨慶ひとつにつかんで數をよむ。三本、四本、五本、六本、是こそ忝じけ、七つ道具といさみ行く、平家の威勢引かへて、源氏は鬼にかな棒の武運の末ぞ、三重頼もしき。世につれてかはればかはる常盤御前、我子の命たすけん爲め、清盛にしたがへば、心にのらぬ乗物や、御供び／＼しくかしづきて、小松殿の御祈禱に、清水まうでの下向道、姿は花をかざれども、覺悟は出家同前の、心に衣胸に袈裟、五條の橋にぞ着き給ふ。

解櫃―立ちもとほりて進み難きさま。ねはさ―遅々たる事。よぐま―遅くる間。

弟子―弟子珠の略。歌珠の珠の内四箇の小珠。達磨―同じく八箇の大なる母珠。

故督の隣―左馬督義朗。

こゝに源の牛若丸、三年の日夢の願も今年は秋の日や、早暮れかゝる橋の上、ゆゝしき女乗物に、茶辨當かたげしは、折々鞍馬へ使に來たる喜三太と云ふ下臈。扱は我母常盤御前、すりちがうて通るならば、見しりし者も有りやせん、人に心をつけがほに、戻られもせず盤桓と、編笠かたふけおはせしに、喜三太見付け乗物へ知らせんと、あの若衆の道のねばさは、あれこそ本シのくらがりの牛。鞍馬の牛とかすらする。常盤はそれぞと心付き、人目よぐまのやるせなく、ハァ、悲しや、數珠を落した、我身の菩提は兎もかくも、平家の御代の御祈禱に、三とせ此かた隨求陀羅尼百萬遍、此たび小松の御願の爲め、千手の眞言十萬遍、唱へこみたる大じの數珠、勿體なくも氣にかゝる、水晶と琥珀と半装束の紫房、弟子と達磨は珊瑚樹ぞや、皆立返つて尋ねてたも。拾うた者の有ならば價をとらせもうふておぢや、喜三太獨付け置いて、皆々早うとの給へば、今迄落ちてはよも有まじ、拾うた人を詮議せんと、方々へこそ走りけれ。常盤輿より轉び出で、やれ牛若か母成は。鞍馬へあげしは七ツの年、それよりは喜三太に、文の便を聞く計り、十年ぶりの我子の顔、見せてたもやと引留め、抱き付て泣き給へば、牛若夢の心地して、涙に沈みおはせしが、故督の殿におくれしは三歳の時なれば、おも影も覺え參らせず、母上の御顔は慥に覺え候が、見かはす程の御やつれ、かくゆゝしき御身にて、何不足の候ぞ、敵清盛

ほゝ一憤。

うた一字陀。

おもひ着一翻姿。

さすてき一指す敵。

妻の敵一夫の敵。

に御身を任せ、平家繁昌の祈禱、小松殿の祈りとて、眞言陀羅尼の數珠の所作、清盛への追従か、心のかはつた母上様、其お心では牛若を、ふびん共おぼされじ。何しに父も戀しからん、御涙はそらごとよ、恨めしの母上やと、恨みかこちて泣き給ふ。母上わつと涙にくれ、たまゝあうて愛らしき、親子の詞をかけもせず、情なの恨みやな、母が心を文にても知らせんとは思ひしが、師の御坊や、傍輩に洩れもやせんとひかへしを、知らで恨みも道理也。督の殿討れ給ひてより、御身を母がほゝに入れ、伏見の雪に凍え臥し、大和の國うたとやらんに隠れしを、平家にさがし出され、御身も二人の兄共も、殺さるゝ筈なりしに、清盛入道自らに心をかけ、おもひ者にせんと云。エ、無念やな、口をしや、源氏の大将義朝に枕を並べし此常盤、さすてきの平家に、はづかしめらるゝこと、恨めしのみめかたち、面に燒鐵さし顔を傷ひ、此無念聞くまじと思ひしが、待てしばしと、思案をかへ、清盛が心に従ひ、さまゝに口説しかば、色にひかるゝ愚の清盛、扱こそはわごぜ達が命を助け置きしぞや。母は女の道立たず、末代に名を捨つるも、御身達を成人させ、平家を亡し、源氏の代とひるがへし、妻の敵も氏の恥辱も、雪がんと思ふ爲計、老入道の清盛、光る源氏か業平か、何に色香の有るべきぞ。床をならぶる寢臥には、火燄の上に寝るよりも、其苦さを推量あれ、語るも涙がこぼるゝぞや。され共小松の重盛は、日

妻のため一夫のため。

修羅前―修羅場即ち戰場に於けるの意。

本の賢人、此人あらんかぎり、平家は亡びがたしと云、時しも重き病氣也。みづから御祈禱の七日詣と偽り、清水の觀音さまに、重盛の命を七日が中に取ころしてたび給へと、調伏の爲め繰る數珠は、我身ながらも恐ろしや。聖人賢人の命を取るは菩薩を殺すに同じくて、五逆罪にまさると聞く。妻の爲め子の爲め、現世後生を取うしなふ母が心と思ひやり、恨みを晴れよ牛若と、かきくどき給ふにぞ、牛若も手を合せ、知らで恨みし恐れの間、眞平御免と計にて、悲歎の涙せきあへず。常盤重ねて、聞けば此比此橋にて、十六七の小わつばの、往來をなやますとは、疑ひもなくお事よの。大義を思ひ立つ者は、無益の殺生せぬことぞ、數珠落せしとは、供人避けんたばかりごと、これを持て神佛を信心あれとて給ひければ、牛若戴き懷中し、まつたく無益の殺生ならず、源の牛若が下人一人持たずして、大事は思ひたゝれずと、千人切を企て、手なみを見届け召仕はんと、夜前まで九百九十九人切て候へ共、是ぞと思ふ下人もなしと、語り給へば、喜三太、おそれ多く候へ共、拙者を召れ下されかし、外の事はいさしらず、修羅前の御馬の口は、蛇に綱つけても引まはし、雜兵の首四つ五つは、寢起になり共仕らんと申せば、母も悦びて、オ、幸々、跡は妾に任せ置き、すぐに供せよ。あれ／＼下人共が立歸る、何を云ふ間もないわいの、氣早な心持やんなや。喜三太萬事に氣を付よ、さらば／＼と乗り給へば、名残つきせぬ親

馬に乗る迄云々馬に乗るまで牛に乗れるの謎による。

夕雲の行方云々。夕顔の云々。遙曲橋の文句による。

普長一丁將の替る。ゆきけたり行栢。

長刀の柄元を云々。これも遙曲橋の文句。以下もその文句に多くよれり。

子の中、ふりかへりく、喜三太、己は馬屋を得たるとや、當分それはいらぬ事、馬に乗る迄牛若が、草履直せと笠かづき、半町計過ぎ給ふ所へ、共の人々立歸り、いか様に尋ねても、御數珠は見え申さず、拾ひし者も是なしと申上れば、オ、其筈く、喜三太奴が拾ひ隠せしを、袖口より見付けられ、直に欠落したさうな。内府様の御祈禱、沙汰なしにしてやりやと、有さうにの給へば、扱いきずりのどろぼう憎やくミ口々に、云ひ繰り返す水晶の、數珠より清き常盤の前、涙にくれの日は入りて、月は出けり、三重夕雲の、行衛はそれか夜あらしの、聲すみわたる秋の風、むさし野ならぬ武藏坊、いづくにととつたりけん、おどしにおどせる黒革の、大鎧大長刀、さながら鬼神と夕顔の、五條の橋の橋板を、とゞろくと踏みならし、わつば遅しと待ち居たり。牛若は母上の教訓に力を得、そどろうき立つ出立は、赤地の錦の着脊長に、美精巧の大口、重代の御はかせ、とつてかづきし薄衣の、ゆきけた遙かに見渡せば、二王の様な法師武者、人か見こし入道か、何にもせよ心見て、おさへて下人にせん物をと、悠々と歩みより給ふ、辨慶は、かくぞとも、白柄の長刀欄干に横たはし、しかけを待てば牛若丸、通りさまに長刀の、柄元をはつしと蹴揚げたり、すはしれ者よ手並を見せんと、切つてかゝれば、薄衣引きのけ、太刀抜きはなつてつめつ開いつ、くどつて切ればそむけてはづし、裾を掃へば足

押付―鎧の背にある
最上部の板。

きぶとい―木と氣太
とがく。

をためず、中をはらへば頭を地に付け、三塔にかくれなき長刀の達者と、僧正坊に授かりし打物の名譽と、甲乙わけめの戦ひは、巢立の鷲の若鳥と、深山を出し荒熊が、野邊に爭ふ如くにて、さしもの辨慶あぐんで見えしが、物々し小冠者めと、たゞみかけて打つ所を葱寶珠に飛びあがり、片足かけて長刀を、からりと踏んで踏み落す。さしつたりとかけよつて、取らんとすれば、打物取のべ、辨慶が押付をしつかとおさへ、なんと御坊いかにいかに、我千人切を思ひ立ち、根性見届け下人にせんと、九百九十九人切る、されども汝程のけなげ者に出合はず。主従に成るべきか、我こそ左馬ノ頭義朝が八男、牛若と名乗り給へば、ヤア、願うてもない主君、我らは熊野の別當辨眞が一子、武藏坊辨慶と申す者、清盛に頼まれ君討ち奉る筈なれども、約束變改世の習ひ、今日より生々世々、お主と頼み奉ると、降参すれば御悦び、主従三世の縁のはし、五條の橋のはし柱、きぶといお主、根づよい下人と、薄衣かげ長刀かたげ、立歸らんとせし所へ、難波の二郎が弟なんばの十郎經時、夜廻りの足輕二三十、洛中なやます天狗冠者、討手に向ひし惡魔坊主が一味せしは、あれ討ち留めよとどつと寄る。新参の喜三太見え隠れの供せしが、其處御退きとつゝと出で、是ていに御太刀を合されんは勿體なし、下拙こなし申さんと、面もふらず切かくる。難波の十郎きつと見て、彼奴は御馬屋の喜三太め、己もあばれ者の同類か。オ、

我は馬の口も取る、時々人の首も取る、うそなら取つて見せうかと、かけよせ、雑兵の兩足小腕かひなひつつかみ、橋の下へ取つて投げ取つてなげ、七八人投ぐるを見て、皆ちり／＼に失せてげり。されども十郎ふみ止め、たゞ一打と打つ太刀を、ひつはづいて裏へぬけ、背抱うしろだきにむんずとしめ、さし上げて橋板にどうど打付け、太刀もぎ取り首かき落す早業は、げにも下臍ちふの手かゞみと、末世に残るも理なり。牛若ますく勇みをなし、でかしたく、一人不足の千人切の、數に入れてくれんとあれば、喜三太かぶりをふつて、いや／＼、君の數には恐れ也。我等御奉公の手見せ、蠅はひ同前の難波なんばの十郎、其の十の字に蠅が留まれば、千人ぎりと、主従どつと笑ひの聲、鳥は八こゑの関かちや、曉あけ近き三重松の風、無常の嵐吹きすさぶ、小松殿の御病體、日に隨つて頼みなく、かぎり近しと聞えしかば、一門は云ふに及ばず、公家武家町人農夫迄、六波羅に群參し、眉をひそむる折からに、清盛入道御入なりと有ければ、枕元に請うかぜらるゝ。やう／＼扶け起されて、衰へてし顔かほに、鬼のやう成る入道も、やゝ涙ぐみおはせしが、御邊へんの所勢大事の由、當家他家の歎なげきなり。然るに此たび宋朝そうてうより、耆鵠きこく天と云ふ名醫日本に渡り、病人の顔色を見て肺肝はいかんを知り、聲を聞て六脈を察し、一粒一七ひの藥を與へて、死したる者を蘇よみがへらせ、長生不死の壽命を授くること、恰も神のごとし。則ち其醫者召つれたり、脈みやくを見せて藥を

碧落—青空をいふ。

功慢—高慢の誤。

かたうざ—万人、味方。

受け、本復の色を見せてたべ。入道無病息災の身なれども、唐土の醫者の名方、不老不死の藥を、はや一廻り飲だれば、千年の命は慥也。又二廻り服したらば、二千年は生き延ぶべし。たとへ萬々年にても、入道計ながらへ、孫子の跡のとひ吊ひ、なふやかましむつかし。御邊も共に生きてたべ、耆鵠天是へ召せとの給へば、今を限りの重盛公、起き直つて、しばらく、其唐の醫師が不老不死の藥を、父禪門ははや聞召され候か、中々常に身をはなさず、夜に三度日に三度、用る也との給へば、重盛公、涙をはらくと流し、ア、淺ましや、平家の運命つきはて、代は魔道に落けるかや。それ乾坤の間に生を受け、形チ有者は天命有り、初、あれば終り有り。三界の教主大覺世尊、耆婆が良藥叶すして、跋提河の涅槃に入り給ふ。病者は佛體醫師は耆婆、定業の天命藥に頼らば釋尊入滅有るべきか。秦の始皇は不老不死の藥を得んと、上は碧落下黃泉を探せ共求めず、但天竺の外道の法は、億萬劫を保ち、中華の仙術、形チをはなれて氣をくらひ風を呑み、千歳を延ぶれども、生死の悟を得ざる故、六道の苦輪をめぐつて、地獄に落ると承る。我朝には天狗の法、我慢功慢の人の心をすみかとして、善根をにくみ悪行を悦び、夜に三度日に三度鐵の熱湯を飲む苦に、天狗道成就し、生もなく死もなし。此魔法の外、三國に不老不死の藥候はず。疑ひもなく愛宕鞍馬の大天狗、平家の驕をかたうどに、世をくつがへさん天魔

の見入、其樂重盛に見せ給へ。生を食る愚蒙の目には良藥と見ゆるとも、五戒を保ち五常を修め、正法を守る重盛が清淨の目にかゝらば、藥の邪正は顯れん。よしは誠の藥にもせよ、位大政大臣に經あがり、日本六十六ヶ國、三十餘國は平家の知行、齡六十に越え給へば、出離生死の御營み、無上菩提の願ひの外、何御不足の候て、煩惱業苦の浮世に長命の御願ひ、淺ましきよと計にて、又むせ返り給ひけり。入道あざ笑ひ、又々癖の生悟、其心より煩はるゝ、御邊は兎もかくも、この入道は文盲なれば、藥を飲んで長いきせん。それ〴〵と有りければ、輿の内に入られし唐桑の筈より、堆朱の香箱御前に差出せば、入道謹み頂戴有り、蓋を取らんとし給ふ時、香箱の内燃え出て、燄煙をまき上げ、微塵に碎け飛ぶ音は、瓦礫を破るがごとくにて、さすがの入道色變じ、上下身の毛を立たりけり。重盛公涙をおさへかね、御覽候へ、天狗の所爲、毒氣五體にしみ渡り、大熱病を受け給ひ、火の病となつて御命をとらん事、三年は過ぐべからず、それより平家の運命傾き、源氏に世を切とられ、今の榮花は引かへて、一門屍をさらすべき、重盛が未來記は、その時思ひ知らるべし。ア、淺ましの運命や、はかなき平家の行末を見んよりも、重盛が命を取りてたべと、熊野權現に祈誓をかけし病なれば、藥も療治もかなふべきか。臨終も早今夜の中と存すれば、是今生の親子の別れ、心の亂れぬ其中に、正念の床に座し、淨土の道をも

下種—種子を下すこと。

資道—阿闍婆。

踏み分けて、御菩提の下種し奉らん。さらばくと涙にくれ、御子達の肩にそひ、泣々佛間に入り給ふ、平家の柱折れたりと、惜まぬ者こそなかりけれ。入道相國大きに怒り、すつくと立ち、ヤアおろかなり内府の詞、此清盛が威勢に、木の葉天狗の見入などゝは思ひもよらず、源氏の奴等が業ならん。唐人醫者めひつ立て來れ、穿鑿せんとの給ふ所に、辻風さつと吹き來り、梢を鳴らし、木の葉を捲き、軒を破り、瓦を飛ばし、遣戸障子を吹折つて、震動するぞ三重恐ろしき。御供の瀬ノ尾の太郎ふるひく罷出で、彼の唐の醫者、一丈餘りの鳶となり、車輪のごとき翼を擴げ、風を起し雲に乗り、鞍馬のかたへ飛び失せて候と、申す間に空晴れて、風收まるぞ不思議なり。入道大きに仰天有り、さては小松が詞に違はず、天狗に毒氣を吹込まれた。三年の中火の病で死ぬるとや、三年の立つは今の間、入道は死ぬるか、ア、扱是は何とせん。エ、死にともないく、妙藥は有るまいか。天狗のあたつた療治はないか、誰ぞが高い鼻をそいで、煎じて飲で見ようかと、顛倒周章うろくと、周章へ給ふぞ見ぐるしき。ア、思ひ付たり、黄金は毒を消す、先年奥州の黄金三千兩、内府が藏に込めさせたり。それ取出せとの給へば、小松の執權主馬の判官盛國罷出で、平家の御運末危うく、日本にて御一門の後弔ふ人も有るまじとて、店育王山佛照禪師の御寺へ、資道に御渡し候さいひもあへぬに、飛びかゝつてしや首取つ

てひつ敷き、主が主なれば己迄が馬鹿律義、目前日本の寶を、見えもせぬ後世の爲め、異國へ渡すうつけ者、それこそ唐へ投金と云ふもの。入道が命三年切り、存命の間に源氏の末葉根を絶やす、軍始の血祭と、肩を踏まへ盛國が、たぶさを搦んでえいうんと、首引抜いてかつはと投げ、サア、常盤御前も討て捨て、法皇を流罪に沈め、蛭が小島のせがれめ、鞍馬山の童を始め、かたはしに攻め伏せん。馬に鞍置け、物の具せよ。入道年は寄つたれ共、保元の弓勢、平治の太刀風、草木も靡かす赤旗を眞先に押し立て、三軍心を一ツ致にして、親が進まば子も續け、兄が引かば弟は駈けよ、主が討れば下人は飛び越え、先陣討れば後陣が乗こえはねこえ、隙を有らすな、息つがすな、無二無三に攻め入らば、秋津島は扱置ぬ、鬼界高麗白濟國、南蠻北狄残りなく、平家の下に屬けん事、案の内に覺えたり。小松が別れ悲んで、心落すな憶するな、勇めやいさめ一門と、中門のあゆみの板をとくく、とうくとうと踏みならし、物に狂ひの勢は、惡魔、天魔、邪魔、心魔、四魔の首領の僧正坊、大天狗の所爲成はと、鼻に顯はれ見えにけり。

中 之 卷

源は渴れて埋れて濁江の、水に離れし魚とかや、源氏侍方々の、底の藻屑に身をそばめ、

阿彌陀の光り一今の
阿彌陀殿の起源とな
れる語。

すもじー推量せよ。
てんごう一戲言。

いつ世の中に這ひ出て、甲を乾すべきしるべなき、龜井六郎重清、晝は人目もうば玉の、小
行燈さへ身の油、擔ひ賣する身代は、吹けば散るてふさゞれ砂、蒟蒻豆腐の塩梅よし、あ
んばいよしとぞ賣りありく。ア、今夜も月は八つ前、扱も賣れぬ事かな、蒟蒻は今夜食
はいでも、明日までも置かるゝが、豆腐が廢る。一挺を廿四に切り、二挺で四十八串、彌
陀の誓願、ア、何處ぞに阿彌陀の光りはせぬかい、賣つてのけ度いな。ア、南無阿彌豆
腐なまいだ、ア、南無あいだ、あだ口念佛高塀より、若き女の顔出し、これ、おぢやつた
か、宵からたんと待ちこがれたと、忍びやかに呼ばる聲、あいゝ、すんど焼立て味噌
べつたりのぬくゝ、顚が落ちまする。十串ばかり上げましかと、いへば女は、
ア、うるさ、違ふたげなとて入りにけり。ヤア、こりやなんぢや、ム、聞えたゝ、こゝは
清盛が、手かけ共を置く對の屋のうらと聞く。清盛の古入道が、塩蛸頭に喰ひ厭いて、生
魚好むいたづら女、念佛を合圖の男引入れ。ヤア、なんでも是はよい慰と、打あふのいて
なまみだ、あゝ南無阿彌陀なむあみだと、張上ぐれば以前の女、是々來てか、何として
遅かりしぞ、待ぼうけに氣が盡きた。こゝへゝと小手招き、さし心得て、ア、待つ身よ
り待たるゝ身の、千々の思ひを御すもじ。宵から賤が魂は、抜けてそさまのお袖にと、
思はせぶりの詞つき、エイ、いやらしいなんぞいの、てんがうも折に由る。コレ、是に大

竊窺一くはん一横笛
一管。

小結の烏帽子一小結
の結びあまりを左右
へ長く出せし少年用
の烏帽子。

二佛の中間一釋迦去
りて彌勒未だ出世せ
ざる間をいふ。中間
を奴の中間にかへし
洒落なり。

事のおかたみ有りと、袋一つなげ出し、見咎められてはむつかし、早うくくと云捨てて、女はかくれ入りにけり。龜井案に相違して、必定是は盜物、後の難儀になるまいか、どうか、かうかと、分別袋の口を解けば、螺鈿の手箱に竊窺一くはん、小結の烏帽子五色の糸にて、さまざまの縫ひ物したる直垂、大口ともに疊み込められたり。いかさまよし有る公達さんだちの御装束、不思議に我手に入ること、武運開けてよき大將、主に取るべき瑞相と、歸り仕度する所に、あかどね鰐つばも物さびて、雲の空鞆そらざや剥げまはり、月山の端に二合半、物むつかしきあたまな奴大聲上、なまだ、は、なまみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ、堀を見上げて高念佛、立とまりては又念佛、是ぞ二佛の中間也。こりやあんばいよし、今身が様に此所を念佛申して通つた者はなかりしか。あの高堀から女中などは見えなんだか。さればく、私さき程ふと念佛申したれば、堀の上より美しい女中が、なふおぢやつたかきぬつと出で、ハア、違うたとてぬつとひつ込み、それより念佛申す人一人も通られず、こなたの念佛待つてさうなと、なぶるも知らず、其筈ぢやくと打點頭うなづき、なまみだぶく、なまいだく、く、ア、喉が痛い、こりやあんばいよし湯はないか。いやく、湯も茶もすつきりしまうた。それよく、蕃椒味とうがらし噲は有るけれど、是ではむせてたまるまいのと、賣物かたげ逃げんとす。こりや待てく、大じの手筈の念佛、一人

とつこの皮―すつぽ
の皮と同じく盗賊の
事

の聲は届かぬさうな、同音に申してくれ、恩に受けう頼むといへば、お易い事ぢやが宗旨がちがうた、御免あれ。なんぢや、ちがうた。さうは言はせぬ、たつた今念佛申したと言うたではないか。いや、只今は魚食うて、口がなまぐさい、明日来て申して進ぜうと、駈け出る拐あふこひきあひて、袋どうど落ちたりけり。扱あこそく、先へおのれがしてやつた、いきがたりめと云ひ捨てて、かゝへて走るをひつたり、おのれこそ横取のとつこのかは、拐あふこのむね打いたどくかと、ふりあぐれば、飛びしさり、呑みこまぬやつぢや、やい下郎奴め、身が旦那は御牢人ろうにん、母御よりの御かたみ、命かけて大じの物、戻して旦那出世の後、きつとお禮にあづかるか、無理取むりとりして首斬きりらるか、勝手かたてにせいとひるまぬ體、

牛若ひたゝれの模様

龜井もさすが心にくゝ、ム、しかとそれが定ぢやうならば、袋の中に何が有る、云うて見よ、違ちがはずはそちにくれうし、もし又ちがふと我やらぬぞよ。中間ちつ共臆おくせず、それを知らいでよい物か、青貝蒔繪の手箱に、小結あひひの烏帽子笛一管、五色の糸の滋縫しなぬいの直垂、大口有る筈、なんとちがひは有るまいがな。ム、然らば笛はいか様の笛すずなるぞ、オ、吹け

ごきん—呉錦
もとわたり—古く舶
來せる品

ばひい／＼鳴る笛よ。うろたへ者、ヤイ、鳴らぬ笛がある物か、竹の恰好がっこう言うて見よ。されば竹は空竹、節ふし込めて蟬のかたち小枝を切つて残されし、是にちがひは有るまいがな。然らば直垂大口の、縫ぬいの模様は何々、地は何色と問ひければ、オ、言うて聞かせんよつく聞け、ひたゝれは紗綾さや編子、純子じゆんし繡珍しゆちんの類ならず、ごきんの綾のもとわたり、山鳩色に薄紅うすべにまぜて、さつと一はけはかせかけたる、八重がすり、八ッ色五色のくみ糸にて、十二の菊とち四つの紐付ひも、とんぼうむすびてふむすび、雌蝶めてふ雄蝶こてふの翅つばさをまなび、つがひむすびに結むすばれたり。右の方の折目より、左の袖のはづれまで鞍馬は大悲多聞だいもんてん天、賀茂の御社みで、糺ただの森、貴船きふね、松の尾、梅の宮、高きお山に愛宕山、麓には三國一の釋迦如来、蔓いらいを並べしけしきを、手をつくし氣をつくし、上手をつくして縫はれたり。脊筋せすじに源氏のうぶすな石清水正八幡の宮所、朱あけの鳥居はあかき糸、瑠璃るりの玉垣たまがきの糸にてぬはるゝ、百八間の廻廊くわいろうに廿四孝八景の彫物はりものをうつして、一ト間ま／＼に金糸きんしを入れ、鷺あもだかに澤瀉あもだか葡萄ぶどうに栗鼠りす、車に螳螂かまきりきり／＼、桐壺きりぎり簪かんざし木若紫、是も源氏の壽ことじきの、御代を祝ひてぬひ物せり。こゝに翠みどりの千本松、白鳩千羽ひな鶴千羽、竹の小枝と子の日の松、ひつくはへ／＼、梢／＼に巢ていをくふ態、源氏の白旗百ながれ、平家の赤はた百ながれ、威勢を爭ふ山おろし、神風山かぜおきつ風、平家の赤はたさつ／＼、吹拂ひ吹まとい、八重の塙路

ましゝ猿
唐のましゝ云々以下
十二段草子の文句
によれり

に引壚の、波間を照らす白旗は、朝日と輝く雲の色、金銀の糸にてぬはれたり。大口は
かまの裾のぬひ、唐のましゝも千疋、日本のましゝも千疋、唐土の猿は大國にて、尾を長く色
うすく、形を大きにぬはれたり。日ッ本は小國の、かほをませく、ませの小猿のすん
ど小猿の猿、さるくく、こけざる小猿が唐と日本の潮境、ちくらが沖の、沖の小島の
波にしよぼ濡れて、日本のかたへ越すを、越させじ、越さん、越させじ我慢の相、天下
分目の軍をまなび、針目たゞしく糸筋きよく、ぬひ仕立てたる直垂を、我朝にて着る人
は、我らが主人ならずして、又と二人有るべきか、サア、渡せとぞ申しける。龜井一々聞
くに付け、是八幡の引合と、小聲に成つて、扱覺えたり申したり。お主と申すは源氏方
のゆかりよの、我は紀州熊野の住人、龜井の六郎重清といふ、代々源氏の下人すぢ、主君
と頼む御かたあらば、引合てたべといへば、喜三太、ム、扱は聞及ぶ龜井殿か、我らが
主と申すは、義朝の八男牛若君、御母常盤御前を、清盛入道害せんとの催し故、此所を忍
びおち給ひ、此御かたみを若君へ、届け申せとの相圖にて、扱こそか様の次第也。君は近
日奥州へ御下向なり、追付跡より下り給へ。某は喜三太と申すお馬取、かねて御披露仕
らん。先それ迄は穩使に、其商ひして豆腐に串を挿さう共、腰に刀はさすまいぞと、袋か
たげて別るれば、龜井悦び打うなづき、兎角御前はよい様に、追付下つてお目見えし、多

こつちり―濃厚なこ
と。こつてり。

勢の軍兵勢ぞろへ、打てのぼる程ならば、主と下人のあんばいよし、源氏の運はあんばいよしの、とうふの豆のさやか成、月にわかれて、三重歸りけり。戀塚をとなりに住めば藁葺の、やきもち茶屋の妹春迄、色をくみ茶の夫婦あひ、夫は京へ小あきなひ、わらぢも妻が手づくりの、なさけのはなを足軽く、朝夕とんで鳥羽の里、名所は人の氣もやさし。まだほのくの朝ぎりに、牢人めきし旅人、なんこおかた、茶はまだ有るまい、さゆ一つ所望と、床几に腰をかければ、成程お茶もわきました、汲んであがつて下されませ。私が亭主は朝茶好き、毎夜京へあきなひに、戻りく飲んで、いかな宇治の極上も、嬪が茶には及ばぬと、夫婦の中のこつちりの、出花をあがつて下さんせと、小じほらしげにあいしらふ。ム、扱は御亭は留守か、聞けば清盛入道、後白河の法皇様を、此鳥羽の北殿とやらんに、押籠め置きしと聞及ぶ、お内儀の才覺で、法皇様の御有さま、少拜む事なるまいか。いっかなく、番に番厳しく、あたりへ参る事かなはず、去ながら、此度小松の重盛かくれ給ひし菩提の爲め、此鳥羽の里日に一遍、頭陀の修行なされたきとの御願ひ、放逸無殘の清盛も、我子の別に心やはらぎ、七日が間は一へんづ、鳥羽一在所の内ばかり、苦しからじと許し参らせ、なふ勿體なや痛はしや、御法體とは申せども、十善天子の御身にて、我等風情の門に立ち、鉢々と宣旨有り、殊勝共いたはし共、涙

秋の山―鳥羽にあ
り。

十二の頭陀―頭陀の
行に十二種ありとい
ふ。

にくれてしみくと、をがみし事も候はず、追付御幸の時節故、此草鞋を捧げん爲め、いそぎ作り候也。あれ、あれへ見えさせ給ふ、必ずそれと知らぬ顔、常體の鉢ひらき同前の挨拶と、知らする風の秋の山、たどろくと御幸なる、頭陀の袋あさ衣、鐵鉢を御手に据ゑ、八つめの草鞋召るれば、二人の内侍鳩の杖、綱代の笠を携へて、昔にかはる御供人、賤が門々鉢々と、の給ふにぞ、主の女進ぜましよと、貧女が一錢手の中の、かた搗き麥を御鉢に受け、三寶供養六道の、有縁無縁と御回向あり、頂き給ふぞいたはしき。旅人もわざとしらぬ顔、近比殊勝の修行者、わづかの報酬いたしたし、受け給はんかと云ひければ、法皇聞召し、さん候、四分律に、十二の頭陀を説かれたる、中にも次第乞食とは、長者をも親します、貧者をも厭はず、次第の門並を、乞つて通る法なれば、いかに申受くべしと、仰せもはてぬに旅人肩にかけたる皮籠を開き、重たさう成一包、御鉢の中へ入れんとすれば、ア、是はおもたげ成御施物、金銀でこそ有るらめ、不作餘食と申て、一時の食の外とては、受けぬが頭陀の法ぞかし。只一錢一粒の施あれとの給へば、修行の法はともかくも、此金子三千兩、御僧の外餘の人に、ほどこす金にて候はずと云捨ててかけ出る。とまれくと内侍達、呼ぶ聲耳に聞入れず、田の畦傳ひ逃げて行く。折しも龜井はあきなひより、もどる所を女房はこちの人、あれ捕らまへさつしやれと、

けでん顔一驚きし顔
八性氏一八庄司の誤
聲。

呼ばゝれば、まつかせと畠も躊躇も踏みあらし、あなたをなたへ追ひまはし、なんなく追つめ、どつこいやらぬとむんずと抱く。ヤア、尾籠千萬、何あやまりにかくするぞと、言へば女房走り出で、あやまりないとは言はれまい、今朝起く／＼にひよつと來て、茶一つ飲みやつたばかりぢや。合點のいかぬ顔付ぢやもの、人がなんの請とらうと、わめくを男は聞ちがへ、そりや見たかなあ、男の留守に女房のねごみへしかけ、かゝが出花をよう飲んだなあ。なんぢや、金で濟まさうや、二百十日に風は吹かず、かゝが出花の相場が、イヤ、いつ三百目に極つた、サア、うせいと、引ずつて立歸れば、法皇御覽じ、ヤレ、さなせそく、其者聊咎はなし、法に過ぎし施物をかへさん爲めなり。いかに旅人、愚老が一鉢は、其日の飢を養ふまで、あすの貯何にせんと、立去らんとし給へば、龜井はあつとけでんがほ、旅人は手をつき頭をさげ、涙を流し居たりしが、一天の君に向ひ奉り、申すも憚多けれども、某は紀州熊野の八性氏、鈴木三郎重家と申し、平家の被官にて御座候。扱も小松の重盛、平家の運命末危うし、憂き恥を見ぬ其中に、命を取つて給はれと、三所權現に命乞し、卯月始に熊野參籠有りし時、某を密かに招き、父の入道天命に背き、法皇を鳥羽殿に押籠め、憂目を見せ奉る、冥罰子孫に及ばん。淺ましくも恐ろし。我死して後、此黃金三千兩、法皇へ獻上し、貧苦を慰め參らせよ。世間へは此黃金菩薩の爲め、

松柏の云々―論語子罕篇の文句。

震電―盛衰の誤。

宿紙―漚返しの紙。論旨を書くに用ふる事あり。

唐へ資道に渡すと披露して、頼むは汝一人、深くつゝめと申されし、此鈴木めを人と見られし、小松の遺言、草葉のかけにも、臍甲斐なく、かつは小松が寸志の忠義、遂げぬも便なく候へば、御そばの上臈達、御取次下されかしと、身をなげ伏して奏しけれ。龜井、さては幼少より別れ育ちし兄なるよと、女房に目くばせし、小くびをかたげ聞き居たる。法皇御手をはたと打ち、松柏の凋むにおくるゝとや。諸木の霜にかゝる時、松の常磐は見ゆるぞや、小松が忠義顯はれたり。それには似ぬ清盛一家が不忠不義、天下の煩國土のうれへ、さくに亡ぼすべかりしを、小松に免じて助けしなり。いで―平家誅罰の院宣をなすべしと、内侍達の懷中の、御硯宿紙にて、震筆の院宣うす墨に遊ばし、義朝が末子牛若、京近邊にありと聞く、此黄金は軍の用意、ともに鈴木渡すべしとて、たびければ、鈴木飛しさり、宣旨背きがたく候へ共、某父かたは鈴木にて、平家の被官、母かたは龜井を名乗て源氏の下人筋、さるによつて、親にて候鈴木の庄司、一人の弟を幼少より引分け、母かたへ付け置き、今にも源平軍となれば、兄弟鏑をけづる中、亡びかゝる平家を捨て、末榮ゆべき源氏に従ふなどゝ笑はれては、他人よりも耻かし。七歳になる倅をつれ、平家の味方に參る某、院宣の御使は、余人に仰付けらるべしと、申捨てゝ駈け出る。龜井走りかゝつて引止め、ハテ、又しては、びち―はねる鈴木殿、尾鰭を付け

てなまぐさい云分召るれど、くだらぬ。是もと法皇さまはナ、平家亡ぼさんとなされし故、かく押籠れおはします、然れば平家の大敵は法皇様、それに金をあてがひ、敵の城へ兵糧をこめながら、源氏に付ては弟が、さげしみが恥かしいとは、一も理のつまらぬいひ分、頭は鱸尾はるぶな、跡先がそろはぬと、かつらとぞ笑ひける。鈴木はつたとにらみ、ヤア、ぼてふりめ推参千萬、おのれ弓取の法は知るまじい。弟鱸井は侍なれば、汝らが推量とは雲泥萬里、そこ立去れとねめ付る、イヤ是、買人も人による、彼の行燈の書付を御覽ぜよ、すんど心底のあんばいよし、さらば其弟の鱸井殿に、此あんばいよしが成かはつて回答せば、一言も明せはせぬと、布頭巾取つて捨て、拐腰に脇挟み、膝立て直し、是兄じや人、鈴木殿、僅二人の兄弟を、源平兩家にわけ置かれし、父の心を御存じか、子を思ふ親の慈悲、我子で思ひしり給へ。傾く平家に從うて、兄弟が譽もなく、やみくと屍をさらし、孫の命も有るまじと、子孫の絶ゆるを悲しみ、末繁昌と見え渡る、源氏へ鱸井をつけられしは、兄の鈴木を見立てよと、云はぬばかりの親心、痛はしとも有難しとも、推量なきは不孝人、親をまなぶは子の作法、七歳の男子を平家がたと名付置き、御身源氏へ忠功あらば、其子も命助かつて、道も立ち子孫も立ち孝も立ち、家も立つ。勅命に背き平家にかたうとし給はゞ、其身は申すに及ばず、七歳五歳もいはせばこそ、胎内迄子孫

を斷たれ、親の墓も引毀たれ、道も立す名も立す、家の名字も絶やさん事、不孝の罪の第一也。弟は源氏に身を立て、兄の身命果させ、龜井が嬉しかるべきか、曲もなき鈴木殿、けんどんなる兄上と、引寄せゝすがり付き、まつ此ごとく本の龜井が悲しまば、何と返答し給ふ、詞は他人向なれど、涙ぞ誠の涙なる。鈴木横手を丁ど打ち、ハ、あやまつたり、院宣の御使して、兄弟諸共源氏がた、牛若君にしたがふべし、汝がいさめを聞くに付け、さこそ龜井が恨むべし、なつかしさよゆかしさよと、そとろに涙をうかおれば、なふさ程にしたひ給ふかや、何をかつゝまん我こそ龜井の六郎よ、ヤ、さては弟の重清か、母の名字をついだれば、御ぶんは母のかたみぞや、父の名字をつぎ給ふ、兄こそ父のかたみぞと、兄弟ひしといだき付き、聲もをします泣きければ、女房も涙にくれ、供奉の内侍法皇も、御衣の袂を、しぼらせ給ふ、叡慮の程ぞ有がたき。かくて龜井は牛若の御ありか、喜三太が口うつしつぶさにかたり、片時も早くとすゝむれば、鈴木もおいとま申せしが、立とまつて、思へばゝ小松殿、平家に向つて弓ひけとて、此重家は頼まれじ、苦の下にて亡魂の、妄執もいたはし。院宣の御使して、源氏の味方に参る共、源平兩家の戦ひの、軍のお供は仕らじ、おくれたり臆病と、後ゆびをさゝばさせ、其かはりには牛若の、御行末若し一大事のあらん時、千里もいとはず馳せ参じ、腹十文

車を碎く云々―白樂
天の太行路の句によ
る。

敵を見て云々―敵を
見て矢を射ぐの謬を
用ふ。

字にかき切つて、冥途の御供仕らん、それ迄は重家が、生國藤代に引籠もり、軍に出ねば身は農人、たち刀無用也と、するり／＼とぬきはなし、石に打あて、段々に、打折つてかりと捨て、是ぞ冥途の小松殿へ二心なき未來の忠義、この御使は牛若君に、現世の忠義の初ぞと、守袋の紐をこき、院宣をさめ首にかけ、叡慮を伺ひ立ち出る、兄は正直順路の武士、形チ一つを源平兩家、現世未來の忠義を立て、弟は孝行武進の勇者、心一つを父と母、兄と君とにたゞせりと、叡慮深く還幸有り。名も水に住む龜鱉、魚と水とのごとくなり。

下　　卷

車を碎く岩よりも、人の心はさかしくて、船をうかぶる淵よりも、深きは人の心とて、鈴木三郎重家は、院宣を首にかけ、御曹子の御跡を、したひて奥へ下りしが、義を守つてしばしが程、農民となりたれば、太刀をもはかず主従の、見参始いかゞとて、弟龜井打つれて、忍ぶ菅笠美濃尾張、三河にかけし八橋や、水の源頼む身は、平家をいつか打つべきと、常の心に敵を見て、矢作の宿にぞ着きにける。折しもけふは寅の日の、峯の藥師の御縁日、矢作の長者参詣の下向道に行き逢うたり。鈴木は一とせほのかに顔

を見覺えて、是申し、卒爾ながら矢作の宿長者殿にて候な、都三條金寶吉次信高の定宿と承る、此度の下向にも、さぞ泊りにて候はん、十六七の少人を、同道にてはござなしか。若し左様にも候はゞ逢はせてたべと有りければ、長者聞き給ひ、さればとよ、信高殿は、わらはが方に逗留有り、東の名所見物とて、氣高き若衆も御同道、さの給ふ人々は、どなたぞやとぞ答へらる。鈴木兄弟嬉しくて、それこそ源氏の督の殿の若君御曹子、我々は紀州熊野鈴木の三郎重家、舍弟龜井ノ六郎重清と申す者、後白河の法皇より、平家追討の院宣を蒙り、扨こそ尋ね參らする、牛若君に逢はせてたべと、心もいさみ氣もせきて、早うくくと云ひければ、ア、音高しく、數年馴染の吉次殿、みづからにさへあかされず、粗忽にはいかゞ也。まだ逗留の筈なれば、御兩人も我方に、二三日もとどまりて、折をうかゞひ吉次殿に申こみ、其上には兎も角も、我も人もそれ迄は、知られず知らぬ旅人の宿かり合はせし風情にて、間所も多ければ、緩々休息遊ばせや、さらば案内申さんと、長者はさきにたつか弓、矢作の宿へぞ、三重歸らるゝ

閏 十三 段

都にまさる、東路や、矢作の長者のひとりびめ、淨瑠璃御前と聞えしは、みねの藥師のま

一人も一人から一
謬。一人子の愛らし
さもその子の人物い
かんによるとの意。
くはんぎねん一歌喜
園(クワンギエン)。
帝釋天の花園。

たてを所存のうたて
作るを仕事とする。

ゆするー 髪用の
水。

うし子とて、瑠璃^{るり}をのべたるかほかたち、ひとりもひとりからなれや、大内そだちにかし
づきて、若紫のをさな立、和歌の道文字の道、繪もうつくしう花むすび、天せい琴の妙を
得て、百の媚もゝのしなくはんぎえんの花のもと、錦華殿の月かげに、明けて三五の
春秋を人に戀られ忍ばれて、戀しと思ふ人はまだ、持ちそめて見ぬ闇の中、およるもの
ゝ重ね着に、枕一つの丸寝こそ、何に不足はなけれども、物たらずなる寢覺なれ。秋もな
かばの、萩^{あき}の聲、籠飼^{こがひ}の虫の色々に、音をそめ出す萩桔梗、むらゝ薄^{うす}の露ごとに、うつ
る月かと見るまでに、立て並べたる鏡臺は、だてを所在の女房達、淨るり御前の夕化粧、
其役々をぞ定めらる。先御めのとのれいぜいはおぐしの役、十五夜は額^{ひたひ}の役、玉藻の前は
ほそまゆの上手^{うす}なり、そらさゆ月さゆ千じゆの前、白粉油紅^{あけ}の役、有明はお爪^{つま}の役、さら
しなはとめ伽羅^{がら}、まがき、さごろも、そつのすけ、楊子^{やうじ}手拭ゆするつぎ、さだめの役々勤
めつゝ、淨るり御前はすがた見の、ますみの鏡に向ひ給へば、十五夜れいぜい衣紋つ
くろひ参らする。もうよいわいの、どうたしなんでもつくつても、見せるはをなごばかり
成り、身は闇^{やみ}の夜の花ぞとて、たとへられてもなかくゝに、花も及ばぬ姿なり。かゝる
折ふし御曹子^{おんざうし}、こよひは父の速夜^{はや}ぞと、烏帽子装束あらためて、姫の闇とも白露^{はくろ}の、か
ら手水^{てみづ}手向草、此ひたゝれ大口は、母の手づからぬひものし、せみをれの一管^{くわん}と、共にか

かん五云々―千五上
勾中六下口。笛の歌
口の名稱。
みもひも寒し―僮馬
の文句。みもひは永
のこと。

まんこが玉―萬戸將
軍が龍宮へ取られた
りといふ玉。
まどうて―償ひて。

たみにたび給ふ。何とかならせ給ふぞと、いとどおぼつかなく、思ひの数もちく
さの露、かん五上さく中六げく、八つの歌口打しめし、父母の手向の樂なれば、夫をお
もふ想夫戀、みもひもさむしと歌ひけん、昔おぼゆる木枯に、吹きあはせてぞ、三重聞え
ける。さしきには女房達笛の音色に聞惚れて、目をほそめ身をねぢて、腰もふなくなり
にけり。姫君感に堪へかねて、おもしろの笛の音や、ことに天満天神の、惜み給ひし樂な
れば、此秘曲を吹く者は、只人にてはよもあらじ、みづからこれにて琴をしらべて合せん
に、いかにととがむる人あらば、箒木の巻と答ふべしとひき寄せて、かき合せ、爪音ゆ
たかに遊ばせば、十五夜、冷泉、太鼓筆簾あひしらひ、まがきへだつる京竹は、心もう
ごく、三重ばかりなり。牛若笛を吹きさして、かゝるあづまに誰なれば、このつまお
との優しやと、のぞき給へば座敷にも、聞きうしなひて茫然と、まんこが玉の玉琴の、
調子まばらに狂ひけり。耳をすまして姫君は、あれ―笛がやんだは、まどうてかやし
や、笛かやしやと、御機嫌そんぜしをりからに、御曹子の面影、鏡にうつれば十五夜、な
ふ笛を誰ぞと思ひしに、美しい若衆が、鏡の内にそれくと、走り寄つて姿見に、ひつ
たりと抱き付けば、冷泉も女房達も、騒ぎ立ち、此鏡には袖が有りこちには髪のと計、
こちの鏡はかんじんの、袴の前腰、ア、うまさうなとくひ付くやら、抱き付くやら、顔は

上氣の濃いもみち、女護にょごの鳥の夢ばなし、男見たるもかくやらん。姫君そゞろの御目もと、是はしたない十五夜、みづからが鏡なれば、内の若衆も妾わらはが若衆、見ぐるしいこち退きや。ほんに是は不調法と立ち退くあとに入かはり、御覽ごらん有るまに牛若は、小萩が本の一村に、立寄る姿かぐろひて、鏡に影は止まらず。ホウオ、よい事しやつた、若衆をみなにしやつた、元のやうに入れてかやしやと、御機嫌いよ／＼損すれば、今までありしに不思議な事、誰もかくしはしやらぬかと、騒ぐ人音夕嵐、庭の萩原女原、洩るゝや戀の風ならん。牛若さすが奥ゆかしく、つま戸あらはに押し開き、立聞き給へる御姿、又こそ鏡に映りけれ。十五夜嬉しく、それ／＼御神體ごしんたいが、鏡のうちに顯はれ給ふ、をがませ給へと御手を取り、なふ能く見れば、金賣吉次同道ありし、都の君お目の張の氣高けだかさ、此口元のしほらしさ、御はだぎの白小袖、壓おささるゝ程の色白、上がさねは唐綾、上品ほんのひたゝれ、此品々の縫物の手ぎはゝ、心も及ばれず。お烏帽子は左折、黄金作りの御佩刀はかせ、あのさしぶりの尋常さ。百萬騎の大將と申しても、おめはせじ、ウゝゝいとらしいお顔や、ほつかりと喰ひ付きたい、お姫様も我々も、鏡で見たは仕合しあはせ、直に見たらば今頃は、きつげが入るで有らうと、ぞく／＼すれば冷泉、御年は十六七迄は行くまい、姫君様には似合比にらひ、十五夜、我々にはちとはしかからうと云ひければ、ア、驕おごつた事ばかり、はしこうても

こそばうても、たとへるぐうて跡で口が腫れても、身は構はぬとさゝめく聲、ほの聞ゆれば半若は、きやうとくも逃げ入らず、玉虫拾ひ玉さゝの、露を飼うてぞおはします。淨るり御前も戀草の、ほに現はるゝ詞の色、さもあれ、此君は源氏方の御ゆかりと覺えたり。いたはしや御代ならば、かく輕々しく有るべきか、苦しからずは暫しが程、御宮づかへ申したしと、思ひしみたる御顔ばせ、冷泉見てとり、なふ十五夜、何卒あの笛をちとの間借りて見せましたし、機轉はないかと云ひければ、オ、おかげにて我々も、ちよつと戴く爲めなれば、随分借りて参らせんと、庭の蒔砂すなぐと歩みより、今遊ばせし物の音の、笛とやらん申して、火吹竹のやうなもの、我等がお主の姫君、ついに見た事候はず、かりて参れと申さるゝ、お心あれと有りければ、あまり卑下なる御口上、辭退申す筈なれ共、御ことを聞しるべ、吹き汚して候と、幅紗に歌口清めんとし給ふを、いや其まゝが忝しとおつとりて、足ばやに椽の上へくわらくと、一足飛びに駈け上がり、サア、借りましたく、お口のついた歌口の乾ぬさきに姫君さま、それからだんぐに、ちよつちよとねぶつてまはしやと、御口びるにさし附けぬり附け、又用無心も云ふため、約束ちがへずはや返さんと、云へば冷泉、いやく今は返さぬ、姫君様のお寢間へ、都人のお忍びで、お手からお手へ請取わたし、それ迄は姫君様、大事の殿ごの御笛握つてく

ひとよの情——一夜と一節とかく。

東の伽羅——伽羅はこゝにては美人といふ程の意。さしまずいぢらず。

握りつめてござんせ。それ女房達お寢間とりや、火をともしやと打連れて、皆々奥へぞ三重入り給ふ。ふけ行く鐘の初夜も過ぎ、夜露にぬれて御曹子、笛の返事はいかゞぞと、つま戸の内に入り給へば、十五夜見参らせ、是和子様、御笛を遅なはり面目もなき事ながら、妾が姫君、御姿をかいまみの戀風が、ぞつとしてよりお枕あがらず、あはれおねまへお忍びあり、御手枕の上にて直にうけ取り給ひなば、藥師まさりの若衆様、さあお手引かんと云ひければ、是は思ひもよらぬ事、妹脊の道はまだ知らず、旅の空にてそれがまあ、さもしい事とて逃げ給へば、是、それを知らねばお侍のかなはぬ事、すは夜戦夜討と云ふ時の、一ばん鑓の稽古に成る、萬事のこなしは此十五夜に、まかせ給へと押し遣れば、力なくふるひく牛若は、局々を打過で、浮るり御前の閨の戸や、几帳のかげにぞ忍ばるゝ、十五夜さゝやき、やさしい聲にて、何なりとも云ひかけ給へと、ほのめけば、やさしい聲とは笛の音か、母のかたみの一管戻してたべと仰せける。エ、もどかしい妾に任せて置き給へと、若衆聲にて十五夜は、枕屏風をほとくくと、數ならぬ峰の松風琴の音に、通ひまよへる笛竹の、ひこよのなさをかけ給へ、あづまの伽羅とぞ申しける。おそばに臥したる冷泉、それ彼のさまがく、少きしまして見さんせと、申せば姫君どうなりともよい様にしてたもと、お聲も震ひひつたりと、玉ぬく汗もいとしら

し。冷泉は姫君の聲をうつしてほそくと、誰そや誰そ、枕屏風に音するは、聲がはりせぬ驚の、塀にまどひ給ふかや、よそにも人の聞くものを、還らせ給へと有りければ、十五夜、それくお返事くと、云へ共若君身をちよめ、いか成る責にあふ事ぞ、戻して下され拜むくとばかり也。こゝが大事の機會ぞと、又十五夜が聲細め、つれなき事なの給ひそ。九重の塔が高しとて、鶯や鳥がはね打立てゝ飛ぶ時は、九重の塔も下に見る、滄海深しと申せども、櫓櫓のたゝぬ海もなし、山と云ふ山に霞のかゝらぬ山もなし、谷あひと云ふ谷あひに、ちりく草の生えぬはなし、駒に踏まれし道芝も、露に一夜の宿は貸す、風にもまるゝさゝ竹も、小鳥に一夜の宿はかす、蘆のかりねのときふねも、比丘尼に一夜の宿はかす、こよひ一夜はなびかせ給へ、つれなの君やと仰せける。姫君はせき給ひ、もうよい加減仕損うてたもんなどの給へ共、いやく戀は機會が大事ぞと、雲に梯霞に千鳥、木幡山にはあらねども、こちや口なしとて音もせず。十五夜わざと荒らかに、及ばぬ戀との聲かや、とてもこがれ死なんより、腹搔き切て煩惱の犬となり、猫となつて、寢所へぐすくとはひ入り、爪を立て、どこもかしこも搔いてく搔きたくり、ひりくさせて我がおもひ、一度は晴らし申さんと、足拍子とんくく、こゝんとんと踏みければ、誠と思ひ姫君は、覺えずねまきほらくと駆け出て、ひたゝれの御たもと、ひかへら

ながし、ひかへ、し
ん―生花の衝語。

けいん―化現。

るゝもひかふるも、笑顔ばかりの梅櫻、ながしひかへのにらみあひ、しんには中のおもひ
かや、かくて十五夜冷泉は、これではらちもあか月近し、ア、しんき、くくくと夕づけ
の、あれ鳥が鳴く鐘が鳴る。先出立が堅くろしい、烏帽子被たは晝にもありと、寄つて
かゝつて直垂や、常陸帶解く紐を解く、淨るり御前の瑠璃の肌源氏の君のひかり肌、お
肌比べと押しやれば、いやちやくとかぶりふり、後はうなづく花ずゝき、亂れ伏す猪の
床の内、しつぽりひつたり、しつぽりひつたり、しんそこく、その心ぞ、三重解け
にける。かゝる所へ鞍馬山の大天狗、僧正坊けん有り、あらおろかや牛若丸、御身や
さしく思ひ立つ、心ざしを感じつゝ、源氏の代とせさせん爲め、劍術軍術残らず教へ、士卒
を乞ひに奥へ下すに、浅ましくも色に溺れ、かやうの有様大かたならず、急ぎ東に下るべ
し、いざゝ我も伴なはんと、大きに怒りの給へば、牛若はつと立出で、何僧正にてまし
ますか、凡心の愛着今更先非を悔ゆといへども、甲斐なき上を御見捨てなく、東へ具
せんとは、有がたき御いさめに預るは、言語につきぬ御詞、申上ぐるもはづかし。此
上ながら御ゆるさを蒙むり、奥へつれさせ下さるべし、御機嫌なほされ御めぐみ、頼み
上ぐると歎かるゝ。然る所へ、又雲中に妙なる聲、僧正しばしと有りけるを、ふりあふ
ぬき見給へば、多門天の神勅とて、美童せつなに影向あり、しばらく僧正坊、おこと

知らずや、我朝の佛法破却せんこて、大唐の天狗の首領是界坊、此土に渡り障碍さまゝ火急なるゆゑ、即ち僧正召し寄せて、唐土に返せと、毘沙門天の神勅により來つたり。早々歸り是界坊鎮められよと仰有り。僧正坊頭をさげ、いともかしこきみどうじの神勅つぶさに承り候、扱は是界われ山になきを見すまし來ると見えし、エ、愚なり神國の直なる道の神風に、追返さんと出給ふを、牛若袂にすがり給ひ、恐れ多くは候へども、然らば御弟子の中一人、我にみつがせ下さるべし、去とては便なやと餘議なき態げに誠、これも御代を鎮めんため、其まゝにも捨て置かれじ、心は二つ身は一つ、行くも行かれずうろく、と、さすがの僧正せんかたも、途方にくれて居られしが、エ、忘れたり、通力は今此時、氣遣あるな牛若丸、東へも同道せん、都へも此身を分じ、自由自在の飛行のわざ、見よくと詞もいらぬに、僧正二人に、三重成り給ふ。若君あまり尊さに、はつと禮する夜もしらく、明行く末は源氏の春、四海波風をさまりて枝を鳴らさぬ御代とかや、千秋萬歲。

右此本者依小子之懇望附祕密音節自遂校合令開板者也

加 賀 掾 印

二條通寺町西へ入町
山本九兵衛刊

昭和三年十一月二十五日印刷
昭和三年十一月三十日發行

註校
淨瑠璃稀本集(十)

定價壹圓八拾錢

著者 藤井乙男

發行者 會社
印刷者 株式文獻書院

代表者 武藤欽

印刷所 京都府下長者町堀川東
文獻書院印刷所



發行所

東京市神田區錦町一ノ一(振替口座東京六〇〇六一)
文獻書院

京都市下長者町油小路西(振替口座大阪六三〇九二)

文學博士 藤井乙男氏編輯及び解説

國文歌謠名著叢刊

四六判布表裝

竹取翁物語解	定價貳圓 送料十二錢	我國物語の祖といはれる竹取物語を詳解したるもの 田中大秀著原本六卷
伊勢物語新釋	定價壹圓六拾錢 送料十二錢	原文の語句を註釋し又章句の大要を述べたるもの藤 井高尚著原本六卷
宇治拾遺物語	定價壹圓六拾錢 送料十二錢	宇治大納言隆國の名によつて古今世間の異事奇聞を 集録したるもの原本十五卷
沙石集	定價壹圓八拾錢 送料十二錢	無住法師の著佛道に關する雜話を集録したる、十卷 百二十餘話
平家物語	定價貳圓 送料十二錢	鎌倉時代の戰記文學として平家物語は代表的である 元和七年の古板本を底本とす
近松世話物全集(上)	定價壹圓五拾錢 送料十錢	近松巢林子の作品は其世話物に金玉の響を残す、本 集は曾根崎心中外十一篇を收む

雅文笑話集	定價壹圓五拾錢 送料十錢	六樹園のしみのすみか物語、秋成のくせ物語、翁満の童話長篇、廣道の芹の葉わけ、其他を收む
萬葉集略解(上)	定價壹圓八拾錢 送料十二錢	萬葉集註釋書中の代表的大著、橘千蔭の著にして原本三十卷
古今集遠鏡 (附 六歌仙集)	定價貳圓 送料十二錢	古今集の口語譯として本居宣長學生の名著、山崎美成の頭註あり原本六卷
芭蕉七部集	定價壹圓六拾錢 送料十二錢	蕉風の代表的俳書、冬の日、春の日、曠野、ひさこ猿蓑、炭俵、續猿蓑の七卷を收む。
萬葉集櫛の杣	定價貳圓四拾錢 送料十二錢	上田秋成の萬葉集秀歌評釋にして無二の珍書、原本五卷
蜀山歌集	定價貳圓 送料十二錢	蜀山人の狂歌、狂文、狂詩を收録し、併せて蜀山人の傳記を附録とす
橘曙覽歌集	定價壹圓六拾錢 送料十二錢	一名志濃夫廼舍家集といふ。曙覽の純真な美はしき歌想を味ふべきである。

方丈記・徒然草、近松世話物全集下、淨瑠璃稀本集、浮世風呂・浮世床、萬葉集中、同下、舞の本、舉白集、長歌撰格、短歌撰格、鶉衣——【以上近刊】

